

堀 川 遺 跡
平 井 遺 跡
三 反 地 遺 跡
水 奥 遺 跡
西 河 内 遺 跡
中 屋 B 遺 跡

2014

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
田布施町教育委員会

<small>ほり</small> 堀	<small>かわ</small> 川	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡	
<small>ひら</small> 平	<small>い</small> 井	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡	
<small>さん</small> 三	<small>たん</small> 反	<small>じ</small> 地	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡
<small>みず</small> 水	<small>のく</small> 奥	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡	
<small>にし</small> 西	<small>ごう</small> 河	<small>ち</small> 内	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡
<small>なか</small> 中	<small>や</small> 屋	<small>びー</small> B	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡

2014

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
田布施町教育委員会

序

地下に埋もれている遺跡は、先人の日々の生活と、不断の努力を知るうえで大変貴重な資料であり、国民共有の財産と言えるでしょう。こうした遺跡は本来、現状保存が望ましいところですが、開発工事などにより、やむを得ず消失するものにつきましては、関係機関と調整を図り、記録保存を行うことになっております。

本書は、国営の南周防農地再編整備事業に先立ち、同地区内に所在する堀川遺跡、平井遺跡、三反地遺跡、水奥遺跡、西河内遺跡、中屋B遺跡について、公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施し、また一部は田布施町教育委員会と共同で実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、平井遺跡や中屋B遺跡では弥生時代から古墳時代を中心とする竪穴建物跡が、西河内遺跡では磨製石斧や弥生土器が、三反地遺跡では竈片をはじめ古墳時代の遺物が発見されました。また、水奥遺跡では中世の掘立柱建物跡とともに多くの土師器皿・杯、青磁や白磁の椀、鉄刀子などが出土した土坑が検出され、堀川遺跡でも中世の遺物を確認しています。これらの調査成果は田布施川流域における先人の息吹を今に伝えるとともに、当時の生活の様子や社会状況を考えるうえで大変貴重な資料となります。

本書が文化財保護に対する理解をより深める資料として、また、教育ならびに学術研究、郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施ならびに報告書作成に際しまして多大なご尽力とご協力をいただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 山口県ひとつづくり財団

理事長 松永貞昭

序

瀬戸内に面した田布施町は、遠く弥生時代や古墳時代から海上交通の重要な地として人々が生活を営んできており、多くの遺跡や古墳なども確認されています。こうした地域にあって、平成23年度から国営の南周防農地再編整備事業を行うに先立ち、公益財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターと本町教育委員会が協力して、関係箇所を発掘調査を行ってきました。

本書は、波野地域に所在する堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡や水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。三反地遺跡では古墳時代の移動式竈が見つかり、平井遺跡では、一部に土石流の影響が見られたものの、弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡が数多く見つかっています。また、水奥遺跡では、土師器の杯・皿や青磁や鉄刀子などが見つかり、中屋B遺跡では弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡が見つかっています。

今回の調査によって得られた遺構や遺物群等は、本町の歴史をさらに明らかにする際の貴重な資料となるものであり、本書が学術研究他や郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願っています。

終わりに、発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたってご努力いただいた関係各位、地権者や地元の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年3月

田布施町教育委員会

教育長 尾崎 龍彦

例 言

- 1 本書は平成24年度に実施した堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡（山口県熊毛郡田布施町波野地内）および同25年度に実施した水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡（同地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとつくり財団が中国四国農政局の委託〔平成24年度堀川遺跡・平井遺跡調査契約名：平成24年度南周防農地整備事業波野（木地）団地外埋蔵文化財発掘調査委託業務（変更1回）、平成24年度三反地遺跡調査契約名：南周防農地整備事業波野（木地）団地（三反地遺跡）埋蔵文化財発掘調査委託業務、平成25年度水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡調査契約名：南周防農地整備事業木地団地埋蔵文化財発掘調査委託業務（変更1回）平成25年度報告書作成契約名：南周防農地整備事業木地団地埋蔵文化財調査取りまとめ委託業務（変更1回）〕を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団・山口県埋蔵文化財センター
	田布施町教育委員会
調査担当	事業課長 西岡 義 貴（平成25年度）
	主 査 石井 龍 彦（平成24・25年度）
	主任調査研究員 小南 裕 一（平成25年度）
	文化財専門員 上田 克 也（平成24・25年度）
	文化財専門員 四元 努（平成24年度）
	文化財専門員 井上 広 之（平成25年度）
	文化財専門員 米澤 昭 信（平成25年度）
	文化財専門員 高木 英 明（平成25年度）
	調 査 員 中原 有 彩（平成24・25年度）
	調 査 員 河島 清（平成25年度）
	調 査 員 荒蒔 周 平（平成25年度）
	調 査 員 大重 優 花（平成25年度）
	埋蔵文化財発掘等専門員 池本 篤（田布施町教育委員会）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、中国四国農政局南周防農地整備事業所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「柳井」を複製使用した。第2図は山口県柳井農林事務所提供の地図を元に作成した。
- 6 本書の方位は、遺跡周辺図、遺構配置図、個別遺構の全てを国土座標（世界測地系）の北で示している。なお、掘立柱建物の棟方向に関しては、国土座標（世界測地系）の北を基準とする。また、標高は海拔高度（m）である。
- 7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B	掘立柱建物	S D	溝状遺構	S I	竪穴建物	S K	土坑
S P	柱穴	S X	性格不明遺構				
- 10 資料の鑑定・分析に関して、胎土分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、放射性炭素年代測定（AMS測定）はパリノ・サーヴェイ株式会社および株式会社加速器分析研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。
- 11 本書の執筆・編集は、石井・小南・井上・荒蒔・中原が共同で行った。

本文目次

I	位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	堀川遺跡調査の成果	5
1	遺構	5
2	遺物	7
IV	平川遺跡調査の成果	8
1	遺構	8
2	遺物	18
V	三反地遺跡調査の成果	43
1	遺構	43
2	遺物	46
VI	水奥遺跡調査の成果	51
1	調査の概要	51
1	遺構	51
2	遺物	58
VII	西河内遺跡調査の成果	69
1	調査の概要と成果	69
2	遺物	77
VIII	中屋B遺跡調査の成果	87
1	調査の概要	87
1	遺構	91
2	遺物	95
IX	まとめ	99
X	付編	103
付編 1	平井遺跡・堀川遺跡・三反地遺跡における放射性炭素年代報告書（AMS測定）	103
付編 2	山口県平井遺跡および三反地遺跡出土土器の胎土分析	111
付編 3	水奥遺跡・中屋B遺跡発掘調査に伴う放射性炭素年代測定業務 報告	127

表目次

堀川遺跡

第1表	出土土器観察一覧表	7
第2表	出土石製品観察一覧表	7

平井遺跡

第3表	出土土器・土製品観察一覧表	37
第4表	出土石製品観察一覧表	42
第5表	出土鉄製品観察一覧表	42

三反地遺跡

第6表	出土土器・土製品観察一覧表	49
第7表	出土石製品観察一覧表	50
第8表	出土鉄製品観察一覧表	50

水奥遺跡

第9表	出土土器観察一覧表	65
-----	-----------	----

西河内遺跡

第10表	出土土器観察一覧表	84
------	-----------	----

中屋B遺跡

第11表	出土土器観察一覧表	98
------	-----------	----

図 版 目 次

堀川遺跡

- 堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡遠景
図版1 堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡全景
堀川遺跡・平井遺跡全景
図版2 調査区全景 調査前全景(西から) 完掘全景(南から)
調査区東壁北半部土層断面(西から) 出土遺物

平川遺跡

- 調査区全景
図版3 竪穴建物跡群・掘立柱建物跡全景 調査前全景(南から)
S I 1 土層断面(南から)
S I 1 遺物出土状況(北から)
S I 1 中央土坑完掘(南から)
図版4 S I 1 完掘(南から) S I 2 完掘
図版5 S I 2 遺物出土状況(南から)
S I 2 土層断面(西から)
S I 2 中央土坑遺物・炭検出状況(南から)
S I 2 中央土坑完掘(南から)
S I 3 遺物出土状況(北から)
S I 3 土層断面(東から) S I 3 完掘(南から)
図版6 S I 4 遺物出土状況(西から)
S I 4 完掘(南から) S I 5・6 土層断面(西から)
S I 6 遺物出土状況(西から)
S I 5・6 完掘(南から)
図版7 S I 7 完掘(南から) S P 2 遺物出土状況(南から)
S K 4 完掘(南から) S K 8・9 完掘(南から)
S K 11 完掘(南から)
図版8 S K 12 完掘(南から) S K 13 完掘(南から)
S D 1 土層断面(西から) S D 1 完掘(西から)
S D 4 完掘(西から)
図版9 S D 3 完掘(西から) S D 5 完掘(西から)
中央部遺物包含層東部遺物出土状況(南から)
中央部遺物包含層西部遺物出土状況(南から)
中央部遺物包含層西部遺物出土状況(南から)
図版10 出土遺物(1) 図版11 出土遺物(2)
図版12 出土遺物(3) 図版13 出土遺物(4)
図版14 出土遺物(5) 図版15 出土遺物(6)
図版16 出土遺物(7) 図版17 出土遺物(8)
図版18 出土遺物(9) 図版19 出土遺物(10)
図版20 出土遺物(11) 図版21 出土遺物(12)
図版22 出土遺物(13) 図版23 出土遺物(14)
図版24 出土遺物(15) 図版25 出土遺物(16)
図版26 出土遺物(17)

三反地遺跡

- 調査区全景
図版27 調査区全景 完掘全景(南から)
図版28 完掘全景(北から) 調査前全景(北から)
N R トレンチ3 土層断面(南から)
N R トレンチ2 遺物出土状況(北から)
調査区北壁東半部土層断面(南から)
図版29 出土遺物(1) 図版30 出土遺物(2)

水奥遺跡

- 水奥遺跡遠景(北西から)
図版31 調査区全景
A地区遺構密集区
図版32 S B 1 完掘状況(西から)
S X 1 土師器皿等出土状況(西から)
図版33 S X 1 土師器皿等出土状況(南から)
S X 1 鉄刀子出土状況(西から)
図版34 S X 1 完掘状況(西から)
S D 1 遺物出土状況(西から)
S D 1 砥石出土状況(北から)
S X 7 遺物出土状況(西から)
S P 16 遺物出土状況(西から)
図版35 出土遺物(1) 図版36 出土遺物(2)
図版37 出土遺物(3) 図版38 出土遺物(4)
図版39 出土遺物(5) 図版40 出土遺物(6)
図版41 出土遺物(7) 図版42 出土遺物(8)

西河内遺跡

- 西河内遺跡B地区全景(南から)
図版43 A地区北端部(東から)
A地区北部中央(東から)
図版44 A地区南端部(南から)
A地区南部中央(北から)
図版45 B地区北部(西から) B地区南部(西から)
図版46 A地区北側包含層土層断面(北から)
A地区北側包含層ベルト土層断面(西から)
A地区南側包含層土層断面(東から)
A地区北側包含層遺物出土状況(南から)
B地区トレンチ1土層断面(北から)
B地区トレンチ2土層断面(北から)
B地区トレンチ3土層断面(北から)
B-2地区石斧出土状況(南から)
図版47 出土遺物(1) 図版48 出土遺物(2)
図版49 出土遺物(3) 図版50 出土遺物(4)
図版51 出土遺物(5) 図版52 出土遺物(6)
図版53 出土遺物(7) 図版54 出土遺物(8)

中屋B遺跡

- 中屋B遺跡遠景(南から)
図版55 調査区全景
調査区北西端部近景
図版56 S I 1・S K 1 完掘状況(南から)
S I 1 完掘状況(南から)
図版57 S I 2・S I 3 炭化材・遺物出土状況(南から)
S I 2・S I 3 完掘状況(南から)
図版58 S K 1 完掘状況(南から)
北西端部土層断面(北から)
南西端部土層断面(南から)
S I 2 遺物出土状況(北から)
S I 3 遺物出土状況(北から)
図版59 出土遺物(1) 図版60 出土遺物(2)

挿 図 目 次

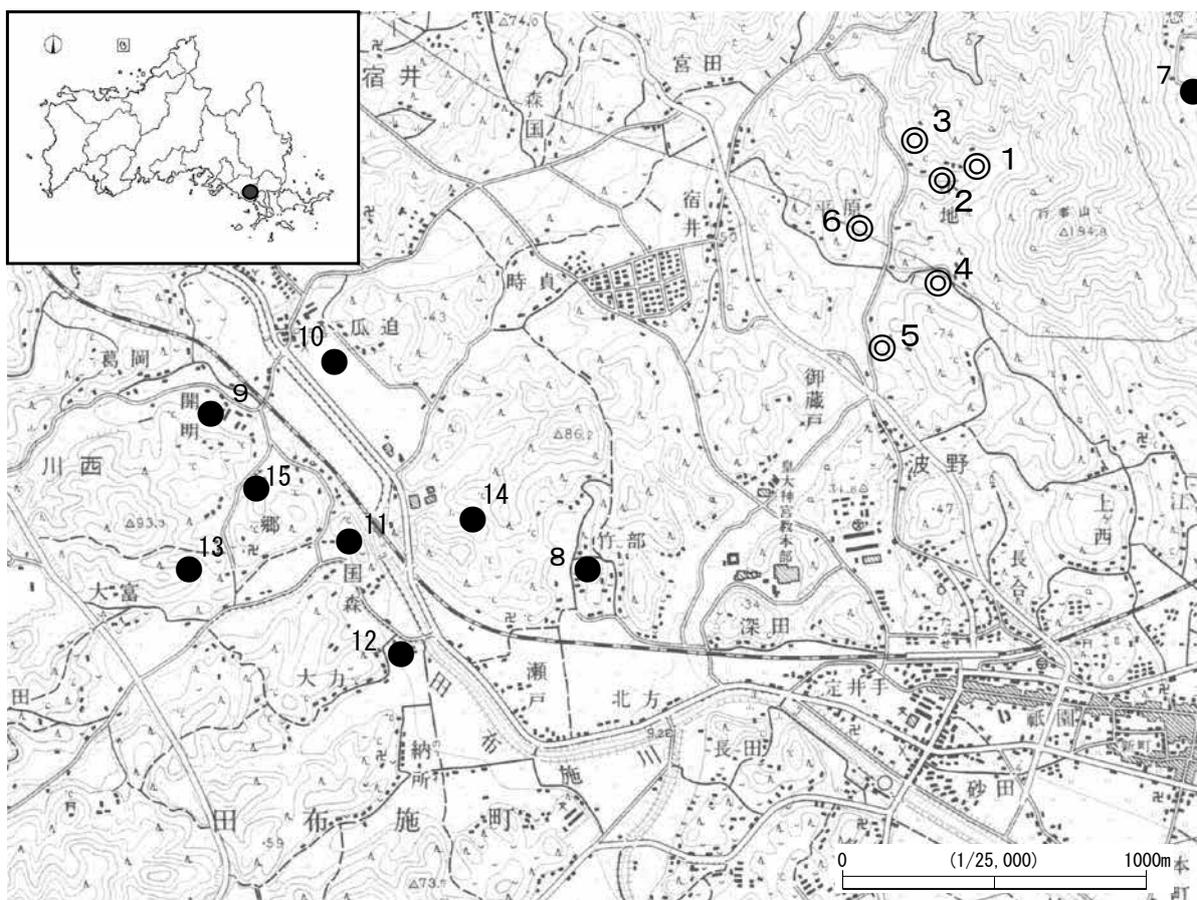
第1図	堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡の位置と周辺の遺跡…	1
第2図	調査区設定図	4
堀川遺跡		
第3図	堀川遺跡遺構配置図	5
第4図	S K 2 実測図	5
第5図	S D 1・3 実測図	5
第6図	調査区北壁土層断面図	6
第7図	出土遺物実測図(1)	7
第8図	出土遺物実測図(2)	7
平井遺跡		
第9図	S I 1 実測図	8
第10図	平井遺跡遺構配置図	9・10
第11図	S I 2 実測図	11
第12図	S I 3 実測図	12
第13図	S I 4～6 実測図	13
第14図	S I 7 実測図	14
第15図	S B 1 実測図	15
第16図	S P 6 実測図	15
第17図	S K 5・7・10・13・17 実測図	16
第18図	S D 1・5・8 実測図	16
第19図	調査区壁面土層断面図	17
第20図	出土遺物実測図(1)	19
第21図	出土遺物実測図(2)	20
第22図	出土遺物実測図(3)	21
第23図	出土遺物実測図(4)	22
第24図	出土遺物実測図(5)	23
第25図	出土遺物実測図(6)	24
第26図	出土遺物実測図(7)	25
第27図	出土遺物実測図(8)	26
第28図	出土遺物実測図(9)	27
第29図	出土遺物実測図(10)	28
第30図	出土遺物実測図(11)	29
第31図	出土遺物実測図(12)	30
第32図	出土遺物実測図(13)	31
第33図	出土遺物実測図(14)	32
第34図	出土遺物実測図(15)	33
第35図	出土遺物実測図(16)	33
第36図	出土遺物実測図(17)	34
第37図	出土遺物実測図(18)	35
第38図	出土遺物実測図(19)	36
第39図	出土遺物実測図(20)	36
三反地遺跡		
第40図	三反地遺跡遺構配置図	43
第41図	S K 1・3・5・6 実測図	44
第42図	N R トレンチ3 南壁土層断面図	44
第43図	調査区壁面土層断面図	45
第44図	出土遺物実測図(1)	47
第45図	出土遺物実測図(2)	48
第46図	出土遺物実測図(3)	49
第47図	出土遺物実測図(4)	49
水奥遺跡		
第48図	水奥遺跡遺構配置図	53・54
第49図	水奥遺跡A地区遺構密集区拡大図	55
第50図	S B 1・2 実測図	56
第51図	S X 1 実測図	57
第52図	出土遺物実測図(1)	59
第53図	出土遺物実測図(2)	60
第54図	出土遺物実測図(3)	61
第55図	出土遺物実測図(4)	63
第56図	出土遺物実測図(5)	64
西河内遺跡		
第57図	西河内遺跡A地区全体図	70
第58図	西河内遺跡B地区全体図	71
第59図	A地区土器集中地点出土状況	72
第60図	西河内遺跡A地区土層断面図	73・74
第61図	西河内遺跡B地区土層断面図	75・76
第62図	出土遺物実測図(1)	78
第63図	出土遺物実測図(2)	79
第64図	出土遺物実測図(3)	80
第65図	出土遺物実測図(4)	81
第66図	出土遺物実測図(5)	82
第67図	出土遺物実測図(6)	83
中屋B遺跡		
第68図	中屋B遺跡全体図	88
第69図	中屋B遺跡土層断面図	89・90
第70図	北西端部拡大図	92
第71図	S I 1～3 実測図	93
第72図	土坑・溝状遺構実測図	94
第73図	出土遺物実測図(1)	96
第74図	出土遺物実測図(2)	97

I 位置と環境

堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡（平成 24 年度調査）、水奥遺跡・西河内遺跡・中屋 B 遺跡（平成 25 年度調査）は、ともに山口県東部の熊毛郡田布施町大字波野に所在する。これらの遺跡の北方から西方にかけて神籠石で知られる岩城山（標高 350m）がそびえ、東方背後は上木地山（181.2m）、木地山（169.2m）、樋郷山（175.1m）、行者山（194.8m）が連なる。岩城山～行者山の間を、田布施川の支流である御蔵戸川源流が北北東から南南西方向に走る。その両岸は標高 20m～70m の低丘陵・微高地を形成しており、本遺跡群は東岸に細長く位置する。

御蔵戸川は、南方に広がる谷底平野の中心を流れる田布施川に中流域で合流し、流水は平生港へと達する。熊毛半島沿岸部には平生町岩田遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡が点在するが、田布施川下流域や平生低地では、縄文・弥生時代の遺跡が発見されない。古代海進により標高 10m 以下の低地は海面下あるいは干潟と化し、田布施川上流～中流域にあたる明地遺跡（13m～17m）・林遺跡（32m～34m）・石走山遺跡（35m～40m）・開明遺跡（19m～21m）のように、概ね標高 13m～40m の低丘陵地に集落が展開している。

今回調査した遺跡の中で西河内遺跡 B 地区（25.5 m）や中屋 B 遺跡（32.5m）は現状河川の傍らに位置し、両遺跡の低地部トレンチ調査では、河川の広がりや滞水・湧水を下位層で確認している。



- | | | | | | |
|------------|----------|---------|---------|----------|-----------|
| 1 堀川遺跡 | 2 平井遺跡 | 3 三反地遺跡 | 4 水奥遺跡 | 5 西河内遺跡 | 6 中屋 B 遺跡 |
| 7 納蔵原 1 号墳 | 8 稻荷山古墳 | 9 開明遺跡 | 10 尾尻遺跡 | 11 石走山遺跡 | 12 国森古墳 |
| 13 木ノ井山古墳 | 14 後井古墳群 | 15 宮川遺跡 | | | |

第 1 図 堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋 B 遺跡の位置と周辺の遺跡

本町を土性別分類からみると、中粗粒質の畑が多く、耕起には土粒がやや粘質となり、栽培に適している。水田は概ね細粒質で灌水の際には粘質となる。湿田が多く滞水状態が続くため、グライ化した土壌分布が広くなり、肥料分解悪や作業困難といった水田栽培上の問題点を引き起こす。しかしながら、県内では小雨区にあたる本町において、河川周辺の段丘や谷底小平野は、畑作や原始的稲作に置き換えれば利水に適した耕作地であったと言えよう。平井遺跡や中屋B遺跡の調査によって発見された弥生中期以降の集落跡の存在がそれを物語っている。

やがて弥生後期以降の有力者の墓として集落外に墳墓が築造されるようになると、県内最古の方墳である国森古墳をはじめとし、多数の古墳出現を見ることとなる。5世紀中葉の円墳で粘土槨を埋葬主体とする木ノ井山古墳、6世紀中葉築造の前方後円墳である納蔵原1号墳、周防国造の系譜に連なる後井古墳など田布施町には20基を超える墳墓が点在する。これらの中には本遺跡群における古墳時代の集落を束ねる有力者の墳墓も存在したであろう。

集落の展開は中世へと続く。波野における初見資料は鎌倉時代、康元元年（1256年）の「伴宗」近売券（『宗禅寺文書』）であり、伴宗近という名主の存在や住居単位「垣内」などが記されている。また波野郷には大内弘直（大内氏栄華の基盤を築いた大内弘世の父である弘幸の弟にあたる）の居館があり、波野殿と呼ばれていた。弘直は建武3年（1336年）石見国に赴き、大山城に立てこもり、来攻した益田氏らの軍勢と戦って討死している。弘直の墓は大山城の麓にあるが、波野市の某邸内にも墓と伝えられる宝篋院塔があり、弘直居館跡とされる場所では土塁も確認されている。この居館跡から水奥遺跡にかけては現在も旧道が南北に延びており、その延長線は岩城山頂へと続く。こうした点から水奥遺跡や平井遺跡に見られる中世建物跡群や出土遺物は、大内氏の関連性も推察される。その後においても応永9年（1402年）2月13日には、大内盛見は興隆寺修二月会の頭役のうち脇頭役の料足を波野郷に負担させている（『興隆寺文書』）。

ところで、水奥遺跡の「水奥」とは、堤などの水源地の奥を意味する。水奥の小名は19世紀に入り、天保13年（1842年）明法寺堤（現妙法寺堤）の存在とともに「水ノ奥」として出現する（『防長風土注進案』）。元文3年（1738年）の『地下上申』によると、堤は数少なく、明法寺堤も存在していない。県内少雨区である田布施低地は、波野や大波野地区をはじめとし、当時全ての地区において早損に悩まされていた。堤からの用水に頼るしかなく、明法寺堤17.2畝（1705.785㎡）をはじめ、多くの堤が作られたことが記載されている。しかしながらその後は先述の土質から、水はけの悪さといった悪水問題に悩まされることとなる。

現代に至っては水稻の作付面積は減ってきたものの、休耕田や粘質性の畑を利用した戦略作物として、イチジク栽培が普及し、県下でも有数のイチジク産地となっている。

引用・参考文献

山口県教育委員会『未指定文化財総合調査報告書』（1985） 田布施町教育委員会『国森古墳』（1988） 田布施町史編纂委員会『田布施町史』（1990） 山口県教育財団・山口県教育委員会『明地遺跡』（1993） 山口県教育財団・山口県教育委員会『林遺跡』（1993） 山口県教育委員会『石走山遺跡』（1993） 山口県教育財団・山口県教育委員会『明地遺跡Ⅱ』（1994） 山口県教育委員会『木ノ井山古墳』（1994） 田布施町教育委員会『納蔵原古墳』（1996） 山口県『山口県史 資料編 考古1』（2000） 山口県埋蔵文化財センター『石走山遺跡Ⅱ』（2006） 山口県埋蔵文化財センター『開明遺跡・尾尻遺跡』（2013） 山口県文書館『防長風土注進案』『地下上申』

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県教育委員会では、ほ場整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については、記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。柳井市、熊毛郡田布施町及び光市の一部で始まった南周防農地整備事業に際し、中国四国農政局、田布施町農村整備課及び田布施町教育委員会などとの協議を重ね、当該地域の中で遺構が埋存している可能性が高い地域について、平成22年度に山口県教育委員会が試掘調査を行った。その結果、遺構が確認され、現状保存が困難な開明遺跡 2,300㎡、尾尻遺跡 2,700㎡、堀川遺跡 268㎡、平井遺跡 1,505㎡、三反地遺跡 800㎡、水奥遺跡 848㎡、西河内遺跡 800㎡、中屋B遺跡 814㎡を対象に、記録保存を図るための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、中国四国農政局からの委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団と田布施町教育委員会が平成23・24・25年度の3年間にわたり共同で実施することとなった。開明遺跡・尾尻遺跡は平成23・24年度に発掘調査を実施し、平成25年3月に報告書を発行している。堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡については平成24年度に発掘調査を実施し、平成25年度に発掘調査を実施した水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡とともに報告書の作成・発行をする運びとなった。

2 調査の概要

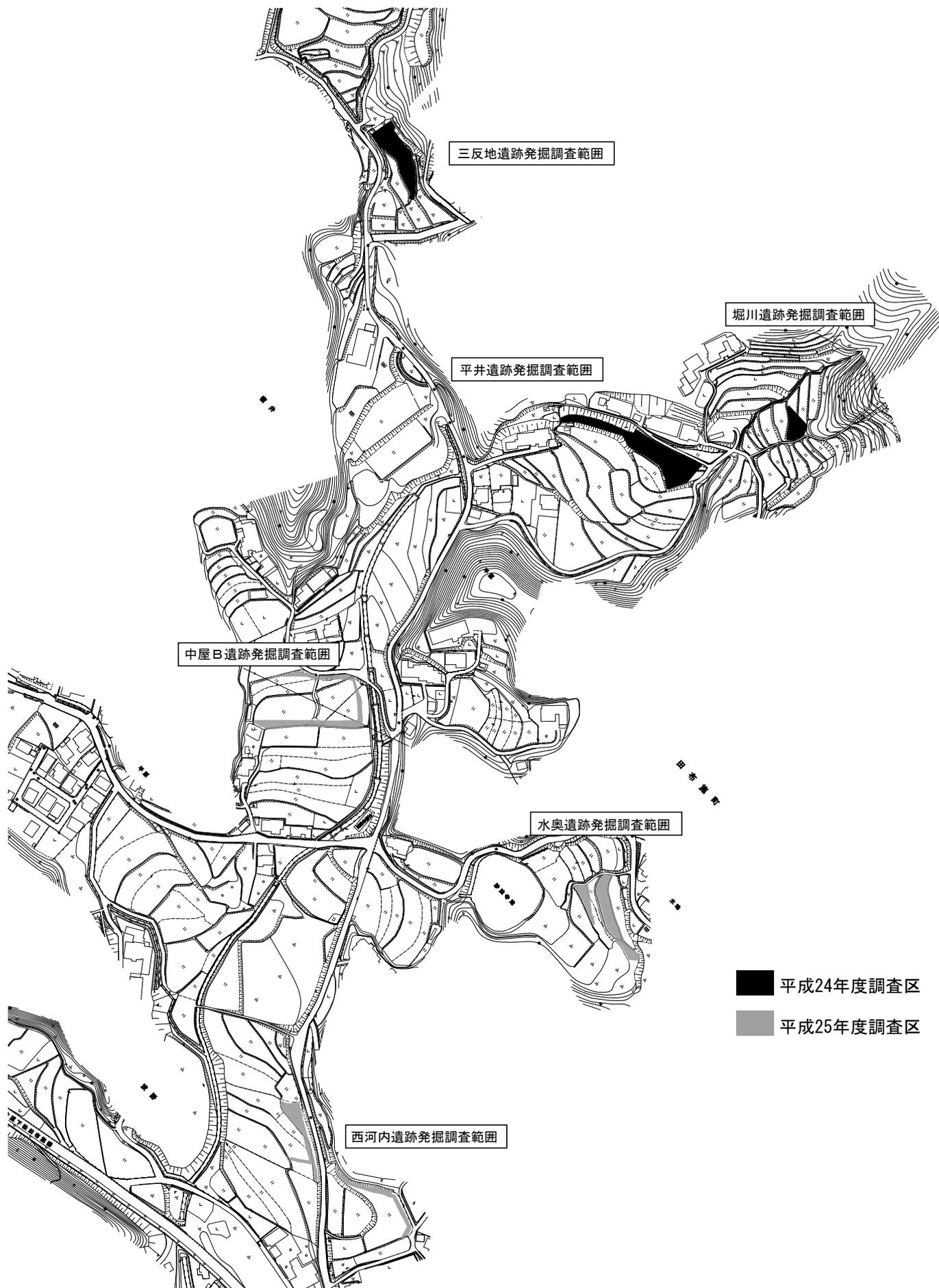
現地調査を始めるにあたっては、中国四国農政局、田布施町農村整備課及び田布施町教育委員会との打ち合わせや調査区の現状確認・環境整備等を行い、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に安全確保のための理解と協力を要請した。

平成24年度調査は平成24年12月3日、堀川遺跡の表土除去から始まり、続いて平井遺跡、三反地遺跡の順に行った。壁面清掃・遺構検出・掘り込み作業と進めていったが、平成25年1・2月は極寒に阻まれ、掘り込み作業は難航した。また、平井遺跡の遺構密度は高く、遺物の多さも調査の進行を妨げたが、無事3月24日、空中写真測量を実施することができ、翌3月25日に3遺跡全ての現地調査を終了した。

平成25年度調査は、平成25年5月30日、重機による西河内遺跡の表土除去作業から始め、順に中屋B遺跡、水奥遺跡と進めていった。6月4日から作業員を現地投入し壁清掃・遺構検出作業を開始したが、梅雨時の雨や猛暑によって、作業の進行に大きな影響を受けた。しかし、こうした悪条件の中でも、遺構や包含層の掘り込みは着実に進み、9月13日に中屋B遺跡、10月14日に水奥遺跡の空中写真撮影を実施。10月29日、3遺跡の発掘調査が無事終了した。

平成24・25年度ともに、発掘調査の終了報告を受けて、中国四国農政局南周防農地整備事業所による完了確認がなされ、その後、発掘現場の引き渡しを行った。

以後、かねてより進めていた図面整理に本格的に取り掛かり、新たに遺物実測・写真撮影を行っていった。挿図・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を継続し、平成26年3月20日に発掘調査報告書(本書)を刊行した。

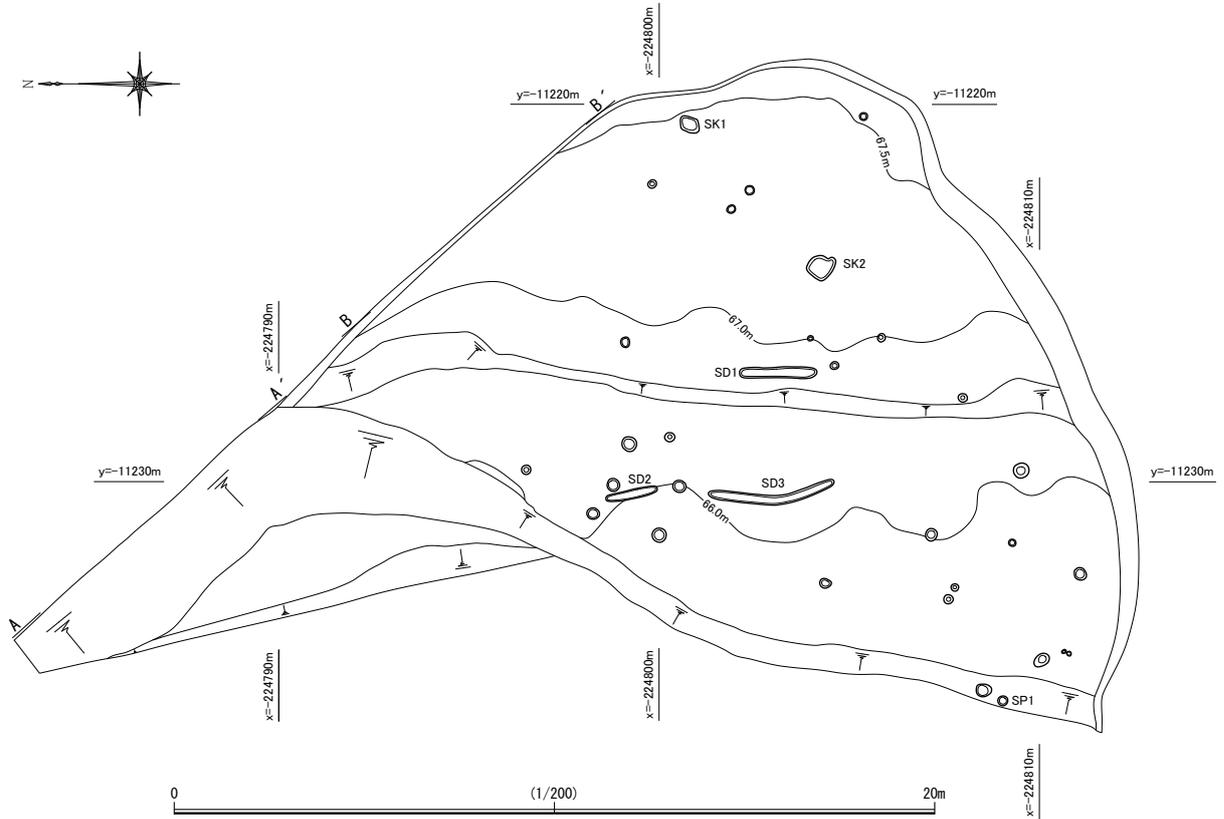


第2図 調査区設定図

Ⅲ 堀川遺跡調査の成果

1 遺構

調査区は、行者山北部の山塊から西に張り出す狭い尾根上に位置し、標高はおよそ 65.5 ～ 67.5 m である。調査区東側は山林、西側は 1.5 m 以上落差のある棚田、北西は直ぐ北に谷川が流れ、南側は



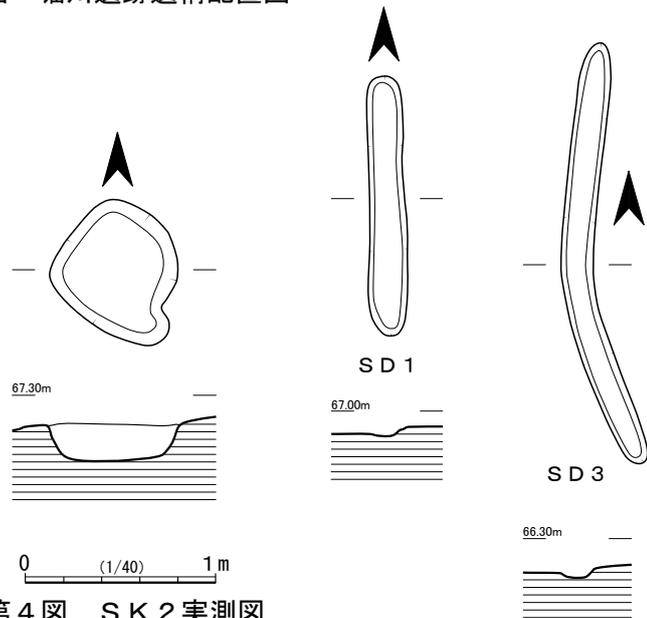
第3図 堀川遺跡遺構配置図

幅 1 m あまりの道を挟んで湿田となっている。

遺構は、地山に掘り込まれている。地山には多数の礫がみられ、遺構の深さが浅いことから、水田造成時に上面を削平されたものと考えられる。検出された遺構は、土坑 2 基、溝 3 条、柱穴 26 個と少なく、集落の中心部は東側の山腹にあると考えられる。

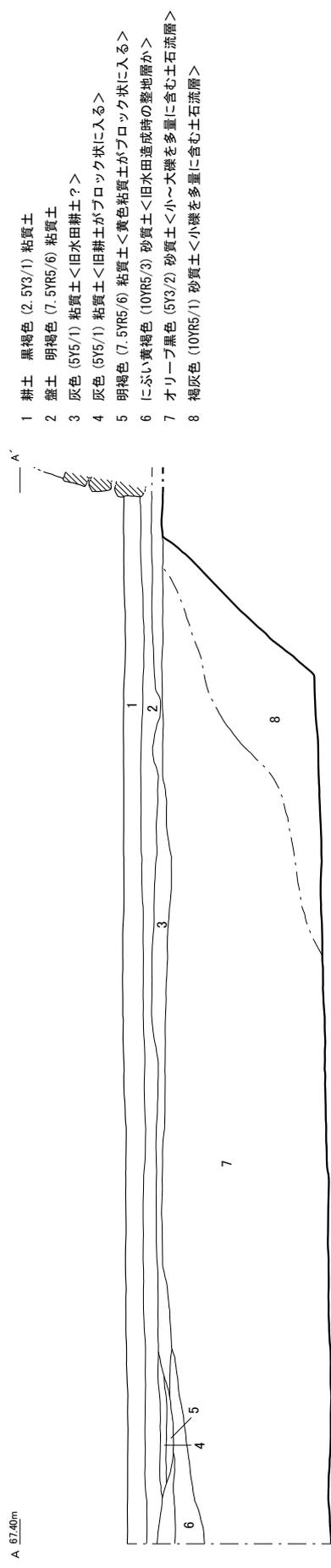
(1) 土坑

SK 1 (第3図) 調査区東端部にあり、東側山裾から常時湧水が認め

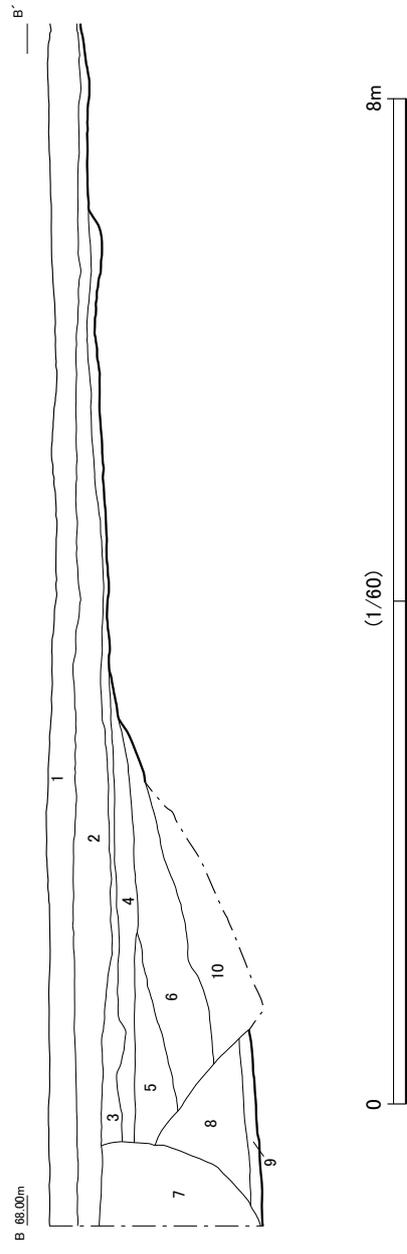


第4図 SK 2 実測図

第5図 SD 1・3 実測図



- 1 耕土 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
- 2 盤土 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
- 3 灰色 (5Y5/1) 粘質土<旧水田耕土?>
- 4 灰色 (5Y5/1) 粘質土<旧耕土がブロック状に入る>
- 5 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土<黄色粘質土がブロック状に入る>
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土<旧水田造成時の整地層か>
- 7 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質土<小~大礫を多量に含む土石流層>
- 8 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土<小礫を多量に含む土石流層>



- 1 耕土 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
- 2 盤土 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
- 3 旧水田耕土? 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 4 旧水田の盤土? 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
- 5 旧水田整地層 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 6 旧水田客土? 褐灰色 (10YR4/1) 土
- 7 裏込め土 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土<小礫を含む>
- 8 裏込め土 灰黄褐色 (10YR4/2) 土<小礫を多量に含む>
- 9 灰色 (5Y5/1) 粘質土
- 10 明赤褐色 (5YR5/6) 粘質土



第6図 調査区北壁土層断面図

られる。平面形は不整形で、長径 50cm、短径 39cm、深さは 26cm である。埋土は小石を含む灰色弱粘質土で、部分的に黄褐色弱粘質土のブロックを含む。遺物は検出されていない。

SK 2 (第 4 図) 調査区の中央やや北寄りにあり、平面形は不整形で、南東部がやや突出する。床面はほぼ平坦で、長径 78cm、短径 65cm、深さは 20cm である。埋土は灰色弱粘質土で、遺物は検出されていない。

(2) 溝

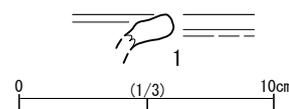
SD 1 (第 5 図) 調査区のほぼ中央にあり、長さは南北方向に 204cm、深さは最大で 7cm である。埋土は灰色弱粘質土で、遺物は検出されていない。

SD 2 (第 3 図) 調査区の南寄りにあり、ほぼ南北方向に長さ 137cm、深さは最大で 9cm である。埋土は灰色弱粘質土で、遺物は検出されていない。

SD 3 (第 5 図) 調査区の中央やや南寄り、SD 2 の東側にあり、ほぼ南北方向に延びるが、南半部はやや東に曲がる。全長は 334cm、深さは最大で 10cm である。埋土は灰色弱粘質土で、遺物は検出されていない。SD 2 と一連の溝であった可能性がある。

柱穴 26 個が発見されたが、掘立柱建物跡は復元できなかった。遺構からの出土遺物がほとんどないため、時期の特定は難しい。表土中から、土師質鍋の口縁部片 (1) が出土し、サヌカイト剥片 (2) が採集された。

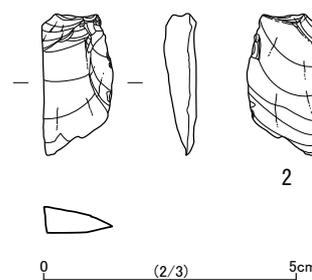
調査区北壁 (第 6 図) を観察すると、北側の現在小川が流れる谷に向かって落ち込んでいく西側部分の下層に多量の礫を含んだ複数の堆積層が認められ、尾根の周辺部では度々土石流が起こったものとみられる。



第 7 図 出土遺物実測図 (1)

2 遺物

1 は表土中から出土した土師質鍋の口縁部片である。口縁部は短く、口唇部は面をもち、両端部はやや丸味を帯びる。胴部以下を欠失するが、内面は口縁部と胴部の境で屈折し、屈折部に稜をもつ。13～14 世紀のものとみられる。2 はサヌカイトの剥片である。打割によって作成した剥片の、上端部及び表面側辺に剝離を加えている。



第 8 図 出土遺物実測図 (2)

第 1 表 出土土器観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
7	2	1	表土中	土師器	鍋	-	-	(1.4)	やや密	良	にぶい橙色 褐灰色	ヨコナデ ヨコナデ	外面に煤付着

第 2 表 出土石製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
8	2	2	表面採集	石製品	剥片	2.8	1.4	0.6	2.4	サヌカイト	

IV 平井遺跡調査の成果

1 遺構

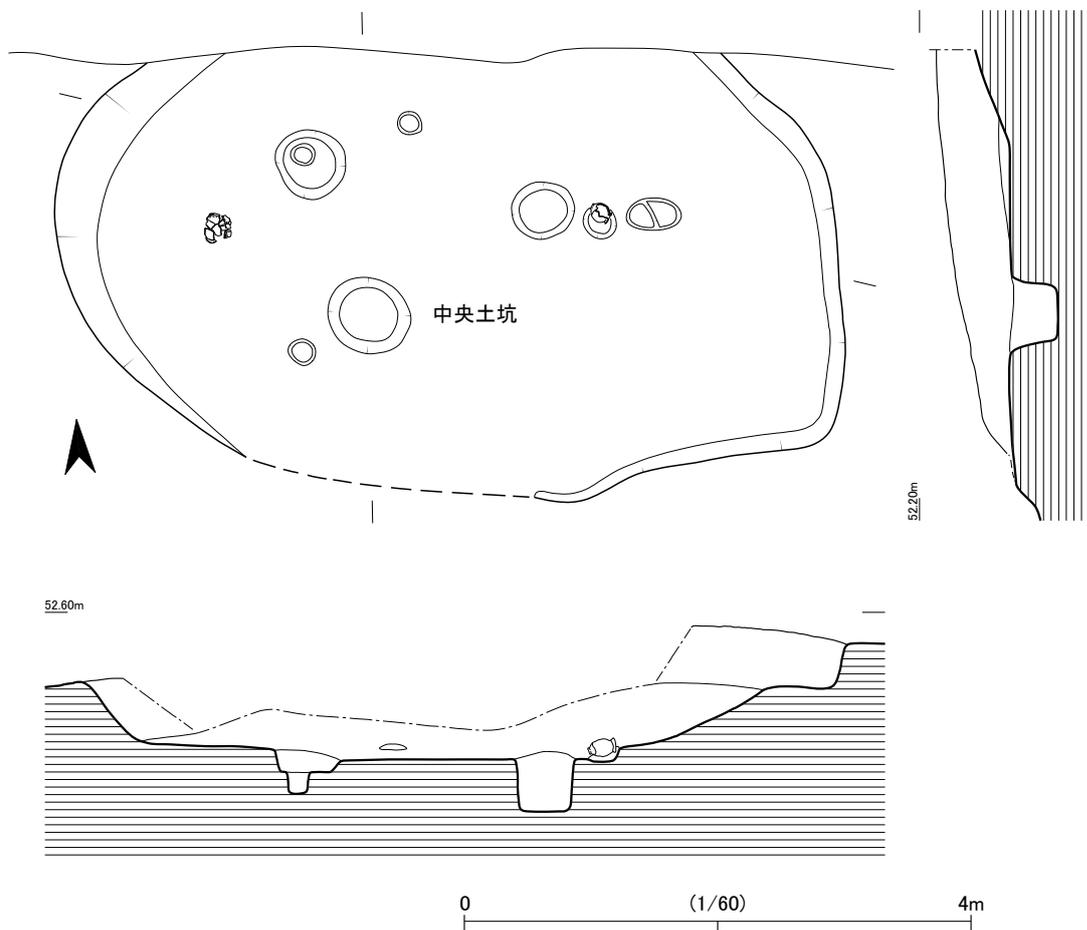
堀川遺跡の西南西約 150 mにある。調査区の標高は概ね 51 ~ 54 mである。調査区のほぼ全面を覆う遺物包含層は、S I 2より西を西部、S I 2~S I 7間を中央部、S I 7より東を東部とした。遺物包含層の厚さは、10 ~ 120cmである。

(1) 竪穴建物跡

調査区のほぼ中央部から西端部にかけて、弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡 9軒が確認できた。うち、S I 8・S I 9は、S I 1西側の壁面に南端部のみが露出した(第 19 図)。

S I 1(第 9・19 図 図版 4) 調査区北西部にあり、北側は調査区外に続き、南側は一部流失している。平面形は不整長円形を呈し、長径 612cm、残存短径 339cm、深さは北側上場から 99cmである。中央北寄りに直径 50cmの柱穴が柱間約 2 mで並び、支柱穴の可能性もある。中央やや南西に炉とみられる直径約 65cmの中央土坑がある。焼土塊及び炭が繰り返し投棄されている。埋土中及び床面直上から弥生土器が出土した。後期前半の竪穴建物跡と考えられる。

S I 2(第 11 図 図版 4・5) 調査区西部にあり、竪穴建物跡中、規模が最大である。平面形は円形で、北西部が突出する。壁下に幅約 120cmのベッド状部がめぐり、内部は八角形に掘りくぼめる。東西径 754cm、南北径は調査区内で 530cm、深さは北側上場から約 80cmである。周溝は、北半部の壁下及び



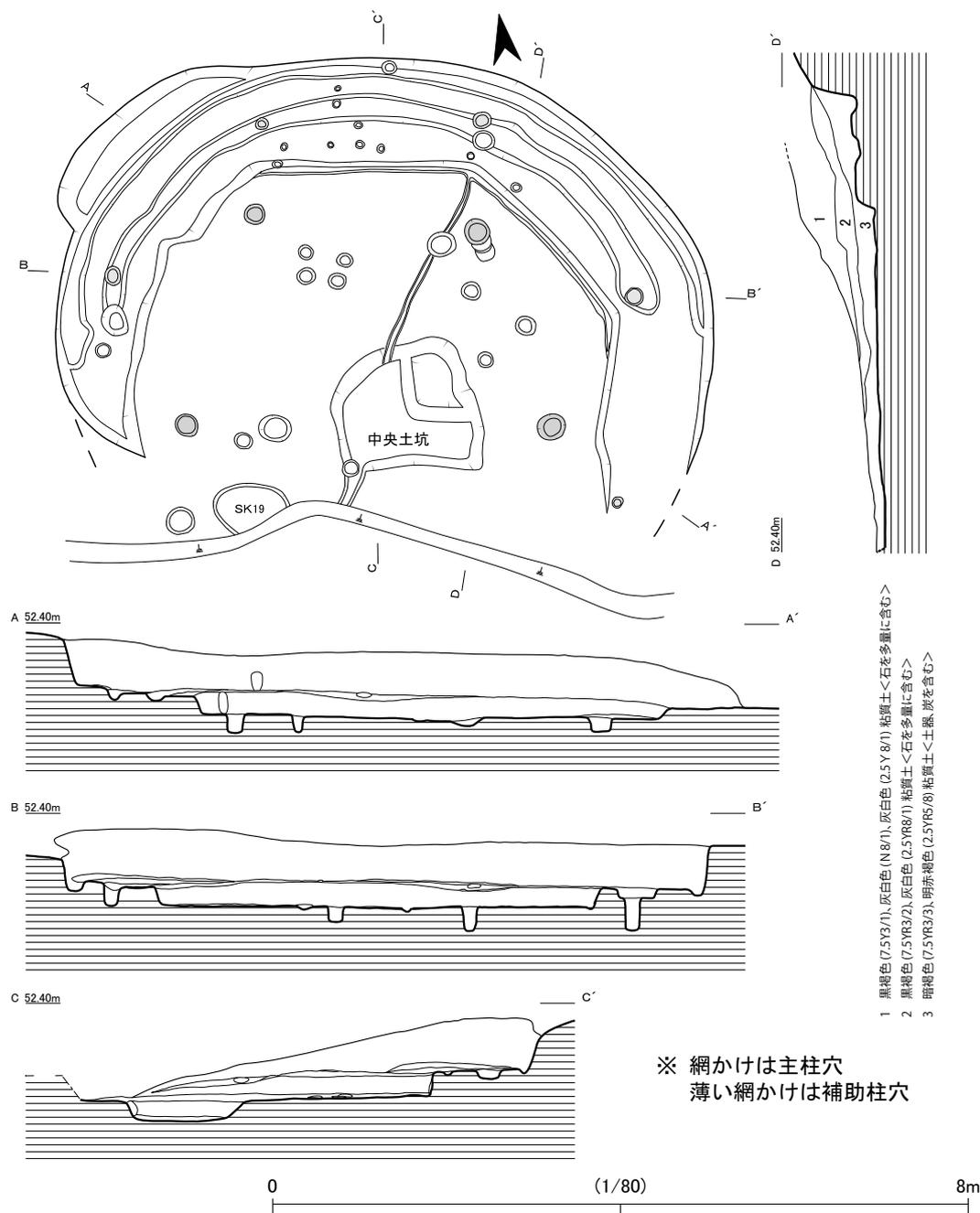
第 9 図 S I 1 実測図



第10図 平井遺跡遺構配置図

ベッド状部中央付近と八角形掘り込み北側壁下で検出された。八角形掘り込み壁下周溝から中央土坑
 にかけて浅い溝がある。ほぼ中央に184cm×158cmの不整形の中央土坑があり、焼土や炭を含み、甕
 などが出土したことから炉とみられる。主柱穴は八角形掘り込みから約50cm内側に並ぶ4本とみら
 れ、調査区外を含め5本と推定される。また、ベッド状部中央の周溝部に補助柱穴が約280cm間隔で
 5本並ぶ。後期の建物跡と考えられる。

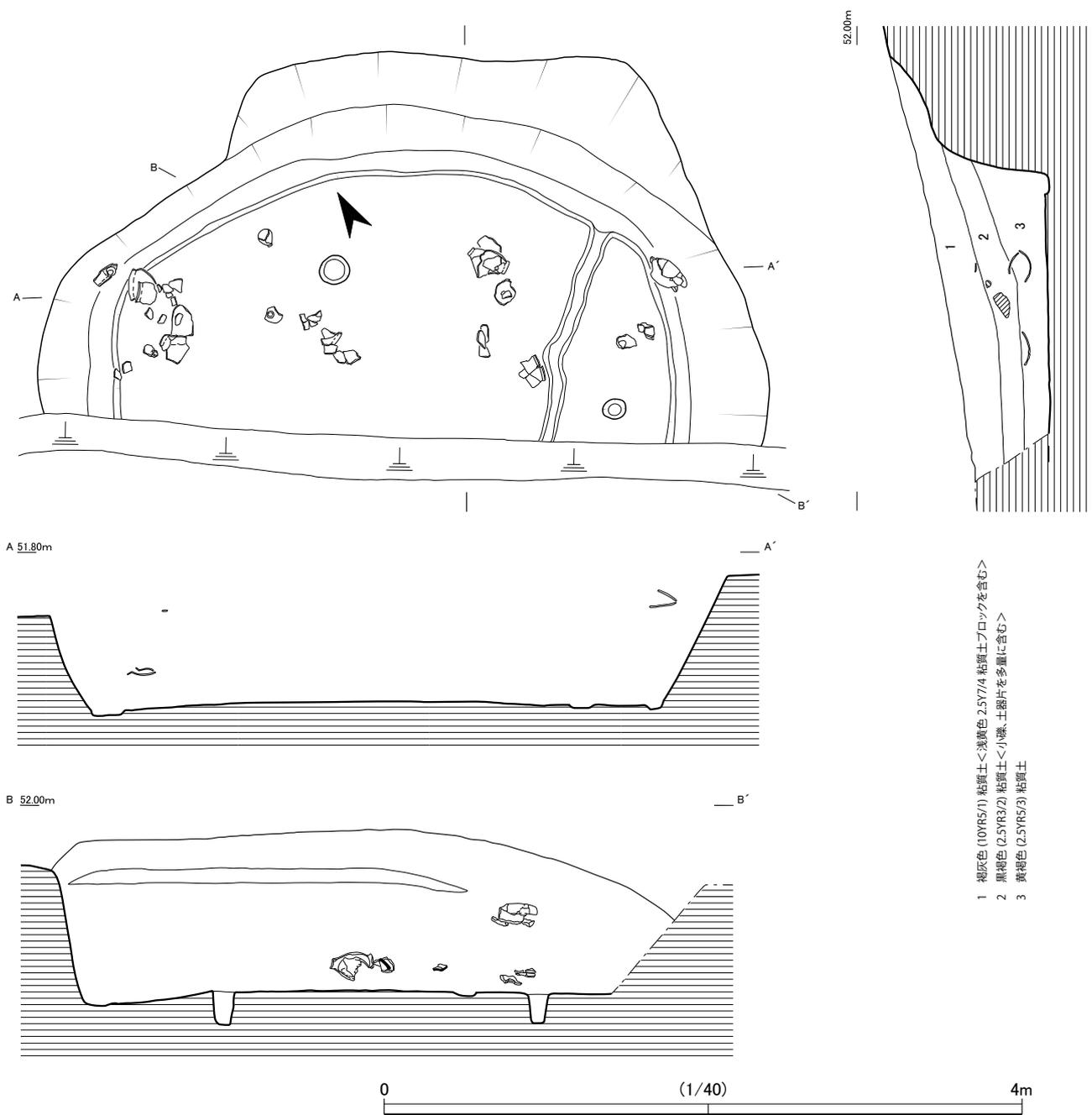
S I 3 (第12図 図版5) S I 2の東側に隣接する。平面形は円形で、南半部は調査区外に続く。
 東西径は446cm、深さは北側上場から102cmである。壁下に幅10～20cmの浅い周溝がめぐり、北東



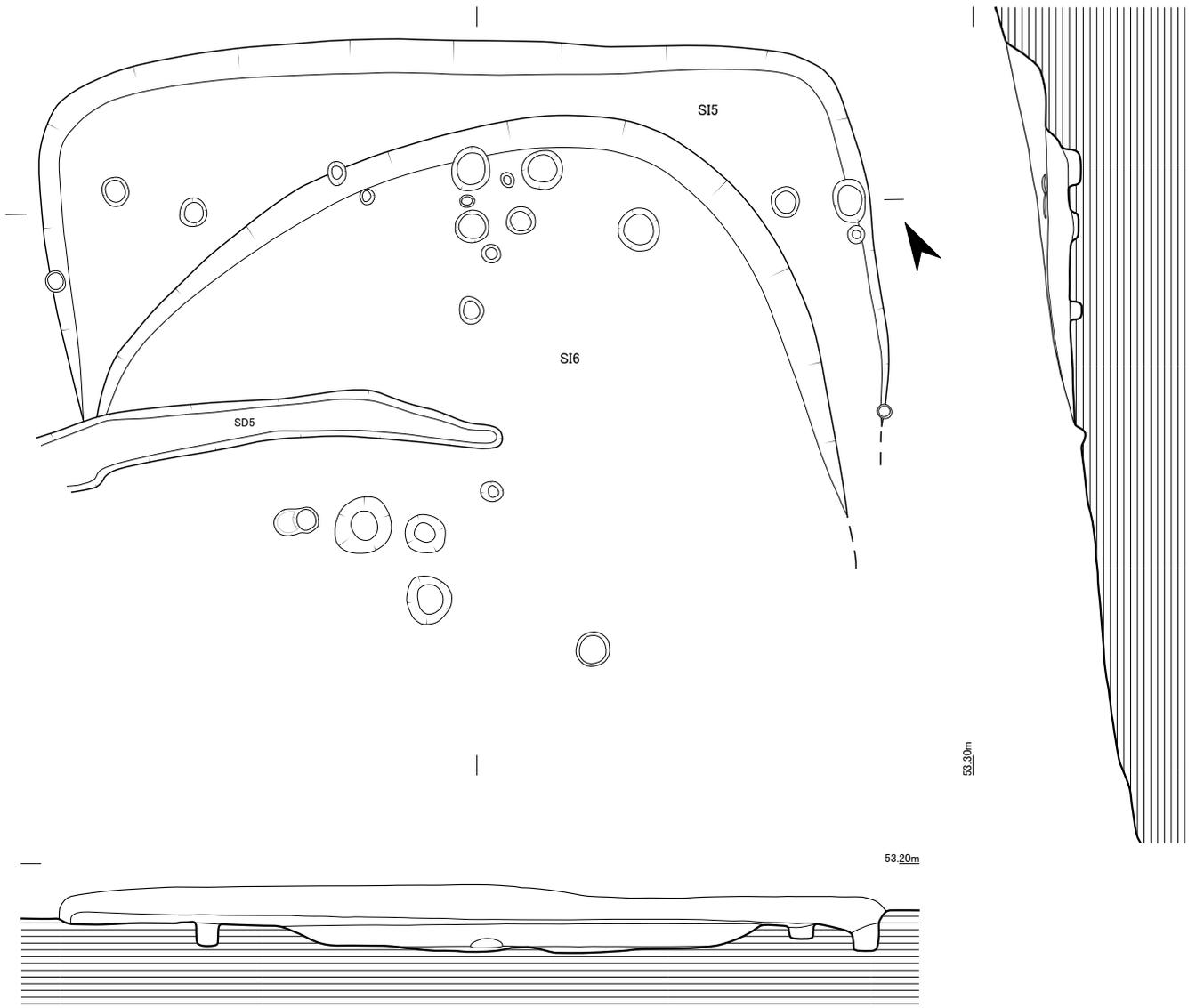
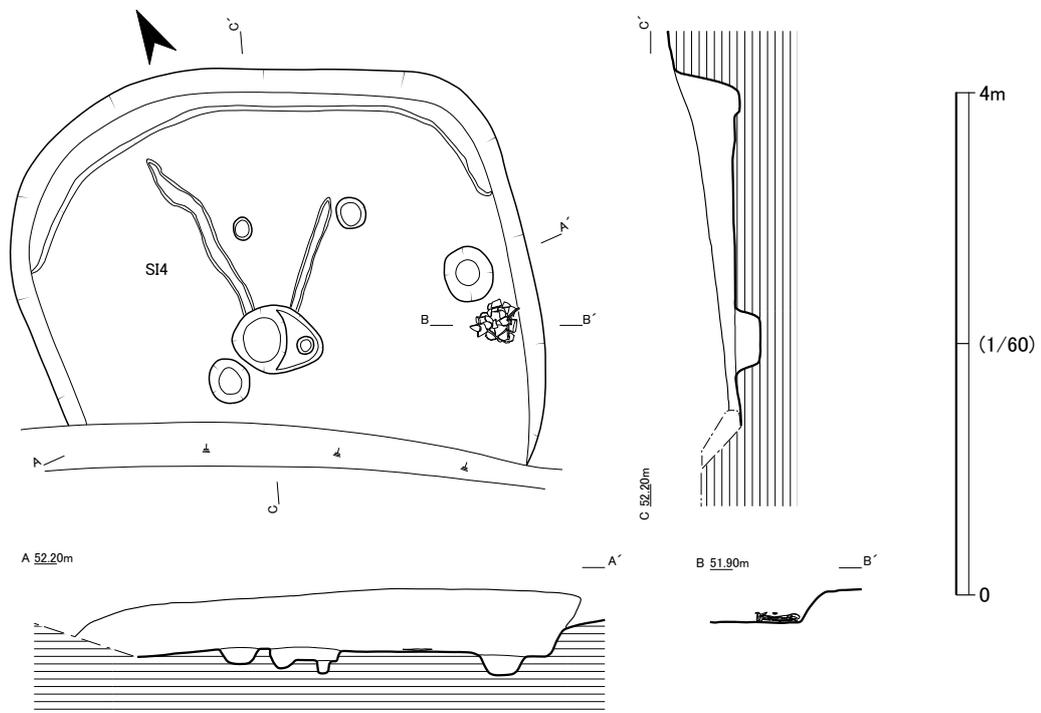
第11図 S I 2実測図

部から枝分れした溝が南の調査区外に続く。主柱穴は判然としない。埋土は、3層に分かれ、上から褐灰色粘質土、2・3層は黒褐色粘質土である。2・3層の床面から10～50cm上で、多量の弥生土器が出土した。良好なセット資料とみられ、後期前半に位置づけられる。

S I 4 (第13図 図版6) S I 3の東側にある。平面形は不整隅丸方形で、南端部は調査区外へ続く。東西径415cm、深さは北側上場から55cmで北半部壁下は浅い周溝がめぐる。ほぼ中央に炉とみられる50cm×70cmの長円形の土坑が検出され、北側2方向から浅い溝が接続する。主柱穴は判然としない。東端壁下で甕一個体が検出され、埋土中から弥生土器片が出土した。



第12図 S I 3実測図



第13図 SI4~6実測図

S I 5・6 (第 13 図 図版 6) 調査区の中央部にあり、S I 6→S I 5→S D 5 の順につくられ、南半部は流失している。S I 5 は平面形が方形で、東西径は最大 723cm、深さは北側上場から 30cm である。支柱穴は判然としない。出土土器は土師器・須恵器で、古墳時代後期のものである。S I 6 は平面形が不整円形で、直径は最大 620cm である。S I 5 床面からの深さは 24cm である。支柱穴は判然としない。埋土中から弥生時代後期の土器片が出土した。

S I 7 (第 14 図 図版 7) S I 5・6 の東に隣接する。平面形は方形で、南端部は流失する。東西径は 567cm、深さは最大 27cm である。北辺中央部付近に焼土が認められたが、カマドに伴うものではないとみられる。支柱穴は 4 本で東西の柱間は約 3 m、南北の柱間は約 2.1 m である。埋土は暗褐色粘質土で、土師器・須恵器片が出土し、古墳時代後期後半のものである。

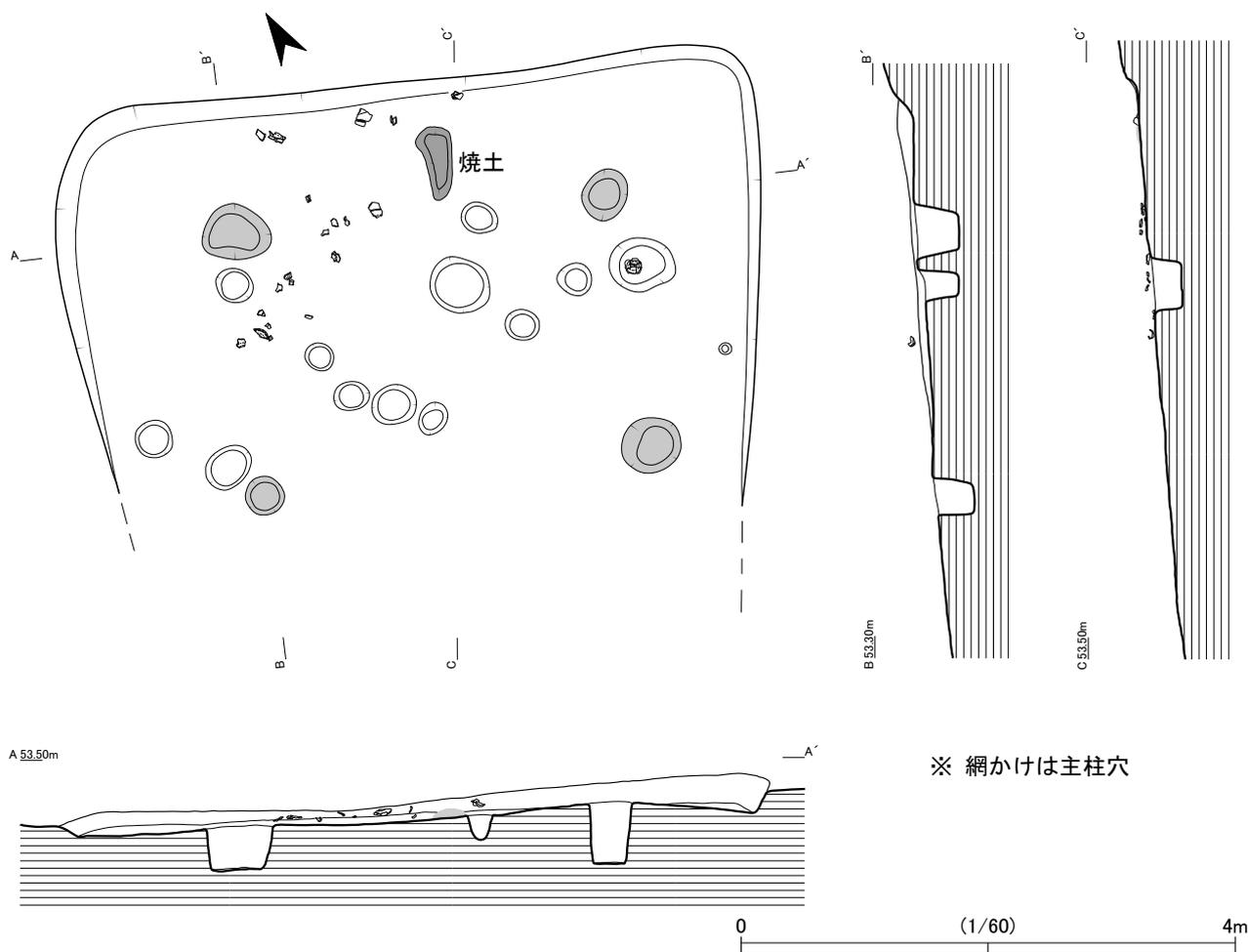
(2) 掘立柱建物跡

多数の柱穴が検出されたが、復元できた掘立柱建物跡は 1 棟のみである。

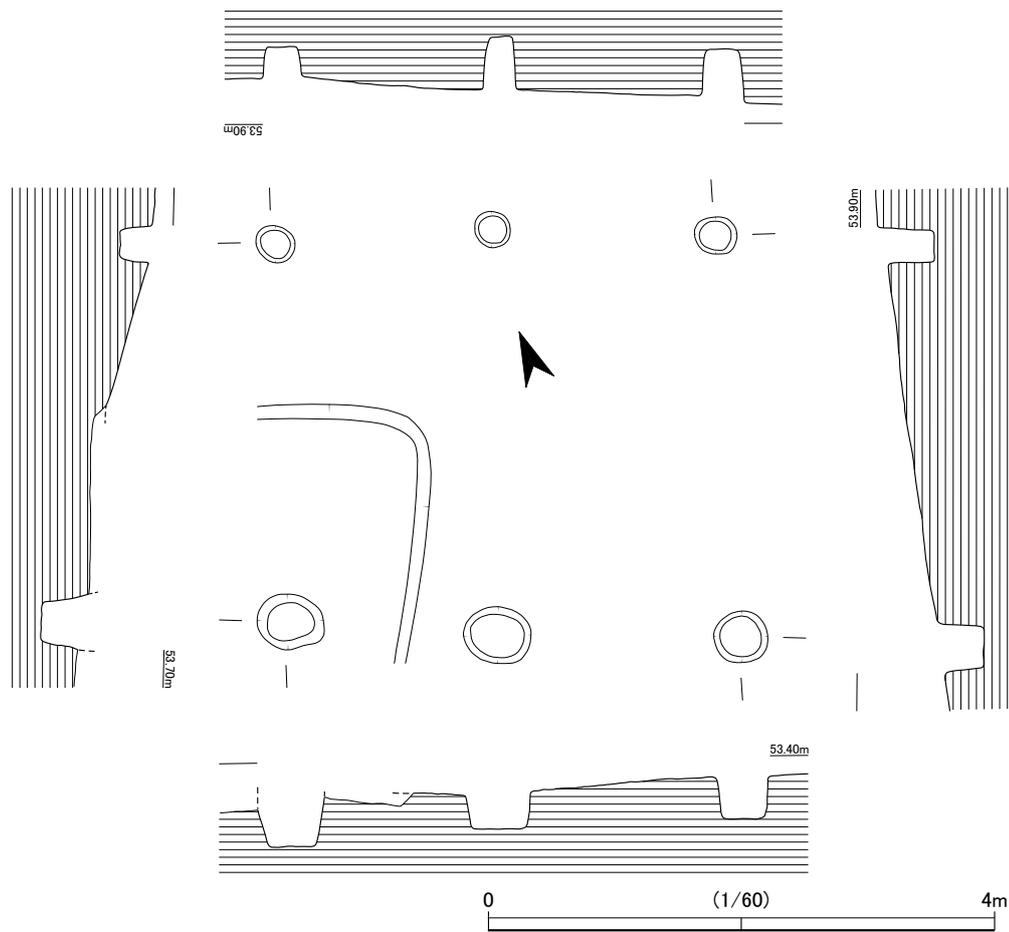
S B 1 (第 15 図 図版 3) S B 7 の北東に隣接する。規模は 2 間×1 間で、桁行 354cm、梁行 317cm である。S B 7 より新しいが、出土遺物がほとんどないため、詳細な時期は不明である。

(3) 柱穴

S P 2 (図版 7) S I 1 の西にあり、古墳時代の完形の土師器椀 2 個体などが出土した。建物の廃絶儀礼に関わる可能性がある。



第 14 図 S I 7 実測図



第15図 SB1実測図

SP6 (第16図) SI7の南東にある。弥生土器の鉢1個体が、検出された。

(4) 土坑

19基が検出され、径1m以下、深さ30cm以下のものが多い。多くは埋土が黒褐色粘質土で、弥生土器片や土師器片を含む。

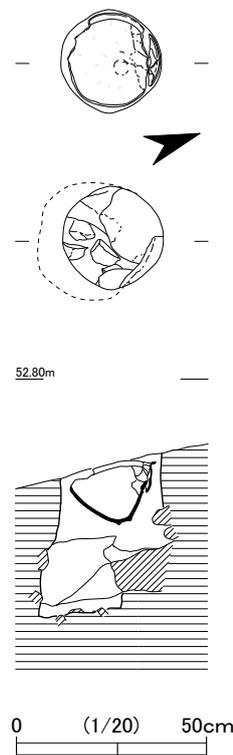
SK5 (第17図) SI1の東にある。平面形は不整形で、長径101cm、短径75cm、深さは36cmである。

SK7 (第17図) SI1とSI2のほぼ中間にある。平面形は長円形で、長径107cm、短径45cm、深さは14cmである。

SK10 (第17図) SI4の東にある。平面形は長円形で、南端部は流失する。長径179cm、短径は120cm以上で、深さは9cmである。埋土中から、弥生土器高杯脚部片が出土した。

SK13 (第17図 図版8) SI5・6の南東にあり、平面形はほぼ円形で、直径113～122cm、深さは47cmである。

SK17 (第17図) SI7の東にあり、SK15・16・18と近接する。平面形は不整形長円形で、長径177cm、短径78cm、深さは18cmである。



第16図 SP6実測図

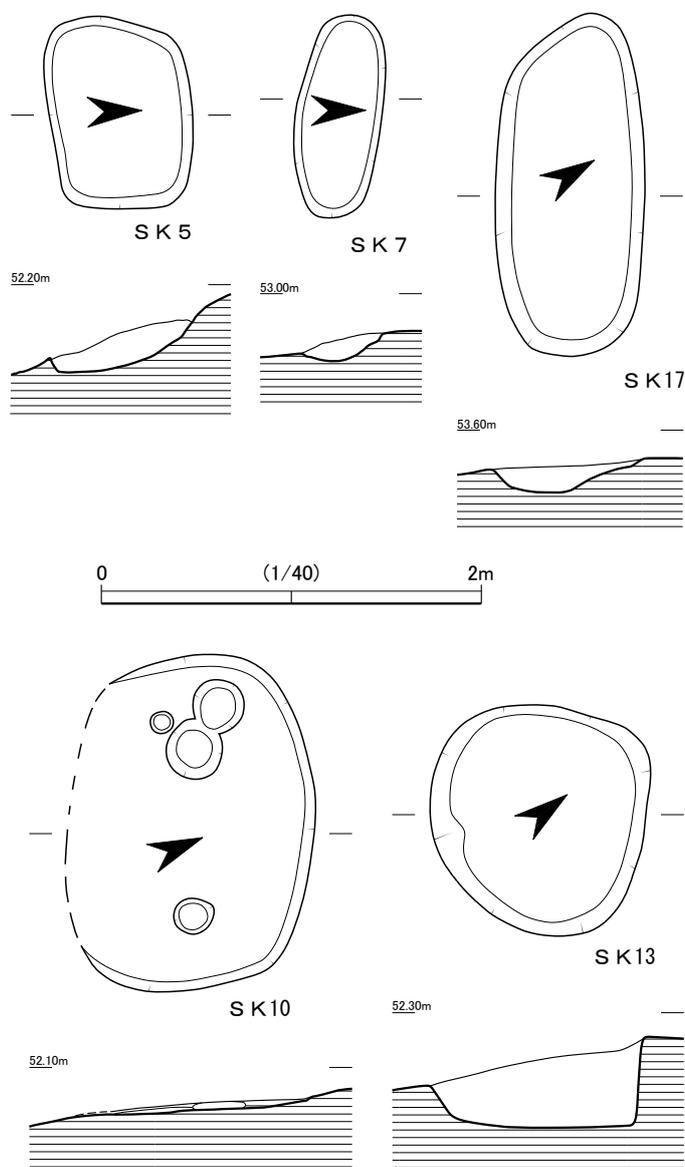
(5) 溝

8条の溝が検出された。SD 2以外は、等高線に沿って東西方向に掘り込まれている。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器片や土師器片を含む。

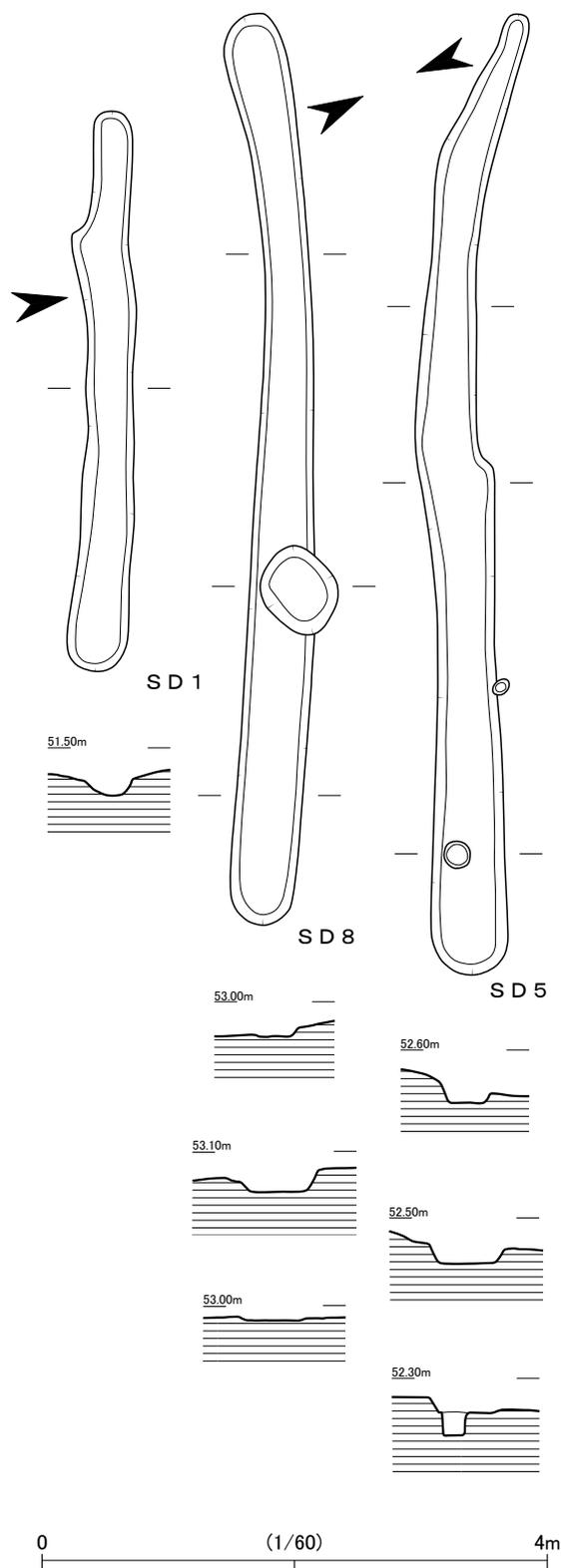
SD 1 (第 18 図 図版 8) S I 1 の南東にある。長さは 442cm、最大幅は 37cm、深さは 13cm で、埋土中から古墳時代の土師器の甕などが出土した。

SD 5 (第 18 図 図版 9) SD 4 の東側にあり、S I 5・6 を切る。SD 4 と一連の溝とみられる。長さは 760cm、最大幅は 55cm、深さは 16cm である。埋土中から古代の土師器皿や須恵器杯身・蓋片等が出土した。

SD 8 (第 18 図) S I 7 の南東にあり、長さは 720cm、最大幅は 44cm、深さは 9cm である。

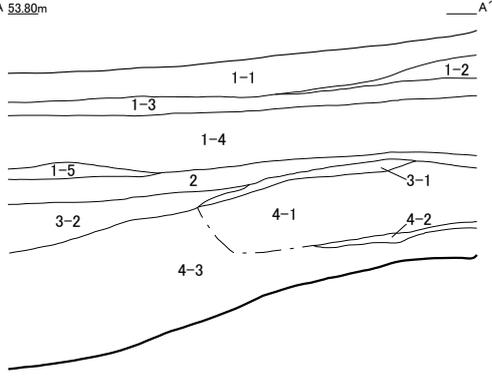


第 17 図 SK 5・7・10・13・17 実測図



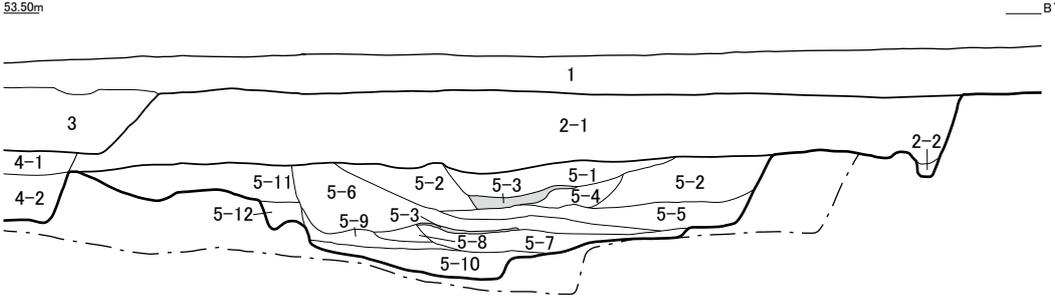
第 18 図 SD 1・5・8 実測図

A 53.80m

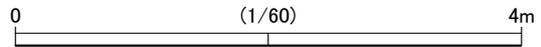


- 1-1 耕土・表土 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土
- 1-2 耕土・表土 褐灰色 (7.5YR4/1) 弱粘質土<一部瓦礫片を含む>
- 1-3 耕土・表土 灰色 (5Y5/1) 弱粘質土<炭片を含む>
- 1-4 耕土・表土 オリーブ灰色 (5GY6/1) 弱粘質土<明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土ブロックを含む>
- 1-5 耕土・表土 灰色 (10Y6/1) 弱粘質土<明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土ブロックを含む>
- 2 灰褐色 (5YR4/2) 粘質土<礫、炭、土器片を含む>
- 3-1 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土<小礫、土器片、焼土片を含む>
- 3-2 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土<マンガン、赤変有機質を含む>
- 4-1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土<小礫、土器片、炭を含む>
- 4-2 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土<多量の焼土を含む、最下部は炭層>
- 4-3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土<多量の土器片、マンガン粒を含む、遺物包含層>

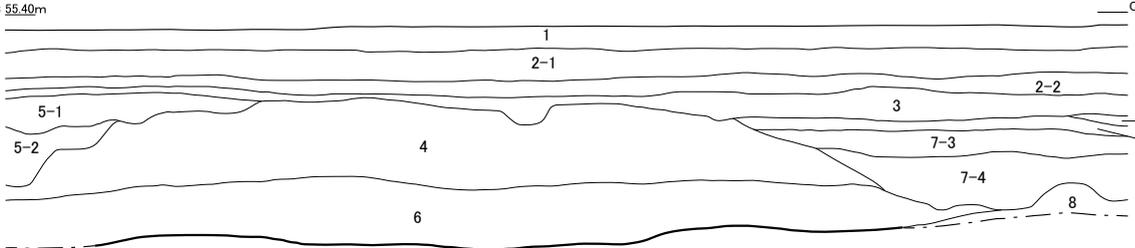
B 53.50m



- 1 耕土 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質土
- 2-1 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土<土器片、小礫、褐色 (7.5YR4/6) 粘質土ブロックを含む>
- 2-2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土<褐色 (7.5YR4/6) 粘質土ブロックを含む>
- 3 S I 9埋土: 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土<小礫、土器器、須恵器片を含む>
- 4-1 S I 8埋土: 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘質土<炭、土器片を含む>
- 4-2 " : 灰褐色 (5YR4/2) 粘質土<礫、炭、土器片を含む>
- 5-1 S I 1埋土: 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土<小礫、焼土塊、炭の小片を含む>
- 5-2 " : 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土<炭、土器、焼土片を含む>
- 5-3 " : 炭層
- 5-4 S I 1埋土: にぶい赤褐色 (2.5YR4/4) 粘質土<焼土塊+炭 (主に下位)>
- 5-5 " : 褐色 (10YR4/6) 粘質土<オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土ブロック、焼土、炭を含む>
- 5-6 " : 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土<黄褐色 (10YR5/6) 粘質土ブロック、焼土、炭を含む>
- 5-7 " : にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土<炭の小片を含む>
- 5-8 " : 赤色 (10R4/6) 粘質土<焼土層、炭片を含む>
- 5-9 " : 焼土塊+炭層
- 5-10 " : 褐色 (10YR4/4) 粘質土<炭、土器の小片を含む>
- 5-11 " : 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土<明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土ブロック、小礫を含む>
- 5-12 " : 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土<にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘質土ブロック、小礫を含む>

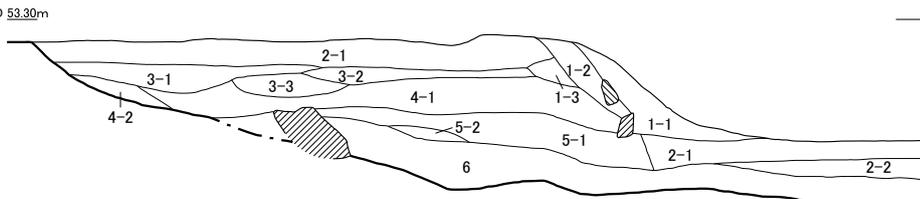


C 55.40m



- 1 耕土 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質土
- 2-1 盤土 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土
- 2-2 盤土 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
- 4 礫層 黒色 (7.5YR2/1) 砂質土<上半は大小礫を多量に含む>
- 5-1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土<整地土>
- 5-2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土<マンガンを少量含む、整地土>
- 6 褐色 (7.5YR4/4) 土<小礫を含む>
- 7-1 黄褐色 (10YR5/6) 弱粘質土
- 7-2 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
- 7-3 褐灰色 (10YR4/1) 土
- 7-4 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
- 8 褐灰色 (7.5YR4/1) 土<小礫を少量含む>

D 53.30m



- 1-1 黄灰色 (2.5Y4/1) 土
- 1-2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 土<石垣の裏込め 砂質土>
- 1-3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土<石垣の裏込め>
- 2-1 灰色 (5Y4/1) 粘質土<耕土>
- 2-2 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
- 3-1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土<盤土>
- 3-2 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土<盤土>
- 3-3 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土
- 4-1 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土<小礫を含む>
- 4-2 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土
- 5-1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土<小礫を含む>
- 5-2 明黄褐色 (10YR6/6) 弱粘質土
- 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土<礫を多量に含む>

第 19 図 調査区壁面土層断面図

2 遺物

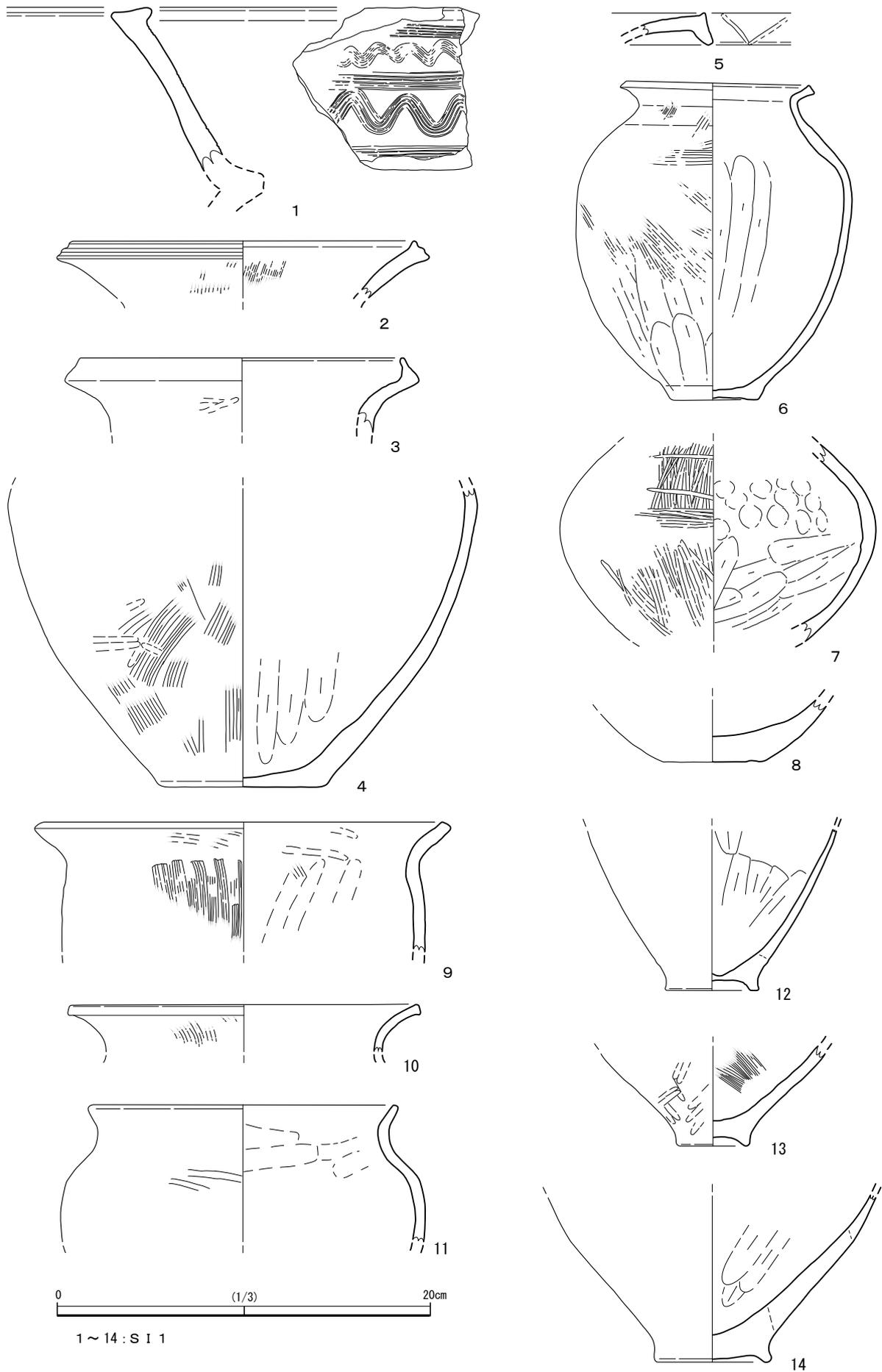
竪穴建物跡出土品を中心に、主な遺物について記述する。その他は、観察表を参照されたい。

(1) 土器 (第 20 ~ 34 図 図版 10 ~ 24)

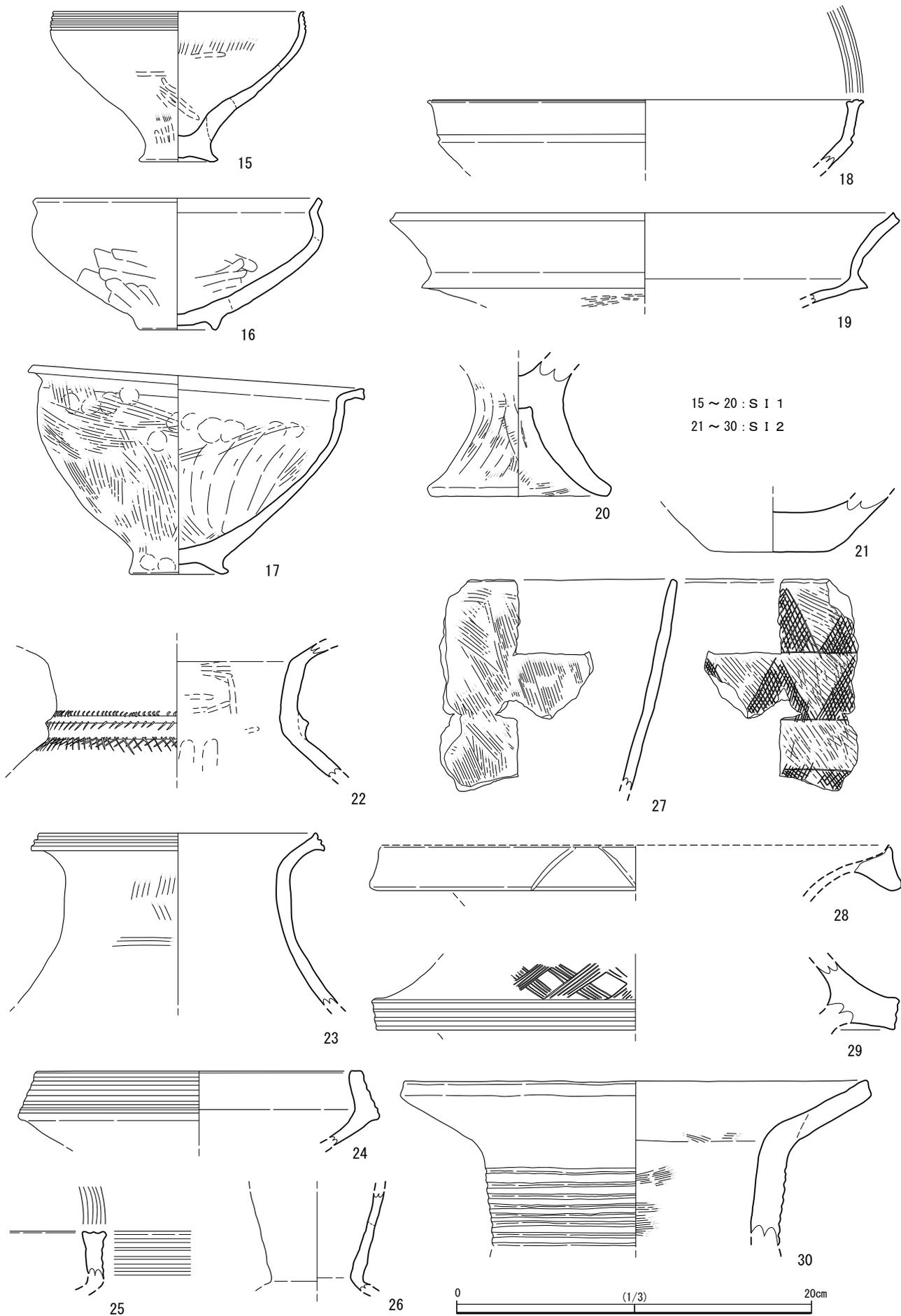
1 ~ 20 は S I 1 出土の弥生土器である。1 は複合口縁壺の立ち上がり部で、端部を外方に拡張する。外面に櫛描き平行線文及び波状文を施す。2 は壺の口縁部で、端部に 2 条の擬凹線をめぐらす。5 は壺の口縁部で、垂下部外面にヘラ描き山形文を施す。15 は鉢で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、外面に 4 条の擬凹線を施す。瀬戸内海沿岸地域の影響をうけたものとみられる。S I 1 出土土器は、流入や混入とみられる 1 と 5 以外は、後期前半に位置づけられる。21 ~ 44 は S I 2 出土の弥生土器である。27 は長頸壺で、斜格子を入れた山形文を 3 段施している。41 は器台の筒部で、平行沈線文、3 段以上の円孔透かしを施す。45 ~ 70 は S I 3 出土の弥生土器である。46 は複合口縁壺で、内傾する立ち上がり部を貼付する。50 は甕で、口縁端部に 2 条の擬凹線がめぐり、頸部に連鎖状突帯を貼付する。51 ~ 53 は甕で、底部は上げ底、胴部上位が張り、口縁部はくの字形に外反する。外面は縦方向のハケ目やヘラミガキ、内面はヘラケズリを行う。55・56・58・61・62 は鉢で、底部は平底または上げ底で、胴部上位が張り、口縁部はくの字形に外反する。外面はハケ目及びヘラミガキ、内面はヘラケズリを行う。69 は高杯の裾部で、端部を上方に拡張する。70 は器台の受部で、端部外面にヘラ描きの鋸歯文を施す。S I 3 出土土器は、流入とみられる 45 を除き、後期前半に位置づけられる。71 ~ 76 は S I 4 出土の弥生土器である。71 は口縁端部を垂下させ、外面に櫛描き×文を施す。76 は甕で、底部はやや上げ底をなし、胴部上位が張り、口縁部はくの字形に外反する。肩部外面に斜行刺突文を施す。外面はハケ目、内面はヘラケズリを行う。77 ~ 102 は S I 5 出土の土師器、須恵器である。80 ~ 82 は鉢の底部で、外面にヘラ描き葉脈文を施す。85 ~ 87 は須恵器杯蓋で、86 は口縁部と天井部の境に明瞭な段をもつ。87 は口縁部~天井部にかけて内湾気味に立ち上がる。88 ~ 90 は杯身で、口縁端部が丸味をもち、立ち上がり部は内傾する。92・93 は甕で、92 は肩部に櫛描き波状文、93 は胴部に刺突文を施す。94 ~ 96 は甕で、口縁部外面を拡張し、端部は丸味をもつ。97 ~ 102 は高杯である。100 は脚部で、長方形透かしをもつ。103 ~ 107 は S I 6 出土の弥生土器である。103 は複合口縁壺で、箍部に 3 条の沈線をめぐらし、立ち上がり部に櫛描き斜格子文を施す。108 ~ 116 は S I 7 出土の土師器、須恵器である。108 は椀で、胴部上位は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。110 ~ 112、114 ~ 115 は杯身で、受部は短く、立ち上がり部は内傾する。113 は杯蓋で、口縁部と天井部の境に明瞭な段を有し、口縁端部に段をもつ。116 は甕で、口縁部を外方に拡張し、端部は丸味をもつ。流入とみられる 113 を除き、S I 7 出土土器は 6 世紀末に位置づけられる。

126 ~ 128 は S P 2 出土の土師器椀で、内外面にヘラミガキ調整を行う。128 は外面に×字状のヘラ記号をもつ。132 は弥生土器鉢で、底部はやや上げ底を呈し、胴部上位が張り、口縁部はくの字状に外反する。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ及びヘラミガキを行う。

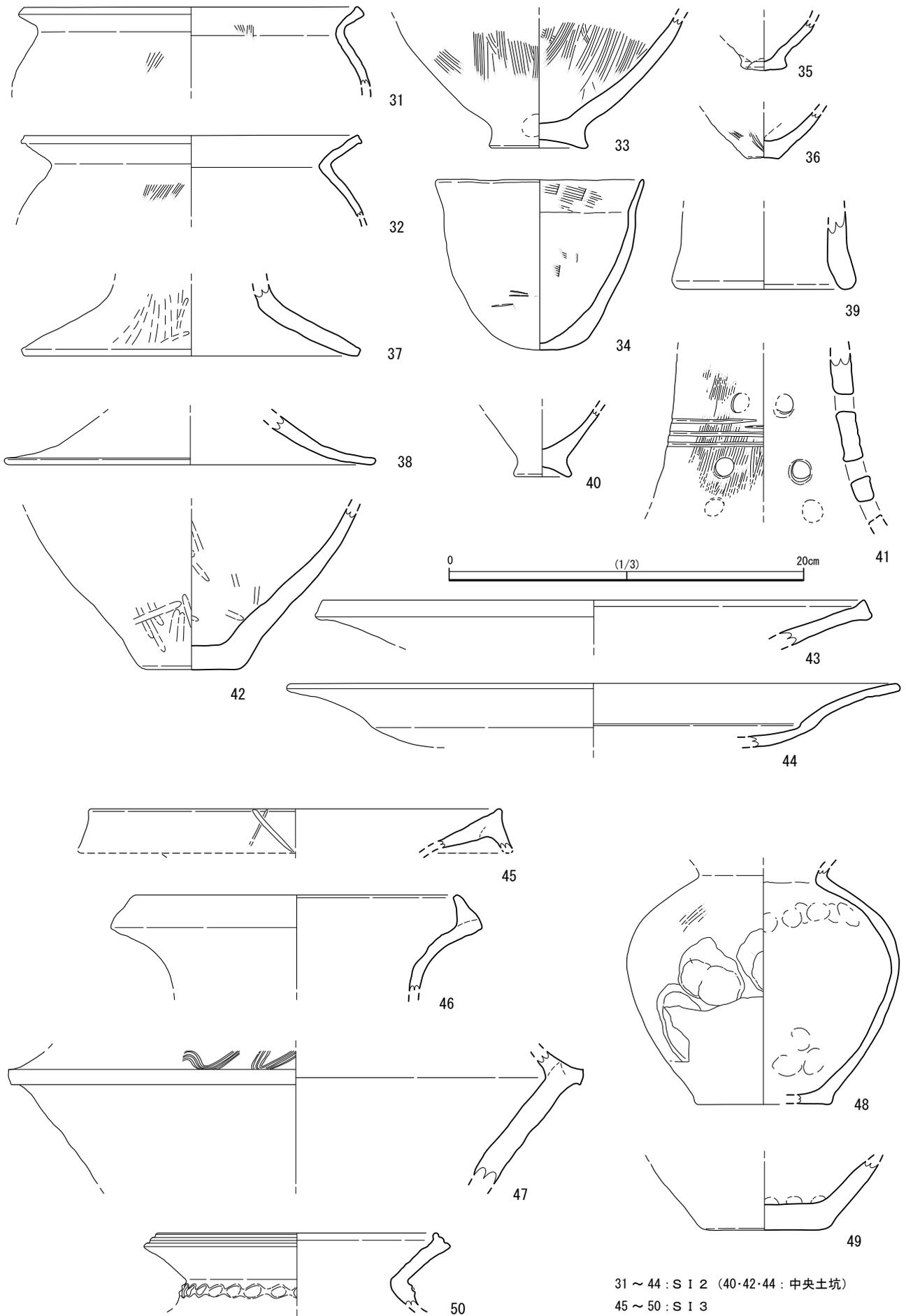
145 は縄文時代晩期の粗製深鉢で、波状口縁をなす。口縁部外面及び口唇部内面に 1 条の沈線をめぐらす。146 ~ 191 は弥生土器である。146 は複合口縁壺の立ち上がり部で、外面に櫛描き波状文と平行線文を交互に施す。164 は弥生土器の長頸壺で、外面に多条の沈線を施す。185 は高杯脚部で、裾部と端部に擬凹線状に沈線をめぐらし、上に矢羽透かしを簡略化したヘラ描き文を施す。192



第 20 図 出土遺物実測図 (1)

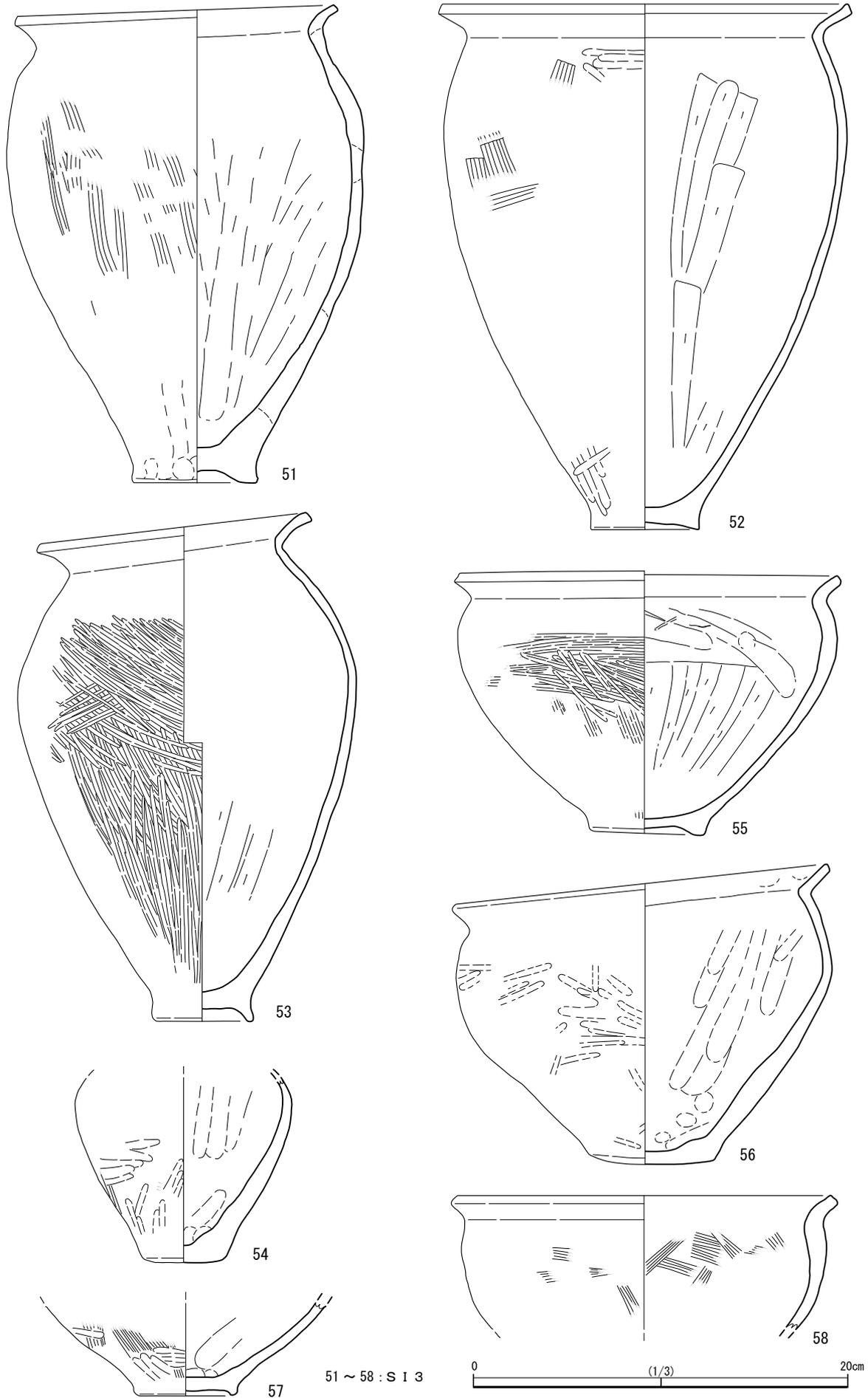


第 21 图 出土遺物実測図 (2)

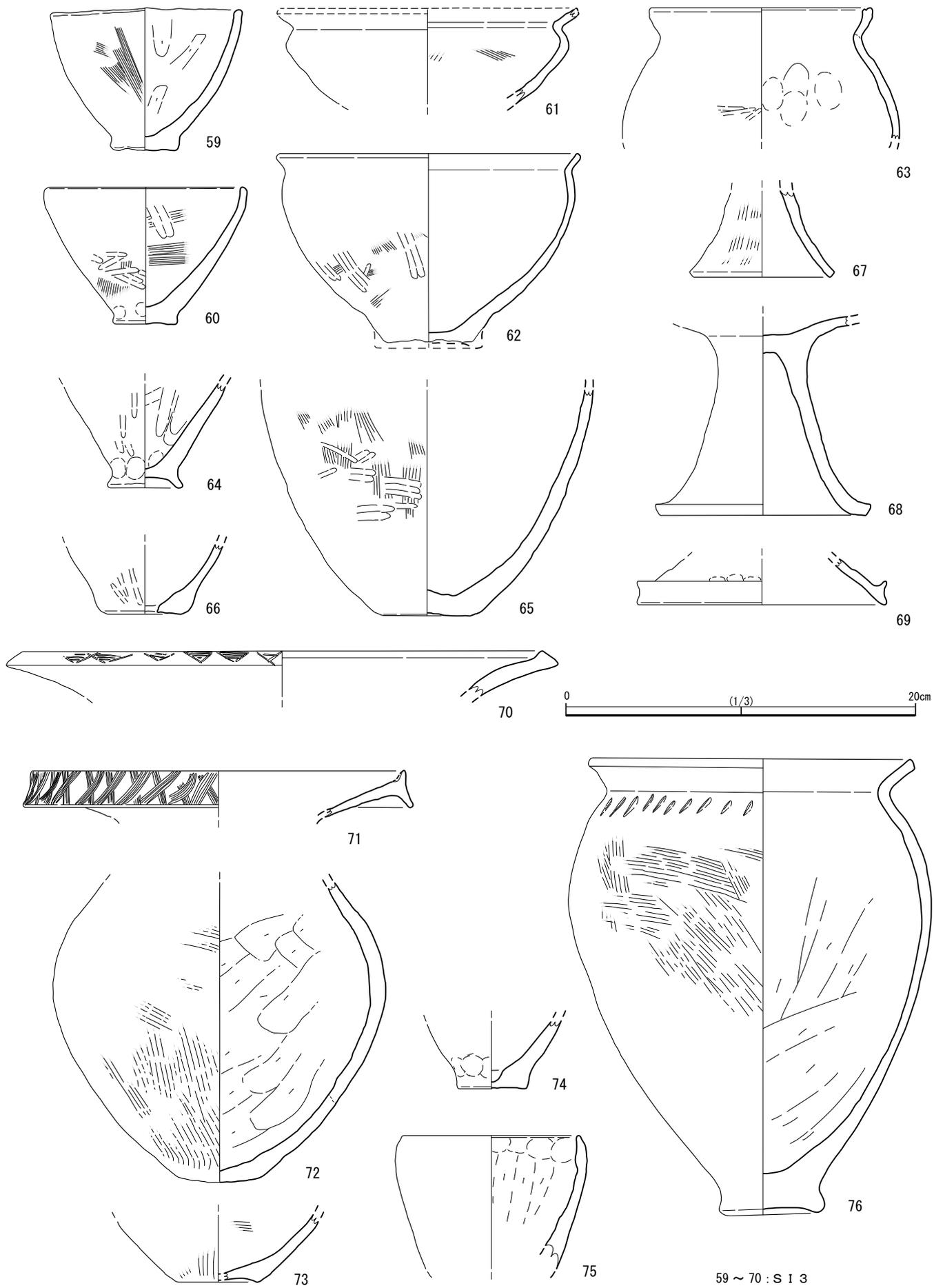


第 22 图 出土遺物実測図 (3)

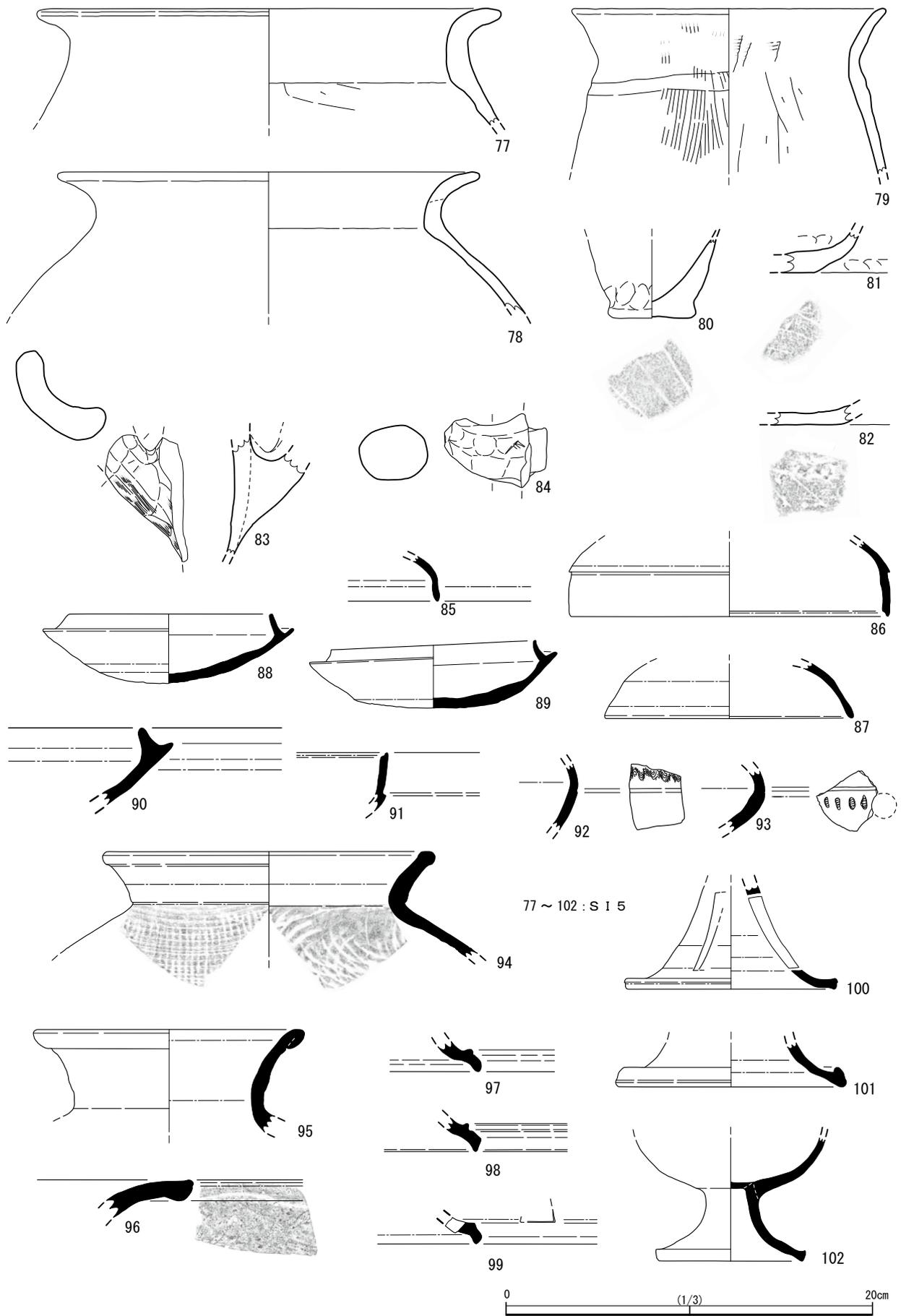
31 ~ 44 : S I 2 (40·42·44 : 中央土坑)
 45 ~ 50 : S I 3



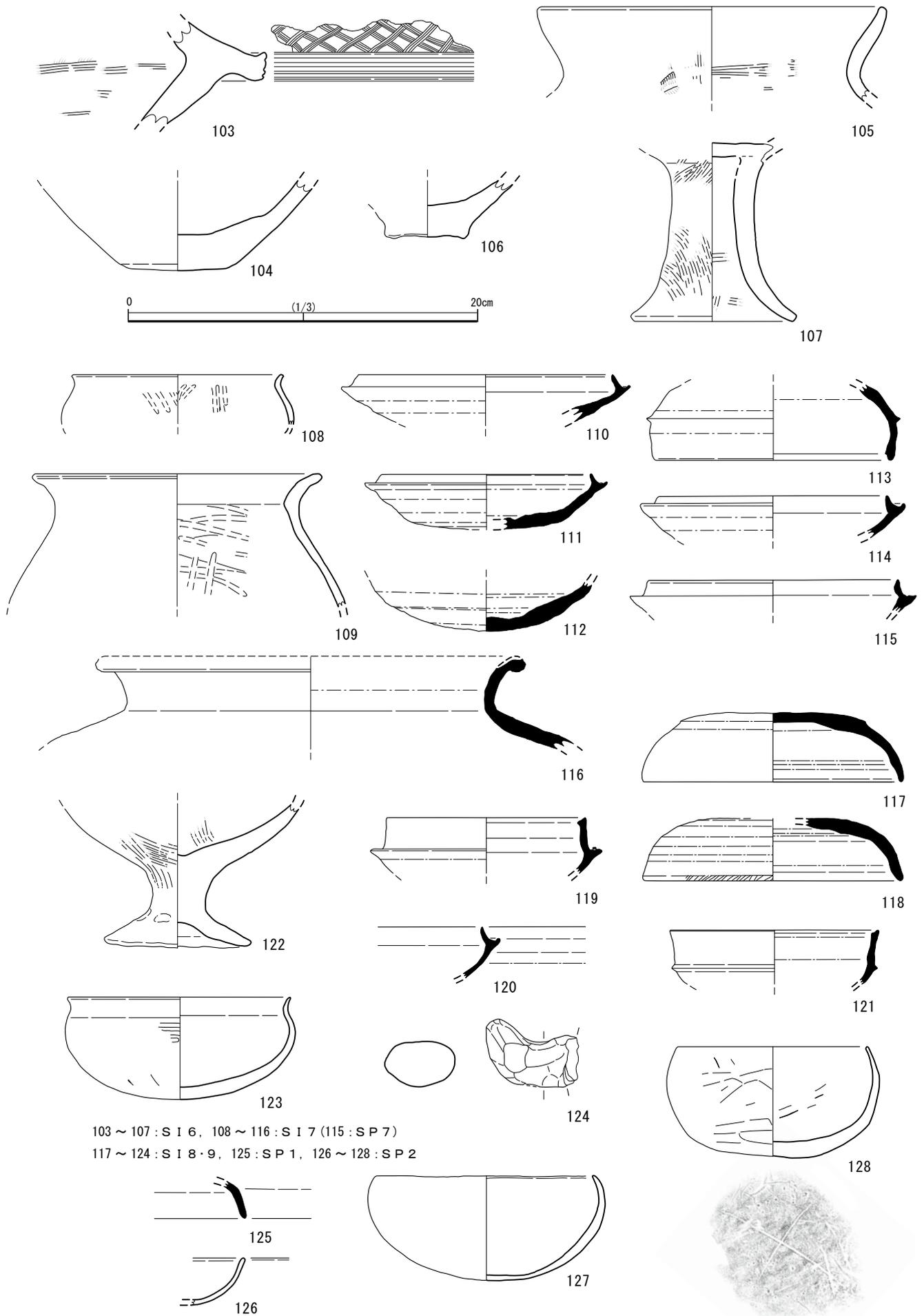
第 23 图 出土遺物実測図 (4)



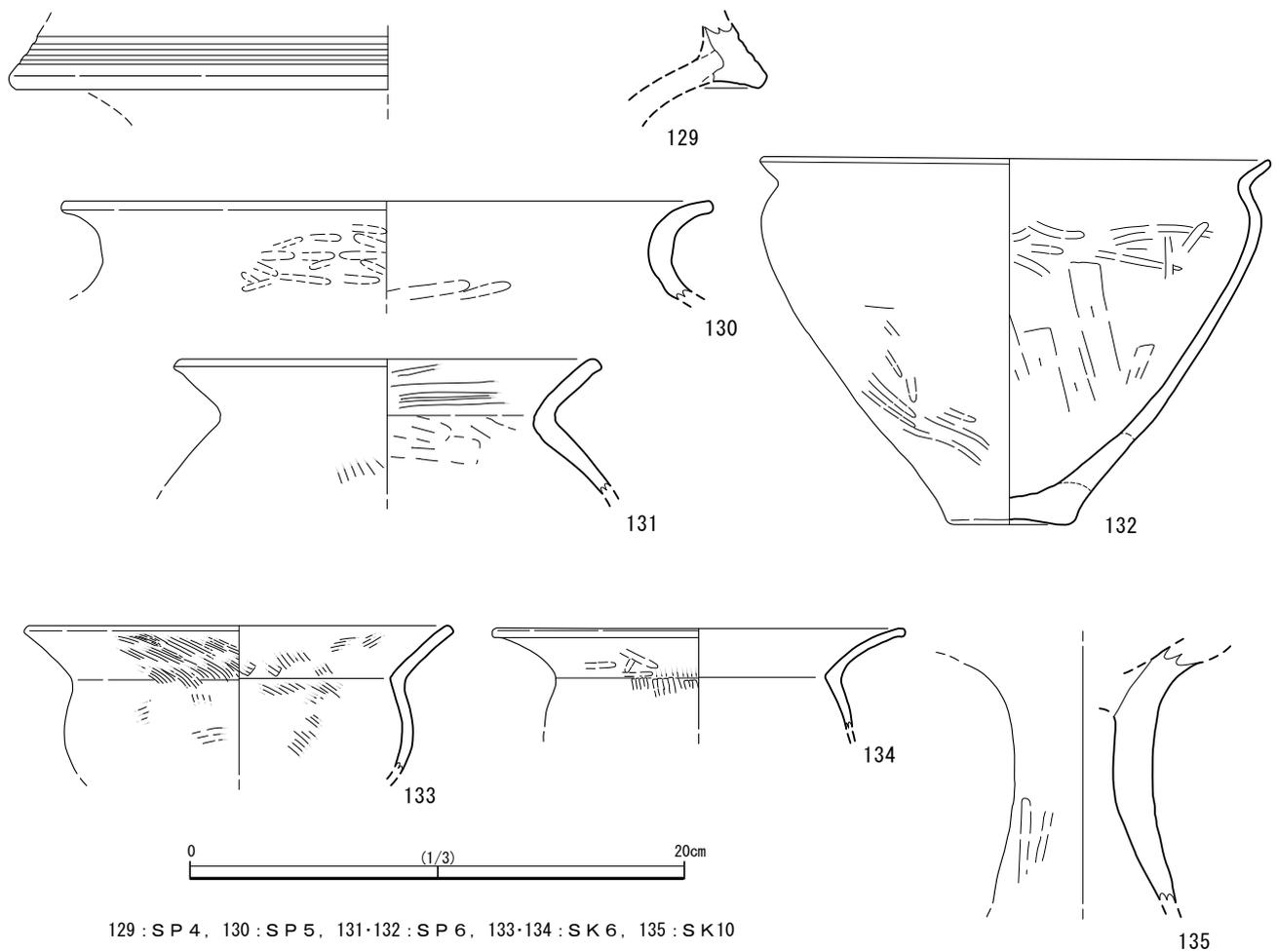
第 24 图 出土遺物実測図 (5)



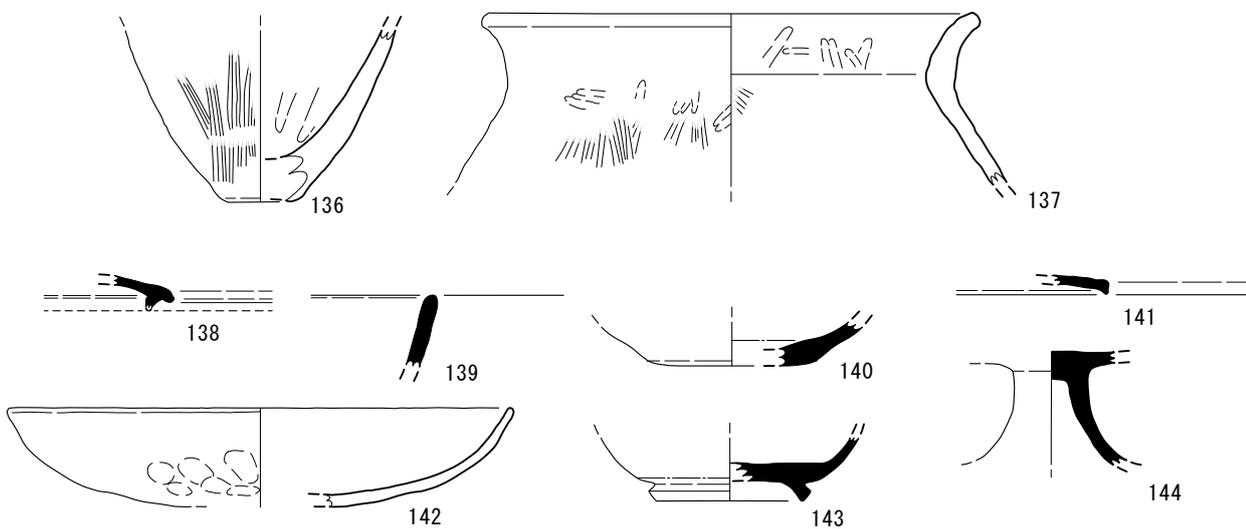
第 25 図 出土遺物実測図 (6)



第 26 图 出土遺物実測図 (7)

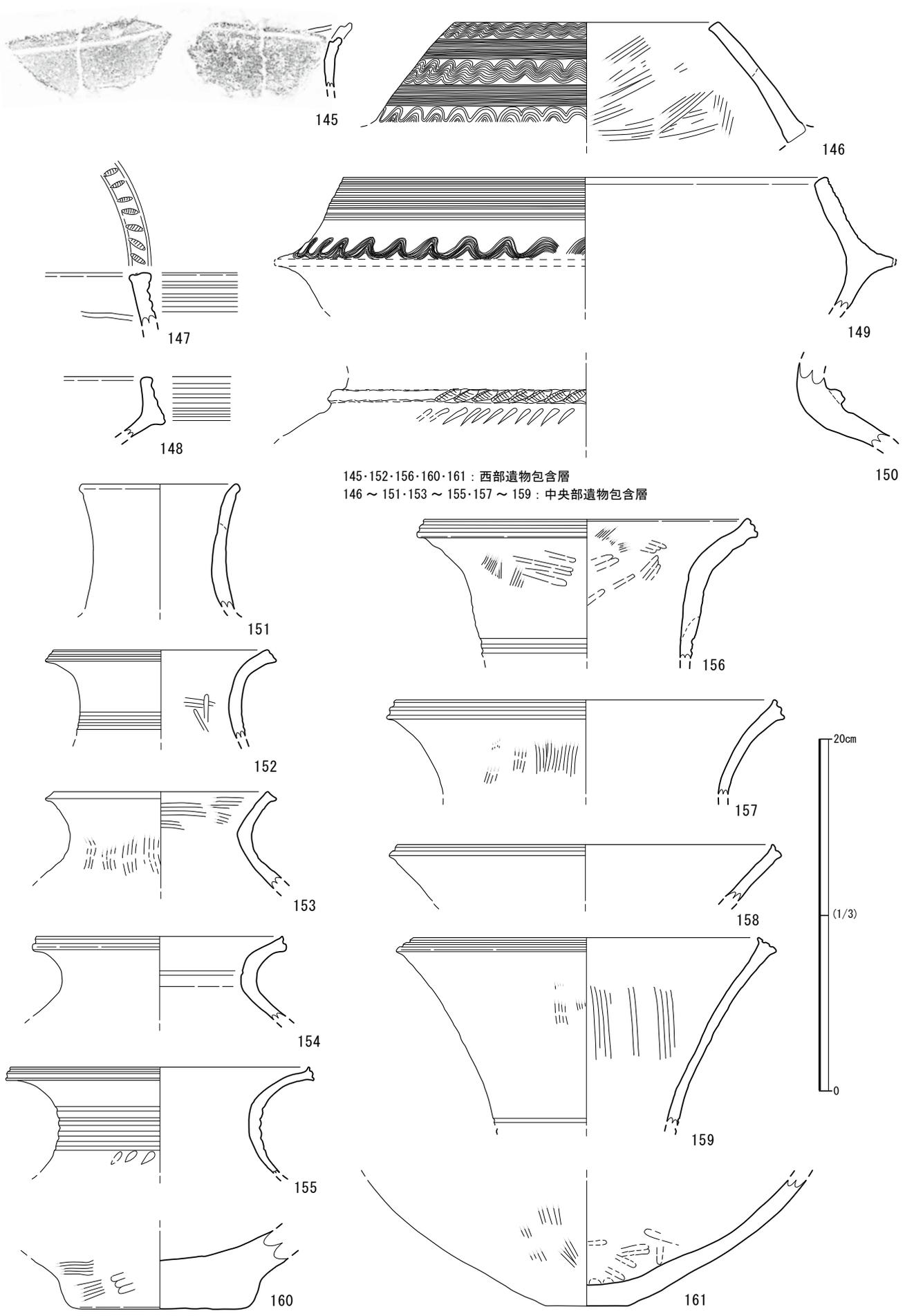


129 : SP 4, 130 : SP 5, 131-132 : SP 6, 133-134 : SK 6, 135 : SK 10
 136-137 : SD 1, 138 : SD 3, 139-140 : SD 4, 141 ~ 144 : SD 5



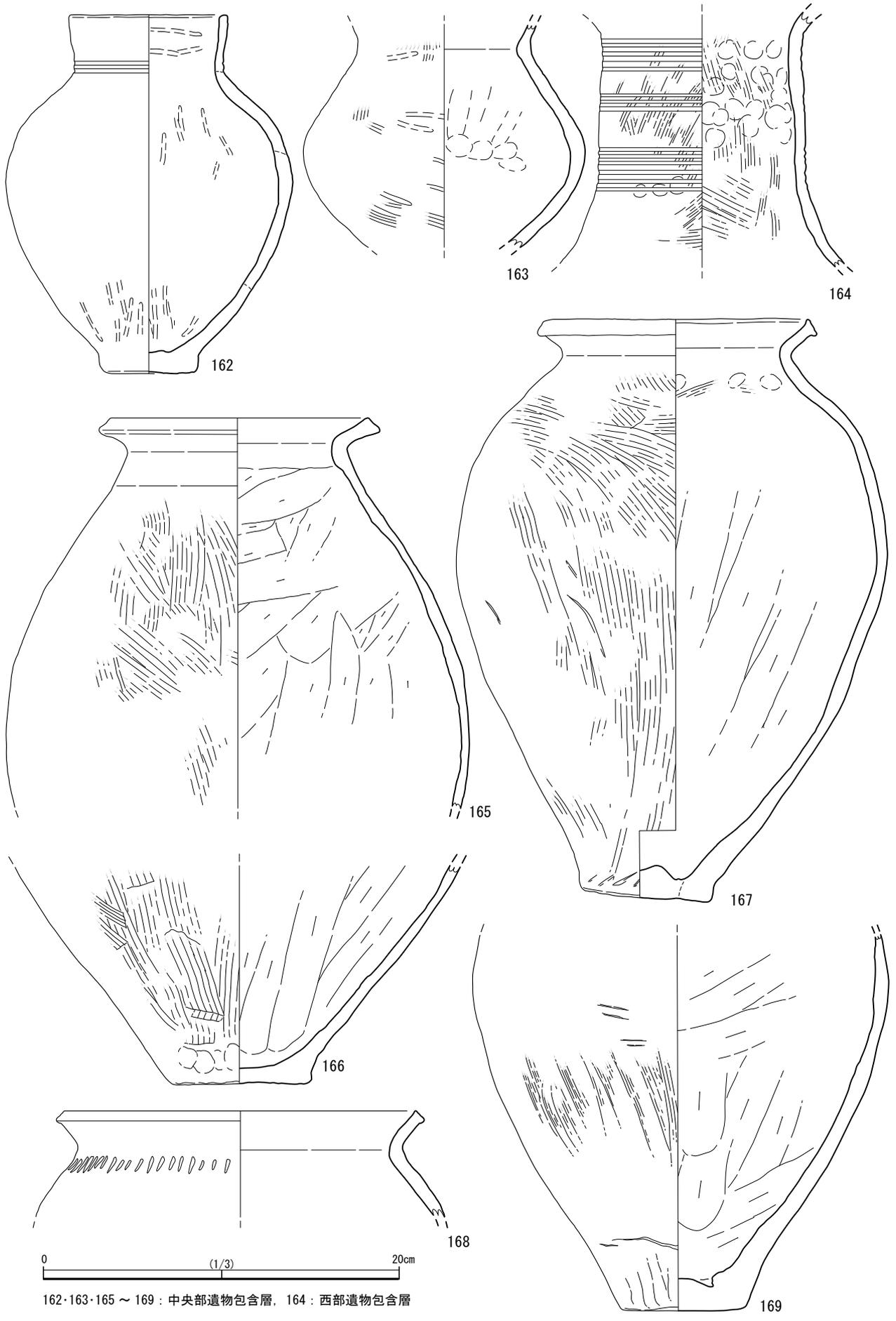
第 27 図 出土遺物実測図 (8)

～ 218 は古墳時代の土師器である。195 は、脚部に沈線をめぐらす。胎土が精製されており、山陰系台付壺とみられる。198 は口縁部がやや外傾気味に立ち上がり、端部は尖り気味となる。山陰系の甕とみられる。199・200 は布留系の甕である。216～218 は製塩土器とみられ、外面はタタキを行う。219～238 は古墳時代の須恵器である。231 は直口壺とみられ、口縁部が内傾して直線的に立ち上がり端部は面をもつ。下端部は屈折して外方へ開く。233 は提瓶で、肩部側面に下向きの把手を貼付す



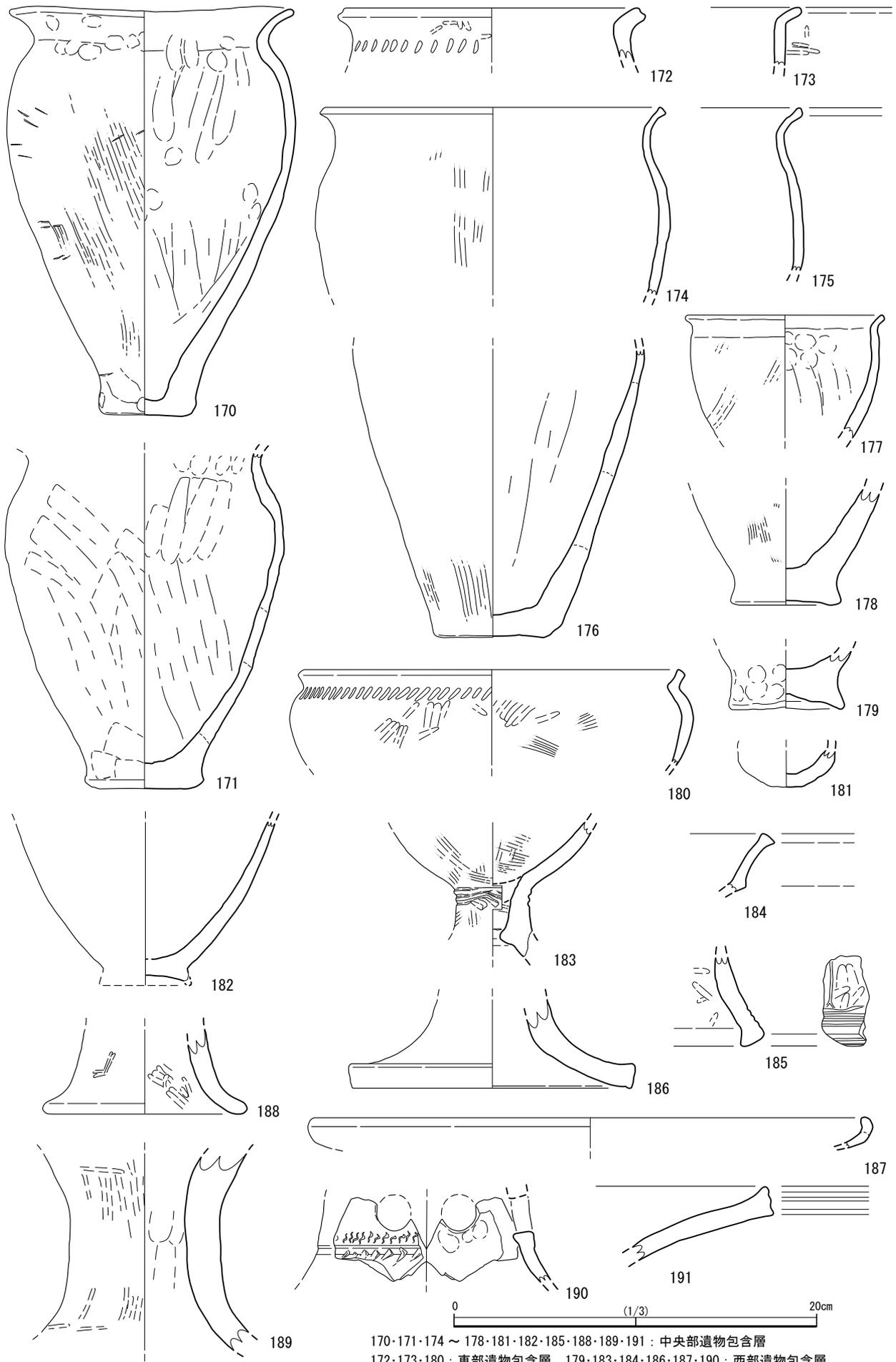
145・152・156・160・161：西部遺物包含層
 146～151・153～155・157～159：中央部遺物包含層

第 28 図 出土遺物実測図 (9)



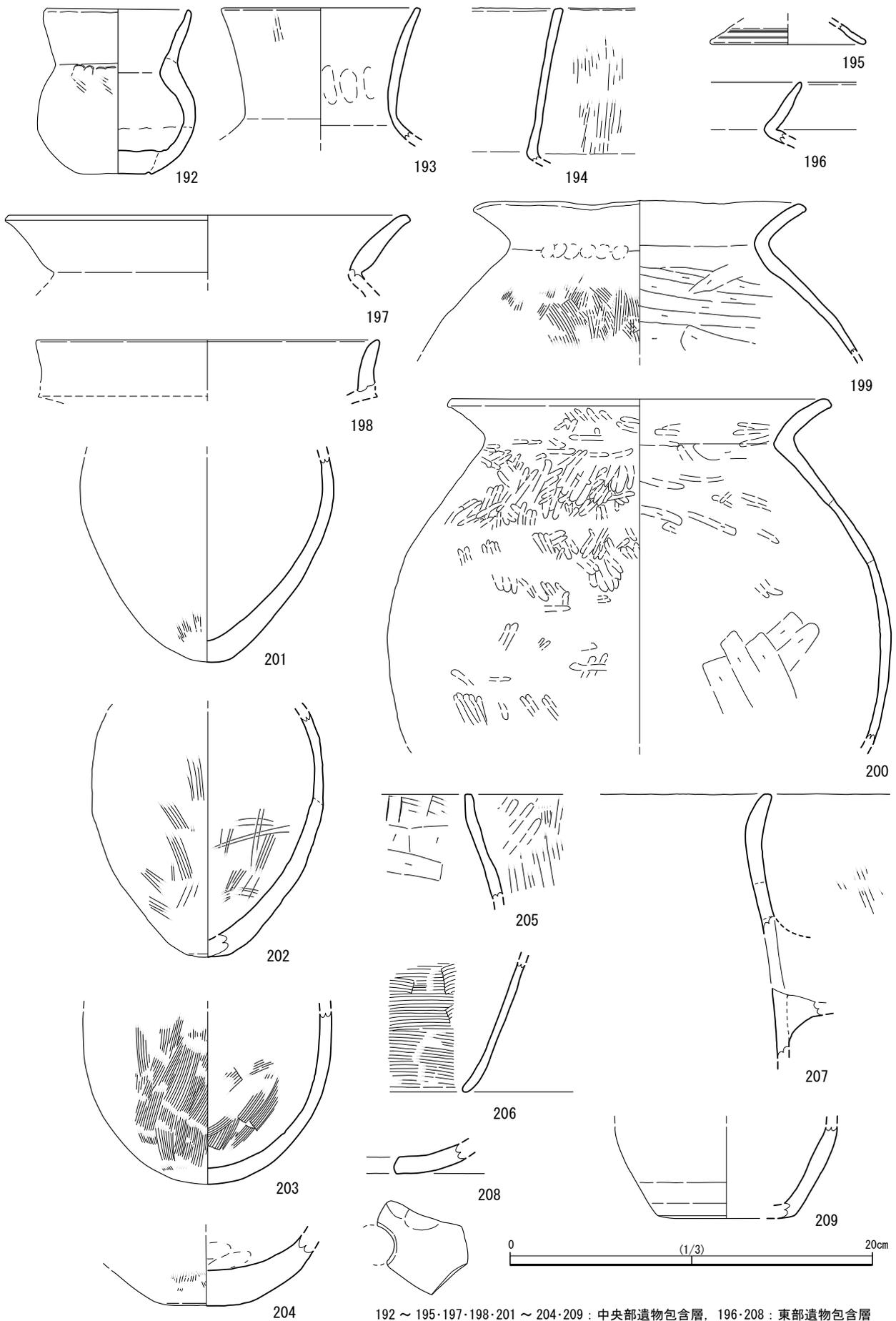
162・163・165～169：中央部遺物包含層，164：西部遺物包含層

第 29 図 出土遺物実測図 (10)



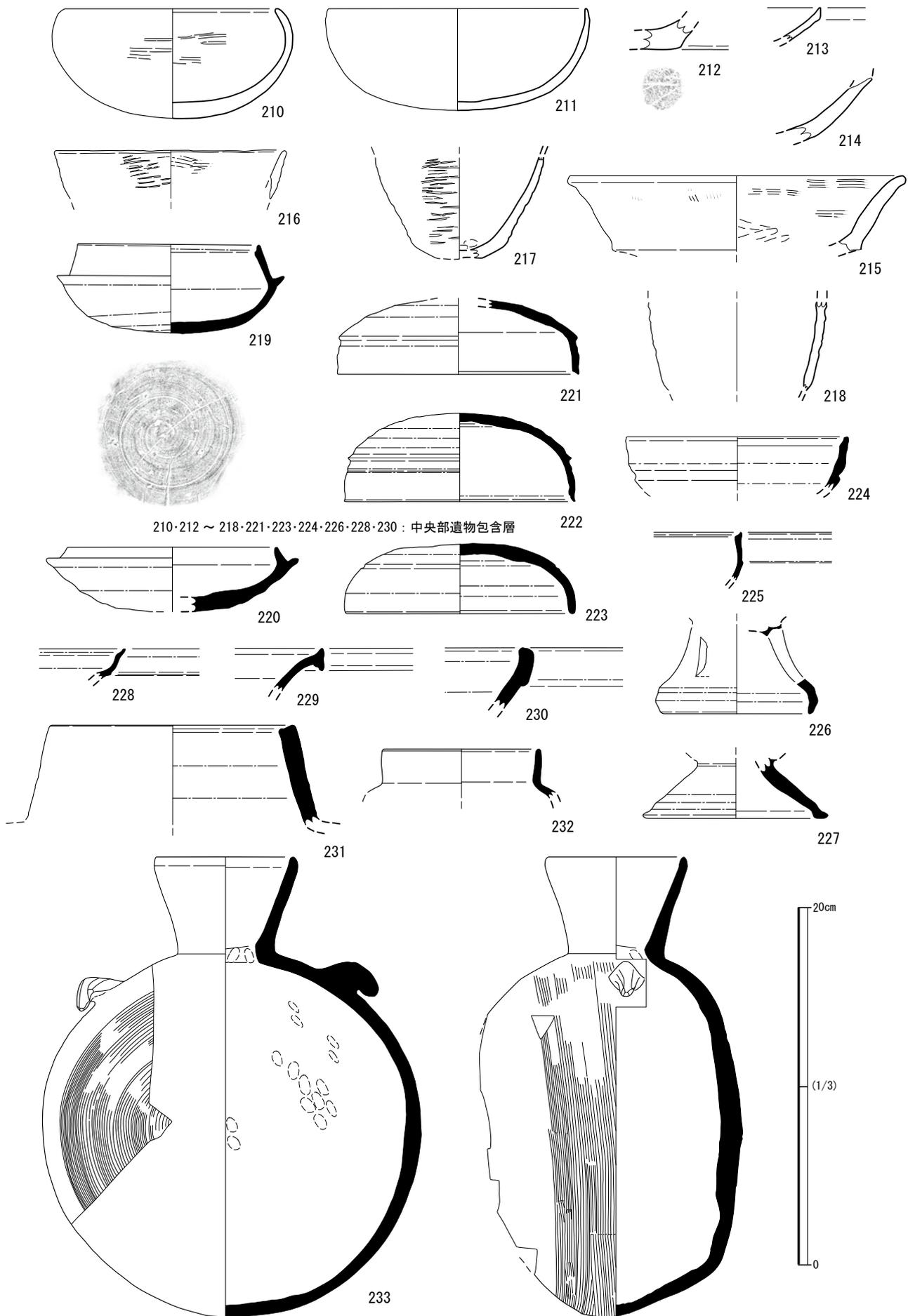
170-171-174 ~ 178-181-182-185-188-189-191 : 中央部遺物包含層
 172-173-180 : 東部遺物包含層, 179-183-184-186-187-190 : 西部遺物包含層

第 30 図 出土遺物実測図 (11)



192 ~ 195・197・198・201 ~ 204・209 : 中央部遺物包含層, 196・208 : 東部遺物包含層
 199・200・206・207 : 西部遺物包含層, 205 : 遺物包含層

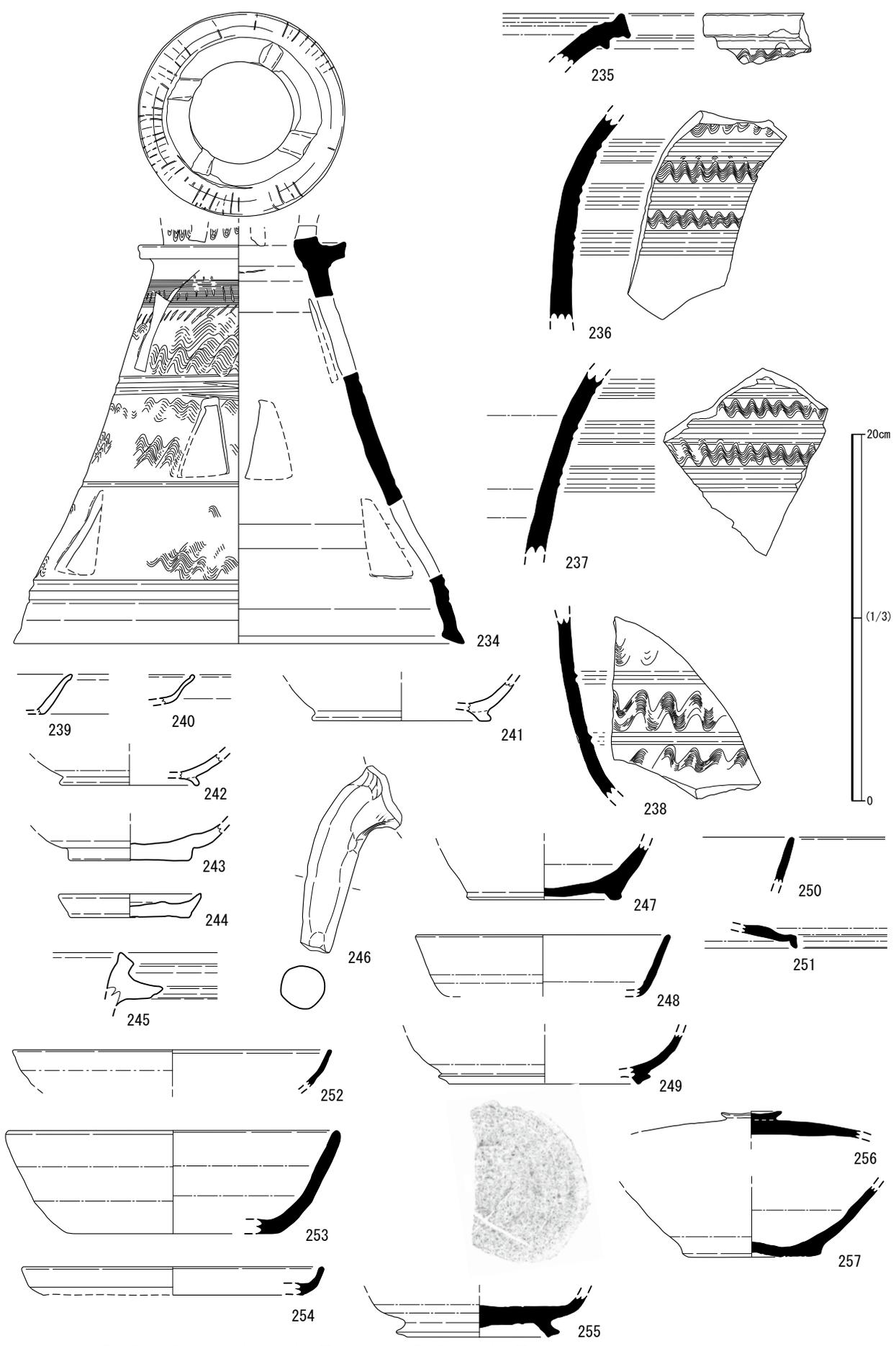
第 31 図 出土遺物実測図 (12)



210・212 ~ 218・221・223・224・226・228・230 : 中央部遺物包含層

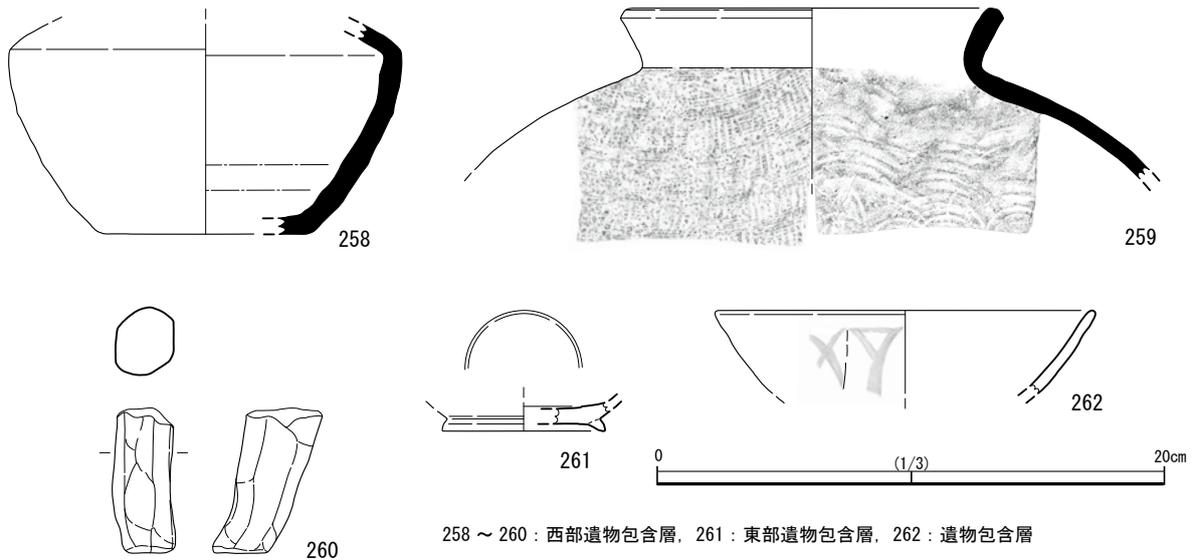
211・219・222・229・231・233 : 西部遺物包含層, 220・227・232 : 遺物包含層, 222・225 : 東部遺物包含層

第 32 図 出土遺物実測図 (13)

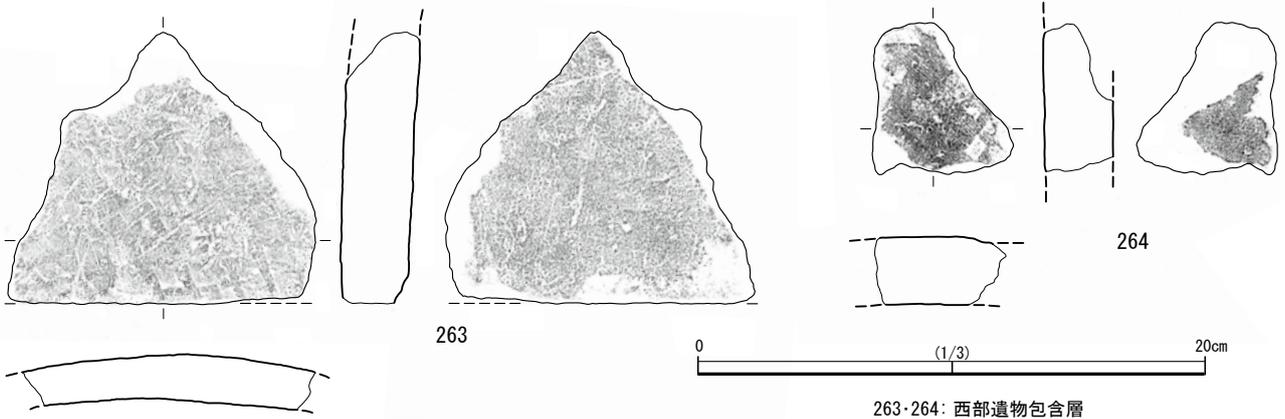


234 ~ 238・250・252 ~ 254・256 : 中央部遺物包含層, 239・246・247・255 : 遺物包含層
 240・241・249 : 東部遺物包含層, 242 ~ 245・248・251・257 : 西部遺物包含層

第33図 出土遺物実測図(14)



第34図 出土遺物実測図(15)



第35図 出土遺物実測図(16)

る。234は筒形器台である。脚部に3段の三角形透かしをもち、全面に櫛描き波状文を施す。籬状部からさらに筒状部が直線的に立ち上がるが上部を欠失する。筒状部の4方向に透かしをもつ。県内ではほとんど類例のない形状の器台である。239～246は古代～中世の土師器である。247～259は古代の須恵器である。260は須恵質の脚部である。261は緑釉陶器で、素地は須恵質、高台部に段を有し、近江系とみられる。262は龍泉窯系の青磁椀である。

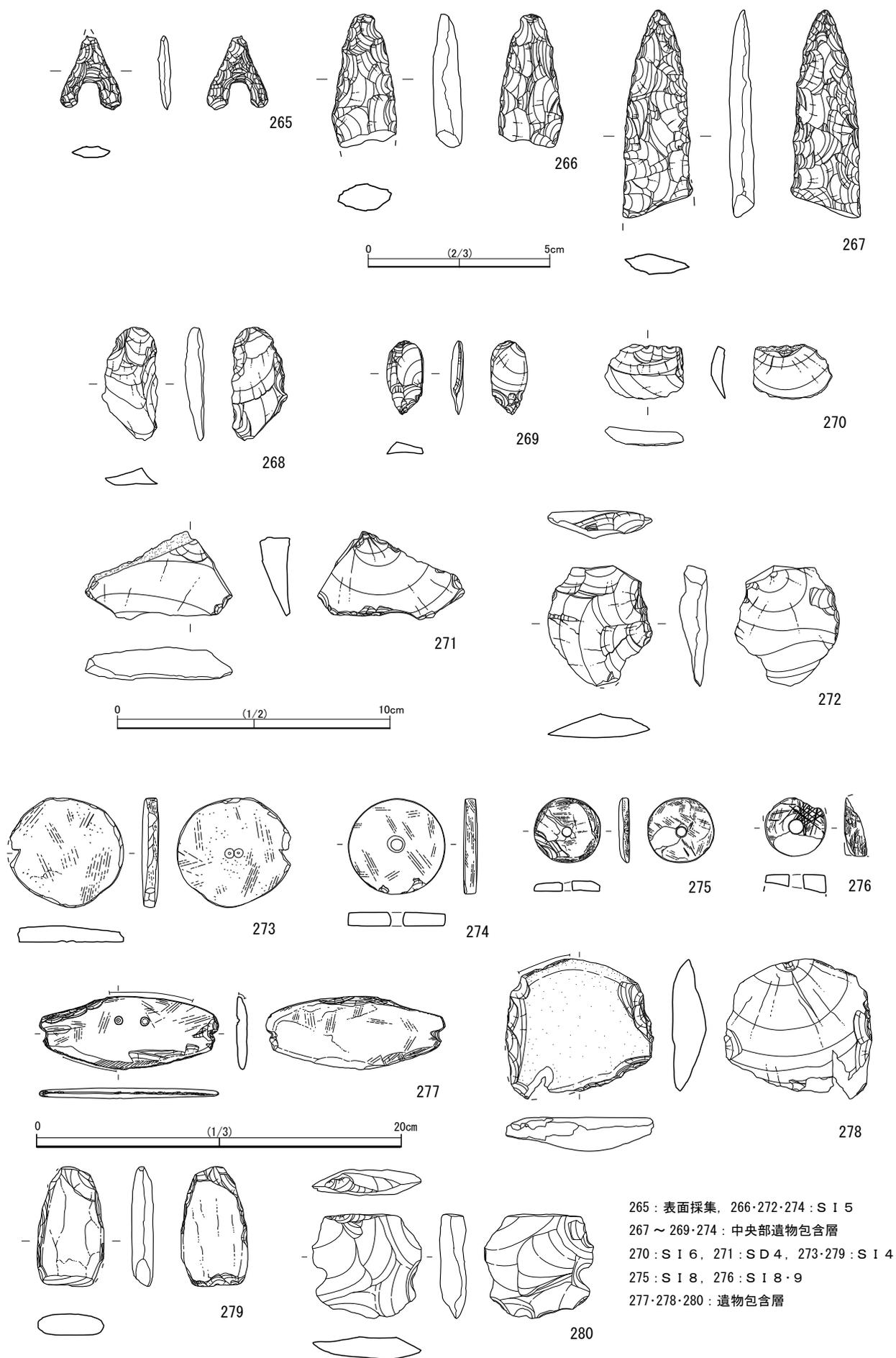
(2) 土製品 (第35図 図版25)

263・264は、西部遺物包含層から出土した平瓦である。外面は、格子目タタキの後、ナデ調整を行っている。内面は一部布目痕跡が残るが、ナデ調整を行っている。古代の瓦とみられる。

(3) 石製品 (第36～38図 図版25・26)

出土した石器は、主に縄文時代～古墳時代のものとみられる。法量等は、第4表に示した。

265はサヌカイト製の石鎌である。凹基無莖式で腸袂は深い。266は尖頭器の未製品で、基部側を欠失する。サヌカイト製で、器面全体にやや粗い剥離が施されている。267は尖頭器で、基部を欠失する。やや粗い剥離の後、縁辺部に細かい調整剥離が施されている。縄文時代草創期の所産とみられ、

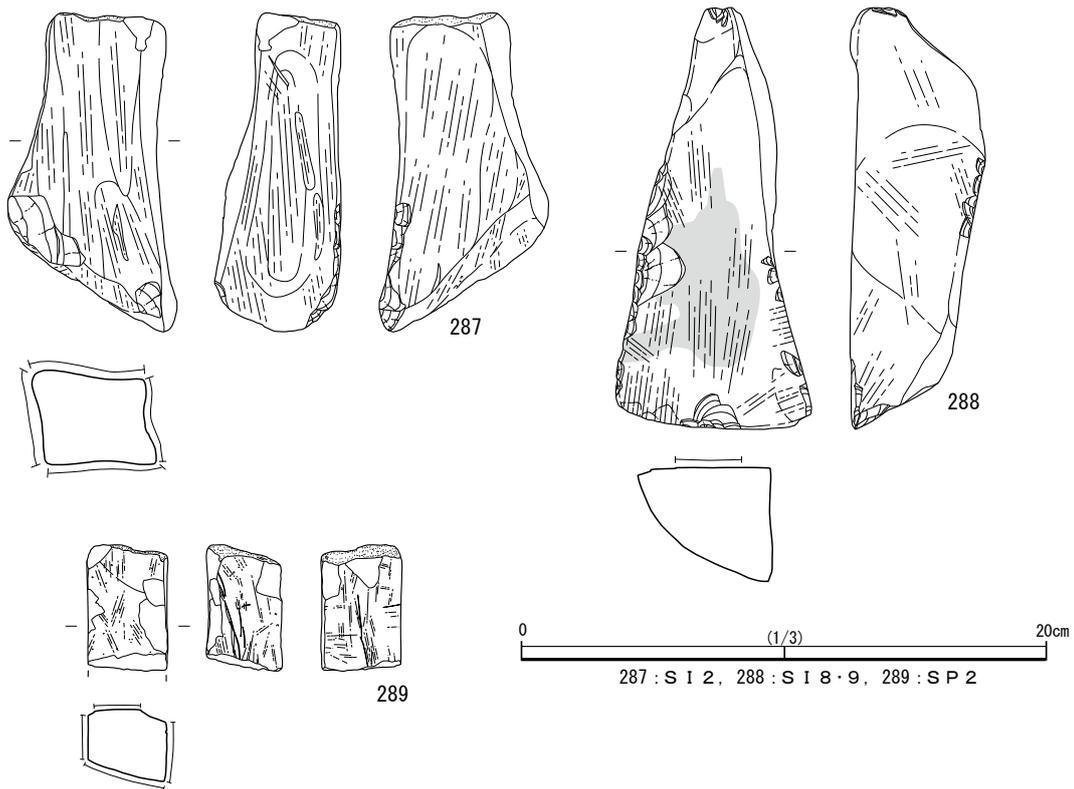


第36図 出土遺物実測図(17)



281・283 : S I 2, 282・285・286 : S I 1 (282 : 中央土坑), 284 : 中央部遺物包含層

第 37 図 出土遺物実測図 (18)

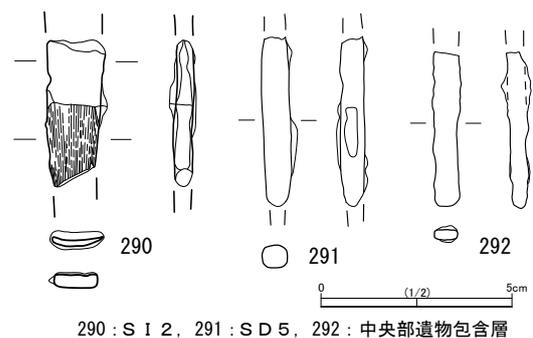


第 38 図 出土遺物実測図 (19)

県東部ではほとんど出土例がない。273・274 は角閃石安山岩製の紡錘車である。273 は未製品で、中央部に穿孔を試みた痕が2つ並ぶが、いずれも浅い。274 は器面全体を丁寧に研磨し、中央の孔は両面から穿孔している。276 は滑石製の紡錘車で、断面形は台形を呈し、裏面は剥落している。古墳時代のものである。277 は緑色片岩製の石包丁である。両側辺に抉りを入れるが、表面2ヶ所に穿孔を試みた痕がある。刃部は斜め方向に研磨している。279 は緑色片岩製の磨製石斧の未製品である。加工中に刃部が欠損したため、放棄したとみられる。281 は磨石で、表面中央に磨り痕がみられ、両側辺は敲石として使用している。283 は磨石で、両端部と片方の側面に磨り痕がみられる。284 は磨石で、両端部と表裏面に磨り痕がある。表面と側面に2ヶ所ずつ指かけ用のくぼみを設けている。285～289 は砥石である。285 は粘板岩製で、表裏面に研磨痕がある。286 は片麻岩製で、表面に研磨痕が認められる。287 は4面に研磨痕がある。288 は安山岩製で、表面に研磨痕が認められる。289 は流紋岩製で、4面に研磨痕がある。

(4) 鉄製品 (第 39 図 図版 26)

290 は、鉈の柄～刃部の一部とみられる。上部の断面形は湾曲し、下部は表面に木質が残存し、断面形は長方形を呈する。291 は断面形が方形を呈する。上下を欠失し、器形は不明である。292 は鉄鎌の茎部とみられる。断面形は長方形を呈し、上部は欠失する。



290 : S I 2, 291 : S D 5, 292 : 中央部遺物包含層

第 39 図 出土遺物実測図 (20)

第3表 出土土器・土製品観察一覧表

挿図	図版	No	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
20	10	1	SI1	弥生土器	壺	-	-	(8.8)	やや粗	やや良	にぶい黄橙 にぶい黄橙	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	複合口縁 柳描き波状文、平行沈線文
20	10	2	SI1	弥生土器	壺	(18.3)	-	(3.1)	やや粗	良	橙色 橙色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	口唇部2条の擬凹線
20	10	3	SI1	弥生土器	壺	(17.2)	-	(4.0)	密	良	橙色 橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラミガキ	複合口縁
20	10	4	SI1	弥生土器	壺	-	(8.8)	(16.1)	密	やや良	橙色 明黄褐色	ナデ ハケ目後ヘラミガキ、ナデ	外面に黒斑
20	10	5	SI1	弥生土器	壺	-	-	(1.7)	密	良	にぶい黄褐色、灰色 にぶい黄褐色、灰色	ナデ 調整不明	ヘラ描き山形文
20	10	6	SI1	弥生土器	壺	9.8	4.7	17.2	やや粗	やや良	灰黄褐色 橙色	ハケ目後ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ヨコナデ、ハケ目後ヘラケズリ	
20	10	7	SI1	弥生土器	壺	-	-	-	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 橙色	指オサエ、ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	
20	10	8	SI1	弥生土器	壺	-	5.8	(3.3)	密	良	にぶい橙色 橙色	ヘラケズリ、ヘラミガキ ヘラミガキ	外面に黒斑
20	10	9	SI1	弥生土器	甕	(21.4)	-	(7.0)	やや密	良	橙色 褐色	ヘラミガキ、縦方向ナデ 粗いハケ目後ナデ、ハケ目	
20	10	10	SI1	弥生土器	甕	(18.5)	-	(2.6)	やや密	やや良	橙色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
20	10	11	SI1	弥生土器	鉢	16.0	-	(7.4)	やや密	良	明赤褐色 にぶい赤褐色	ヨコナデ、ヘラナデ ヨコナデ、ナデ、ハケ目後ナデ	
20	10	12	SI1	弥生土器	甕	-	5.0	(8.7)	密	良	明褐色 褐色	ハケ目後ヘラケズリ、ヘラミガキ ヘラミガキ、ナデ	外面に黒斑
20	10	13	SI1	弥生土器	鉢	-	3.9	(5.4)	密	良	褐色 褐色	ハケ目、ナデ ヘラミガキ、ナデ	
20	10	14	SI1	弥生土器	鉢	-	6.3	(9.0)	密	やや良	黄灰色 にぶい褐色	ヘラケズリ ハケ目、ナデ	外面に煤付着
21	10	15	SI1	弥生土器	鉢	(14.0)	(4.4)	(8.5)	密	良	褐色 褐色	ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ、ナデ ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ	口縁部外面に4条の擬凹線
21	10	16	SI1	弥生土器	鉢	(15.9)	(4.4)	7.5	やや密	良	褐色 褐色	ナデ、ハケ目後ヘラミガキ ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	
21	10	17	SI1	弥生土器	鉢	18.6	5.6	11.3	やや密	やや良	褐色 褐色	ヨコナデ、指オサエ、ハケ目後ヘラケズリ ヨコナデ、指オサエ、ハケ目	内面はヘラケズリは弱くハケ目がよく残る
21	10	18	SI1	弥生土器	高杯	(24.0)	-	(4.0)	密	良	暗灰色、褐色 褐色	ヘラミガキ ナデ後ヘラミガキ	口唇部2条の擬凹線
21	10	19	SI1	弥生土器	高杯	(28.0)	-	(5.1)	やや密	良	褐色 褐色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	
21	10	20	SI1	弥生土器	高杯	-	(9.8)	(7.6)	やや粗	やや良	灰白色 褐色	ヘラケズリ、ハケ目 ハケ目後ナデ	二次被熱の可能性あり
21	11	21	SI2	弥生土器	甕	-	6.9	(3.1)	密	やや良	にぶい黄褐色 明赤褐色	ナデ? ハケ目、ヘラミガキ	底部外面下端に黒斑
21	11	22	SI2	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	良	にぶい褐色 褐色	ヘラミガキ、指ナデ ヘラミガキ、ナデ	半截竹管文、斜行刺突文、斜格子文
21	11	23	SI2	弥生土器	壺	(15.6)	-	(9.8)	粗	良	褐色 褐色	ヨコナデ、ヘラミガキ ヨコナデ、ハケ目	口唇部2条の擬凹線
21	11	24	SI2	弥生土器	壺	(18.4)	-	(4.2)	密	やや良	黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	口縁部に擬凹線黒斑
21	11	25	SI2	弥生土器	壺	-	-	(2.8)	密	やや良	明褐色 にぶい黄褐色	調整不明 調整不明	複合口縁、口唇部・外面に擬凹線 外面に黒斑
21	11	26	SI2	弥生土器	壺	-	-	-	密	良	黒色～褐色 褐色	調整不明 調整不明	長頸壺 丹塗
21	11	27	SI2	弥生土器	壺	-	-	(11.9)	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目、ヨコナデ ハケ目、ヨコナデ	長頸壺 鋸歯文内に斜格子文
21	11	28	SI2	弥生土器	壺	-	-	-	密	良	にぶい黄色 暗灰黄色	調整不明 ヨコナデ、ナデ	ヘラ描き山形文
21	11	29	SI2	弥生土器	壺	-	-	-	密	良	褐色 褐色	ナデ、指オサエ ナデ	複合口縁 外面に柳描き斜格子文
21	11	30	SI2	弥生土器	壺	(26.0)	-	(9.3)	やや粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目、ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	多条の擬凹線を巡らす
22	11	31	SI2	弥生土器	甕	(18.8)	-	(4.5)	密	良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ、ハケ目後ヘラミガキ ヨコナデ、ハケ目	外面に煤付着
22	11	32	SI2	弥生土器	甕	(18.8)	-	(4.6)	密	良	褐色 褐色	ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目	
22	11	33	SI2	弥生土器	鉢	-	(5.6)	(7.4)	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ハケ目 ハケ目、ヨコナデ、指オサエ	
22	11	34	SI2	弥生土器	鉢	(11.6)	-	9.7	粗	良	褐灰色 にぶい褐色	ハケ目、ハケ目後ナデ ナデ	外面に工具のあたり痕
22	11	35	SI2	弥生土器	ミニチュア (鉢または甕)	-	2.5	(2.8)	密	良	黄褐色 褐色	ナデ ハケ目、指オサエ	赤色の砂粒を少量含む
22	11	36	SI2	弥生土器	ミニチュア (鉢)	-	1.9	(2.5)	密	良	褐色 褐色	指オサエ エハケ目	
22	11	37	SI2	弥生土器	高杯	-	(19.0)	(4.1)	やや密	良	にぶい黄褐色 浅黄色	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ	内面に黒斑?
22	11	38	SI2	弥生土器	高杯	-	(20.8)	(2.7)	粗	やや良	褐色褐色	調整不明 調整不明	
22	11	39	SI2	弥生土器	器台	-	(10.0)	(4.4)	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ 調整不明、下端ナデ	
22	12	40	SI2中央土坑	弥生土器	鉢	-	(3.2)	(3.8)	密	不良	にぶい黄橙 褐色	調整不明 ナデ	
22	11	41	SI2	弥生土器	器台	-	-	-	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ハケ目	円形透かし 沈線3条
22	12	42	SI2中央土坑	弥生土器	壺	-	(6.0)	(9.1)	密	やや良	褐色 褐色	ヘラミガキ、ナデ ヘラミガキ、ナデ	外面に黒斑
22	11	43	SI2	弥生土器	器台	(30.6)	-	(2.6)	やや粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	
22	12	44	SI2中央土坑	弥生土器	高杯	(34.2)	-	(3.6)	粗	やや良	褐色 にぶい褐色	調整不明 調整不明	内面に煤付着
22	12	45	SI3	弥生土器	壺	(23.1)	-	(2.2)	密	良	灰黄色 黄褐色	ナデ ナデ	ヘラ描き山形文
22	12	46	SI3	弥生土器	壺	(18.1)	-	(5.5)	粗	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	複合口縁
22	12	47	SI3	弥生土器	壺	-	-	-	粗	やや良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ ナデ	複合口縁 柳描き波状文
22	12	48	SI3	弥生土器	壺	-	(7.7)	(13.4)	やや粗	良	褐色 褐色	指オサエ、ナデ、ハケ目後ナデ? ハケ目後ナデ	煤痕、焼成破裂痕、煮沸に使用か?
22	12	49	SI3	弥生土器	壺	-	(7.0)	(3.9)	密	不良	褐色 褐色	指オサエ 調整不明	外面に黒斑
22	12	50	SI3	弥生土器	甕	(15.5)	-	(4.1)	粗	やや良	褐色 にぶい黄色	調整不明 調整不明	口唇部2条の擬凹線、連鎖状突帯
23	12	51	SI3	弥生土器	甕	16.9	6.7	25.5	やや密	良	灰褐色、明褐色 灰褐色、明褐色	ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目後ミガキ、指ナデ	煤付着
23	13	52	SI3	弥生土器	甕	(21.6)	(5.8)	(28.3)	密	やや良	暗灰黄色 明褐色	ハケ目後ヘラケズリ ハケ目後ヘラケズリ	胴部外面に煤付着 胴部底部外面に黒斑

挿図	図版	№	出土場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
23	13	53	SI3	弥生土器	甕	(14.2)	5.3	26.6	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ後ヘラミガキ	外面に煤付着、底部二次被熱痕
23	12	54	SI3	弥生土器	壺	-	(4.4)	(9.9)	密	やや良	明褐色 明褐色	指ナデ ハケ目後ヘラミガキ、ナデ	外面に黒斑
23	12	55	SI3	弥生土器	鉢	20.2	6.2	14.1	やや密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ、ハケ目後 ナデ	
23	12	56	SI3	弥生土器	鉢	19.9	6.7	15.1	密	やや良	明黄褐色 にぶい黄褐色	指オサエ、ナデ 指ナデ、ヘラミガキ	外面に煤付着 内面に黒斑
23	12	57	SI3	弥生土器	鉢	-	(5.4)	(5.0)	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ、指オサエ ハケ目後ヘラミガキ、ヨコナデ	内面に煤付着
23	12	58	SI3	弥生土器	鉢	(20.0)	-	(7.2)	やや密	やや良	褐色 にぶい赤褐色	ヨコナデ、ハケ目後ナデ ヨコナデ、ハケ目	外面に煤付着
24	13	59	SI3	弥生土器	鉢	10.8	3.8	8.2	やや密	良	褐色 褐色	ヘラケズリ、ナデ ハケ目後ヘラミガキか?、ナデ	外面に黒斑
24	13	60	SI3	弥生土器	鉢	(11.0)	(3.7)	7.9	密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ヘラミガキ、ナデ ハケ目後ヘラミガキ、指オサエ、ナデ	外面下端に黒斑
24	12	61	SI3	弥生土器	鉢	-	-	-	密	良	明赤褐色 赤褐色	ナデ、ハケ目 ナデ、頸部以外調整不明	
24	13	62	SI3	弥生土器	鉢	(17.1)	-	(10.9)	やや粗	やや良	褐色 明赤褐色	ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ヘラミガキ	体部外面に黒斑
22	14	63	SI3	弥生土器	甕	(12.5)	-	(7.6)	密	良	明褐色 褐色	ヨコナデ、指オサエ ナデ、ヘラミガキ	
22	14	64	SI3	弥生土器	甕	-	(4.2)	(6.0)	密	やや良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ナデ、指オサエ ヘラミガキ、指オサエ、ナデ	外面に黒斑
22	14	65	SI3	弥生土器	甕	-	(5.4)	(13.0)	やや密	やや良	褐色 褐色	ナデ ハケ目後ヘラミガキ、ナデ	体部から底部に黒斑 内面にヘラ状工具による擦痕
22	14	66	SI3	弥生土器	甕	-	(5.0)	(4.0)	密	良	褐色 暗灰	ナデ ヘラミガキ、ナデ	底部中央付近に穿孔
24	12	67	SI3	弥生土器	高杯	-	(7.2)	(4.9)	やや密	良	褐色 褐色	ナデ ハケ目、ナデ	器台の可能性あり
24	12	68	SI3	弥生土器	高杯	-	(11.8)	(11.4)	やや密	良	褐色 褐色	ナデ、ハケ目後ナデ ハケ目、ヨコナデ	
24	12	69	SI3	弥生土器	高杯	-	(14.3)	(2.5)	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ、指オサエ	
24	12	70	SI3	弥生土器	器台	(29.7)	-	(2.6)	やや密	やや良	褐色 褐色	ヨコナデ ヨコナデ	
24	13	71	SI4	弥生土器	壺	(21.2)	-	(2.7)	密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	櫛描き×文
24	14	72	SI4	弥生土器	壺	-	(5.2)	(17.2)	やや密	やや良	褐色 褐色	ヘラケズリ、指オサエ ハケ目	
24	14	73	SI4	弥生土器	壺	-	(4.7)	(4.0)	密	良	灰色 灰色	ハケ目 ハケ目、ナデ	
24	14	74	SI4	弥生土器	甕	-	(4.0)	(3.9)	やや密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ、指オサエ	
24	14	75	SI4	土師器	鉢	(10.0)	-	(7.7)	密	良	褐色 褐色	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ ナデ後ヘラミガキ?	製塩土器に形態が酷似
24	14	76	SI4	弥生土器	甕	18.2	5.7	26.4	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目	煤付着、被熱
25	14	77	SI5	土師器	甕	(25.2)	-	(6.4)	粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ヨコナデ、ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目後ナデ	
25	14	78	SI5	土師器	甕	(22.4)	-	(7.8)	粗	良	にぶい赤褐色、にぶい 褐色、にぶい褐色	ヘラケズリ ナデ	
25	14	79	SI5	土師器	甕	(16.8)	-	(9.1)	密	良	にぶい赤褐色、黒褐色 にぶい赤褐色、黒褐色	ヨコナデ、ハケ目、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目後ヨコナデ、ハケ目	
25	14	80	SI5	土師器 ミニチュア (鉢)	鉢	(6.9)	4.7	(4.4)	密	良	明褐色 明褐色	ナデ ナデ、指オサエ	外面底部にヘラ描き葉脈文様
25	14	81	SI5	土師器	鉢	-	-	(2.2)	粗	良	褐色 褐色	ナデ 指オサエ	外面底部にヘラ描き葉脈文様
25	14	82	SI5	土師器	鉢	-	-	(1.1)	密	良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	外面底部にヘラ描き葉脈文様
25	14	83	SI5	土師器	甕	-	-	-	粗	良	にぶい黄褐色 明褐色		把手部
25	14	84	SI5	土師器	甕?	-	-	-	粗	良	にぶい褐色	ナデ	把手部
25	15	85	SI5	須恵器	杯蓋	-	-	(2.4)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
25	14	86	SI5	須恵器	杯蓋	(17.3)	-	(4.1)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
25	15	87	SI5	須恵器	杯蓋	(13.5)	-	(3.0)	密	不良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
25	15	88	SI5	須恵器	杯身	11.0	-	3.8	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ	ロクロ回転方向は右回転
25	15	89	SI5	須恵器	杯身	(11.0)	-	3.4	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ	全体的に歪み ロクロ回転方向は右回転
25	15	90	SI5	須恵器	杯身	-	-	(3.2)	密	良	灰白色 灰色	回転ナデ ヨコナデ、回転ナデ	
25	15	91	SI5	須恵器	高杯	-	-	(3.2)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ ナデ、回転ナデ	
25	15	92	SI5	須恵器	甕	-	-	-	密	良	灰白色 灰白色	ナデ 回転ナデ、ナデ	外面に沈線、櫛描き波状文
25	15	93	SI5	須恵器	甕	-	-	-	密	良	灰色 灰白色	回転ナデ ナデ	外面から内面に向け穿孔刺突文
25	15	94	SI5	須恵器	甕	(16.8)	-	(5.7)	やや密	良	灰色 灰色	ヨコナデ、タタキ ヨコナデ、タタキ	内面に同心円状当て具痕 外面のタタキは格子文
25	15	95	SI5	須恵器	甕	(14.4)	-	(5.6)	密	不良	灰白色 灰白色	ナデ ナデ	口縁部に歪み
25	15	96	SI5	須恵器	甕	-	-	(2.0)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	外面に刺突文
25	15	97	SI5	須恵器	高杯	-	-	(1.6)	密	良	灰黄色 灰黄色	ヨコナデ ヨコナデ	
25	15	98	SI5	須恵器	高杯	-	-	(1.8)	密	良	灰色 灰色	ヨコナデ ヨコナデ	
25	15	99	SI5	須恵器	高杯	-	-	(1.5)	密	良	灰色 灰色	ヨコナデ ヨコナデ	透かし孔は外面から内面に向け切 り込む
25	15	100	SI5	須恵器	高杯	-	(11.3)	(6.0)	密	良	灰色 暗オリーブ灰色	回転ヘラケズリ後ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	長方形透かし孔痕2か所あり 裾端部外面に沈線
25	15	101	SI5	須恵器	高杯	-	(12.6)	(2.4)	密	良	黄灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
25	15	102	SI5	須恵器	高杯	-	8.0	(6.6)	やや密	良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ	
26	15	103	SI6	弥生土器	壺	-	-	-	やや粗	良	褐色 暗灰色～にぶい黄色	ヨコナデ、ハケ目 ヘラミガキ、ナデ	斜格子文、籬部に3条の沈線
26	15	104	SI6	土師器	壺	-	(5.4)	(5.2)	粗	良	灰色 にぶい褐色	調整不明 調整不明	
26	15	105	SI6	土師器	甕	(19.5)	-	(5.4)	粗	良	にぶい褐色 明黄褐色、褐色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
26	15	106	SI6	土師器	甕?	-	4.7	(3.3)	密	良	にぶい橙色 赤色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目、ナデ	外面に煤付着
26	15	107	SI6	土師器	高杯	-	(9.0)	(10.3)	やや密	やや良	橙色 褐色	ナデ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
26	15	108	SI7	土師器	椀	(12.0)	-	(2.8)	密	良	暗灰色 暗灰色	ヘラミガキ ヘラミガキ	
26	16	109	SI7	土師器	甕	(16.2)	-	(7.6)	粗	良	黒色にぶい橙色～褐色 黒褐色	ココナデ、ヘラナデ ナデ	ヘラ状工具によるナデ
26	15	110	SI7	須恵器	杯身	(14.5)	-	(2.7)	やや粗	良	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ	ロクロ回転方向は左回り
26	15	111	SI7	須恵器	杯身	(11.9)	-	3.2	密	良	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、ヘラケズリ後ナデ、回転ヘラケズリ	ロクロ回転方向は右回り
26	16	112	SI7	須恵器	杯身	-	-	(2.8)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロクロ回転方向は左回り
26	16	113	SI7	須恵器	杯蓋	(13.4)	-	(4.8)	密	良	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロクロ回転方向は左回り
26	16	114	SI7	須恵器	杯身	(13.0)	-	(2.4)	やや粗	良	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ	
26	16	115	SI7 SP7	須恵器	杯身	(14.3)	-	(1.8)	やや密	良	灰色 灰色	ココナデ、回転ナデ ココナデ、回転ナデ	ロクロ回転方向は右回り
26	16	116	SI7	須恵器	甕	-	-	-	密	良	灰色～オリブ黄色 灰色～オリブ黄色	ナデ タタキ後カキメ、回転ナデ	内面当て具痕 自然釉
26	16	117	SI8-9	須恵器	杯蓋	(14.8)	-	4.0	密	良	灰色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナデ	天井部歪み
26	16	118	SI8-9	須恵器	杯蓋	(14.8)	-	(3.6)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ヘラ切り、回転ナデ	口縁部に刻目状圧痕あり
26	16	119	SI8-9	須恵器	杯身	(11.4)	-	(3.2)	密	良	青灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	受部に重ね焼き時の溶着痕
26	16	120	SI8-9	須恵器	杯身	-	-	(2.9)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
26	16	121	SI8-9	須恵器	高杯	(11.9)	-	(3.1)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
26	16	122	SI8-9	弥生土器	高杯	-	(8.1)	(8.2)	やや粗	不良	明赤褐色 にぶい黄褐色	ハケ目 ハケ目、指オサエ	内面に丹塗
26	16	123	SI8-9	土師器	椀	12.7	-	5.9	密	良	にぶい赤褐色、黒褐色 にぶい赤褐色、褐色	調整不明 ヘラミガキ	
26	16	124	SI8-9	土師器	甕?	-	-	-	粗	良	明褐色	ナデ	把手部
26	16	125	SP1	須恵器	杯蓋	-	-	(2.1)	密	良	灰色灰色	回転ナデ 回転ナデ	
26	16	126	SP2	土師器	皿	-	-	(2.8)	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	調整不明 調整不明	内外面丹塗
26	16	127	SP2	土師器	椀	12.4	-	6.0	密	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	
26	16	128	SP2	土師器	椀	10.9	-	6.3	粗	良	褐色褐色、にぶい黄褐色 褐色	ナデ後ナデ ヘラケズリ後ナデ	底部外面にヘラ記号「×」
27	16	129	SP4	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	剥離 ココナデ、指オサエ	複合口縁、外面多条の沈線
27	16	130	SP5	土師器?	甕	(26.1)	-	(4.0)	密	やや良	褐色 褐色	一部ヘラミガキ、他調整不明 ナデ、ヘラミガキ	
27	16	131	SP6	土師器	甕	(16.6)	-	(5.5)	やや密	良	明褐色、明褐色、にぶい黄褐色 黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目後ナデ	
27	16	132	SP6	弥生土器	鉢	(20.5)	5.2	14.9	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ココナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ ココナデ、ヘラミガキ	底部から胴部内外面に黒斑
27	17	133	SK6	弥生土器	鉢	(16.8)	-	(6.1)	やや密	良	明褐色 明赤褐色	ココナデ、ハケ目後ナデ ココナデ、ハケ目後ナデ	
27	17	134	SK6	土師器	鉢	(16.4)	-	(4.1)	密	やや良	褐色 褐色	調整不明 ナデ、ハケ目後ヘラミガキ	
27	17	135	SK10	弥生土器	高杯	-	-	-	密	良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ ナデ後ヘラミガキ	杯部底部は円板充填(欠失)
27	17	136	SD1	弥生土器	甕	-	(3.0)	(6.8)	やや粗	やや良	褐色 褐色	ヘラミガキ ハケ目、ナデ	外面に煤付着
27	17	137	SD1	土師器	甕	(19.0)	-	(6.8)	粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ヘラミガキ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目後ヘラミガキ	
27	17	138	SD3	須恵器	杯蓋	-	-	-	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
27	17	139	SD4	須恵器	杯身	-	-	(2.8)	密	良	灰白色 灰白色	ナデ ナデ	253と同一個体か 胎土に黒色砂粒を含む
27	17	140	SD4	須恵器	杯身	-	(6.7)	(1.8)	密	良	灰白色 灰白色	ナデ ナデ	
27	15	141	SD5	須恵器	杯蓋	-	-	(0.8)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
27	17	142	SD5	土師器	皿	(19.8)	-	3.9	粗	良	明赤褐色、明赤褐色 にぶい赤褐色	調整不明 ナデ、指オサエ	
27	17	143	SD5	須恵器	杯身	-	(5.8)	(2.5)	密	良	灰白色 灰色	調整不明 回転ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ	
27	17	144	SD5	須恵器	高杯	-	-	-	密	良	灰白色 灰白色	ナデナデ	
28	17	145	西部遺物 包含層	縄文土器	深鉢	-	-	(3.7)	密	良	オリブ灰色 オリブ灰色	ナデ? 調整不明	粗製 波状口縁、口唇部沈線
28	17	146	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(15.1)	-	-	やや密	良	褐色 褐色	ハケ目 ハケ目による文様	内面に黒斑、複合口縁 櫛描き平行線文、波状文
28	17	147	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	-	(3.0)	密	良	褐色 明黄褐色	ココナデ 調整不明	複合口縁、赤色顔料塗布 口縁部刺突文、多条の擬凹線
28	17	148	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	-	(3.5)	やや密	良	にぶい黄色 にぶい黄色	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ	複合口縁 5条の擬凹線
28	17	149	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(27.4)	-	(7.6)	密	良	褐色 褐色	調整不明 ナデ	複合口縁 櫛描き波状文、平行沈線
28	17	150	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	-	-	やや粗	良	明褐色 明黄褐色	ナデ ナデ	突帯文、斜行刺突文
28	17	151	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(8.8)	-	(7.2)	粗	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	長頸壺
28	17	152	西部遺物 包含層	弥生土器	壺	(12.2)	-	(5.1)	やや密	良	褐色 褐色	ナデ、ヘラミガキ 調整不明	頸部内側に黒斑 口唇部2条の擬凹線、頸部3条の擬凹線
28	17	153	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(12.2)	-	(5.6)	粗	良	明赤褐色、にぶい黄褐色 明赤褐色、明褐色	ハケ目、調整不明 ハケ目	
28	17	154	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(14.0)	-	(4.8)	密	やや良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ ナデ、ハケ目	
28	17	155	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(17.0)	-	(6.0)	密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	口唇部2条の凹線、頸部5条の沈線、 斜行刺突文
28	18	156	西部遺物 包含層	弥生土器	壺	(18.4)	-	(8.0)	密	良	にぶい黄褐色 赤色	ハケ目後ヘラミガキ ナデ、ハケ目後ヘラミガキ	口唇部2条の擬凹線、頸部2条の擬凹 線が残存
28	18	157	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(21.5)	-	(5.4)	やや密	良	灰黄色 明黄褐色	調整不明 ナデ、ハケ目	口唇部2条の擬凹線
28	17	158	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	(21.4)	-	(3.2)	粗	良	明褐色 にぶい黄褐色	調整不明 調整不明	口唇部擬凹線

挿図	図版	№	出土場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
28	18	159	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	19.6	-	(10.8)	密	良	橙色、浅黄橙色 橙色	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	口唇部2条の擬凹線
28	18	160	西部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	(10.0)	(4.5)	密	良	橙色 褐色	ハケ目 ハケ目後ヘラミガキ	底部内面に丁寧なハケ目
28	18	161	西部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	(4.8)	(7.2)	密	不良	にぶい黄褐色 明褐色	ヘラミガキ ハケ目、ナデ	内外面に黒斑
29	18	162	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	8.7	5.2	20.3	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ ヨコナデ、ヘラミガキ	
29	18	163	中央部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	-	-	粗	良	にぶい赤褐色 にぶい褐色	ナデ ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ	
29	18	164	西部遺物 包含層	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	不良	褐色 褐色	指オサエ後ハケ目 ハケ目	擬凹線、焼成破綻痕あり
29	18	165	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	14.4	-	(22.1)	やや密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目	煤付着
29	18	166	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	7.8	(12.3)	やや粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ヘラケズリ ハケ目、指オサエ	
29	19	167	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	14.8	7.3	32.9	やや粗	やや良	褐色 褐色	ヨコナデ、指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ヘラケズリ、ヨコナデ、ハケ目	口唇凹線が無文化したものか?
29	18	168	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	(19.8)	-	(6.0)	粗	良	褐色 褐色	ナデ後ミガキ、ハケ目後ヘラミガキ ヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ	頸部斜行刺突文
29	18	169	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	7.0	(21.2)	やや粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目後ヘラケズリ タタキ後ハケ目、ナデ	焼成破綻痕(ハクリ痕)少量 煤付着
30	18	170	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	15.3	4.9	22.7	やや密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	指オサエ、ナデ、ヘラケズリ 指オサエ、ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	煤付着
30	18	171	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	6.3	(18.6)	やや粗	良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ、ヘラケズリ、指オサエ 指ナデ、ヘラナデ、指オサエ	外面上部径5mm程度の工具痕? 煤付着
30	18	172	東部遺物包 含層	弥生土器	甕	(16.0)	-	(3.0)	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ、調整不明 ナデ、ヘラミガキ	外面に斜行刺突文
30	18	173	東部遺物包 含層	弥生土器	甕	-	-	(3.2)	密	やや良	明黄褐色 明黄褐色	ナデ、ヘラミガキ ヨコナデ、ヘラミガキ	
30	18	174	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	(18.4)	-	(10.3)	密	良	褐色 褐色	調整不明 ナデ、ハケ目	
30	19	175	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	-	(9.0)	やや密	やや良	褐色 褐色	調整不明 ナデ	
30	19	176	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	6.5	(15.9)	やや密	やや良	黒褐色 明赤褐色	ヘラケズリ、ナデ ハケ目後ナデ	
30	19	177	中央部遺物 包含層	弥生土器	鉢	(10.8)	-	(6.8)	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ヨコナデ、指オサエ、ナデ ヨコナデ、ハケ目後ナデ	
30	19	178	中央部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	(6.1)	(6.4)	粗	良	暗灰色 明黄褐色、明赤褐色	ナデ? ハケ目、ナデ	
30	19	179	西部遺物 包含層	弥生土器	甕	-	6.4	(3.2)	やや粗	やや良	暗灰色 にぶい黄褐色	ナデ、ヘラケズリ? 指オサエ、ナデ	甌未製品 外面底部に二次被熱痕
30	19	180	東部遺物包 含層	弥生土器	鉢	(20.6)	-	(5.3)	密	良	灰色 褐色	ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ	頸部外面に斜行刺突文
30	19	181	中央部遺物 包含層	弥生土器	ミニチュア (鉢?)	-	2.0	(2.0)	粗	良	灰黄色 浅黄色	ナデ? 調整不明	
30	19	182	中央部遺物 包含層	弥生土器	鉢	-	-	-	粗	良	褐色、にぶい黄褐色、暗 灰色、褐色、明黄褐色、 暗灰色	調整不明 ハケ目	
30	19	183	西部遺物 包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	やや密	良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目 ハケ目	底部円盤刻線 3条の沈線
30	20	184	西部遺物 包含層	弥生土器	高杯	-	-	(3.2)	密	やや良	にぶい黄褐色 浅黄色	調整不明 調整不明	
30	19	185	中央部遺物 包含層	弥生土器	高杯	-	-	(4.9)	密	やや良	褐色 明黄褐色	ヘラミガキ ヘラミガキ	外面に多条擬凹線、矢羽形透かしの 退化文様、黒斑
30	19	186	西部遺物 包含層	弥生土器	高杯	-	(15.4)	(5.0)	やや密	良	明赤褐色 明赤褐色	調整不明 調整不明	
30	19	187	西部遺物 包含層	弥生土器	高杯	(30.6)	-	(1.7)	密	やや良	褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、ヘラミガキ ヘラミガキ	
30	19	188	中央部遺物 包含層	弥生土器	器台	-	(10.8)	(4.7)	やや粗	良	褐色 褐色	ヘラミガキ、ナデ ヘラミガキ、ヨコナデ	赤色・褐色砂粒を含む 黒斑
30	19	189	中央部遺物 包含層	弥生土器	器台	-	-	-	粗	やや良	黒色、にぶい黄色 にぶい黄褐色	ナデ、指オサエ? ナデ後ヘラミガキ	支脚の可能性あり
30	19	190	西部遺物 包含層	弥生土器	器台	-	-	-	密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	刺突文、円孔あり
30	19	191	中央部遺物 包含層	弥生土器	器台	-	-	(4.1)	粗	やや良	褐色 褐色	ヘラミガキ 調整不明	2条の擬凹線
31	19	192	中央部遺物 包含層	土師器	壺	7.8	3.8	9.2	粗	良	褐色 褐色	調整不明 ハケ目	小型丸底壺、底部外面にヘラ描き葉 脈文様、外面一部赤変
31	19	193	中央部遺物 包含層	土師器	壺	(10.6)	-	(7.3)	粗	やや良	褐色 褐色	ナデ、指オサエ 調整不明	長頸壺
31	20	194	中央部遺物 包含層	土師器	壺	-	-	(8.5)	粗	良	明褐色、褐灰色 明褐色	調整不明 ハケ目後ナデ	長頸壺
31	20	195	中央部遺物 包含層	土師器	台付壺	-	(8.6)	(1.1)	密	良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	外面沈線2条
31	20	196	東部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(3.4)	密	良	褐色 褐色	ヨコナデ ヨコナデ	
31	20	197	中央部遺物 包含層	土師器	甕	(21.8)	-	(3.6)	密	やや良	褐色 明赤褐色	調整不明 ハケ目	
31	20	198	中央部遺物 包含層	土師器	甕	(18.8)	-	(2.8)	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	調整不明 ヨコナデ	山陰系か?
31	20	199	西部遺物 包含層	土師器	甕	(17.7)	-	(8.5)	やや密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ヨコナデ、指オサエ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ目	外面に煤付着
31	23	200	西部遺物 包含層	土師器	甕	(20.8)	-	(19.2)	やや密	良	褐色 にぶい褐色	ナデ、ナデ後ヘラミガキ、ヘラケズリ後ヘラミガキ ヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ、ハケ目	胴部外面に煤付着 中位にハケ原体による横方向のナデ
31	20	201	中央部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(14.0)	粗	やや良	褐色、灰黄色 褐色	調整不明 ハケ目	
31	20	202	中央部遺物 包含層	土師器	甕	-	(2.2)	(13.6)	密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	外面に煤付着
31	20	203	中央部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(9.6)	粗	良	褐色 にぶい褐色	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	内外面黒斑
31	20	204	中央部遺物 包含層	土師器	甕	-	5.1	(3.4)	やや粗	良	にぶい褐色 明赤褐色	ナデ ハケ目、ハケ目後ナデ	
31	20	205	遺物包含層	土師器	甕	-	-	(5.8)	粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ、タタキ後ナデ、ハケ目	
31	20	206	西部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(7.2)	密	良	褐色 褐色	ハケ目ナデ	
31	20	207	西部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(14.7)	粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目、指オサエ	丹塗 把手部接合のための差し込み孔あり
31	21	208	東部遺物 包含層	土師器	甕	-	-	(1.6)	粗	良	黒色 明褐色	調整不明 調整不明	内面使用により黒色化
31	21	209	中央部遺物 包含層	土師器	甕	-	(7.5)	(5.1)	粗	良	明赤褐色 明褐色	ナデ ヘラケズリ、ハケ目後ナデ	
32	21	210	中央部遺物 包含層	土師器	椀	12.0	-	6.2	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色、褐色	ヘラミガキ ヘラミガキ	内外面に丹塗顔料 内外面被熱部分あり
32	21	211	西部遺物 包含層	土師器	椀	(14.6)	-	5.8	密	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	

挿図	図版	No	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
32	21	212	中央部遺物 包含層	土師器	鉢	-	-	(1.7)	粗	良	明褐色 明褐色	調整不明 調整不明	外面底部にヘラ描き葉脈文様
32	21	213	中央部遺物 包含層	土師器	器台	-	-	(1.9)	密	良	明褐色 橙色	ココナデ ナデ	畿内系精製小型器台
32	21	214	中央部遺物 包含層	土師器	高杯	-	-	-	粗	良	橙色 橙色	調整不明 調整不明	口縁部剥落
32	21	215	中央部遺物 包含層	土師器	高杯	(18.8)	-	(4.2)	やや密	良	にぶい橙色 橙色	ココナデ、ハケ目後ヘラミガキ ココナデ、ハケ目後ヘラミガキ	
32	22	216	中央部遺物 包含層	土師器	製塩土器	(12.8)	-	(2.7)	やや密	やや良	橙色 橙色	ハケ目後ナデ 平行タタキ	217と同一個体か
32	21	217	中央部遺物 包含層	土師器	製塩土器	-	(3.4)	(5.7)	やや密	やや良	橙褐色 褐色	ナデ、指オサエ 平行タタキ、ナデ	216と同一個体か
32	21	218	中央部遺物 包含層	土師器	製塩土器	-	-	-	やや密	良	橙色 明赤褐色	ナデ タタキ	煤付着
32	21	219	西部遺物 包含層	須恵器	杯身	10.1	-	5.1	やや密	良	灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	直線状のヘラ記号
32	22	220	遺物包含層	須恵器	杯身	(11.8)	-	(3.7)	密	良	灰色 灰白色～灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
32	22	221	中央部遺物 包含層	須恵器	杯蓋	(13.6)	-	(4.2)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ヘラ切り、回転ヘラ切り後回転ナデ	
32	22	222	東部遺物 包含層	須恵器	杯蓋	(13.0)	-	5.0	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ後回転ナデ	
32	22	223	中央部遺物 包含層	須恵器	杯蓋	(12.8)	-	4.0	密	良	灰色 灰色	ナデ回転 ヘラケズリ、ナデ	
32	22	224	中央部遺物 包含層	須恵器	高杯	(12.4)	-	(3.0)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
32	22	225	東部遺物 包含層	須恵器	高杯?	-	-	(2.7)	密	良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
32	22	226	中央部遺物 包含層	須恵器	高杯	-	(8.6)	(4.9)	密	良	灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	透かし孔2箇所あり
32	22	227	遺物包含層	須恵器	高杯	-	(10.3)	(3.3)	やや密	良	灰色 暗灰色、灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
32	22	228	中央部遺物 包含層	須恵器	甕	-	-	(1.7)	密	良	灰白色 灰色	ナデ ナデ	
32	22	229	西部遺物 包含層	須恵器	広口壺	-	-	(2.3)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ カキメ	
32	22	230	中央部遺物 包含層	須恵器	鉢	-	-	(3.4)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
32	22	231	西部遺物 包含層	須恵器	壺?	(13.5)	-	(5.6)	密	良	灰色 灰色	ココナデ ココナデ	
32	22	232	遺物包含層	須恵器	壺	(8.7)	-	(2.8)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	短頸壺
32	22	233	西部遺物 包含層	須恵器	提瓶	(7.6)	-	26.1	やや粗	良	青灰色 灰色	ナデ、指オサエ カキメ、ナデ	
33	23	234	中央部遺物 包含層	須恵器	器台	-	(24.6)	(22.9)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ、指オサエ、ナデ 回転ナデ、カキ目	筒形器台、自然釉、飾描き波状文、 三角形の透かし
33	23	235	中央部遺物 包含層	須恵器	器台	-	-	(2.8)	密	良	灰色 灰色	回転ヘラケズリ、ナデ ナデ	外面に飾描き波状文
33	23	236	中央部遺物 包含層	須恵器	器台	-	-	-	やや密	良	灰色 灰色		外面に飾描き波状文及び沈線
33	23	237	中央部遺物 包含層	須恵器	器台	-	-	-	密	良	灰色 灰色	回転ナデ	外面に飾描き波状文
33	23	238	中央部遺物 包含層	須恵器	器台	-	-	-	密	良	灰色 灰色、灰褐色	ココナデ ココナデ	飾描き波状文施文後ココナデを施し一部 文様が不明瞭、素地は赤褐色を呈する
33	24	239	遺物包含層	土師器	皿	-	-	(2.2)	密	やや良	褐色 褐色	ココナデ	内外面丹塗
33	24	240	東部遺物 包含層	土師器	皿	-	-	(1.6)	密	良	明褐色 明褐色	回転ナデ 回転ナデ	
33	24	241	東部遺物 包含層	土師器	椀	-	(9.8)	(2.1)	密	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	外面に丹塗
33	24	242	西部遺物 包含層	黒色土器	椀	-	(7.6)	(1.7)	密	良	黒色 褐色	ヘラミガキ 回転ナデ	内面黒化処理
33	24	243	西部遺物 包含層	土師器	皿	-	6.8	(2.0)	密	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	底部糸切りか
33	24	244	西部遺物 包含層	土師器	皿	(7.8)	(6.6)	1.3	密	良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
33	24	245	西部遺物 包含層	土師器	羽釜	-	-	(2.9)	粗	良	明赤褐色 明赤褐色、灰褐色	調整不明 ココナデ	
33	24	246	遺物包含層	土師器	足罎	-	-	-	粗	良	褐色	ナデ、ハケ目	
33	24	247	遺物包含層	須恵器	杯身	-	(8.5)	(3.1)	密	良	黄灰色 灰白色、黄灰色	ナデ ナデ、回転ナデ後ナデ	底部ヘラ切り
33	24	248	西部遺物 包含層	須恵器	杯身	(13.8)	-	(3.4)	密	良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
33	24	249	東部遺物 包含層	須恵器	杯身	-	(10.5)	(2.6)	やや粗	不良	褐色 褐色	ナデ ココナデ	焼成不良のため土師質化
33	24	250	中央部遺物 包含層	須恵器	杯身	-	-	(2.5)	密	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
33	24	251	西部遺物 包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(1.2)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
33	24	252	中央部遺物 包含層	須恵器	杯身	(17.2)	-	(2.0)	密	良	灰色 灰色	ココナデ、回転ナデ ココナデ、回転ナデ	ロクロ回転方向は左回り 皿の可能性あり
33	24	253	中央部遺物 包含層	須恵器	鉢	(18.0)	(11.6)	5.7	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に黒色砂粒を含む 139と同一個体か
33	24	254	中央部遺物 包含層	須恵器	皿?	(16.3)	-	(1.6)	やや密	良	灰白色 灰白色	ココナデ、回転ナデ ココナデ、回転ナデ	ロクロ回転方向は左回り 杯蓋の可能性あり
33	24	255	遺物包含層	須恵器	杯身	-	(9.0)	(2.3)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	見込みに×状ヘラ記号
33	24	256	中央部遺物 包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(1.5)	密	良	灰白色 灰白色	ナデ回転 ナデ	
33	24	257	西部遺物包 含層	須恵器	壺	-	(7.6)	(3.7)	密	良	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	
34	24	258	西部遺物包 含層	須恵器	壺	-	(8.5)	(8.3)	密	良	灰色 灰白色～灰色	回転ナデ 回転ナデ	器壁内外面に気泡膨張がみられる
34	24	259	西部遺物包 含層	須恵器	甕	(14.0)	-	(6.4)	密	良	暗灰色、黄灰色、灰白色 灰白色	ナデ、タタキ後ココナデ タタキ後カキ目	口縁部に自然釉あり
34	24	260	西部遺物包 含層	須恵器?	不明	-	(5.8)	-	密	良	灰白	ナデ	脚部
34	24	261	東部遺物包 含層	緑釉陶器	椀	-	(6.4)	(1.1)	密	良	明オリープ灰色、明オ リープ灰色、浅黄色		素地底部内面に沈線状の段あり 内外面に光沢のある明緑色の透明 釉がかかる
34	24	262	遺物包含層	青磁	椀	(15.0)	-	(3.3)	密	良	素地:灰白色 釉:灰オリープ色		片影鑄蓮弁文 龍泉窯系
35	25	263	西部遺物包 含層	瓦	平瓦	-	-	-	密	良	暗灰色 暗灰色	ナデか? 格子タタキ後ナデか?	内面に布目痕
35	25	264	西部遺物包 含層	瓦	軒平瓦	-	-	-	密	良	灰色 灰色	ナデ 格子タタキ後ナデ	

第4表 出土石製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
36	25	265	表面採集	石製品	石鎌	2.1	1.7	0.4	0.7	サヌカイト	凹基無茎式、先端部欠損
36	25	266	SI5	石製品	尖頭器	3.7	1.8	0.8	5.5	サヌカイト	未成品 基部欠損
36	25	267	中央部遺物 包含層	石製品	尖頭器	5.8	1.9	0.7	7.3	サヌカイト	基部欠損
36	25	268	中央部遺物 包含層	石製品	剥片石器	4.2	2.1	0.7	5.5	チャート	自然面を残す
36	25	269	中央部遺物 包含層	石製品	剥片	2.7	1.3	0.5	1.7	サヌカイト	
36	25	270	SI6	石製品	剥片	2.0	2.9	0.7	3.0	サヌカイト	
36	25	271	SD4	石製品	剥片	3.3	5.4	1.2	13.9	サヌカイト	一部自然面を残す
36	25	272	SI5	石製品	剥片石器	4.5	3.8	1.0	14.1	サヌカイト	一部欠損
36	25	273	SI4	石製品	紡錘車	6.1	6.2	0.9	46.2	角閃石安山岩	未成品 両面と周縁部加工、一部欠損、未完通穿孔 2ヶ所あり
36	25	274	中央部遺物 包含層	石製品	紡錘車	5.3	5.3	0.8	31.1	角閃石安山岩	完形 穿孔は両面から行っている
36	25	275	SI8	石製品	紡錘車	3.6	3.6	0.6	11.3	粘板岩	裏面欠失
36	25	276	SI8・9	石製品	紡錘車	3.3	3.4	1.2	11.6	滑石	裏面欠失、表面一部欠損 表面に研磨痕あり
36	25	277	遺物包含層	石製品	石包丁	4.1	9.9	0.6	36.2	緑色片岩	両端挟り入り 未完通穿孔2ヶ所あり
36	26	278	遺物包含層	石製品	剥片	7.8	8.1	1.9	13.07	安山岩	片面自然面を残す、周辺部に加工痕あり
36	25	279	SI4	石製品	磨製石斧	6.7	3.7	1.2	50.6	緑色片岩	刃部欠損、未製品か？
36	26	280	遺物包含層	石製品	石核	5.8	6.0	1.5	60.6	サヌカイト	表面摩耗
37	26	281	SI2	石製品	敲石・磨石	12.5	10.2	7.7	1406.2	安山岩	円盤片面に磨り痕、磨り面に敲打痕
37	26	282	SI1 中央土坑	石製品	敲石	9.8	8.1	6.1	695.4	アブライト (半花崗岩)	表面中央部及び周辺部に敲打痕
37	26	283	SI2	石製品	磨石	13.7	8.0	6.4	1097.0	砂岩	円盤の両端部に使用痕、側辺に敲打痕
37	26	284	中央部遺物 包含層	石製品	磨石	12.7	7.3	6.0	754.1	凝灰岩	指かけ用窪み2個×2ヶ所あり
37	26	285	SI1	石製品	砥石	14.8	5.9	1.7	147.0	粘板岩	表裏を使用
37	26	286	SI1	石製品	砥石	19.4	20.7	3.5	1805.9	片麻岩	一面のみ使用
38	26	287	SI2	石製品	砥石	12.7	6.7	5.0	292.1	軽石	4面使用
38	26	288	SI8・9	石製品	砥石	16.8	7.7	5.4	574.5	安山岩	一面のみ使用
38	26	289	SP2	石製品	砥石	5.0	3.2	3.0	66.0	流紋岩	4面使用、両端欠損

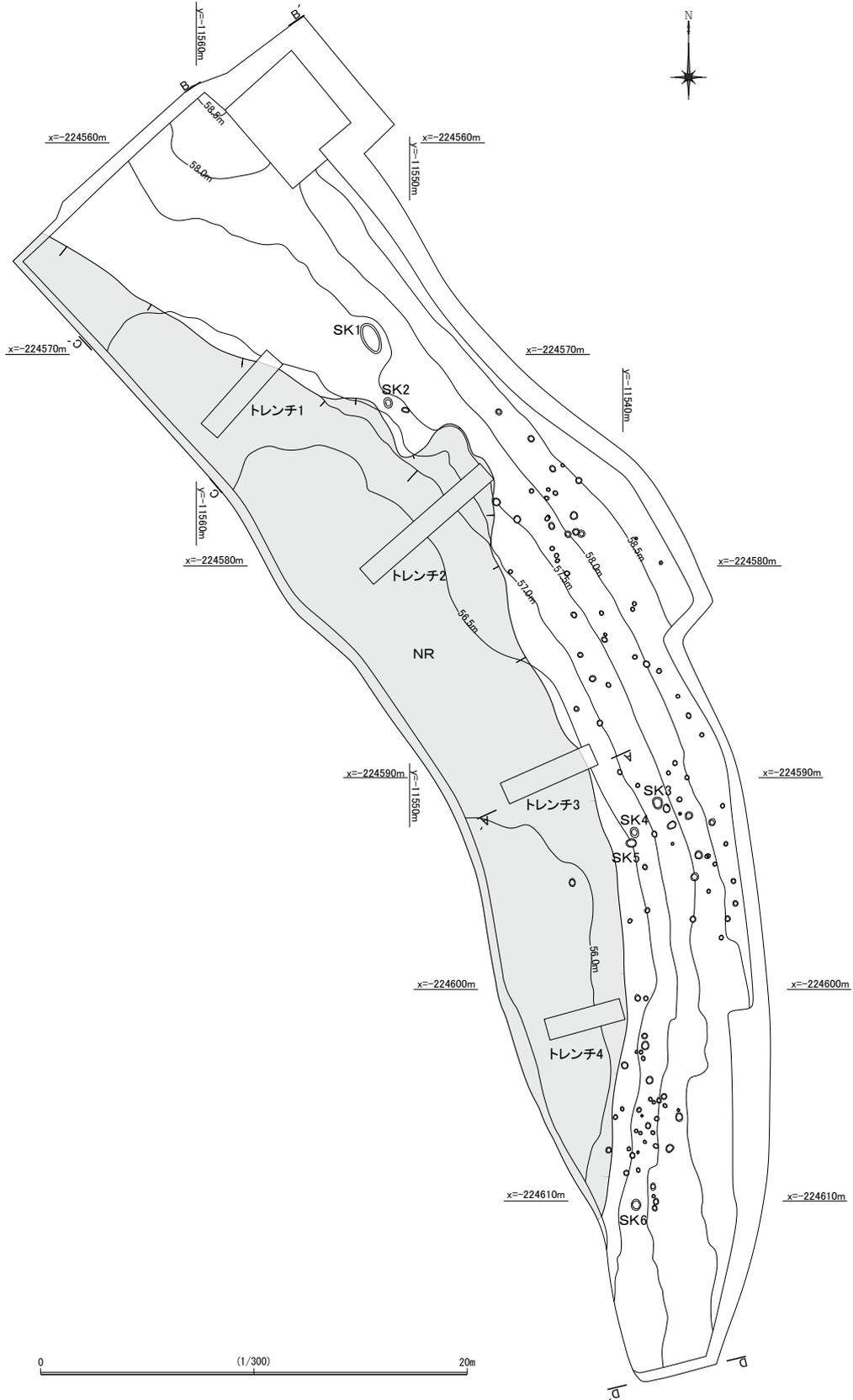
第5表 出土鉄製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	備考
						長さ	幅	厚さ		
39	26	290	SI2	鉄製品	鉈	(2.8)	1.1	刃部厚 0.1 基部厚 0.3	1.8	一部木質部残存
39	26	291	SD5	鉄製品	不明	4.5	0.7	0.6	4.3	
39	26	292	中央部遺物 包含層	鉄製品	鉄鎌	(4.1)	0.8	0.3	2.8	鉄鎌茎部か？

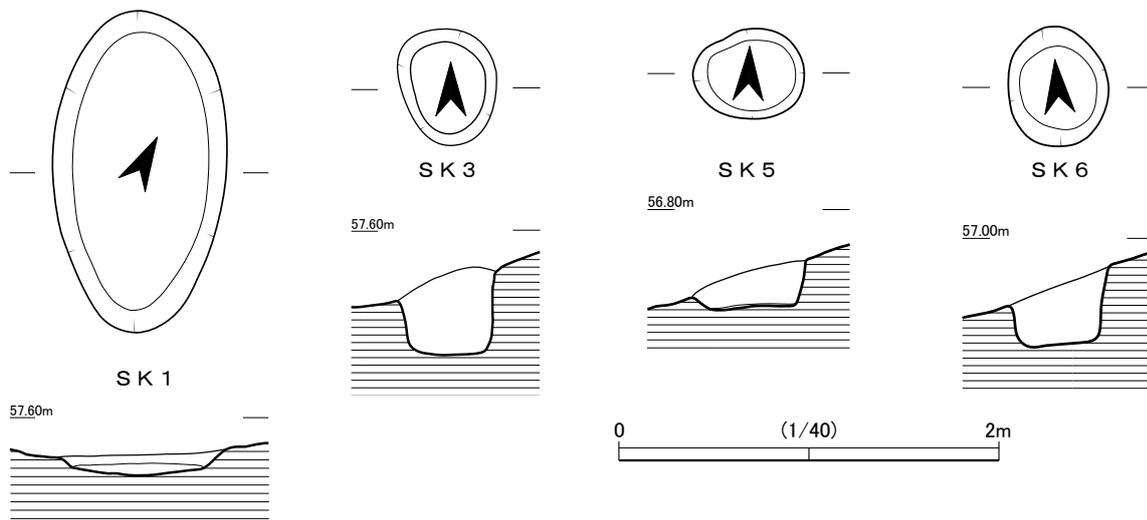
V 三反地遺跡調査の成果

1 遺構

行者山北の山塊から西に張り出す尾根の一部と北から流下する谷川が形成した河谷に位置する。標



第40図 三反地遺跡遺構配置図



第 41 図 SK 1・3・5・6 実測図

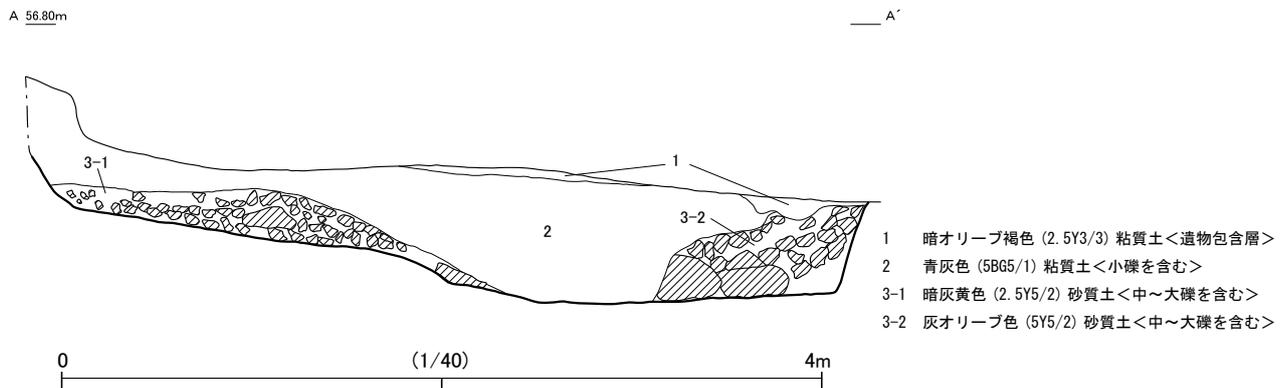
高はおよそ 56 ~ 58.5 m である。調査区東側は山林、北・西・南は、河谷である。東半部の丘陵斜面部分北部は、北東方向から流れ込んだ土石流に由来する堆積層で形成されている。

丘陵斜面部のほぼ中央から約 25 m の間は、調査区東端から自然流路にかけて遺物包含層が堆積していた。遺物包含層は黒褐色粘質土で、拳大から人頭大以上の角礫を多量に含み、径 1 m を超えるものもみられた。厚さは東端部では数 cm だが、自然流路に近い部分は 100 cm に達するところもある。遺物は、古墳時代の土師器・須恵器が量的に多く、弥生土器や石器も若干含まれ、古代・中世の土師器・須恵器や瓦質土器も一定量みられる。以上の状況から、調査区東側の山腹部に継続して営まれた集落があり、中世以降の大雨による表層崩壊等で一部が削られ、遺物包含層を形成したものと考えられる。

柱穴や土坑は、ほとんどが遺物包含層の下部から検出された。埋土に遺物を含まないものがほとんどであるが、数個の柱穴内から古墳時代とみられる土師器の小片が出土しており、遺構の多くは古墳時代に帰属するものと推定できる。傾斜の急な斜面にあり、整列するものがないことから、居住用の掘立柱建物跡に伴うものではないと考えられる。

(1) 土坑

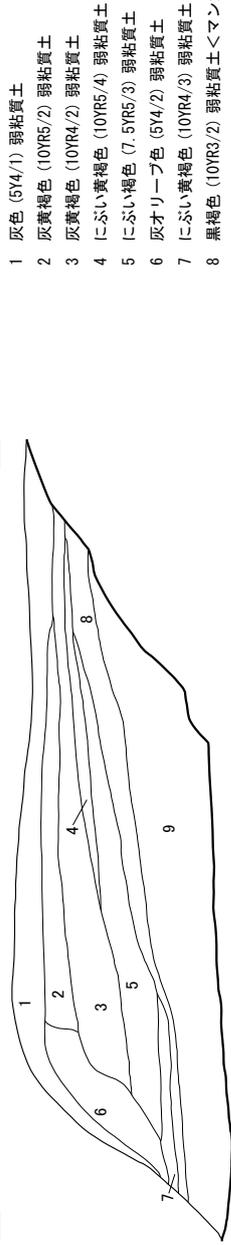
土坑は 6 基検出された。SK 2 ~ 6 は自然流路東肩のやや高位側にある。埋土は、SK 1・2 が青灰色粘土、SK 3 ~ 6 は遺物包含層と同様の黒褐色粘質土である。いずれの土坑からも、遺物は出土していない。



第 42 図 NR トレンチ 3 南壁土層断面図

B 60.20m

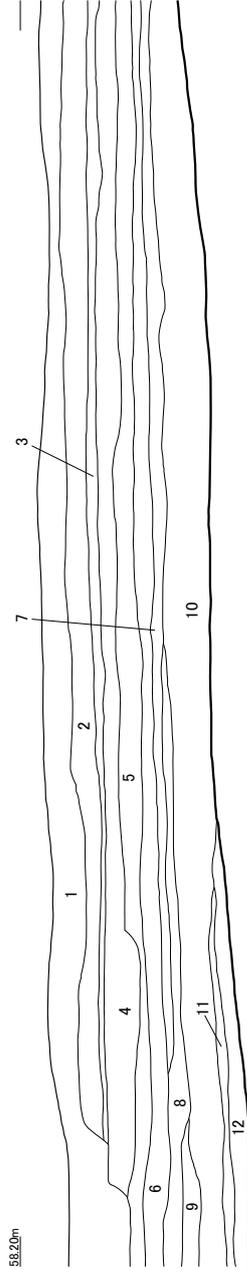
B'



- 1 灰色 (5Y4/1) 弱粘質土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 弱粘質土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 弱粘質土
- 5 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 弱粘質土
- 6 灰オリーブ色 (5Y4/2) 弱粘質土
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 弱粘質土<マンガン・鉄分を含む>
- 9 褐色 (10YR4/4) 弱粘質土<マンガン・鉄分、中礫を含む>

C 58.20m

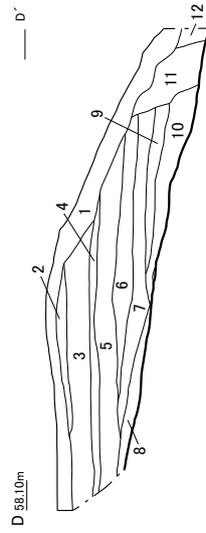
C'



- 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 やや粘性あり
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 やや粘性あり
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 やや粘性あり
- 4 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土<砂粒やや大>
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
- 6 灰黄色 (2.5Y6/2) 弱粘質土
- 7 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 8 灰白色 (10YR7/1) 粘質土
- 9 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土
- 10 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土
- 11 灰色 (5Y6/1) 弱粘質土
- 12 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土

D 58.10m

D'



- 1 耕土 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
- 2 盤土 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
- 3 旧耕土か 暗褐色 (10YR3/3) 弱粘質土
- 4 礫土 褐色 (10YR4/4) 粘質土
- 5 褐色 (10YR4/6) 土<小礫を含む>
- 6 褐色 (7.5YR4/4) 土<小礫を少量含む>
- 7 旧耕土 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土<小礫を含む>
- 9 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
- 10 灰黄褐色 (10YR5/2) 土
- 11 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- 12 褐灰色 (10YR4/1) 土

0 (1/60)

4m

第43図 調査区壁面土層断面図

SK1 (第41図) 調査区北部にある。平面形は長円形で、長径153cm、短径82cm、深さ13cmである。

SK3 (第41図) 調査区ほぼ中央部の斜面にある。平面形は長円形で、長径56cm、短径45cm、深さ38cmである。

SK5 (第41図) 調査区ほぼ中央部の自然流路東肩付近にある。平面形はほぼ円形で、直径40～49cm、深さは20cmである。

SK6 (第41図) 調査区南部の自然流路東肩付近にある。平面形はほぼ円形で、直径43～52cm、深さは35cmである。

(2) 自然流路

NR (第40・42図 図版27・28)

調査区西半部は自然流路跡で、北から南に向かって流下する。調査区内で幅10mあまり、さらに西側の調査区外に続く。堆積状況から、この谷の中で、小川が繰り返し流路を変えたようすがみとれる。自然流路東側の上部には、遺物包含層が覆いかぶさっている。また、流路内の出土遺物には、弥生土器から中世の土師器までが含まれることから、中世以降に検出面上部まで埋まり、埋没後に耕地化されたものとみられる。

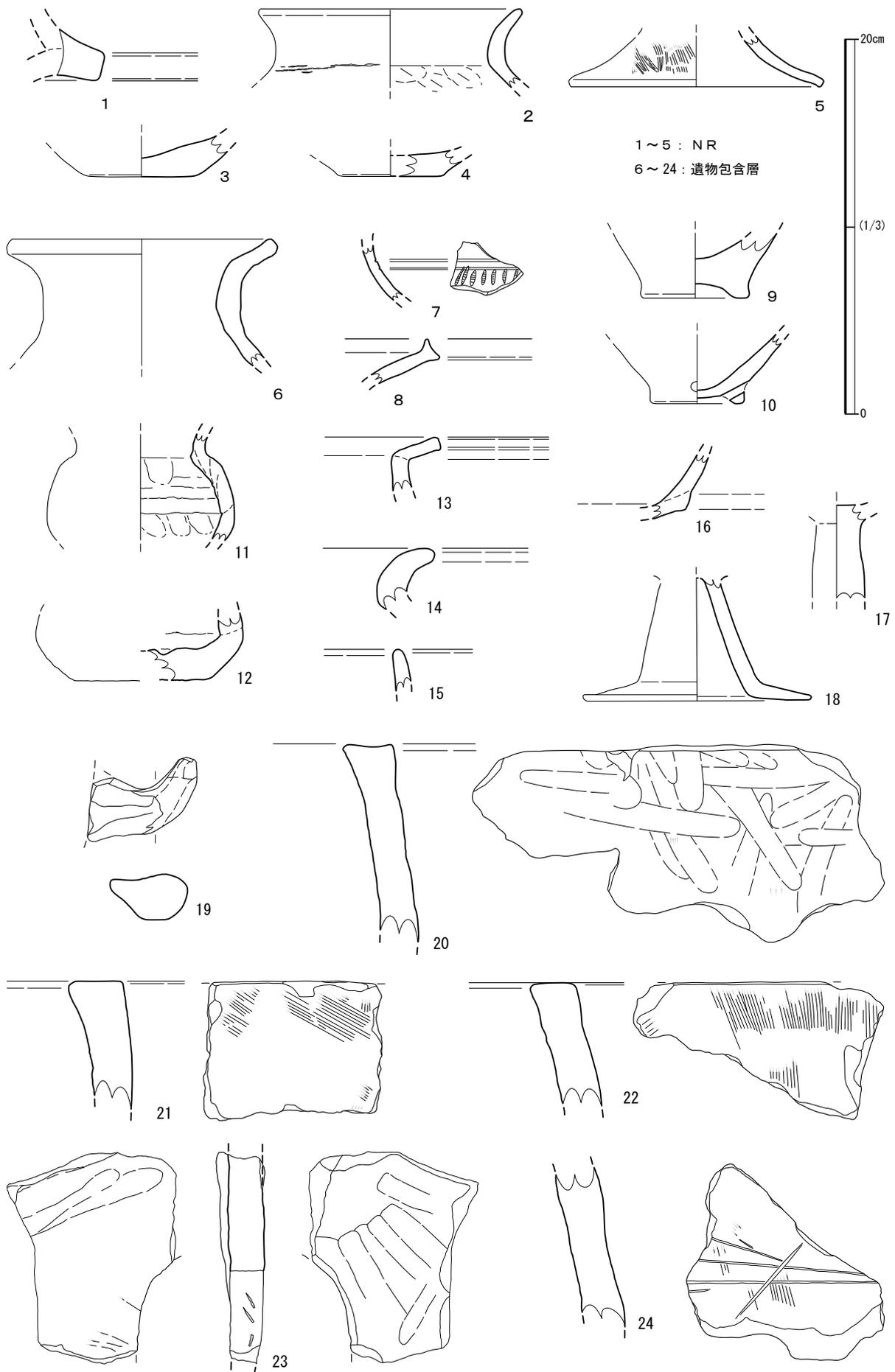
2 遺物

(1) 土器 (第44・45図 図版29・30)

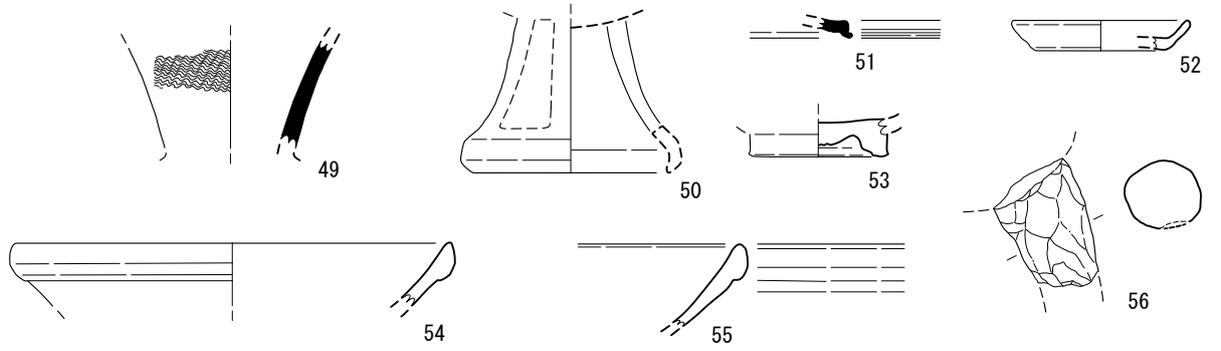
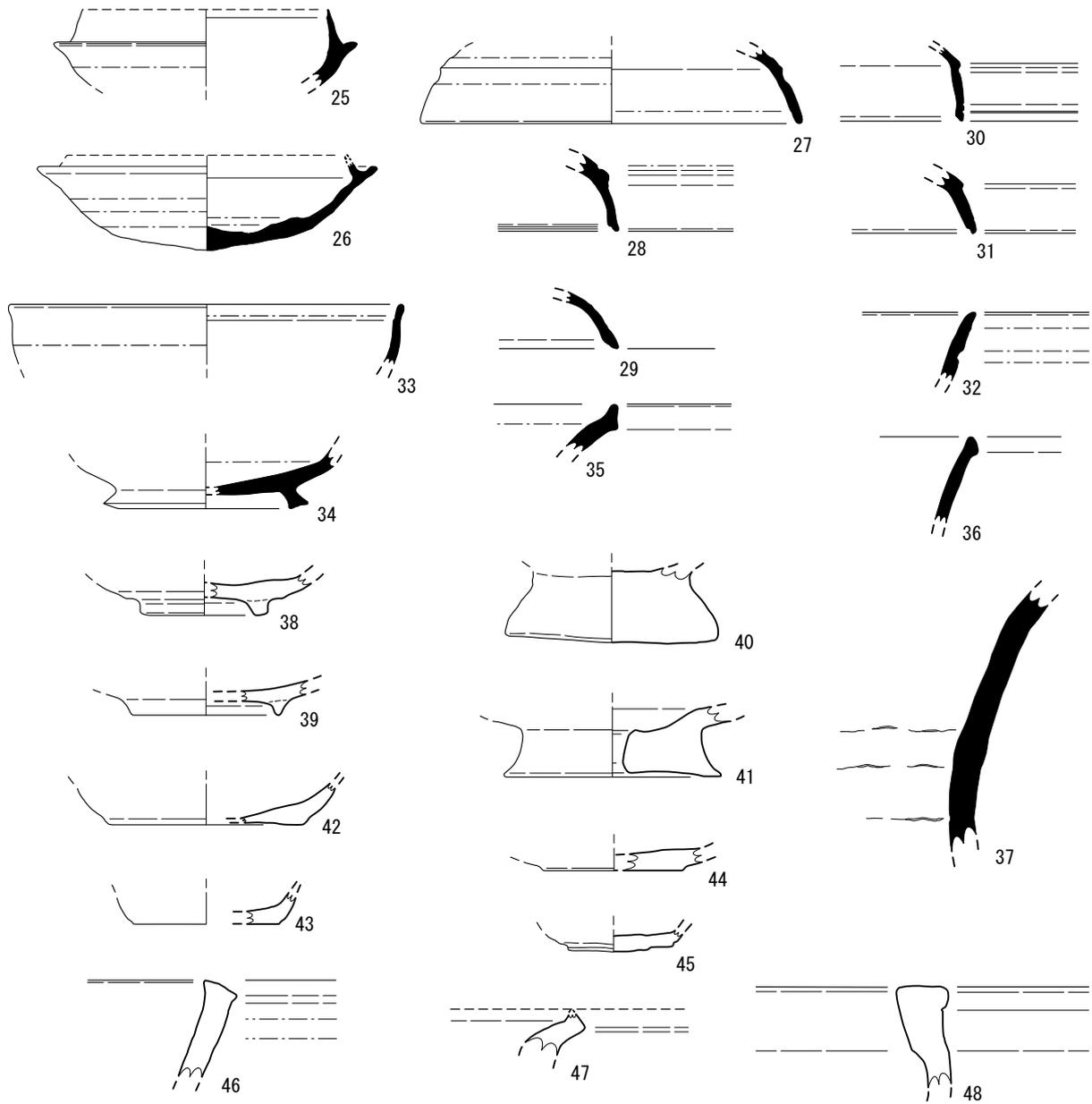
1は複合口縁壺の箍部で、弥生時代後期のものである。3は古墳時代の土師器鉢の底部で、外面に葉脈文を表すと考えられるヘラ描き沈線がある。6は弥生土器の壺で、口縁部は弧を描いて外反する。7は弥生土器の壺頸部で、2条の沈線下に斜行刺突文をもつ。10は弥生土器の壺底部で、外面のくびれ部から底部にかけて穿孔がみられる。11は古墳時代の土師器小型丸底壺の頸部～胴部で、内面に粘土紐積上痕を残す。18は古墳時代の土師器の高杯脚部である。下方に向かって直線的に開き、屈折して裾部が外方へ開く。20～24は、古墳時代の移動式竈である。20～22は上端の釜口部分、23は焚口の破片である。24は部位が不明瞭であるが、表面にヘラ描き平行線と斜線を組み合わせた文様が施される。表面は縦・斜めのハケメ調整及びナデ、裏面はナデ調整である。25・26は古墳時代の須恵器の杯身である。25は立ち上がり部がやや高い。34は古代の須恵器杯身で、高台がハの字形に開く。40・41は、古代～中世初期の土師器台付皿の底部である。底部は糸切りで、41は中央に貫通孔がある。42は土師器の杯、43～45は土師器の皿である。底部は糸切りである。46は陶器の播鉢、47は瓦質土器の鍋の口縁部とみられる。48は瓦質土器の甕または火鉢である。42～48は中世のものである。49は古墳時代の壺または甕で、頸部に櫛描き波状文をめぐらす。51は古代の須恵器の杯蓋で、下端部を下外方へ拡張し、受部とする。53～55は貿易磁器で、53は青磁碗の底部、54・55は白磁の碗である。玉縁は幅広でやや垂れ下がり、釉は黄白色である。56は土師質の足鍋片で、中世のものである。

(2) 石製品 (第46図 図版30)

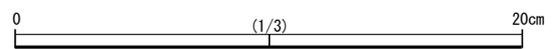
57はサヌカイト製の石鎌で、腸袂はやや浅い。58は安山岩製の敲石で、両端部および表裏面中央に敲打痕がある。59は粘板岩製の石包丁で、全体の1/2強を欠失する。刃部は外湾し、刃部寄りの



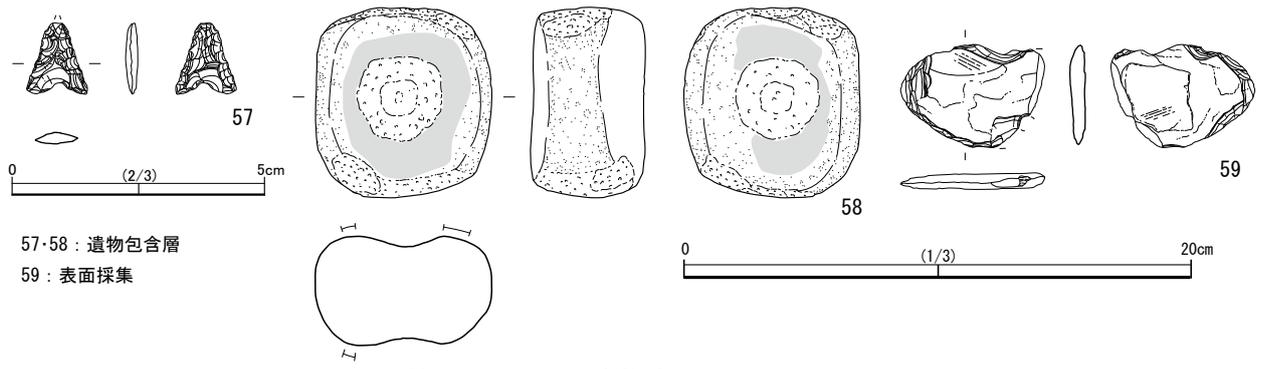
第 44 图 出土遺物実測图 (1)



25 ~ 48 : 遺物包含層, 49 ~ 56 : 表面採集



第 45 図 出土遺物実測図 (2)



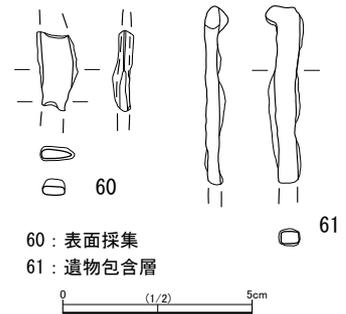
57・58：遺物包含層
59：表面採集

第46図 出土遺物実測図（3）

折損部に穿孔の痕跡が認められる。

(3) 鉄製品（第47図 図版30）

60は片刃鋸の刃部で、先端部及び基部を欠失する。刃部断面は二等辺三角形を呈す。61は鉄釘とみられる。上端部をたたいて折り曲げており、断面形は長方形を呈する。



60：表面採集
61：遺物包含層

第47図 出土遺物実測図（4）

第6表 出土土器・土製品観察一覧表

挿 図 版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)						
44	29	1	NR	弥生土器	壺	-	-	-	粗	不良	橙色 橙色	調整不明 調整不明	複合口縁撞部
44	29	2	NR	土師器	甕	(14.0)	-	(4.2)	やや粗	やや良	にぶい橙色 褐色	ナデ、ヘラケズリ後ナデ ナデ	頸部にハケ目原体による押圧痕
44	29	3	NR	土師器	鉢	-	(6.2)	(2.2)	粗	不良	灰黄褐色 灰黄褐色	調整不明 調整不明	底部外面にヘラ描き葉脈文
44	29	4	NR	土師器	皿	-	(5.7)	(1.4)	密	やや良	橙色 褐色	調整不明 回転ナデ	底部糸切り
44	29	5	NR	土師器	高杯	-	(13.4)	(2.7)	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ヘラミガキ、ヨコナデ ハケ目、ヨコナデ	内面に黒斑 内外面に赤色顔料塗布
44	29	6	遺物包含層	弥生土器	壺	14.1	-	(6.8)	粗	不良	橙色 褐色	調整不明 調整不明	
44	29	7	遺物包含層	弥生土器	壺	-	-	-	やや粗	やや良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	2条の沈線、斜行刺突文
44	29	8	遺物包含層	弥生土器	器台?	-	-	(2.4)	粗	不良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	
44	29	9	遺物包含層	弥生土器	壺	-	5.8	(3.5)	粗	不良	褐色 にぶい褐色	調整不明 調整不明	
44	29	10	遺物包含層	弥生土器	壺	-	(4.9)	(3.7)	やや粗	不良	褐灰色 褐色	調整不明 調整不明	側面から底面にかけ穿孔
44	29	11	遺物包含層	土師器	壺	-	-	(5.8)	密	不良	黄褐色 褐色	指オサエ 調整不明	内面に粘土紐積上痕
44	29	12	遺物包含層	土師器	壺?	-	7.6	(3.6)	やや密	不良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	
44	29	13	遺物包含層	土師器	甕	-	-	(2.9)	やや粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	調整不明 調整不明	
44	29	14	遺物包含層	土師器	甕	-	-	(3.3)	粗	やや良	明褐色 明褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
44	29	15	遺物包含層	土師器	鉢	-	-	(2.2)	やや粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ナデか ナデか	
44	29	16	遺物包含層	土師器	高杯	-	-	(3.5)	やや粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	
44	29	17	遺物包含層	土師器	不明	-	2.0	(5.0)	粗	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	器種不明（中実、高杯?）
44	29	18	遺物包含層	土師器	高杯	-	12.2	(6.6)	やや密	不良	褐色 褐色	調整不明 調整不明	
44	29	19	遺物包含層	土師器	甕	-	-	-	やや密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	指オサエ	胎土にくさり礫を多く含む
44	29	20	遺物包含層	土師器	移動式甕	-	-	(10.6)	やや粗	やや良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、指ナデ ヨコナデ、ハケ目後指ナデ	上部の破片とみられる
44	29	21	遺物包含層	土師器	移動式甕	-	-	(6.9)	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
44	29	22	遺物包含層	土師器	移動式甕	-	-	(6.6)	やや粗	やや良	にぶい赤褐色 にぶい褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	
44	29	23	遺物包含層	土師器	移動式甕	-	-	(11.4)	やや密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	指ナデ ナデ、ハケ状ナデ	前面焚口部分
44	29	24	遺物包含層	土師器	移動式甕	-	-	(8.5)	やや粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ハケ目後ナデ	ヘラ描き模様あり

挿図	図版	No	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)					
45	30	25	遺物包含層	須恵器	杯身	-	-	-	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	26	遺物包含層	須恵器	杯身	-	-	(3.9)	密	良	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ	
45	30	27	遺物包含層	須恵器	杯蓋	(16.5)	-	(3.3)	やや粗	やや良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	28	遺物包含層	須恵器	蓋	-	-	(3.4)	やや粗	やや良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	29	遺物包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(2.5)	やや粗	やや良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	30	遺物包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(3.3)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	31	遺物包含層	須恵器	杯蓋	-	-	(2.7)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ ヘラケズリ、回転ナデ	口唇部内面に段あり
45	30	32	遺物包含層	須恵器	杯身	-	-	(3.0)	やや密	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	外面に1条の沈線
45	30	33	遺物包含層	須恵器	杯身	(17.4)	-	(2.6)	やや粗	やや良	紫灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	34	遺物包含層	須恵器	椀	-	(9.0)	(2.7)	やや粗	不良	灰色 灰色	調整不明 回転ナデ、ヘラケズリ	
45	30	35	遺物包含層	須恵器	鉢?	-	-	(2.1)	やや密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
45	30	36	遺物包含層	須恵器	壺	-	-	(3.9)	密	良	灰色 暗オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	高杯脚部の可能性あり
45	30	37	遺物包含層	須恵器	壺	-	-	-	やや粗	やや良	灰白色 灰色	ナデ ナデ	頸部内面に粘土紐積上痕
45	30	38	遺物包含層	土師器	椀	-	(5.6)	(1.8)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 灰白色	ミガキ 回転ナデ	
45	30	39	遺物包含層	土師器	椀	-	(6.6)	(1.5)	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	40	遺物包含層	土師器	台付皿	-	(9.4)	(3.4)	密	やや良	明黄褐色 明黄褐色	ナデ ナデ	底部回転糸切り
45	30	41	遺物包含層	土師器	台付皿	-	9.5	(3.1)	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 中央部に成形時の穿孔あり
45	30	42	遺物包含層	土師器	杯	-	(8.6)	(1.8)	やや粗	不良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	43	遺物包含層	土師器	皿	-	(6.5)	(1.4)	やや粗	やや良	橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部糸切り
45	30	44	遺物包含層	土師器	皿	-	(6.2)	(0.9)	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデか 回転ナデ	底面回転糸切り
45	30	45	遺物包含層	土師器	皿	-	4.6	(0.9)	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	46	遺物包含層	陶器	播鉢	-	-	4.3	密	良	黄灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ	注口付近か
45	30	47	遺物包含層	瓦質土器	鍋?	-	-	-	やや密	やや良	灰色 灰色	ナデ、ヘラケズリ 回転ナデ	
45	30	48	遺物包含層	瓦質土器	甕	-	-	(4.5)	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	ナデ ナデ	口縁部は肥厚 口縁部外面にヘラ状工具による1条の沈線
45	30	49	表面採集	須恵器	壺	-	-	-	密	良	灰色 灰色	ナデ	外面に櫛描き波状文
45	30	50	表面採集	須恵器	高杯	-	7.8	(6.1)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	破片両側面透かし 一部自然釉
45	30	51	表面採集	須恵器	蓋	-	-	(0.8)	密	良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
45	30	52	表面採集	土師器	皿	(6.9)	(5.2)	1.2	やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
45	30	53	表面採集	青磁	椀	-	(5.5)	(1.4)	密	良	素地: 灰色 釉: 灰オリーブ	底面ヘラケズリ	内面施釉 削り出し高台
45	30	54	表面採集	白磁	椀	(17.2)	-	(2.5)	密	良	素地: 灰白色 釉: 灰白色	ナデ ナデ、ヘラケズリ	
45	30	55	表面採集	白磁	椀	-	-	(3.2)	密	良	素地: 灰白色 釉: 灰白色	ナデ ナデ、ヘラケズリ	
45	30	56	表面採集	土師器	足鍋	-	-	-	やや粗	やや良	にぶい黄褐色	指オサエ	

第7表 出土石製品観察一覧表

挿図	図版	No	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
46	30	57	遺物包含層	石製品	石鎌	1.9	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	凹基無茎式
46	30	58	遺物包含層	石製品	敲石	7.5	6.9	4.5	425.4	安山岩	両面に敲打痕、上端部に敲打痕あり
46	30	59	表面採集	石製品	石包丁	4.1	5.7	0.7	17.7	粘板岩	

第8表 出土鉄製品観察一覧表

挿図	図版	No	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	備考
						長さ	幅	厚さ		
47	30	60	表面採集	鉄製品	鉄鎌	2.1	1.0	0.2	1.3	片刃鎌か
47	30	61	遺物包含層	鉄製品	釘	4.7	0.5	0.3	3.9	

IV 水奥遺跡調査の成果

1 調査の概要

水奥遺跡は妙法寺池の東側、標高約 40m の緩やかな丘陵斜面上に立地する。上下 2 段にわたる水田部分が調査対象地であり、上段部を A 地区、下段部を B 地区と命名し、調査を開始した。試掘調査では A 地区の一部において地表下約 40cm で遺物包含層が確認され、その厚さは約 25cm と報告されており、その直下に遺構面が存在することが明らかになっていた。この試掘成果どおり、A 地区北半部では、表土除去の段階から多くの遺物が出土しており、遺構検出後、柱穴などを中心とした遺構を確認できた。いっぽう A 地区南半部や B 地区は試掘調査のデータを見ても遺構や顕著な遺物包含層の存在は期待できず、表土除去後の遺構検出でも、遺構や遺物の分布密度は希薄であった。

遺構の密集区域は A 地区北半の南北約 15m、東西約 10m の範囲内に収まっており、SD1 ならびに SD3 によって方形区画された内部に掘立柱建物跡や廃棄土坑が配置されている状況が窺える。この密集区の中でも東側では、遺構面の上部に遺物包含層が形成されていたため、表土除去の段階では残しておき、人力によってグリッド単位で掘り下げ、遺物の取り上げを行っている。いっぽう A 地区の南半部に関しては、土坑や柱穴状の遺構が散見されるが、いずれも掘り込みが浅く、遺物も出土していない。

B 地区では柱穴を約 20 個と土坑状の掘り込みを確認しているが、これらの遺構から出土した遺物は極めて少ない。また、柱穴は規則的な配置を示さず、掘立柱建物跡として復元できるものはない。こうした調査成果を踏まえれば、当遺跡は A 地区北半部のみで遺構が密集する特異な集落形態であったことが窺える。

2 遺構

水奥遺跡で確認できた遺構は、掘立柱建物跡が 2 棟、土坑 6 基、溝状遺構 3 条、不明遺構 7 基、柱穴約 80 個であり、そのほとんどが A 地区北半部に集中している。ここでは主なものを取り上げ、解説を行いたい。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡として復元したのは 2 棟である。このほか平面上では建物として認定できそうなものもあるが、各柱穴の深度などが著しく異なり、復元に至らなかったものもある。

SB1 (図 50 図版 31・32) SD3 の南側に隣接する 2 × 4 間の掘立柱建物で、長軸（桁行）約 770cm、短軸（梁行）約 300cm を測り、棟方向 N 85° W。桁行の各柱穴間の距離は、約 180 ~ 200cm で、ほぼ均等であるが、梁行に関しては、中間の柱穴が北側にやや偏った配置となっている。柱穴から出土した遺物から判断して、中世前半期の所産と考えられる。なお、先述したように当遺構は SX1 と重複関係にあり、SX1 のほうが新しい。

SB2 (図 50 図版 31) 1 × 1 間の掘立柱建物で、平面形は 1 辺約 250cm のほぼ正方形。棟方向 N 10° E。建物の北側と西側に目隠し状の塀を想定して建物を復元しているが、確証はない。建物の軸は SB1 とほぼ並行しており、一定の距離を保っていることから、両者は同時並存の建物であったと推定している。柱穴から出土した遺物から判断して、中世前半期の所産と考えられる。

(2) 土坑

土坑は6基を確認している。いずれも掘り込みが浅く、遺物もほとんど出土していないため、個別の遺構図としては図示していないので第49図を参照願いたい。いずれも長軸が100cm前後であり、深さは10cmにも満たないものがほとんどである。出土遺物は土器の小片に限定されるため、詳細な年代を決定し得ないが、おそらくほとんどが中世の所産であると考えられる。

(3) 溝状遺構

溝状遺構としては3条を検出した。このうちSD2は残存状態が悪く、削平などによって底面がわずかに残っているにすぎない。また、SD1・3も調査区外にのびているため、全体の規模や形状については不明であるが、平面的な配置状況から考えれば両者は同一遺構である可能性を指摘できる。すなわち第49図に示すように、ほぼ南北方向に主軸をとるSD1が調査区外で直角に曲がり、東西方向に向きを変えたものがSD3である可能性を考えることができるのである。しかし、とりあえず本報告書では、別遺構として番号を付与しており、ここでは個別に解説を加える。

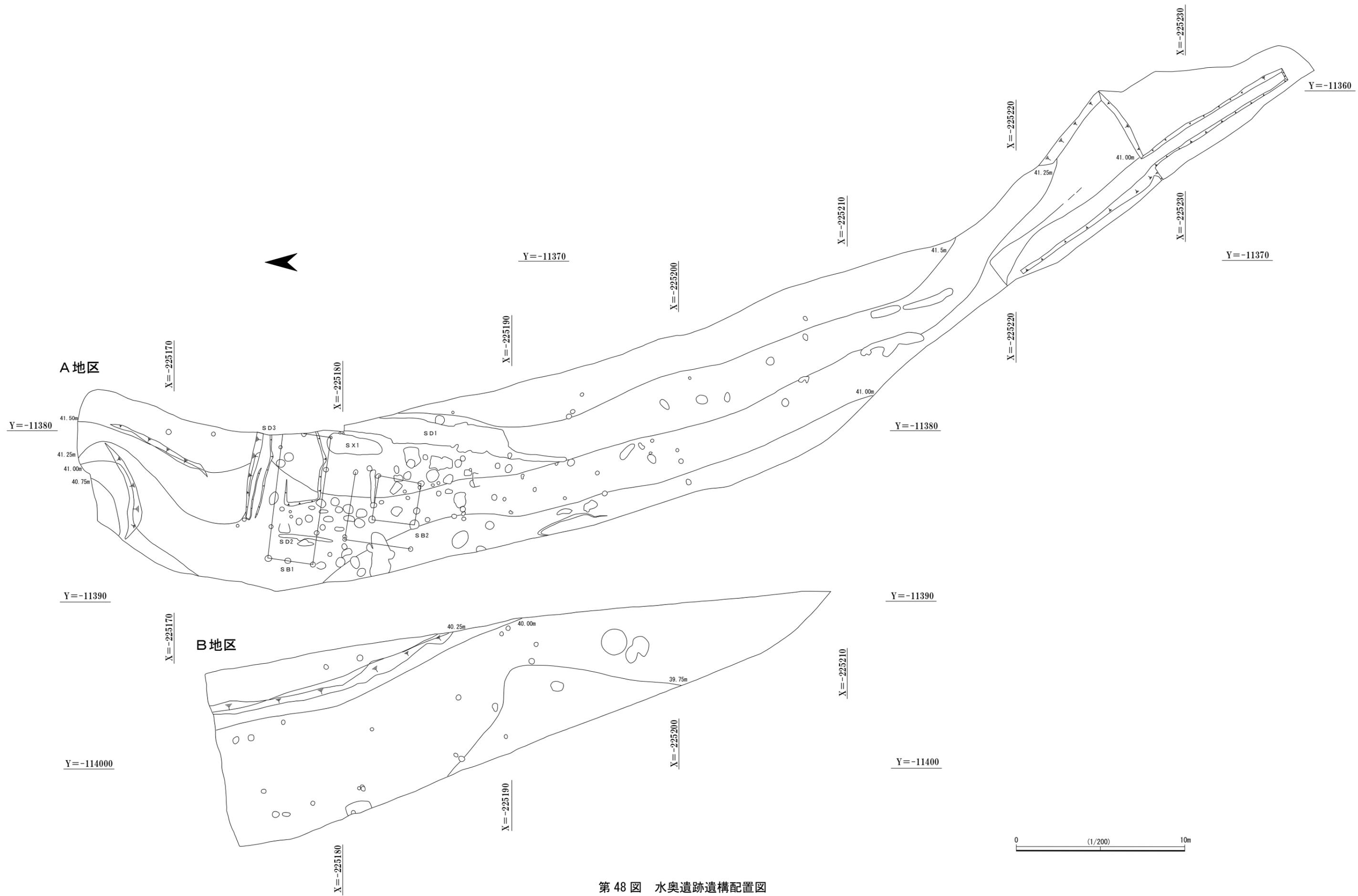
SD1 (第49図 図版31) 残存長約13.2m、最大幅約170cmを測り、南北方向に主軸をとる。当遺構の南端部分は溝幅が急激に狭まっており、深さも浅くなっている。当遺構北部の調査区境では不規則に投棄された石が集中する箇所があり、土層観察ベルト周辺(図49のA・Bポイント付近)では、土師器杯や皿などがまとまって出土している。埋土は単一層であり、埋め戻しが短時間に行われた可能性が窺える。溝の断面は第49図に示すように台形状を呈し底面はほぼ平坦である。出土遺物として、土師器碗、杯、皿のほか砥石などがあり、中世前半期の所産と考えられる。

SD3 (第49図 図版31) 残存長約520cm、最大幅約130cmを測り、東西方向に主軸をとる。この溝は中央部付近で2つに分かれており、この点でSD1とは若干の相違がある。溝の断面形状をみると、北側は肩の残存状況が良いが南側はわずかししか残っていない。出土遺物として土師器杯、皿などがあるが、SD1と比べ出土量は少ない。

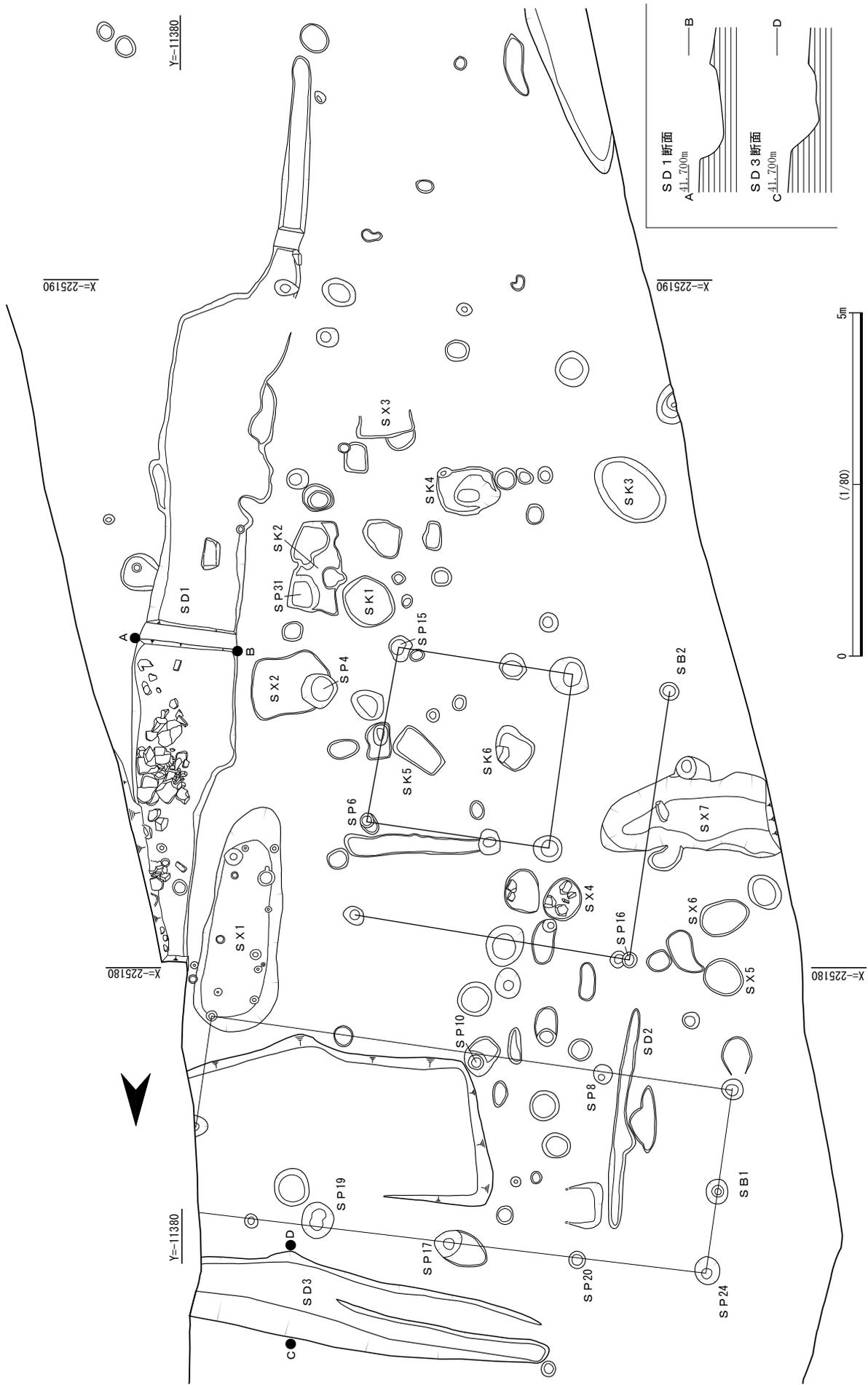
(4) 性格不明遺構

性格不明遺構として7基を認定しているが、このうちSX2～6に関しては、形状や深度などから土坑とも柱穴ともつかないものであり、中には明確に遺構として判断できないものもある。こうした中でSX1は土師器皿や杯の一括廃棄が認められ、本遺跡の中でも特筆すべき遺構である。

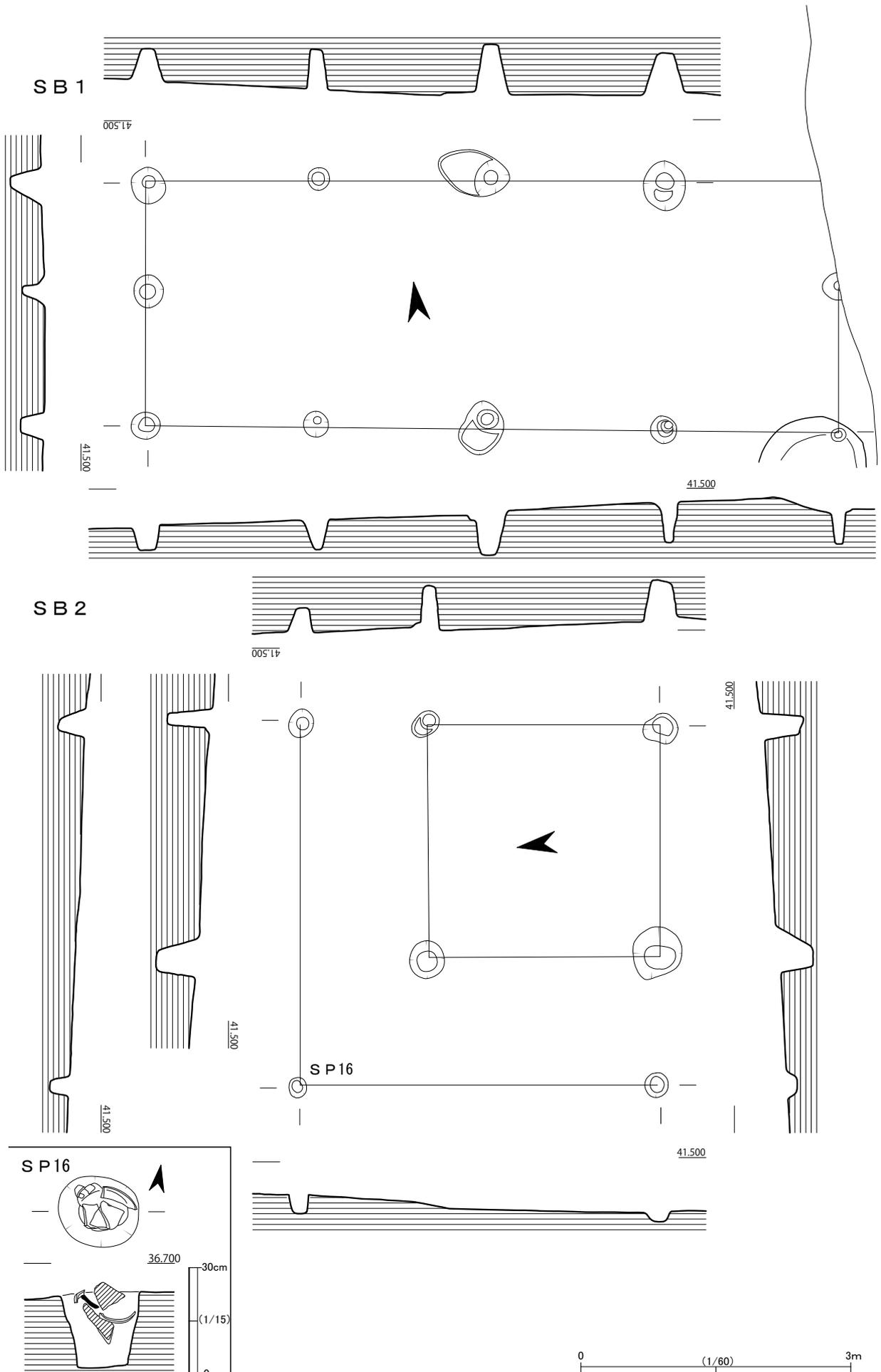
SX1 (第51図 図版32～34) 性格不明遺構としているものであるが、平面形状は長軸約330cm、短軸約120cmを測る長楕円形の土坑である。表土除去の段階から、当遺構の付近では青磁や土師器杯などが確認されていたが、掘り下げを行った結果、中世の土師器杯や皿が大量に投棄された状況が明らかになった。こうした土器群は深さ15～20cm程度の埋土中にまんべんなく分布しており、床面直上出土のものは少ない。この埋土は基本的に暗褐色系の粘質土であり、分層することはできない。大量の土師器皿や杯のほか鉄製刀子なども出土していることから、何らかの儀礼行為後、一括廃棄を行った土坑であると考えられる。出土陶磁器の年代から、おおよそ13世紀代に比定される遺構である。なお、当遺構はSB1の構成柱穴を切るかたちで掘り込まれており、SB1→SX1という先後関係を想定することができる。なお、当遺構の埋土から採取した炭化物をAMS分析したところ、暦年較正年代で11世紀～12世紀の年代が得られている。この年代値の評価については後述したい。



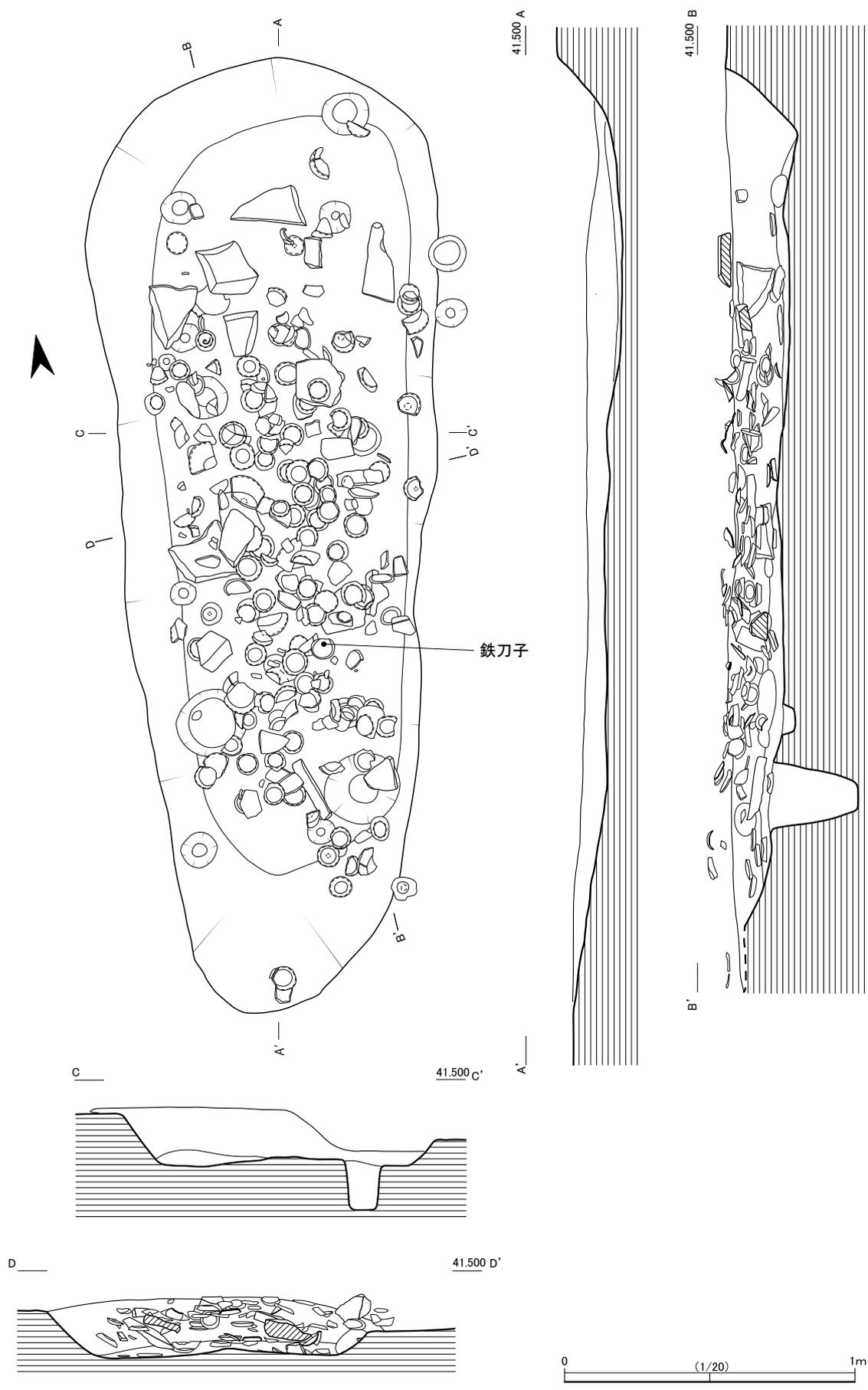
第 48 図 水奥遺跡遺構配置図



第 49 图 水奥遺跡 A 地区遺構密集区拡大図



第 50 図 SB 1・2 実測図



第 51 図 SX 1 実測図

3 遺物

水奥遺跡の出土遺物は、縄文時代の石器以外は中世のものに限定される。とくにS X 1からは大量の土師器の皿、杯、椀が出土し、青磁、白磁、刀子等が相伴しており、特筆すべき成果である。

(1) 土器 (第 52 ~ 56 図 図版 35 ~ 41)

1 ~ 4 は S B 1 から出土した。1 ~ 3 は土師器、4 は瓦質土器である。1 の皿は、内面中央がへそ状に突出し、体部は内湾して立ち上がる。2 は椀。貼付け高台で、高台の断面は三角形となる。3 は台付皿である。底部切離し法は回転糸切り。4 は鉢で、口縁部は肥厚する。

5 ~ 8 は S B 2 出土の土師器である。5 ~ 7 は皿で、底部切離し法は回転ヘラ切りである。7 は明赤褐色を呈する。8 は杯で、底部切離し法は回転糸切り、ロクロ回転は右である。

9 ~ 19 は S D 1 出土の土師器である。9 ~ 12 は皿。口径は 7.5 ~ 9.2cm で、底部は全て回転ヘラ切りの痕がみられる。12 はにぶい橙色を呈し、雑なヘラ切りのため底部が高台状に残る。13 は台付皿で、底部には回転糸切り痕が残る。体部外面には台部と皿部の継ぎ目が残る。14 ~ 18 は杯である。底部切離し法は全て回転糸切りである。14・16 の体部は直線的に立ち上がり、15・17 はわずかに内湾する。16 の器壁は厚めである。19 は椀で、色調は灰白色を呈す。貼付け高台で、高台の断面は台形状となる。

20 は S D 3 から出土した、白磁の椀である。口唇部は面取りされる。外面下部の底部付近は釉剥ぎされる。

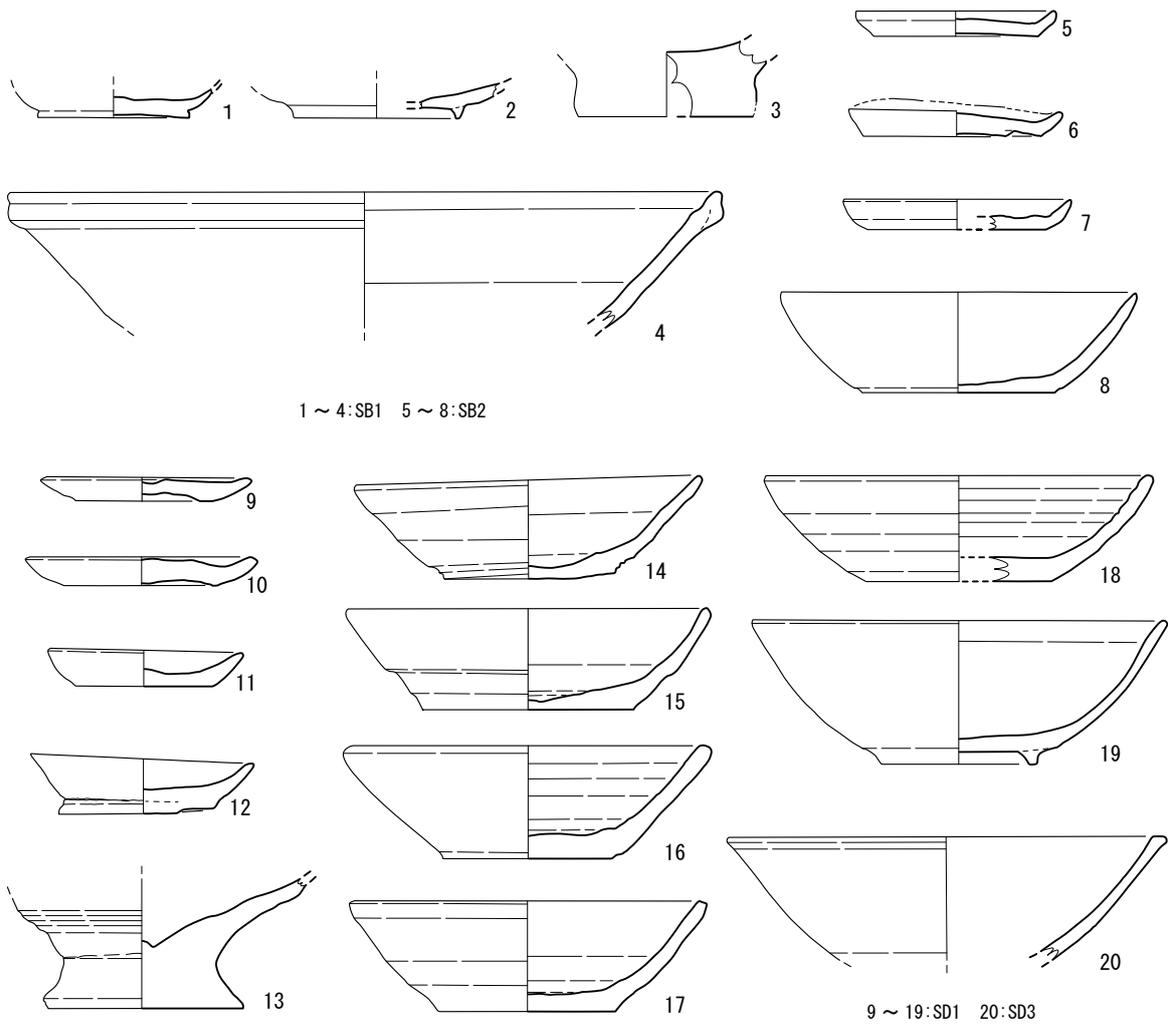
21 ~ 23 は S P 4 から出土した。21 は土師器の皿で、底部には回転ヘラ切り痕が残る。22 は土師器の杯である。底部には回転ヘラ切りの痕が残り、色調は橙色を呈す。23 は陶器の壺である。図には現れていないが、外面口唇部の直下には 2 条の沈線が施されている。

24 ~ 26 は S P 31 から出土した。24 は土師器の杯で底部切離し法は回転糸切りである。25 は白磁の椀である。26 は瓦質土器の鉢である。口唇部は肥厚する。

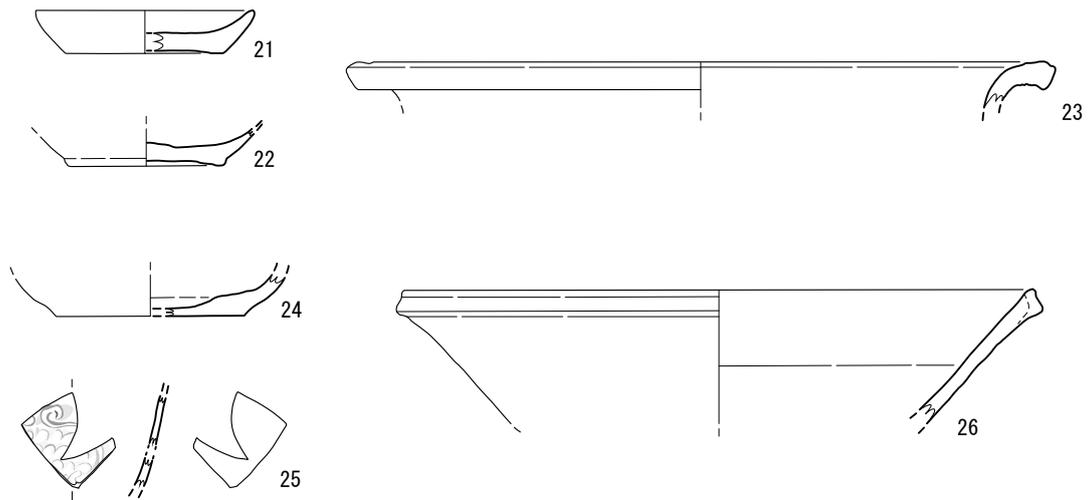
27 ~ 137 は S X 1 から出土した。27 ~ 110 は土師器の皿である。口径 7.4cm ~ 9.5cm で、色調はにぶい橙色か、にぶい黄橙色を呈するものが多い。底部切離し法は全て回転ヘラ切りで、ロクロの回転方向は右である。外形は直線的に立ち上がるものと、わずかに内湾しながら立ち上がるものがある。63・65 は口縁がわずかに外反する。34・40・71・87 は内面中央がへそ状に突出する。50 は外面の底部中央に円錐形の穿孔を有する。61・68・79 は内外面に煤が付着している。69 は口縁部の一部に、71 は口縁全体に赤色顔料が付着している。

111 ~ 126 は土師器の杯である。口径 12.4 cm ~ 15.4cm で、色調はにぶい橙色か、にぶい黄橙色である。底部切離し法は全て回転糸切りであり、ロクロの回転方向は判明するものは全て右である。体部はやや内湾しながら立ち上がるものが多い。124 は浅黄橙色を呈し、外面の底部付近に指頭圧痕を残す。体部は下方で段を作り、そこから直線的に立ち上がる。127 は台付皿である。底部には回転糸切り痕が残る。128 は土師器の鉢である。外面の口縁下にハケメを施している。胎土は粗く 2 ~ 3 mm の石英を多く含んでいる。

129 ~ 132 は土師器の椀である。底部切離し法は全て回転糸切りで、その後ナデを施す。貼付け高台で、色調は灰白色を呈する。129 は高台の断面は三角形となる。見込みの中央部は円形に赤色顔料

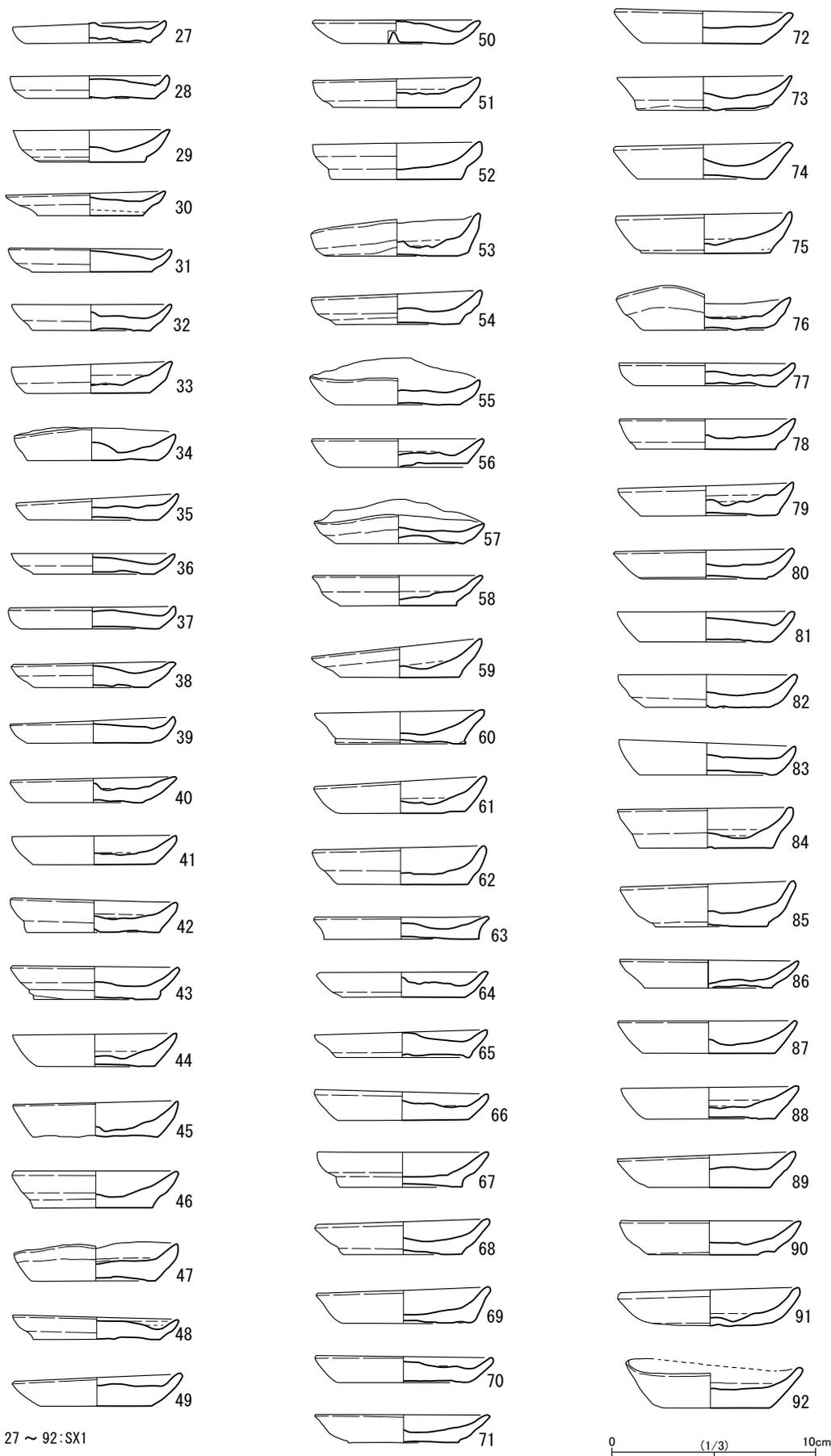


21 ~ 23: SP4 24 ~ 26: SP31



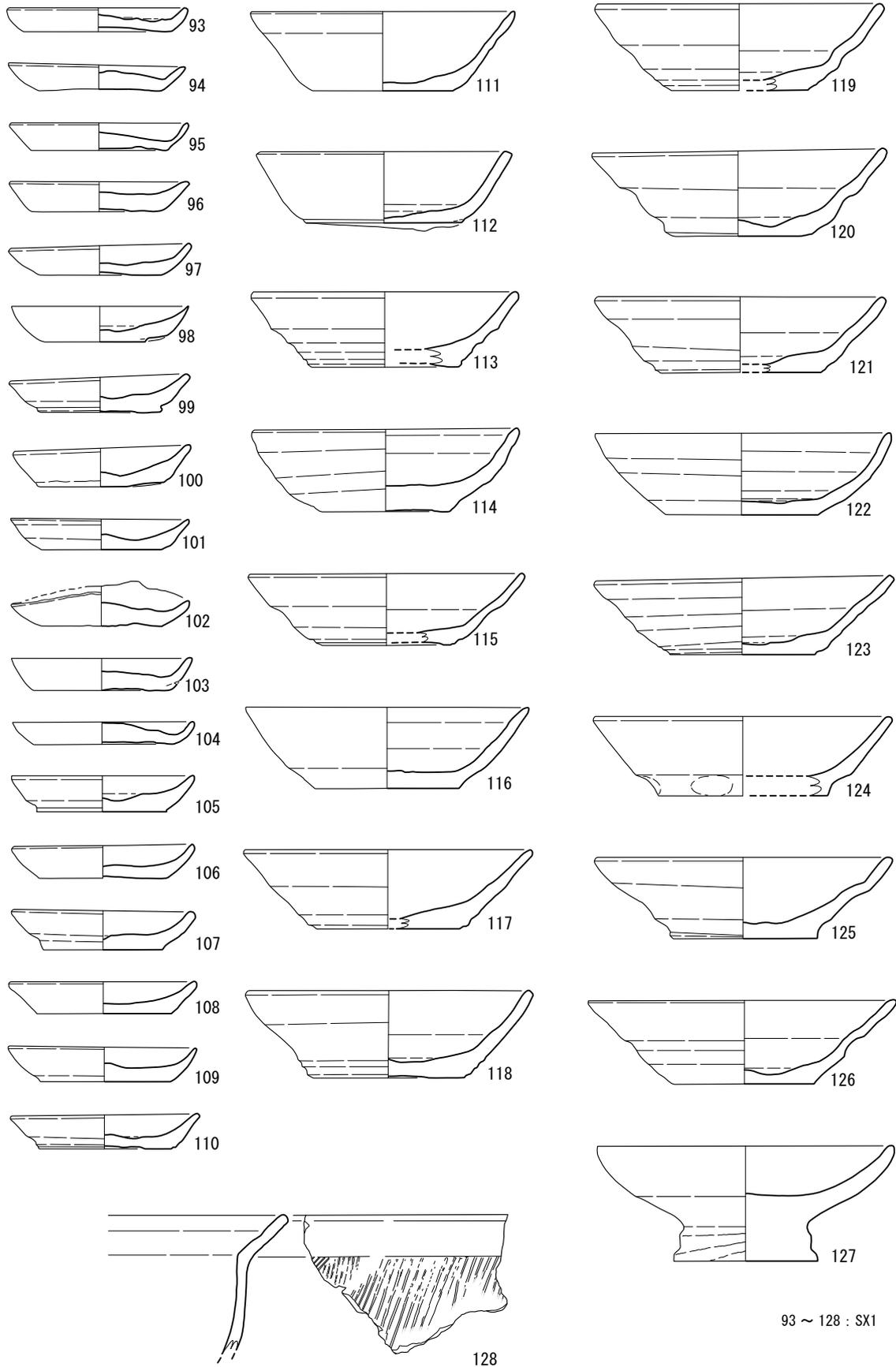
0 (1/3) 10cm

第 52 図 出土遺物実測図 (1)



27 ~ 92: SX1

第 53 図 出土遺物実測図 (2)



第 54 図 出土遺物実測図 (3)

が付着する。130・131は体部が内湾して立ち上がり、やや外反しながら口唇に至る。132は体部が内湾しながら立ち上がる。高台の断面は台形状になる。見込みの中央部は円形のライン状に赤色顔料が付着し、その内部は黒ずんでいる。

133～136は龍泉窯系の青磁の椀である。133・134は体部が直線的に立ち上がる。133の口唇部はやや厚めとなる。削り出し高台をもつが削りは浅く、底部は肉厚となる。高台は断面四角形で、高台内部と畳付は釉剥ぎされる。133は内面に片切り彫りによる草花文と櫛目文を施し、灰オリーブ色の釉が薄くかけられる。134は内面を二又片刀により分割し飛雲文を施す。明オリーブ灰色の釉を薄くかけるが、発色は悪くムラがある。外底面には墨書を施している。135は内面に片切り彫りで文様を施す。オリーブ灰色の釉をやや厚めにかける。136は浅めの削り出し高台に厚い底部を持ち、内面には片切り彫り文様を施す。灰色の釉を薄くかける。137は瓦質土器の鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は肥厚する。

138・140は包含層掘り込み時に出土した。138は土師器の鍋である。内外面に粗いハケ目を施し、口唇部には指頭圧痕が残る。口縁部はゆるやかに外反する。140は同安窯系の青磁の皿である。見込み部分には櫛描文を施し、灰色の釉を薄くかける。底部外面は釉剥ぎされる。これらの遺物は本来S X 1に伴うものであった可能性が高い。139は遺構検出時、141は表土除去の際に出土した。139は白磁の小椀である。口縁端部から口縁内面にかけて釉を掻きとり、口禿げとしている。体部は内湾した後、ゆるやかに外反して口縁にいたる。141は龍泉窯系の青磁椀である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁は丸く収める。内面は二又片刀により分割し、飛雲文を施す。オリーブ灰色の釉が薄くかけられる。

(2) 石製品 (第56図 図版42)

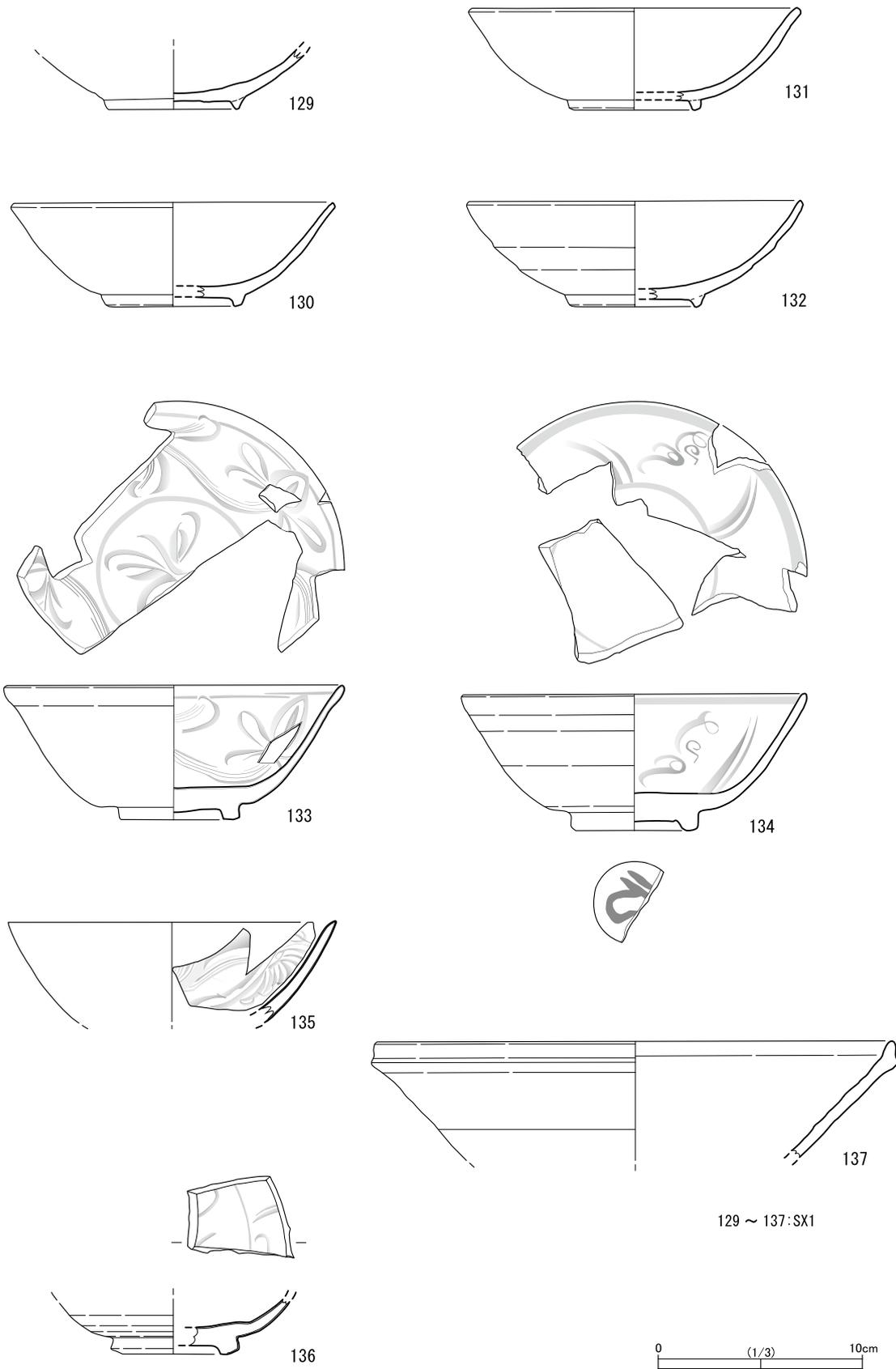
142はS X 1から出土した頁岩製の硯で砥石として転用しているものと考えられる。2面を使用しており、裏面の楕円形部分がいわゆる「池」であろうか。重量は70.3gである。

144・145はS D 1から出土した。144は頁岩製の砥石で、4面を使用している。長さ16.8cm、幅7.2cm、重量720gである。145は安山岩製の石核である。腹面と側面に自然面が残存する。背面には幅広の横長剥片を剥出した痕跡が残る。作業面・打面を入れ替えながら剥片剥離が行われている。長さ6.7cm、幅7.6cm、厚さ3.5cm、重量は188gである。

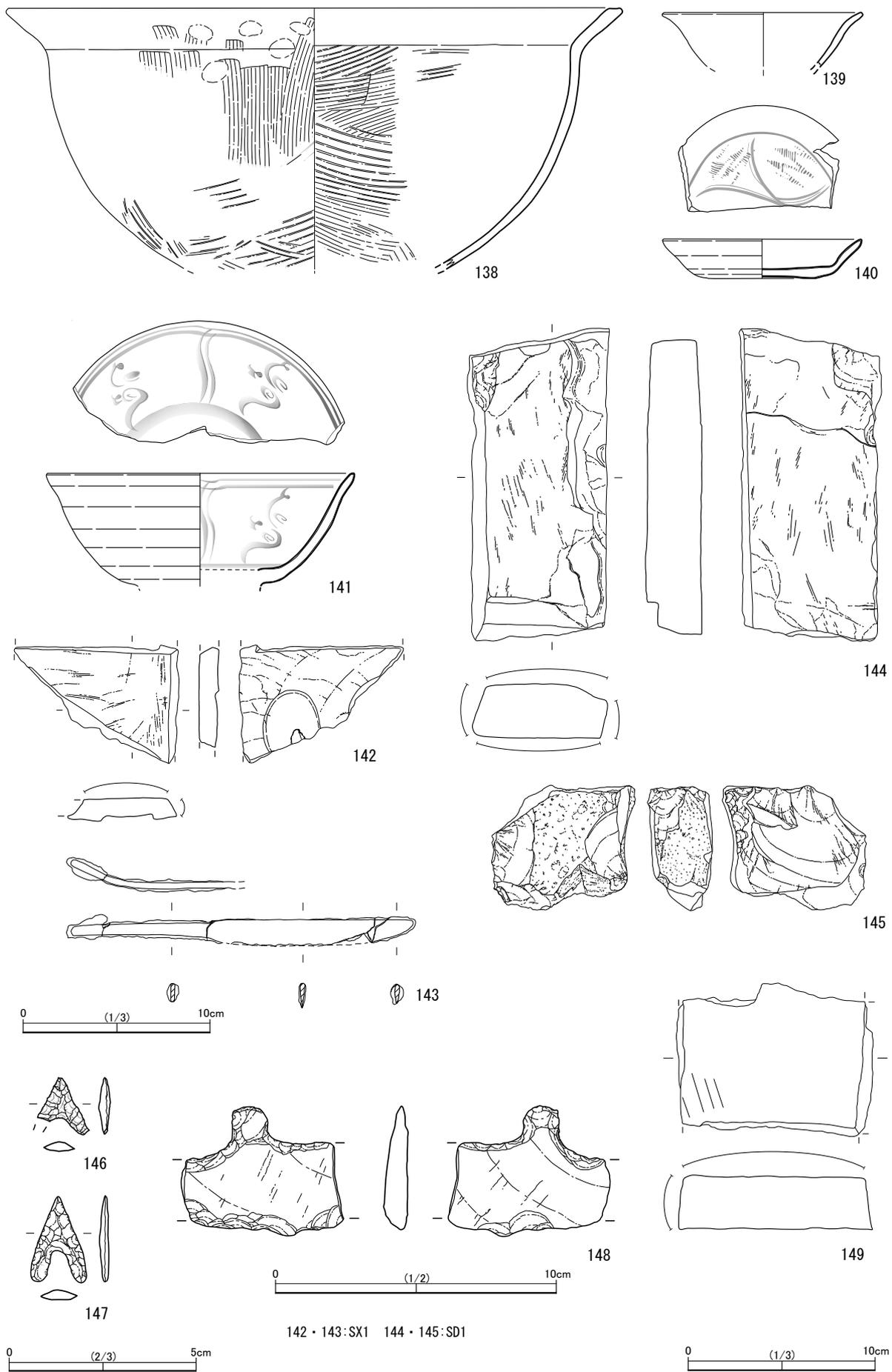
146・147は遺物包含層から出土した凹基無茎式の石鏃である。146は姫島産黒曜石製で、長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ3mm、重量は0.3gを計る。147は安山岩製である。長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ3mm、重量0.6gをはかる。抉りが深く、縄文早期の所産と考えられる。148は安山岩製の石匙である。長さ4.7cm、残存部の幅が5.6cm、重量23.8g。149は安山岩製の砥石である。残存部は長さ8.2cm、幅10.3cm、重量410gである。

(3) 金属製品 (第56図 図版42)

143はS X 1から出土した鉄製の刀子である。S X 1のほぼ中央から完形で出土しており、長さ18.6cm、幅1.4cmで重量は14.9gを計る。茎部は7.6cm。両関の刀子で、刃部の関はなだらかになる。茎の先端部は湾曲している。



第 55 图 出土遺物実測図 (4)



第 56 図 出土遺物実測図 (5)

第9表 出土土器観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
52	35	1	SP17 (SB1)	土師器	皿	-	(1.1)	(6.0)	密	やや良	にぶい 橙色 にぶい 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、内面中央部はへそ 状に突出、ロクロ回転右、くさり 礫含む
52	35	2	SP19 (SB1)	土師器	椀	-	(1.4)	(6.6)	密	やや良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	貼付け高台 見込み部分中央紅変
52	35	3	SP20 (SB1)	土師器	台付皿	-	(3.0)	(6.8)	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
52	35	4	SP11 (SB1)	瓦質土器	鉢	(28.0)	(5.4)	-	密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	口唇部肥厚
52	35	5	SP6 (SB2)	土師器	皿	7.8	1.0	6.4	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫含む
52	35	6	SP6 (SB2)	土師器	皿	8.5	1.5	7.0	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ヘラ切り雑で段差 生じる、ロクロ回転右、壺形、くさり 礫含む
52	35	7	SP16 (SB2)	土師器	皿	(9.0)	1.2	(7.0)	密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転方向不明
52	35	8	SP16 (SB2)	土師器	杯	(14.0)	4.0	(7.6)	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ、口縁部ナデ 回転ナデ、口縁部ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、くさ り礫含む
52	35	9	SD1	土師器	皿	8.3	0.9	5.4	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転方向不 明、くさり礫含む
52	35	10	SD1	土師器	皿	9.2	1.1	6.0	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫含む
52	35	11	SD1	土師器	皿	7.5	1.5	5.4	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫含む
52	35	12	SD1	土師器	皿	8.8	2.4	6.1	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ヘラ切り雑のため 高台状に底部が残る、ロクロ回転右
52	35	13	SD1	土師器	台付皿	-	(5.1)	8.0	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転方向不明、 雲母を多量に含む
52	35	14	SD1	土師器	杯	13.8	4.1	6.7	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
52	35	15	SD1	土師器	杯	(14.4)	4.0	8.4	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
52	35	16	SD1	土師器	杯	15.4	4.5	6.7	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ後ナデか	底部回転糸切り ロクロ回転右
52	35	17	SD1	土師器	杯	(14.2)	4.4	7.0	密	やや良	にぶい黄 褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
52	35	18	SD1	土師器	杯	(15.4)	4.2	(7.2)	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転方向不明、 くさり礫含む
52	35	19	SD1	土師器	椀	(16.4)	5.7	6.2	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り後ナデ、貼付け高台、 ロクロ回転方向不明
52	35	20	SD3	白磁	椀	(17.4)	(4.9)	-	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	口唇面取り 底部軸ハギ
52	36	21	SP4	土師器	皿	(8.6)	1.7	(6.2)	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転方向不 明、くさり礫を少量含む
52	36	22	SP4	土師器	杯	-	(1.3)	6.4	密	やや良	橙色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫含む
52	36	23	SP4	陶器	壺	(28.0)	(1.8)	-	密	良	灰色 灰 (口唇：橙) 色	回転ナデ 回転ナデ	外面口唇部下に2条沈線
52	36	24	SP31	土師器	杯	-	(1.6)	(7.4)	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
52	36	25	SP31	磁器	椀	-	-	-	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色		唐草紋様?
52	36	26	SP31	瓦質土器	鉢	(24.8)	(5.3)	-	密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	口唇部肥厚
53	36	27	SX1	土師器	皿	7.4	1.1	6.1	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	28	SX1	土師器	皿	7.7	1.1	6.3	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む
53	36	29	SX1	土師器	皿	7.7	1.6	5.4	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	30	SX1	土師器	皿	7.8	1.1	5.2	密	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、底部にヘラ切りの 切り込み痕あり、ロクロ回転右
53	36	31	SX1	土師器	皿	7.8	1.2	5.8	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	32	SX1	土師器	皿	7.8	1.3	5.8	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を少量含む
53	36	33	SX1	土師器	皿	7.8	1.6	6.1	密	やや良	にぶい黄 橙色 にぶい黄 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	34	SX1	土師器	皿	7.9	1.6	6.4	密	やや良	灰黄色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ、内面中央部 はへそ状に突出、壺形、ロクロ回転右
53	36	35	SX1	土師器	皿	8.0	1.0	6.3	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	36	SX1	土師器	皿	8.0	1.0	6.0	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	37	SX1	土師器	皿	8.0	1.1	6.8	密	やや良	にぶい黄 褐色 にぶい黄 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	38	SX1	土師器	皿	8.0	1.2	5.6	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む
53	36	39	SX1	土師器	皿	8.0	1.3	6.1	密	やや良	にぶい黄 褐色 にぶい黄 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	40	SX1	土師器	皿	8.0	1.3	5.6	密	やや良	褐灰色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、内面中央部はへそ 状に突出、ロクロ回転右
53	36	41	SX1	土師器	皿	8.0	1.4	6.0	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	42	SX1	土師器	皿	8.0	1.6	6.5	密	やや良	にぶい黄 褐色 にぶい黄 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	43	SX1	土師器	皿	8.0	1.6	6.1	密	やや良	にぶい黄 褐色 にぶい黄 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	44	SX1	土師器	皿	8.0	1.6	5.8	密	やや良	にぶい橙 色 にぶい橙 色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を少量含む

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
53	36	45	SX1	土師器	皿	8.0	1.7	6.0	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	46	SX1	土師器	皿	8.0	1.8	5.9	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	47	SX1	土師器	皿	8.0	1.9	6.0	密	やや良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ヘラ切り痕顕著、 ロクロ回転右、歪形
53	36	48	SX1	土師器	皿	8.1	1.1	6.2	粗	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
53	36	49	SX1	土師器	皿	8.1	1.6	5.4	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	36	50	SX1	土師器	皿	8.2	1.2	5.5	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、底面中央に円錐形 の穿孔、ロクロ回転右、くさり礫を含 む
53	37	51	SX1	土師器	皿	8.2	1.4	6.2	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	52	SX1	土師器	皿	8.2	1.9	6.4	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	53	SX1	土師器	皿	8.2	2.1	7.0	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右、歪形
53	37	54	SX1	土師器	皿	8.2	2.2	6.0	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	55	SX1	土師器	皿	8.3	1.3	6.2	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右、歪形、くさり礫を少量 含む
53	37	56	SX1	土師器	皿	8.3	1.4	6.3	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	57	SX1	土師器	皿	8.3	1.4	6.2	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右、歪形
53	37	58	SX1	土師器	皿	8.3	1.5	5.7	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	59	SX1	土師器	皿	8.3	1.5	5.8	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を少量含む
53	37	60	SX1	土師器	皿	8.3	1.7	6.3	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、黒 斑部分有り、くさり礫を含む
53	37	61	SX1	土師器	皿	8.3	1.8	6.2	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、内 外面に煤附着、くさり礫を含む
53	37	62	SX1	土師器	皿	8.3	1.9	6.4	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む
53	37	63	SX1	土師器	皿	8.4	1.1	7.6	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、口唇部は短く立ち 上がる、ロクロ回転右、くさり礫を含 む
53	37	64	SX1	土師器	皿	8.4	1.3	5.9	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、内面中央部はへそ 状に突出、ロクロ回転右
53	37	65	SX1	土師器	皿	8.4	1.4	6.5	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	66	SX1	土師器	皿	8.4	1.5	6.4	密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	67	SX1	土師器	皿	8.4	1.7	6.0	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む
53	37	68	SX1	土師器	皿	8.4	1.7	5.8	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、内 外面に煤附着
53	37	69	SX1	土師器	皿	8.4	1.8	6.3	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	70	SX1	土師器	皿	8.5	1.3	6.4	密	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	71	SX1	土師器	皿	8.5	1.4	5.4	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、内面中央部はへそ 状に突出、ロクロ回転右、口縁内面朱 色
53	37	72	SX1	土師器	皿	8.5	1.7	5.8	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	73	SX1	土師器	皿	8.5	1.7	6.6	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	74	SX1	土師器	皿	8.5	1.8	6.3	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、 ロクロ回転右
53	37	75	SX1	土師器	皿	8.5	2.0	6.3	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	76	SX1	土師器	皿	8.5	2.2	6.0	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右、歪形
53	37	77	SX1	土師器	皿	8.6	1.1	6.9	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	78	SX1	土師器	皿	8.6	1.4	6.8	密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	37	79	SX1	土師器	皿	8.6	1.5	6.6	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、内 面ナデ跡顕著、内外面に煤附着
53	37	80	SX1	土師器	皿	8.6	1.5	6.1	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	81	SX1	土師器	皿	8.6	1.5	6.4	粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	82	SX1	土師器	皿	8.6	1.6	6.0	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	83	SX1	土師器	皿	8.6	1.7	6.7	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	84	SX1	土師器	皿	8.6	2.0	6.5	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	85	SX1	土師器	皿	8.6	2.2	5.5	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	86	SX1	土師器	皿	8.7	1.4	6.2	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、器壁が薄い、ロク ロ回転右、くさり礫を含む
53	38	87	SX1	土師器	皿	8.7	1.6	6.4	密	やや良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、内面中央部はへそ 状に突出、ロクロ回転右
53	38	88	SX1	土師器	皿	8.7	1.6	6.3	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右

挿 図 No.	図 版 No.	出 土 場 所	種 別	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調 (内 外)	主 な 調 整 (内 外)	備 考	
					口 径 (復 元 値)	器 高 (残 存 値)	底 径 (復 元 値)						
53	38	89	SX1	土師器	皿	8.7	1.6	6.0	密	やや良	にぶい 橙色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	90	SX1	土師器	皿	8.7	1.7	6.2	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
53	38	91	SX1	土師器	皿	8.7	1.9	6.0	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ヘラ切り痕顕著、 ロクロ回転右
53	38	92	SX1	土師器	皿	8.7	2.4	5.8	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右か、 内面に煤付着
54	38	93	SX1	土師器	皿	8.8	1.2	7.4	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	94	SX1	土師器	皿	8.8	1.3	6.1	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を少量含む
54	38	95	SX1	土師器	皿	8.8	1.4	6.8	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む
54	38	96	SX1	土師器	皿	8.8	1.5	6.4	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	97	SX1	土師器	皿	8.8	1.6	6.0	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	98	SX1	土師器	皿	(8.8)	1.8	6.1	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、底部に段差有り ロクロ回転右か、赤変部分有り
54	38	99	SX1	土師器	皿	8.8	1.9	6.0	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	100	SX1	土師器	皿	8.8	1.9	6.4	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	101	SX1	土師器	皿	8.9	1.6	6.0	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	102	SX1	土師器	皿	8.9	2.0	6.0	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り 歪形
54	38	103	SX1	土師器	皿	9.0	1.6	6.8	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ヘラ切りによるキ ズ有り、ロクロ回転右、くさり礫を含 む
54	38	104	SX1	土師器	皿	9.1	1.1	6.9	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	105	SX1	土師器	皿	9.1	1.8	6.5	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	106	SX1	土師器	皿	9.2	1.7	6.4	密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	107	SX1	土師器	皿	9.2	2.0	6.0	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、内 面中央部に亀裂穿孔有す
54	38	108	SX1	土師器	皿	9.4	1.6	6.8	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	38	109	SX1	土師器	皿	9.4	1.7	6.5	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転ヘラ切り、ロクロ回転右、く さり礫を含む、一部に煤付着
54	38	110	SX1	土師器	皿	9.5	1.8	6.6	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り ロクロ回転右
54	39	111	SX1	土師器	杯	(12.4)	4.0	6.8	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 金雲母を多量に含む
54	39	112	SX1	土師器	杯	(12.8)	3.6	(7.8)	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ、口唇部面取り	底部回転糸切り、ロクロ回転右、歪形、 5～6mmの石英粒を含む
54	39	113	SX1	土師器	杯	(13.2)	3.8	(7.4)	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転方向不明
54	39	114	SX1	土師器	杯	13.2	4.2	6.4	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	115	SX1	土師器	杯	(13.8)	3.6	(6.4)	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	116	SX1	土師器	杯	(14.2)	4.1	7.2	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、くさ り礫を少量含む、一部黒斑有す
54	39	117	SX1	土師器	杯	(14.4)	4.0	(7.2)	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、くさ り礫を含む、一部黒斑有す
54	39	118	SX1	土師器	杯	14.4	4.4	7.6	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	119	SX1	土師器	杯	(14.6)	4.4	(6.8)	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	120	SX1	土師器	杯	14.7	4.4	7.4	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	121	SX1	土師器	杯	14.8	3.8	8.4	密	やや良	にぶい 黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	-	122	SX1	土師器	杯	14.8	4.1	(7.6)	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	39	123	SX1	土師器	杯	15.0	4.0	7.2	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	40	124	SX1	土師器	杯	(15.0)	4.0	(8.4)	密	やや良	浅黄色 淡黄色	回転ナデ 回転ナデ、下位横ナデ	底部回転糸切り、外面に指頭圧痕残る、 ロクロ回転方向不明、外面一部黒変
54	40	125	SX1	土師器	杯	15.0	4.1	6.7	密	やや良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、口唇部褐色を呈す、 ロクロ回転右
54	40	126	SX1	土師器	杯	15.4	4.2	3.5	密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転右
54	40	127	SX1	土師器	台付皿	(14.8)	5.8	7.2	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、くさ り礫を含む
54	40	128	SX1	土師器	鉢	-	(7.0)	-	粗	やや不 良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	ナ デ、口縁下はハケ目	くさり礫を含む 外面に煤付着
55	40	129	SX1	土師器	椀	-	(2.9)	6.4	密	やや良	灰白色 淡褐色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り後ナデ、貼付け高台、 見込み部分中央紅変、くさり礫含む
55	40	130	SX1	土師器	椀	(15.8)	5.1	(6.6)	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、口唇面取り	底部回転糸切り後ナデ、貼付け高台、 体部内湾後やや外反して口唇に至る
55	40	131	SX1	土師器	椀	(16.2)	5.0	(6.4)	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、口唇面取り	底部回転糸切り後ナデ、貼付け高台、 体部内湾後やや外反して口唇に至る
55	40	132	SX1	土師器	椀	(16.4)	5.2	(6.4)	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、口唇面取り	底部回転糸切り後ナデ、貼付け高台、 見込み部分中央は円形に紅変
55	40	133	SX1	青磁	椀	(16.6)	6.6	5.8	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	内面は片切り彫りによる草花文・櫛目 文を施す、削り出し高台

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
55	41	134	SX1	青磁	椀	(16.8)	(6.7)	(5.8)	密	良	胎土：灰白色 釉：明オリープ灰	回転ナデ 回転ナデ	内面は二又片刀により分割し飛雲文を 施す、削り出し高台、底面に墨書
55	40	135	SX1	青磁	椀	(16.0)	(4.9)	-	密	良	胎土：灰色 釉：オリープ灰	回転ナデ 回転ナデ	内面に片切り彫り文様を施す
55	40	136	SX1	青磁	椀	-	(2.6)	(5.4)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	内面に片切り彫り文様を施す 削り出し高台
55	41	137	SX1	瓦質土器	鉢	(25.2)	(5.7)	-	密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
56	41	138	B-2	土師器	鍋	(32.6)	(14.0)	-	密	やや良	浅黄橙色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	口縁部下に指頭圧痕
56	41	139	遺構 検出	白磁	小椀	(10.8)	(2.9)	-	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	口髣げ椀
56	41	140	C-2	青磁	皿	(10.6)	2.1	(5.8)	密	良	胎土 灰白色 釉 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	同安窰系、見込み部分に櫛描文を施す 底面釉ハキ
56	41	141	表土 除去	青磁	椀	(16.2)	(5.1)	-	密	良	胎土：灰白色 釉：オリープ灰色	回転ナデ 回転ナデ	龍泉窰系、内面は二又片刀により分割 し飛雲文を施す、口縁部は丸く収める

V 西河内遺跡調査の成果

1 調査の概要と成果

西河内遺跡はA・Bの2地区が調査区として設定されており、前者は丘陵上、後者は谷状地形の一部に立地している。両地区ともに、明確な遺構は確認されておらず、遺物包含層の掘削が調査の主体となった。両地区の詳細について、以下解説を行う。

(1) 西河内A地区

西河内A地区は、標高約30mの丘陵上に位置し、今回の調査範囲は長さ95m、幅3mのトレンチ状に設定されている(第57図)。このように調査範囲が限定されているため、遺構や遺物包含層の確認には自ずと限界があった。特に遺物包含層に関しては、当初の予想をはるかに超えた深度であったため、安全対策上、完掘できていない箇所もある。

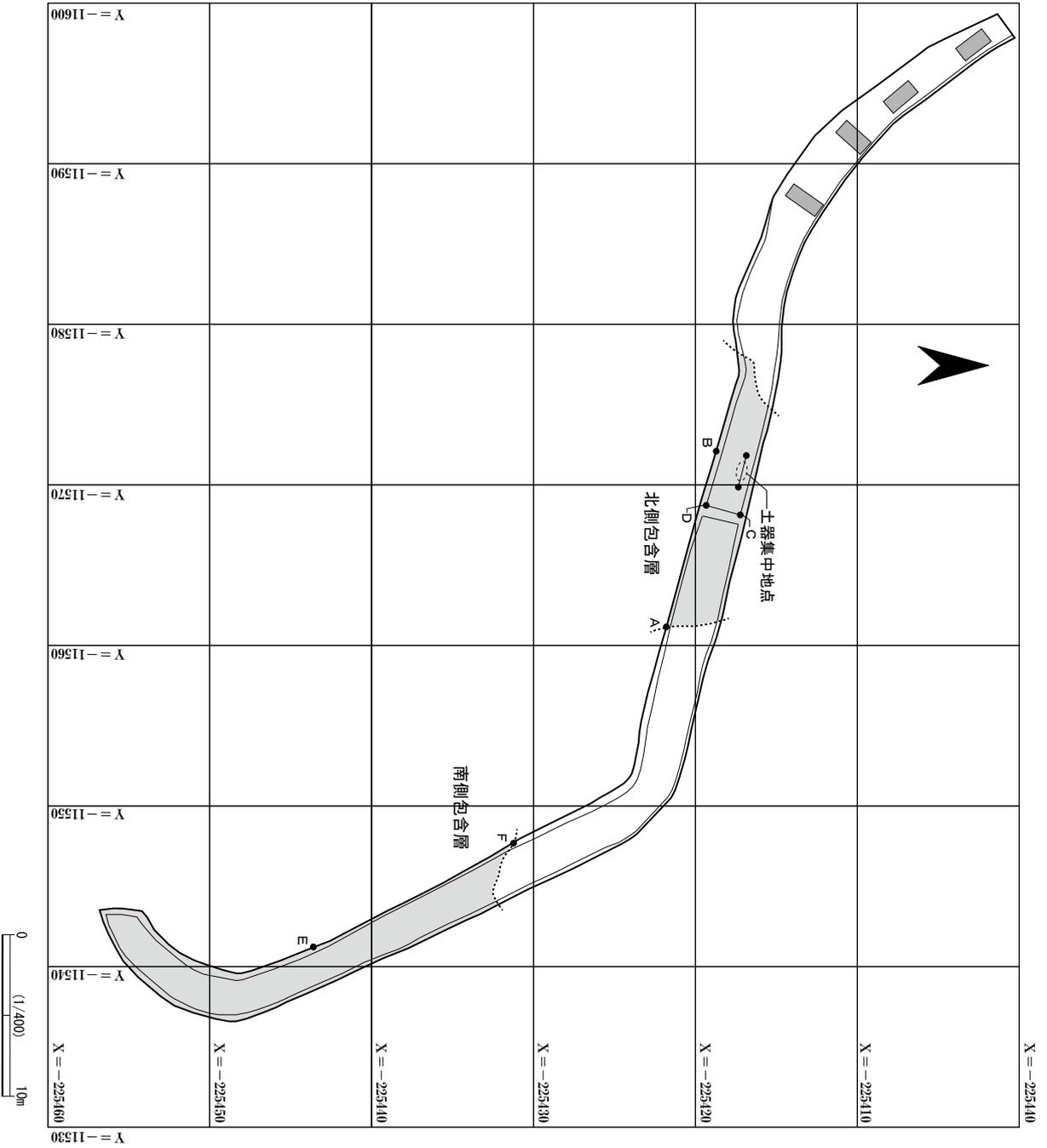
試掘調査では、地表下約120cm～150cm下において遺物包含層を確認しており、この成果をもとに重機を用いた表土除去作業を行った。その結果、おおよそ2箇所の遺物密集範囲を確認したため、それぞれに北側包含層、南側包含層という名称を付与し、調査を進めることにした。また、調査区の最北端部では表土除去の段階で、遺物は検出されなかったが、合計4本のトレンチを設定し、遺構や遺物包含層の有無を確認した。その結果、数点の遺物を検出したものの、明確な遺物包含層は形成されておらず、現地形と同様、急激な崖落ち状を呈していることが判明した。

北側包含層については、厚さが地山面から約100cm程度あり、基本的には暗褐色系の粘質土が堆積している。調査の手順としては、まず壁面にサブトレンチを設定し、層位の把握を行い、その結果を踏まえて大きく4つの土層ごとに遺物の取り上げを行い、それぞれに遺物包含層1～4という名称を付与している(第60図)。出土遺物は若干の須恵器等を除き、弥生土器にほぼ限定され、時期的には後期前葉頃のもものが中心である。包含層のうち、最も遺物の出土量が多いのは1層と2層の境界付近に堆積した、遺物包含層1bとした土層であり、集中的な土器廃棄を確認することができる(第59図)。おそらく、谷状の地形に沿った自然堆積が進行し、窪み状になった箇所に土器が一括廃棄されたものとみられる。なお、この1b層の土を一部サンプリングし、フローテーションによる植物残滓等の検出を試みたが、種子等の抽出には至らなかった。

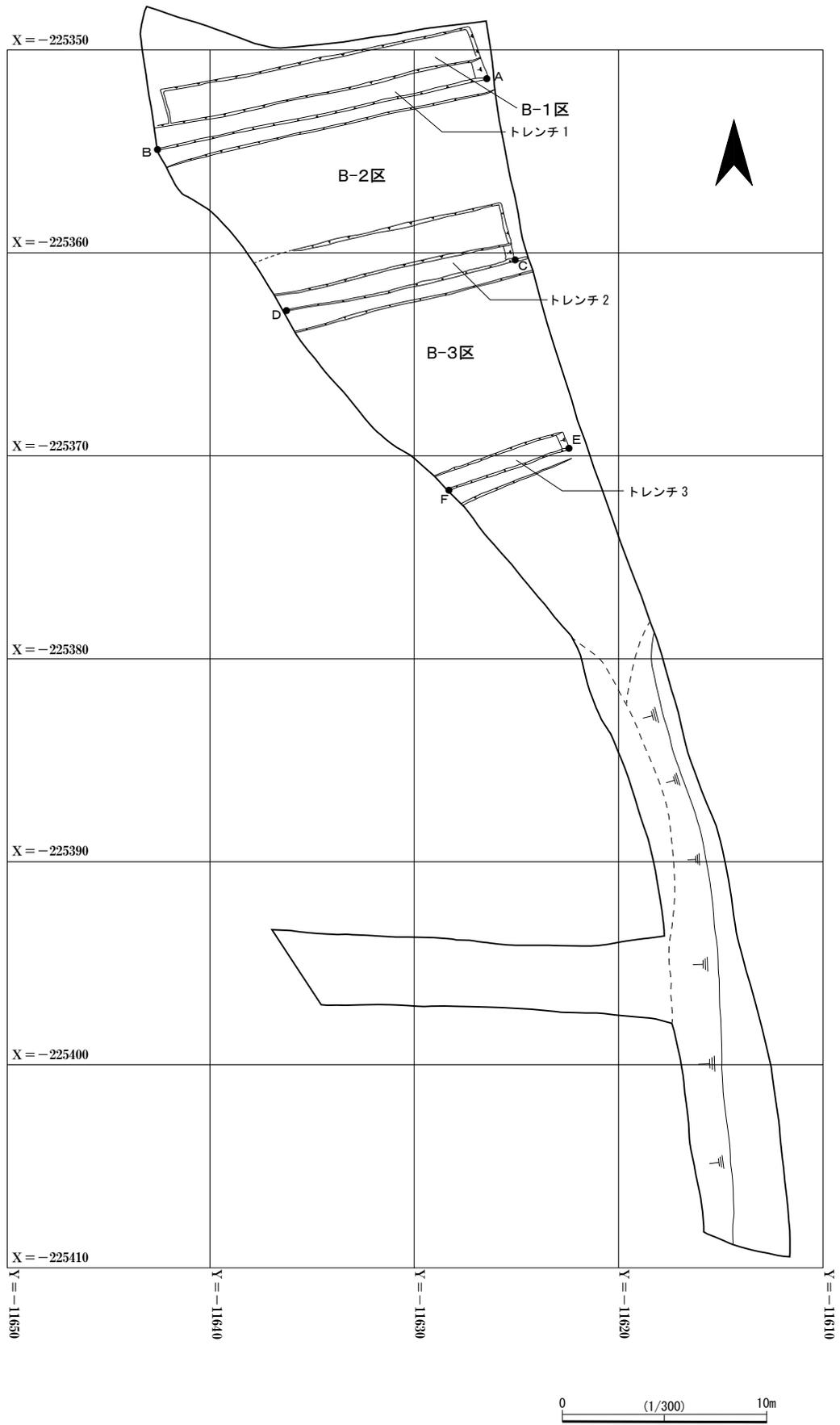
南側包含層も厚さ100cm以上の堆積を確認しているが、先述したように安全対策上、底面まで完掘していない。埋土については、褐色系の粘質土である2～5層を遺物包含層1層とし、黒褐色の粘質土である6層を遺物包含層2、にぶい黄褐色系粘質土である7層を遺物包含層3、褐色系の粘質土である8・9層を遺物包含層4として遺物の取り上げを行った(第60図)。出土遺物の量は北側包含層に比べて少なく、密集した出土状況も示さないが、弥生土器やミニチュア土器を検出することができた。

なお、北側包含層と南側包含層の間には、地山面が検出されているが、遺構等は確認されておらず、少なくとも調査区内での遺構は確認されていない。

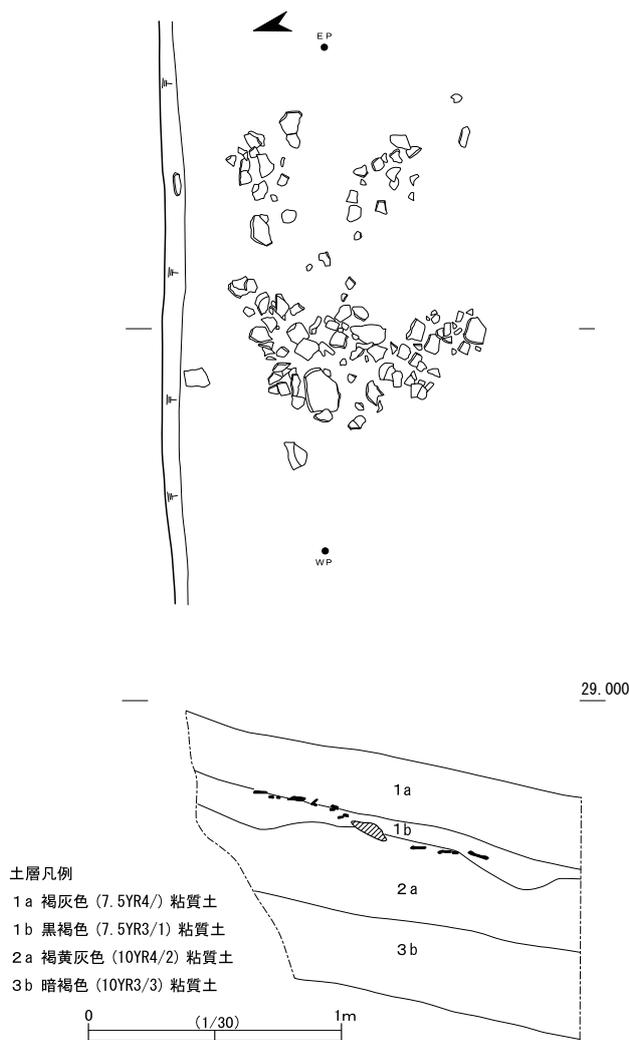
以上のような所見を基にすれば、北側、南側の包含層は谷状の窪みに、周辺からの堆積によって形成されたものと考えられ、一部、北側包含層に認められるように意図的な土器廃棄も確認できる。調査区がトレンチ状を呈しているため、判然としない点が多いが、本調査区より上の丘陵部分に竪穴建



第 57 图 西河内遺跡 A 地区全体图



第 58 図 西河内遺跡 B 地区全体図



第 59 図 A 地区土器集中地点出土状況

緩やかに傾斜しており、各土層には量は少ないものの、室町時代を中心とした遺物が含まれていることが判明した。また 1 点のみではあるが、縄文時代の磨製石斧も出土しており、近辺で当時の人々が生活していた可能性を指摘できる。

土層堆積の詳細について、トレンチ 2 を基準として考えれば、大まかに褐色系の粘砂質土を遺物包含層 1、黄褐色系の粘砂質土を遺物包含層 2、オリブ褐色系の粘質土を遺物包含層 3 として区分することができる (第 61 図)。ただし、これらの各層から出土する遺物の量は少なく、層位ごとの明確な時期差を確認することはできなかった。こうした状況から判断すると当調査区で確認された土層堆積はプライマリな状態を示していない可能性もある。いずれにせよ、B 地区は遺物包含層に含まれる遺物量は少なく、時代も中世のものが中心である点などから、その形成過程や時期については A 地区とは明確に異なっている。

物などが存在しており、こうした生活域からの流れ込みによって形成された遺物包含層であると考えられる。

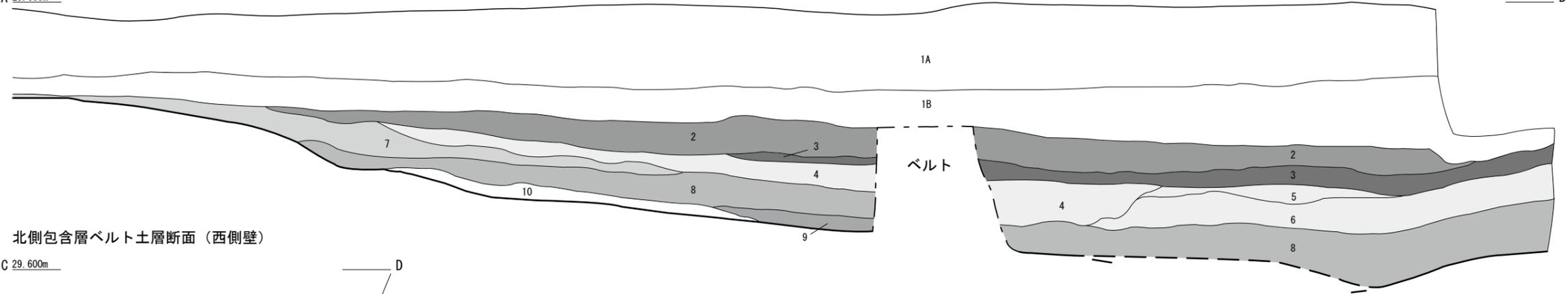
(2) 西河内 B 地区

西河内 B 地区は A 地区と道路を挟んだ東側の水田面に立地する。調査範囲は水田面の造成によって平坦な状態を呈しており、現況の標高は約 23 ~ 24 m である (第 58 図)。

本調査区では試掘調査の結果から、遺構の存在は予想されておらず、当初から遺物包含層の掘削を主眼としていた。しかも、試掘調査のデータでは、まとまった遺物の出土量が期待されるような状況ではなかった。よってまずトレンチを 3 本設定し、土層の堆積状況を確認するとともに、遺物の出土傾向を把握することに努めた。トレンチは北から 1 ~ 3 トレンチと命名し、各トレンチの北側をそれぞれグリッド状に拡張し、B - 1 から B - 3 という名称を付けて遺物を取り上げている (第 58 図)。第 2 トレンチでは、包含層を大まかに 3 つに分層したうえで遺物を取り上げたが、その結果、土層の堆積は南西側方向に

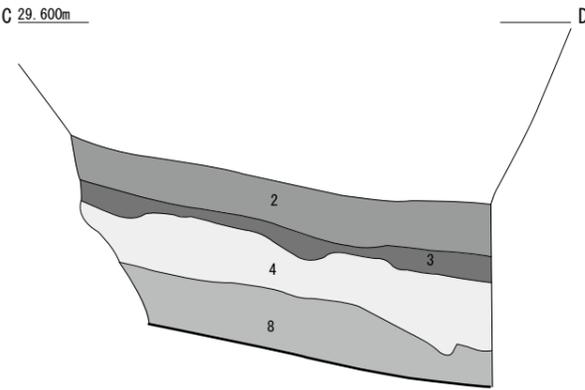
北側包含層土層断面（南壁）

A 29.600m



北側包含層ベルト土層断面（西側壁）

C 29.600m

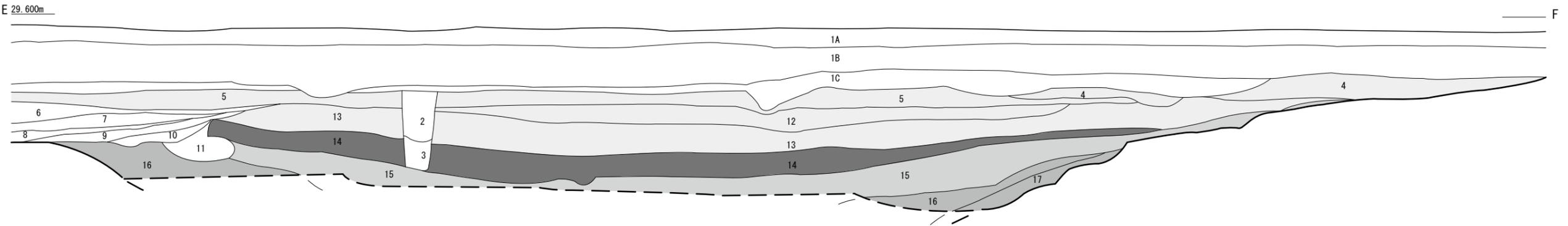


土層凡例

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1A 盛土 1 | 6 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 : 包含層 2 c |
| 1B 盛土 2 | 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 : 包含層 3 a |
| 2 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 : 包含層 1 a | 8 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 : 包含層 3 b |
| 3 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土 : 包含層 1 b | 9 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土 : 包含層 4 |
| 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 : 包含層 2 a | 10 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土 |
| 5 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 : 包含層 2 b | |

南側包含層土層断面（西壁）

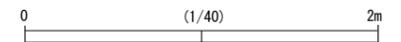
E 29.600m



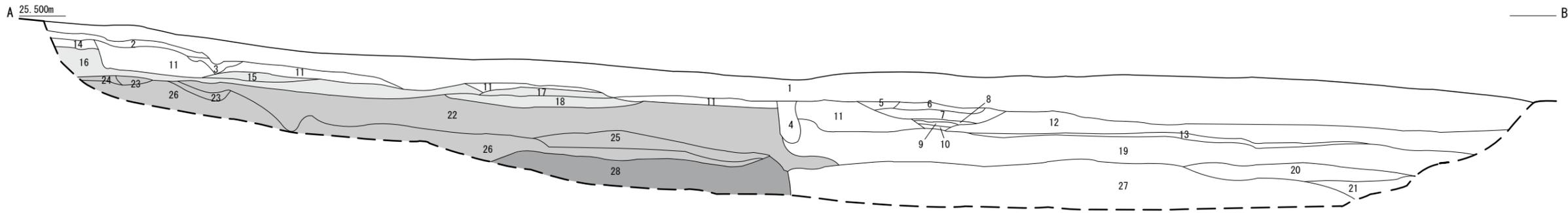
土層凡例

- | | | |
|---|--------------------------------|---------------------------------|
| 1A 盛土 1 | 6 褐色 (10YR4/6) 砂質土 | 13 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 : 包含層 1 d |
| 1B 盛土 2 | 7 褐色 (10YR4/4) 弱粘砂質土 | 14 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 : 包含層 2 |
| 1C 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 : 盛土 | 8 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 弱粘砂質土 | 15 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 : 包含層 3 |
| 2 褐色 (10YR4/4) 弱粘質土 | 9 褐色 (10YR4/6) 弱粘砂質土 | 16 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 : 包含層 4 a |
| 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 : 褐色 (10YR4/4) 弱粘質土混入 | 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土 | 17 褐色 (10YR4/6) 粘質土 : 包含層 4 b |
| 4 褐色 (10YR4/6) 粘質土 : 包含層 1 a | 11 黄褐色 (10YR5/6) 弱粘質土 | |
| 5 褐色 (10YR4/4) 粘質土 : 包含層 1 b | 12 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土 : 包含層 1 c | |

第60図 西河内遺跡A地区土層断面図



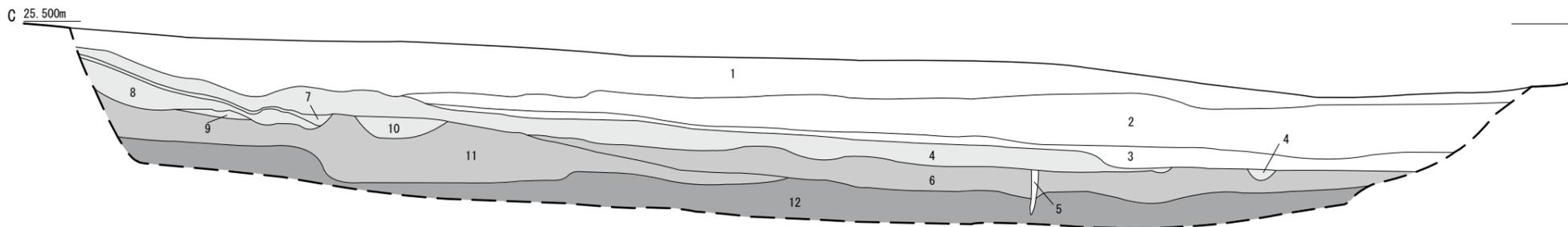
(B-1)
トレンチ1 南壁土層断面



土層凡例

- | | | | |
|--------------------------|---------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黄褐色 (2.5YR5/4) 土：耕作土 2 | 8 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘砂質土 | 15 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 弱粘質土 | 22 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 (砂少量と土器を含む) |
| 2 黄褐色 (10YR5/8) 弱粘質土 | 9 黄褐色 (10YR5/8) 砂質土 | 16 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土 | 23 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| 3 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 | 10 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 | 17 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土 (土器を含む) | 24 黄褐色 (10YR5/6) 弱粘質土 |
| 4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 弱粘質土 | 11 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 土 (砂を少量含む) | 18 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土 | 25 褐色 (10YR4/4) 砂質土 |
| 5 明黄褐色 (10YR6/6) 粘砂質土 | 12 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 土 (砂を少量含む) | 19 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土 | 26 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 |
| 6 黄褐色 (10YR5/6) 粘砂質土 | 13 黄褐色 (2.5Y5/4) 土 (砂を少量含む) | 20 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 | 27 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 |
| 7 黄褐色 (10YR5/8) 粘砂質土 | 14 褐色 (10YR4/6) 土 (砂・マンガンを少量含む) | 21 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 | 28 黒褐色 (10TR3/2) 粘質土 (土器を含む) |

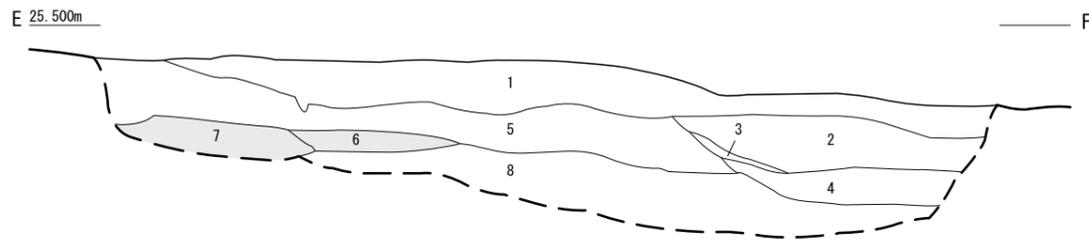
(B-2)
トレンチ2 南壁土層断面



土層凡例

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 土：耕作土 1 | 7 褐色 (10YR4/6) 土：包含層 1 |
| 2 黄褐色 (2.5Y5/4) 土：耕作土 2 | 8 褐色 (7.5YR4/6) 粘砂質土：包含層 1 |
| 3 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土：盤土 | 9 褐色 (10YR4/4) 粘砂質土：包含層 1 |
| 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土：包含層 1 | 10 暗褐色 (10YR3/4) 粘砂質土：包含層 1 |
| 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘砂質土 | 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土：包含層 2 |
| 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 土：包含層 2 | 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土：包含層 3 |

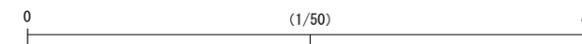
(B-3)
トレンチ3 南壁土層断面



土層凡例

- | |
|-------------------------|
| 1 黄褐色 (2.5Y5/4) 土：耕作土 2 |
| 2 橙色 (7.5YR6/8) 土 |
| 3 暗褐色 (10YR3/4) 土 |
| 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土 |
| 5 褐色 (10YR4/6) 土 |
| 6 黒褐色 (10YR3/2) 土 |
| 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 |
| 8 明褐色 (7.5YR5/6) 土 |

第 61 図 西河内遺跡B地区土層断面図



2 遺物

調査の結果、遺構に伴った遺物は出土せず、全て遺物包含層から出土した。A 地区では弥生時代の土器が大半を占める。B 地区では縄文時代から中世の遺物まで幅広く出土している。

(1) A地区出土土器 (第 62～66 図 図版 47～53)

1・2 は西側包含層から出土した。1 は備前焼の甕であり、口唇から外面にかけて自然釉がかかる。2 は須恵器の杯身で、底部には回転ヘラ切りの痕が残る。体部は直線的に立ち上がる。

3～65 は北側包含層から出土した遺物である。3～15 は 1 層から出土した。3 は須恵質の皿で、その形態から緑釉陶器の素地である可能性が高い。5～15 は弥生土器である。5・9～11 は甕で、6～8 は壺である。6 は複合口縁で、口縁部は内傾する。7 の口縁部には擬凹線を施し、口唇部には刻み目を施す。8 の頸部には連続的な刻み目を施す。13～15 は高杯である。13 の杯部は強く内湾し、口縁はわずかに外反して口唇に至る。15 は杯部が斜め上方に立ち上がり、口縁部は直立する。

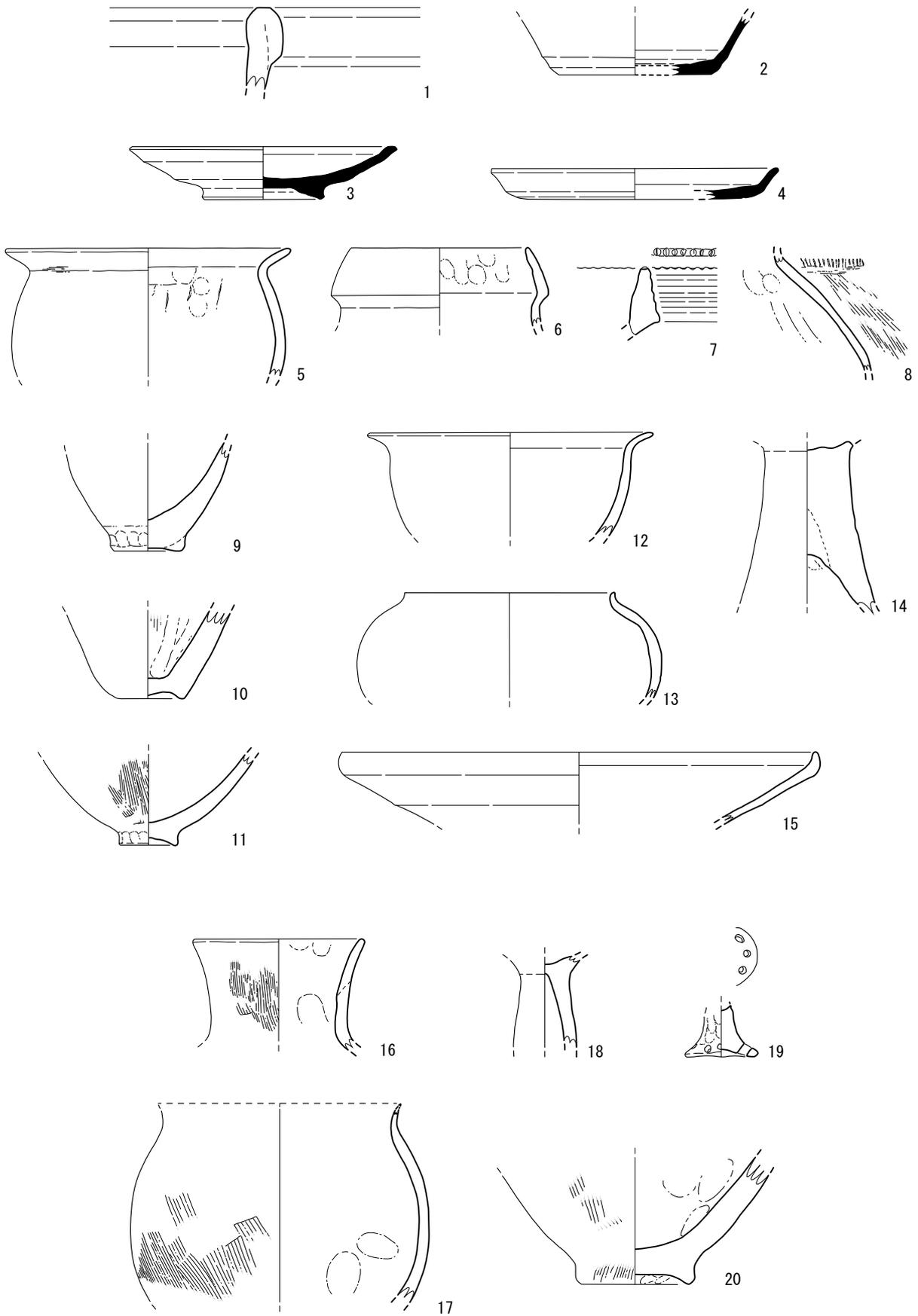
16～20 は 1a 層から出土した弥生土器である。16 は壺である。頸部は直立し、わずかに外反しながら口唇に至る。17 は甕で、外面には煤が付着する。18・19 はミニチュア土器の高杯である。19 は裾部に穿孔をめぐらせている。20 は上げ底の甕底部で、底面はハケで形状を整えた後、ハケ目をナデ消している。21～37 は 1b 層から出土した。21～25・27～32 は弥生土器の甕である。21 はやや長めの口縁が、くの字状に外反する。23 は口縁部がくの字状で、底部は平底である。24 は直立した口縁をもち、肩部が張る。底部は凸レンズ状である。25 は外面の肩から胴部にかけて、二重円弧の線画が施される。26 は弥生土器の鉢で、くの字状の口縁部をもち、外面にはミガキを施す。33 は土師質土器の鍋で、混在品と考えられる。34・35 は弥生土器の器台である。34 は口唇部に 3 条の凹線文を施す。35 は口縁部の内面に列点文、外面には山形文を施す。38～42 は 1 層直下または 2 層直上から出土した弥生土器で、1b 層と同一とみなすことができる。38・39 は壺、40～42 は甕である。38 は複合口縁で、口縁が内傾して立ち上がる。39 は頸部に連鎖状突帯を貼付する。40 は外面に縦方向の粗いハケ目を施し、平底の底部をもつ。42 は内面を指頭によりなであげている。

43～58 は 2 層から出土した弥生土器である。43～46、48～50 は甕である。43 は頸部が締めり緩やかに外反する口縁をもつ。51 は弥生土器の高杯である。脚部には 3 方に、高さを変えた円形のすかしを施す。52・53 は器台である。口縁端部に面を作りそこに文様を施す。52 は斜格子文を充填した鋸歯文を、53 は山形文を施している。さらに双方とも内面には細かな刺突列点文を施す。47・54～57 は弥生土器の壺である。54・55 は口唇部に擬凹線を施す。56 は外面に多条の擬凹線を施す。57 は頸部に 2 条の突帯を貼り付けている。

59～65 は北側包含層の遺物 (層位不明) である。59 は袋状口縁の弥生土器の壺である。内面は横方向にハケ目を施した後ナデている。60 は須恵器の杯身である。立ち上がりは内湾し、端部でやや外反する。受け部は外反して伸びる。61～63 は弥生土器のミニチュア品で、61 は蓋、62・63 は甕を模したものと考えられる。65 は弥生土器の壺で、頸部には刺突列点文を施す。

66～79 は南側包含層出土の遺物である。66 は 1 層から出土した土師器の椀で、底部切り離し法は回転糸切りによると考えられる。貼付高台であり、高台の断面は台形状になる。

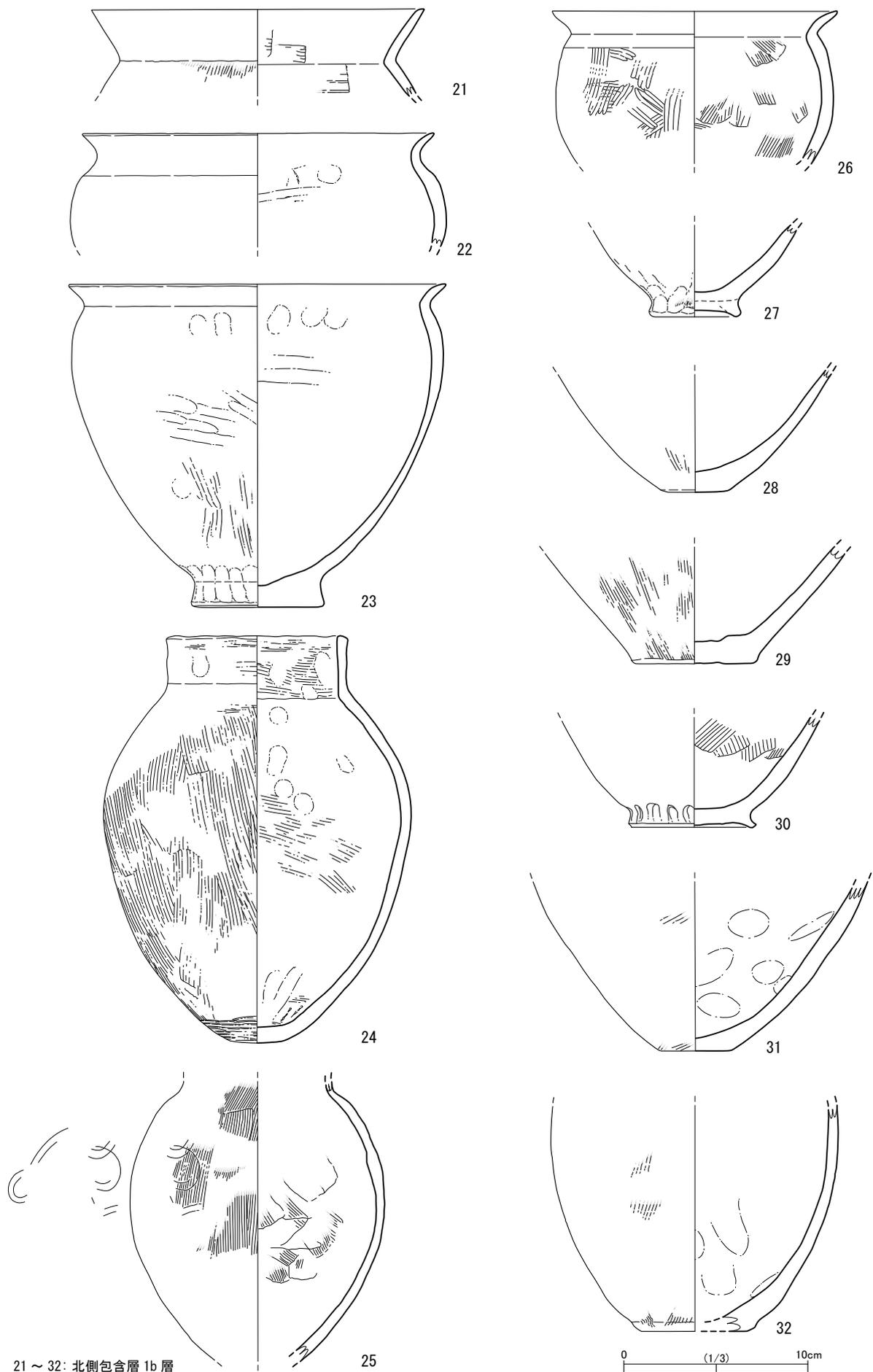
67・68 は 2 層出土である。68 は土師器の壺で、口縁は外反して立ち上がる。69～73 は 3 層から



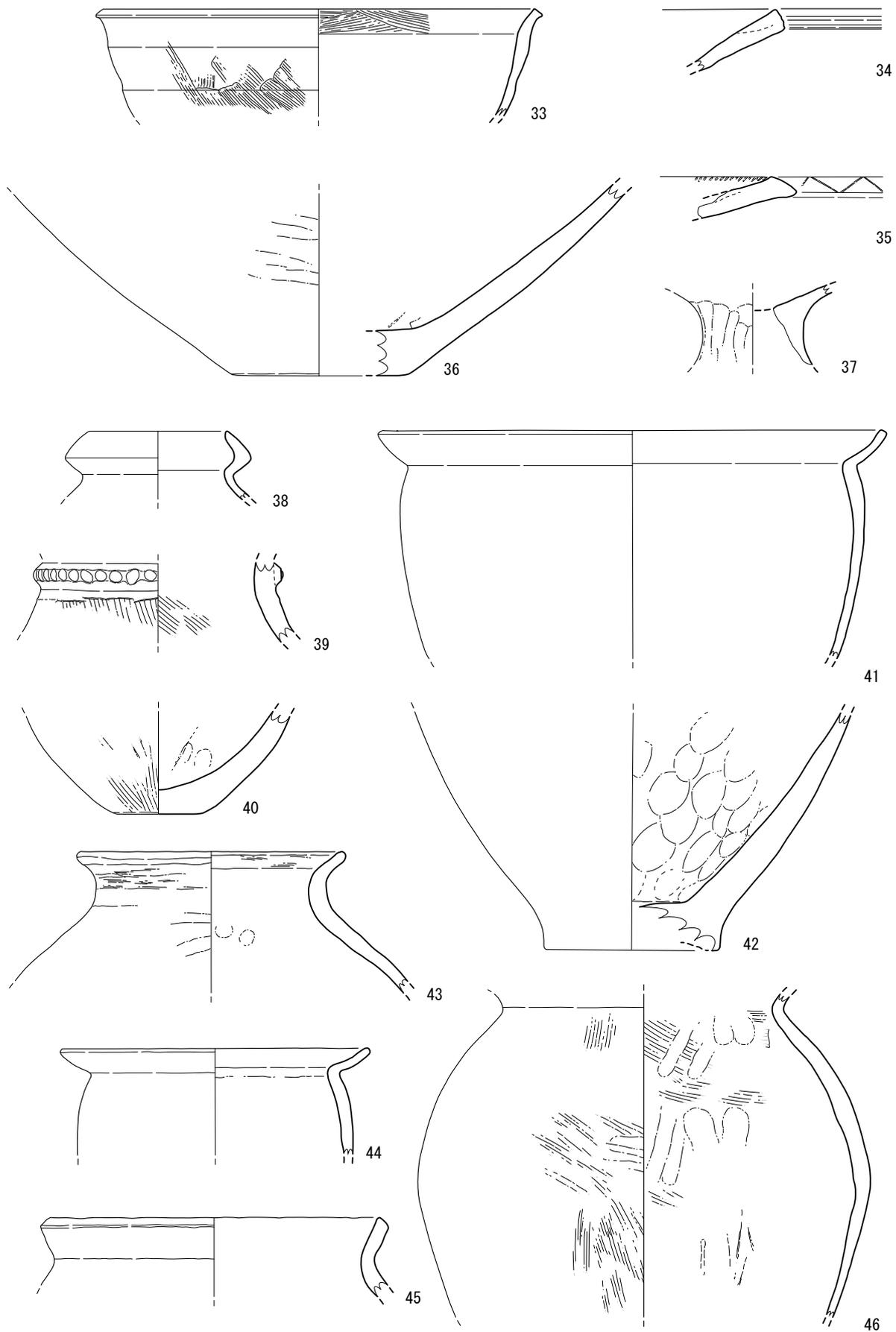
1・2: 西側包含層 3～15: 北側包含層 1層
 16～20: 北側包含層 1a層

0 (1/3) 10cm

第 62 図 出土遺物実測図 (1)

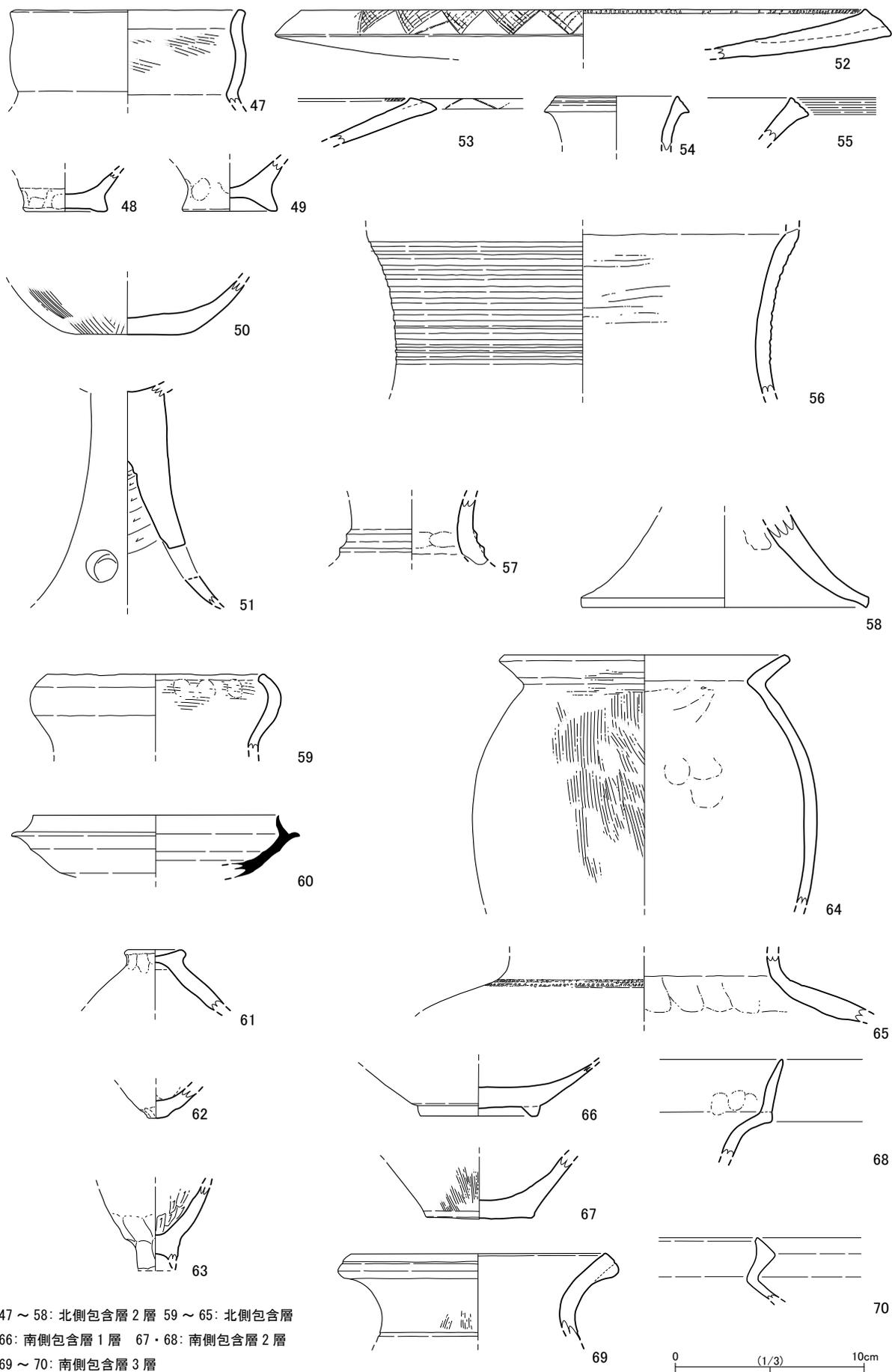


第 63 図 出土遺物実測図 (2)

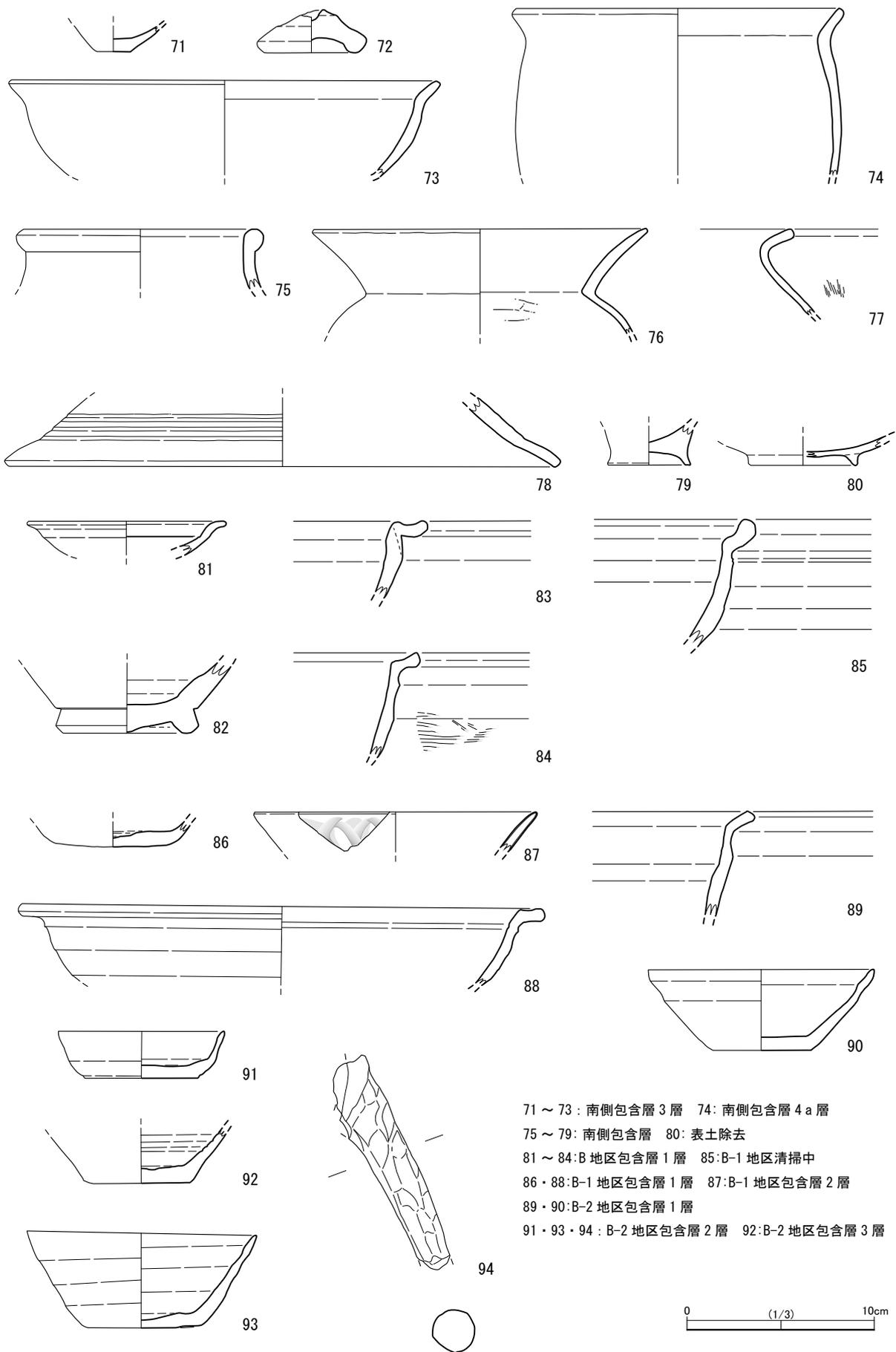


33 ~ 37: 北側包含層 1b 層 38 ~ 40: 北側包含層 1 層直下 (1b 層)
 39 · 41 · 42: 北側包含層 2 層直上 (1b 層) 43 ~ 46: 北側包含層 2 層

第 64 圖 出土遺物実測図 (3)



第 65 図 出土遺物実測図 (4)



71 ~ 73 : 南側包含層 3 層 74 : 南側包含層 4 a 層
 75 ~ 79 : 南側包含層 80 : 表土除去
 81 ~ 84 : B 地区包含層 1 層 85 : B-1 地区清掃中
 86 ~ 88 : B-1 地区包含層 1 層 87 : B-1 地区包含層 2 層
 89 ~ 90 : B-2 地区包含層 1 層
 91 ~ 93 : B-2 地区包含層 2 層 92 : B-2 地区包含層 3 層

第 66 図 出土遺物実測図 (5)

出土した弥生土器である。69・70は壺で、69は口唇部と頸部に1条の沈線を施す。71・72はミニチュア土器である。72は蓋と考えられ、外面中央はへこませている。73は鉢であり、口縁部はゆるやかに外反する。74は4a層から出土した弥生土器の甕である。口縁部はゆるやかに外反する。

75～79は南側包含層の遺物（層位不明）である。75は備前焼の甕で、口縁部は肥厚する。76・77は弥生土器の甕である。76はやや長い口縁部がくの字形に外反する。78は弥生土器の器台と考えられる。裾部に3条の擬凹線を施す。79は上げ底状の弥生土器の甕である。

80はA地区で表面採集された瓦質土器の椀である。底部切離し技法は回転糸切りによると考えられる。貼付け高台で、断面は三角形となる。

(2) B地区出土土器 (第66図 図版53・54)

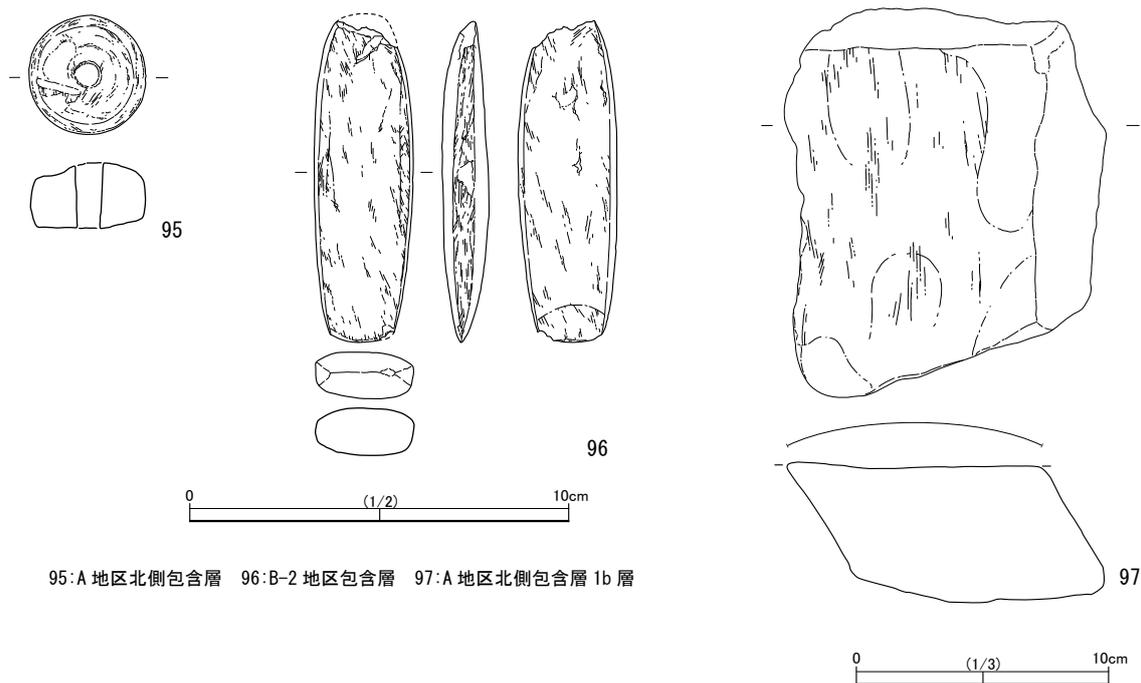
81～94はB地区出土の遺物である。81～84は遺物包含層の1層から出土した。81は白磁の皿と考えられ、内面に1条の沈線を施す。82は青磁椀で、灰色の釉を薄くかける。高台とその内部は露胎する。83・84は土師質土器の鍋である。外面には多量の煤が付着する。

85～88はB-1地区から出土した。86・88はB-1地区の1層の出土である。86は土師器の皿か杯で、底部切離し技法は回転糸切りである。87は龍泉窯系の青磁椀である。外面には蓮弁文をもち、オリーブ灰色の釉を厚めにかける。88は土師質土器の鍋で、内面の口縁直下に1条の沈線を施す。

90～94はB-2地区から出土した。90～93は土師器の杯である。底部切離し技法は全て回転糸切りで、ロクロの回転方向は右である。94は瓦質の足鍋である。

(3) 石製品 (第67図 図版54)

95はA地区の北側包含層から出土した滑石製の紡錘車である。重量は25.6gである。96はB-2地区包含層から出土した蛇紋岩製の磨製石斧である。両面とも明瞭に面取りが施され、研磨は全面に及び、丁寧に仕上げている。長さ8.5cm、幅2.6cm厚さ1.2cmで、重量は48.1gである。97は砂岩製の砥石である。1面のみ使用しており重量は1.42kgである。



95:A地区北側包含層 96:B-2地区包含層 97:A地区北側包含層 1b層

第67図 出土遺物実測図(6)

第10表 出土土器観察一覧表

挿 図 版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	調整 (内) (外)	備 考
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
62 47	1	A 地区西側包含層	陶器	甕	-	(4.3)	-	密	良	褐灰色 褐灰色	ナデ ナデ、口唇肥厚、面取り	備前焼 口唇から外面にかけて自然釉
62 47	2	A 地区西側包含層	須恵器	杯	-	(3.1)	(8.0)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
62 47	3	A 地区北側包含層 1層	緑釉陶器 素地か	皿	14.0	2.8	6.0	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転右 蛇の目高台
62 47	4	A 地区北側包含層 1層	須恵器	杯(身)	(15.0)	1.6	(12.2)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転右
62 47	5	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	甕	(15.0)	(6.7)	-	密	良	橙色 にぶい黄橙色	ナデ、一部ケズリ ナデ	
62 47	6	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	壺	(9.2)	(3.9)	-	粗	やや良	橙色 橙色	ナデ ナデ	
62 47	7	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	壺	-	(3.5)	-	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ ナデ	多条の擬凹線 口唇部に刻目をもつ
62 47	8	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	壺	-	-	-	密	良	浅黄橙色 浅黄橙色	指押さえ、ナデ ハケ目(単位不明)	
62 47	9	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	甕	-	(5.7)	(3.6)	密	良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	
62 47	10	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	甕	-	(4.5)	3.8	粗	やや不良	橙色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ 器面剥離につき不明	
62 47	11	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	甕	-	(4.5)	(3.0)	粗	良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ ハケ目、底部指押さえ	
62 47	12	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	鉢	(15.0)	(5.4)	-	粗	やや不良	浅黄橙色 浅黄橙色	器面剥離につき不明 器面剥離につき不明	
62 48	13	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	高杯	(11.0)	(5.5)	-	粗	やや不良	橙色 褐色	指押さえ、ナデ 器面剥離につき不明	受部は内湾して立ち上がり、 やや外反して口唇に至る
62 48	14	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	高杯	-	-	-	粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	
62 48	15	A 地区北側包含層 1層	弥生土器	高杯	(24.8)	(3.8)	-	粗	やや不良	浅黄褐色 褐色	ナデか ナデか	
62 48	16	A 地区北側包含層 1a層	弥生土器	壺	(9.0)	(5.4)	-	密	良	灰色 灰色	ナデ 縦ハケ目	
62 48	17	A 地区北側包含層 1a層	弥生土器	甕	(12.8)	(10.5)	-	粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	指押さえ、ナデ ハケ目	外面に黒斑有す
62 48	18	A 地区北側包含層 1a層	弥生土器	高杯	-	-	-	粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	ミニチュア土器の可能性あり
62 48	19	A 地区北側包含層 1a層	弥生土器	ミニチュア 土器	-	(2.7)	(3.8)	粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ ナデ	焼成前穿孔有す
62 48	20	A 地区北側包含層 1a層	弥生土器	甕	-	(6.7)	6.2	粗	やや不良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	底面もハケで形状を整えた 後、ハケ目をナデ消している
63 48	21	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	(18.0)	(4.6)	-	粗	やや不良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	出土状況写真・図面
63 48	22	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	(15.1)	(6.1)	-	粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
63 49	23	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	(20.4)	17.6	7.2	密	やや良	黄褐色 黄褐色	ナデ ナデ、一部ハケ目	
63 49	24	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	(9.8)	22.2	(3.0)	密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後指押さえ・ナデ ハケ目	
63 49	25	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	-	-	粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目	外面の一部に黒斑、肩・胴部 にかけて二重円弧の線画
63 49	26	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	鉢	(15.4)	(8.3)	-	粗	やや不良	にぶい褐色 黒褐色	ハケ目、口縁部横ナデ ミガキ、口縁部横ナデ	くさり襷を含む 出土状況写真・図面
63 49	27	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(4.7)	5.0	粗	良	褐灰色 褐色	ナデ ナデ	
63 50	28	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(6.4)	3.8	粗	良	褐色 褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
63 50	29	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(6.0)	6.6	粗	良	褐色 にぶい黄褐色	ナデ ハケ目	
63 50	30	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(6.0)	6.9	粗	やや不良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ナデ、底部は強めの指押 さえ	外面の一部に黒斑
63 50	31	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(9.2)	3.8	粗	やや不良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後指押さえ・ナデ ハケ目	外面の一部に黒斑
63 50	32	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	甕	-	(12.3)	(5.8)	粗	やや不良	灰色 にぶい黄褐色	ナデ ハケ目	
64 50	33	A 地区北側包含層 1b層	土師質土器	鍋	(23.6)	(5.7)	-	粗	やや良	褐色 褐色-黒褐色	ハケ目後ナデ ハケ目	
64 -	34	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	粗	やや不良	褐色 褐色	ナデ ナデ	
64 50	35	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	器台	-	(2.2)	-	粗	良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	口縁内面に列点文 口縁外面に山形文
64 50	36	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	壺	-	(9.7)	(9.4)	粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	
64 -	37	A 地区北側包含層 1b層	弥生土器	高杯 又は器台	-	-	-	粗	良	褐色 褐色	ナデ、一部剥離 ナデ	
64 50	38	A 地区北側包含層 1層直下(1b層か)	弥生土器	壺	(7.2)	(3.4)	-	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
64 50	39	A 地区北側包含層 2層直上(1b層か)	弥生土器	壺	(13.2)	-	-	粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ ハケ	連鎖状突帯
64 50	40	A 地区北側包含層 1層直下(1b層か)	弥生土器	甕	-	(5.2)	(4.6)	粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ハケ目	
64 50	41	A 地区北側包含層 2層直上(1b層か)	弥生土器	甕	(25.0)	(12.1)	-	粗	やや良	淡黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
64 50	42	A 地区北側包含層 2層直上(1b層か)	弥生土器	甕	-	(12.7)	(9.4)	粗	やや不良	褐色 にぶい褐色	指押さえ、ナデ 器面剥離につき不明	
64 51	43	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	(13.8)	(6.9)	-	密	良	褐色 褐色	指押さえ、ナデ ナデ、横ナデ	
64 51	44	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	(16.2)	(5.7)	-	密	良	灰黄褐色 灰黄褐色	ナデ ナデ	

挿園	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
64	51	45	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	(18.9)	(3.6)	-	粗		黄橙色 黄橙色	ナデ ナデ	
64	51	46	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	-	-	(24.0)	粗	やや良	橙色 橙色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
65	51	47	A 地区北側包含層 2層	土師器	壺	(12.4)	(4.9)	-	粗	やや良	橙色 橙色	ハケ目後ナデ ナデ	
65	51	48	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	-	(1.9)	4.4	粗	良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	指押さえ、ナデ ナデ	
65	51	49	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	-	(2.4)	5.0	粗	やや良	橙色 橙色	ナデ ナデ	
65	51	50	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	甕	-	(2.8)	(6.6)	粗	やや不良	明赤褐色 明赤褐色	器面剥離につき不明 ハケ目、底面もハケ目	くさり礫を含む
65	51	51	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	高坏	-	-	-	粗	やや不良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ケズリ ナデ	脚部上位赤変、円形の3方スカシ3mm ずつ高さを変化させている
65	52	52	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	器台	(29.8)	(2.6)	-	粗	やや良	にぶい黄橙色 橙色	ナデ ナデ	口縁内面に刺突列点文 口縁外面に斜格子文を埋めた鋸歯文
65	51	53	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	器台	-	(2.4)	-	粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	口縁内面に刺突列点文 口縁外面に山形文
65	51	54	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	壺?	(6.4)	(2.4)	-	粗	良	明赤褐色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	口唇部に凹線文を施す。 ミニチュア土器か
65	-	55	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	壺	-	(2.3)	-	密	良	橙色 橙色	ナデ ナデ	口唇部に3条の擬凹線を有す
65	52	56	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	壺	-	-	-	粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ ナデ	外面に多条の擬凹線
65	51	57	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	壺	-	-	-	密	やや良	にぶい黄橙色 黄灰色	ナデ ナデ	
65	51	58	A 地区北側包含層 2層	弥生土器	器台	-	(4.9)	(15.0)	粗	やや不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ケズリ、ナデ ナデ、脚部口唇面取り	くさり礫を含む
65	52	59	A 地区北側包含層 壁面	弥生土器	壺	(11.4)	(4.0)	-	粗	やや良	橙色 橙色	横ハケ目後指押さえ ナデ	
65	51	60	A 地区北側包含層 北壁崩落清掃	須恵器	杯身	(13.0)	(3.3)	受部径 (15.2)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
65	51	61	A 地区北側包含層 壁面	弥生土器	蓋	-	(2.8)	3.2	粗	やや良	橙色 灰黄褐色	ナデ ナデ	
65	52	62	A 地区北側包含層 壁面	弥生土器	ミニチュア土器	-	(1.5)	1.1	粗	やや不良	黒色 黒色	指頭による手捏ね 指押による手捏ね	
65	52	63	A 地区北側包含層 パルト	弥生土器	ミニチュア土器	-	(4.3)	(1.9)	粗	やや不良	橙色 にぶい黄橙色	ケズリ 指押さえ	
65	52	64	A 地区北側包含層	弥生土器	甕	14.8	(13.3)	-	粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ハケ目	
65	52	65	A 地区北側包含層	弥生土器	壺	-	-	-	粗	良	橙色 橙色	ナデ ナデ	刺突列点文
65	52	66	A 地区南側包含層 1層	土師器	椀	-	(2.5)	(6.2)	密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切りか 貼付け高台
65	52	67	A 地区南側包含層 2層	弥生土器	甕	-	(2.3)	(5.6)	粗	やや不良	橙色 橙色	ナデ ハケ	
65	52	68	A 地区南側包含層 2層	土師器	壺	-	(5.0)	-	粗	やや不良	橙色 橙色	ナデ ナデ	
65	52	69	A 地区南側包含層 3層	弥生土器	壺	(13.4)	(4.6)	-	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ハケ目後ナデ	
65	52	70	A 地区南側包含層 3層	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	粗	やや良	淡橙色 淡橙色	ナデ ナデ	くさり礫を含む
66	53	71	A 地区南側包含層 3層	弥生土器	ミニチュア土器	-	(1.3)	1.8	粗	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ ナデ	
66	53	72	A 地区南側包含層 3層	弥生土器	ミニチュア土器	-	(2.3)	5.0	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ ナデ	蓋? 石英を含む
66	53	73	A 地区南側包含層 3層	弥生土器	鉢	(18.4)	(5.1)	-	粗	やや良	明褐色 明褐色	ナデ 器面摩滅につき不明	
66	53	74	A 地区南側包含層 4a層	弥生土器	甕	(17.2)	(8.9)	-	粗	やや不良	橙色 橙色	ナデか ナデか	
66	53	75	A 地区南側包含層	陶器	甕	(16.4)	(3.1)	-	密	良	灰赤色 暗赤褐色	ナデ ナデ	備前焼 口唇部肥厚
66	53	76	A 地区南側包含層	弥生土器	甕	(17.8)	(5.5)	-	粗	やや良	にぶい黄褐色 橙色	一部ケズリ、ナデ ナデ	弥生終末期
66	53	77	A 地区南側包含層	弥生土器	甕	-	(4.4)	-	粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
66	53	78	A 地区南側包含層	弥生土器	器台?	-	(3.7)	(29.6)	密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ ナデ (一部擬凹線)	
66	53	79	A 地区南側包含層	弥生土器	甕?	-	(1.9)	(4.4)	粗	良	明赤褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
66	53	80	A 地区 表土除去中	瓦質土器	椀	-	-	5.6	密	やや良	にぶい黄色 暗灰色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切りか 貼付け高台、くさり礫を含む
66	53	81	B 地区包含層 1層	白磁	皿	(10.6)	(1.8)	-	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	口縁下内面に1条の沈線を有す
66	53	82	B 地区包含層 1層	青磁	椀	-	(3.7)	(6.8)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰色	回転ナデ 回転ナデ	ケズリだし高台 底部回転ヘラケズリ (無釉)
66	53	83	B 地区包含層 1層	土師質土器	鍋	-	(4.1)	-	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	横ナデ 口縁下ケズリ後横ナデ	外面に煤付着
66	53	84	B 地区包含層 1層	土師質土器	鍋	-	(5.6)	-	密	やや良	暗灰黄色 黒褐色	ナデ ナデ、ハケ目	外面に煤付着、内面に植物繊維付着、くさり礫を含む
66	54	85	B-1 地区 清掃中	土師質土器	鍋	-	(6.8)	-	密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	内外面に植物繊維付着
66	54	86	B-1 地区包含層 1層	土師器	皿または杯	-	(1.3)	6.0	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転、くさり礫を含む
66	54	87	B-1 地区包含層 2層	青磁	椀	(15.0)	(2.1)	-	密	良	胎土：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	外面に片切彫りの蓮弁を施す
66	54	88	B-1 地区包含層 1層	土師質土器	鍋	(27.6)	(4.1)	-	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	口縁下内面に1条の沈線を有す 外面に煤付着、くさり礫を含む
66	54	89	B-2 地区包含層 1層	土師質土器	鍋	-	(5.6)	-	粗	やや良	にぶい褐色 灰褐色	ナデ ナデ	外面口縁下に多量の煤付着 くさり礫を含む

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
66	54	90	B-2 地区包含層 1層	土師器	杯	(12.0)	4.3	5.2	密	やや良	にふい黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、内外面に植物繊維付着、くさり礫
66	54	91	B-2 地区包含層 2層	土師器	杯	(8.8)	2.5	6.0	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右か くさり礫を含む
66	54	92	B-2 地区包含層 3層	土師器	杯	-	(2.9)	5.2	密	やや良	にふい黄褐色 にふい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、内外面一部黒斑 ロクロ回転右
66	54	93	B-2 地区包含層 2層	土師器	杯	12.2	5.2	6.3	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右、内外面植物繊維付着、くさり礫を含む
66	54	94	B-2 地区包含層 2層	瓦質土器	足鍋 (脚部)	-	(12.1)	-	粗	やや良	にふい橙色	指頭による手握ね	脚部、二次焼成により赤変体部との接合部付近に煤付着

VI 中屋B遺跡調査の成果

1 調査の概要

中屋B遺跡は現況の標高約33mの水田部分に位置し、今回の調査区はほぼ東西方向に「コ」の字状に設定されている（第68図）。事前の試掘調査では計12本のトレンチが設定され、北西の区域で1箇所遺構が確認されていたが、そのほかのトレンチでは遺物包含層の存在が確認されていた。この試掘調査時のデータを基に、深度に留意しつつ、重機による表土除去を行った。

表土除去の結果、本遺跡の基本的な地形は西側から東側にむかって緩やかに傾斜する谷状部分に位置し、遺構が残存する箇所は調査区内では、北西端部と南西端部のみであり、この両地区より東側では黒褐色を呈する遺物包含層が広く分布していることが判明した。よって、まず遺物包含層の分布域に人力で複数のトレンチを設定し、土層の堆積状況や、遺物の出土量を把握し、調査の方向性を定めた。その結果、包含層は川に近い東側にいくほど堆積が厚く、湧水のレベルも高くなり、また遺物の出土量は、遺構が分布する西側がより多く、東側は相対的に少ないことが明らかになった。広範囲に及ぶ遺物包含層を全掘することは、時間的にも予算的にも困難であるため、こうした所見を基に、調査方針を立て、南西側の遺物密度が高い包含層を重点的に調査し、そのほかの地区にはトレンチを増設し、遺物の回収に努めることにした。なお、遺物包含層の基本的な堆積土層は黒褐色もしくは暗灰色の粘質土であり、湿地状の谷状地形を想定することができる（第69図）。

遺物包含層から出土した遺物は土器がほとんどであり、弥生時代後期や中世前半期に比定されるものが多い。このうち弥生後期の土器については、後述するような北西・南西端部で確認できた竪穴建物跡や溝状遺構が分布する居住域から流れ込んだものである可能性が高い。また、南西端部付近の遺物包含層からは中世土師器の椀底部が比較的多く出土しており、時期的に符号する輸入銭もこの区域で得られていることから、近接するエリアに中世の集落が存在する可能性が高い。

遺構は北西端部では現地表面から約150cm、南西端部では約60cmの深さで検出されている。北西端部の遺構面はほぼ平坦な状況で検出されたが、南西端部は西側から東側へ緩やかに傾斜し、遺物包含層へと移行していく。検出された遺構として北西端部では、竪穴建物跡3棟、土坑4基、柱穴約30個がある（第70図）。竪穴建物跡は東側からS I 1・S I 2・S I 3と命名しているが、遺構検出の段階では、S I 2とS I 3は同一遺構として捉えており、トレンチ設定後、重複関係が明らかとなった。しかし、度重なる降雨のたびに、調査区はプールのように水没し、雨が止んだ後も壁際から水が常時しみだす状態で、S I 2とS I 3の重複関係の把握や、焼失建物であるS I 3で検出されていた炭化材の流出など調査の進行に多くの支障をきたすこととなった。

また、南西端部では溝状遺構1条と柱穴2基を検出した。溝状遺構については出土遺物から弥生時代後期のものと考えられるが、柱穴に関しては出土遺物がなく、明確な時期を確定することができない。

いずれにしても、今回調査区の北西端部と南西端部が低丘陵の先端部にあたり、この位置に複数の集落関係遺構が確認されることから、今回調査区の北西側にはさらなる遺構の埋存が予想される。

Y = -11670

Y = -11660

Y = -11650

Y = -11640

Y = -11630

Y = -11620

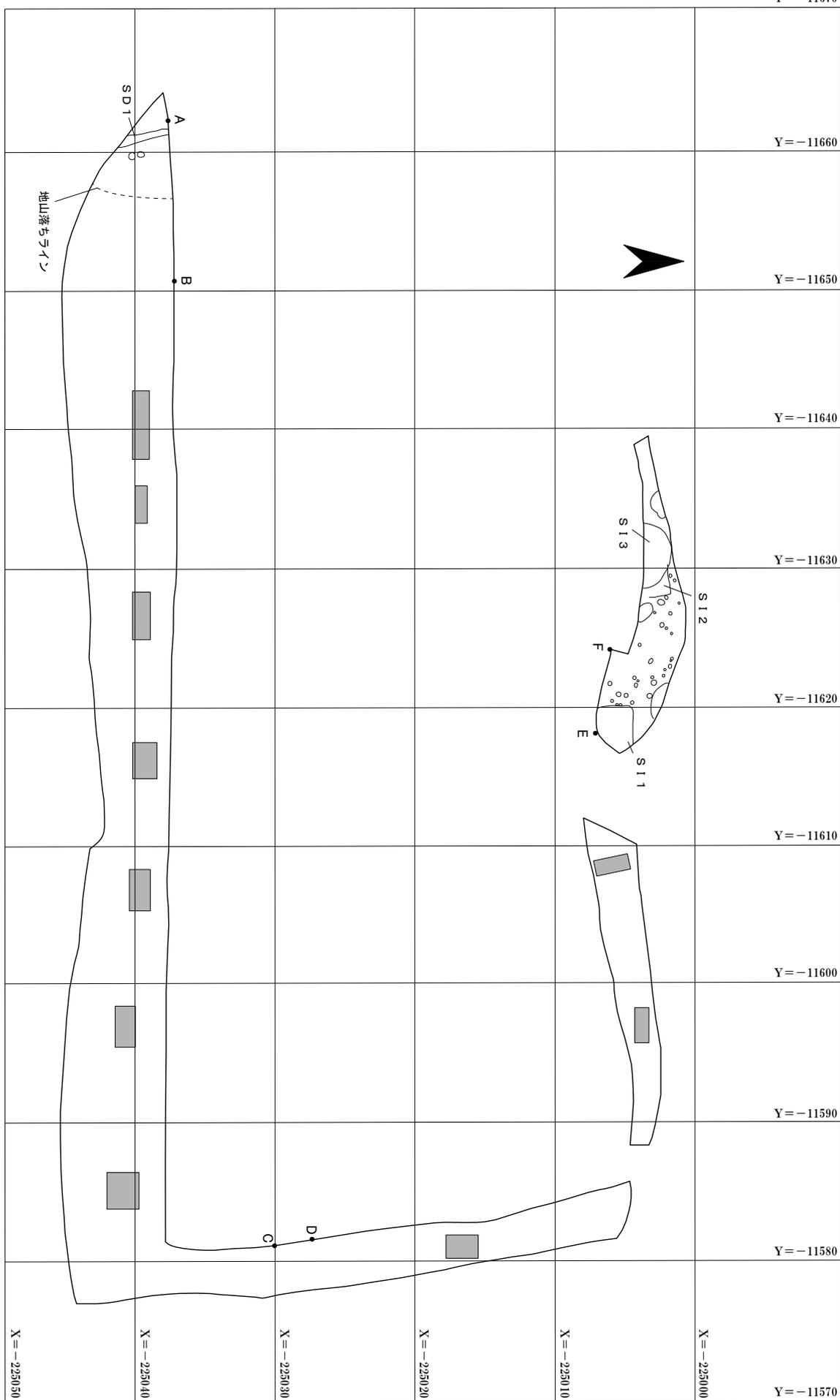
Y = -11610

Y = -11600

Y = -11590

Y = -11580

Y = -11570



地山落ちライン

SD 1

A

B

C

D

F

E

S 1 3

S 1 2

S 1 1

トレンチ

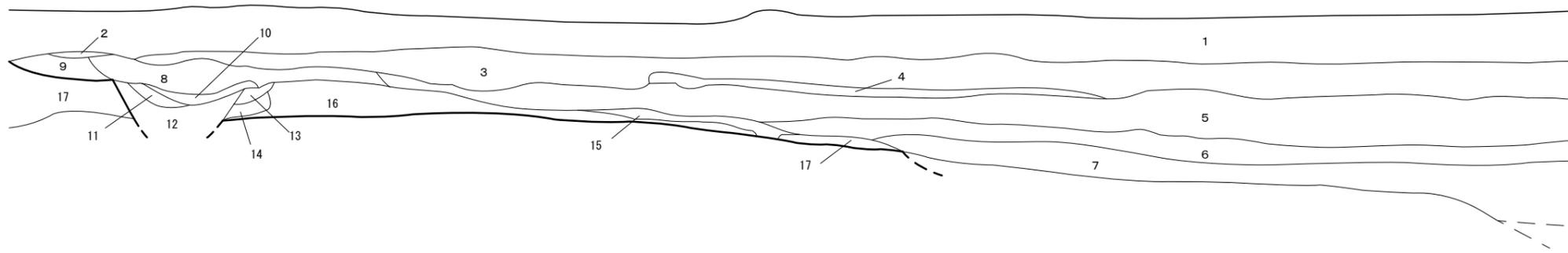


第 68 図 中屋 B 遺跡全体図

南西端部北壁土層断面

A 34.000m

B

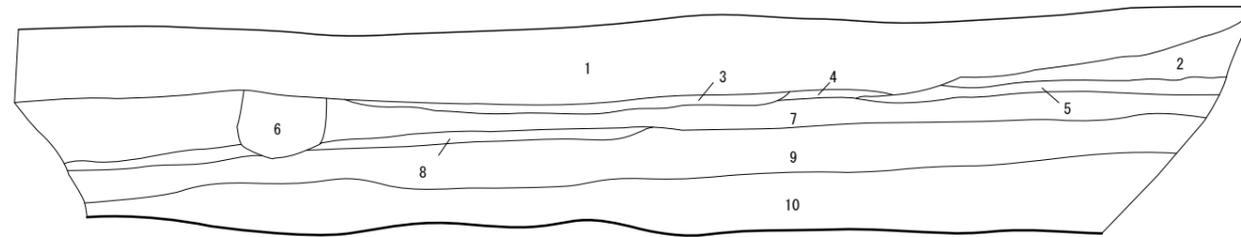


- | | | |
|-----------------------|-------------------------|--------------------------------|
| 1 耕作土 | 7 暗褐色 (10YR3/4) 弱粘質土 | 13 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| 2 褐色 (10YR4/4) 弱粘質土 | 8 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | 14 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 |
| 3 黄褐色 (2.5YR5/3) 弱粘質土 | 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土 | 15 にぶい黄橙 (10YR6/4) 弱粘質土 |
| 4 にぶい黄橙 (10YR5/4) 砂質土 | 10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | 16 にぶい黄橙 (10YR6/4) 砂質土：礫を多量に含む |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 | 11 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 | 17 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土：地山 |
| 6 褐色 (10YR4/6) 弱粘質土 | 12 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 | |

北西端部南壁土層断面

E 35.000m

F

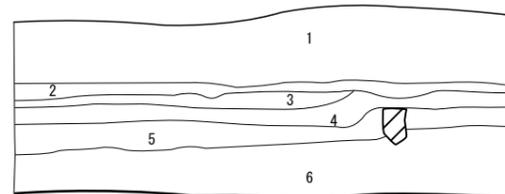


- | | | |
|---------------------------|----------------------------|-----------------------|
| 1 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 | 5 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土：旧盤土か | 9 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 |
| 2 灰色 (5YR6/1) 粘質土：若干砂質強 | 6 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土：遺構埋土 | 10 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 |
| 3 灰色 (7.5YR5/1) 粘質土：若干砂質強 | 7 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質土 | |
| 4 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 | 8 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘質土：旧盤土か | |

東区中央トレンチ西壁土層断面

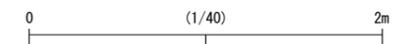
C 33.200m

D



- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1 耕作土 | 4 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土：細礫を多量に含む |
| 2 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 | 5 黒褐色 (10YR3/2) 弱粘質土 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土：細礫を多量に含む | 6 灰色 (5Y4/1) 砂礫 |

第 69 図 中屋B遺跡土層断面図



2 遺構

今回の調査で検出された遺構は竪穴建物跡3棟、土坑4基、溝状遺構1条、柱穴約30個であり、先述したように調査区の北西端部と南西端部で限定的に確認されている。ここでは主な遺構を取り上げ、解説を行う。

(1) 竪穴建物跡遺構

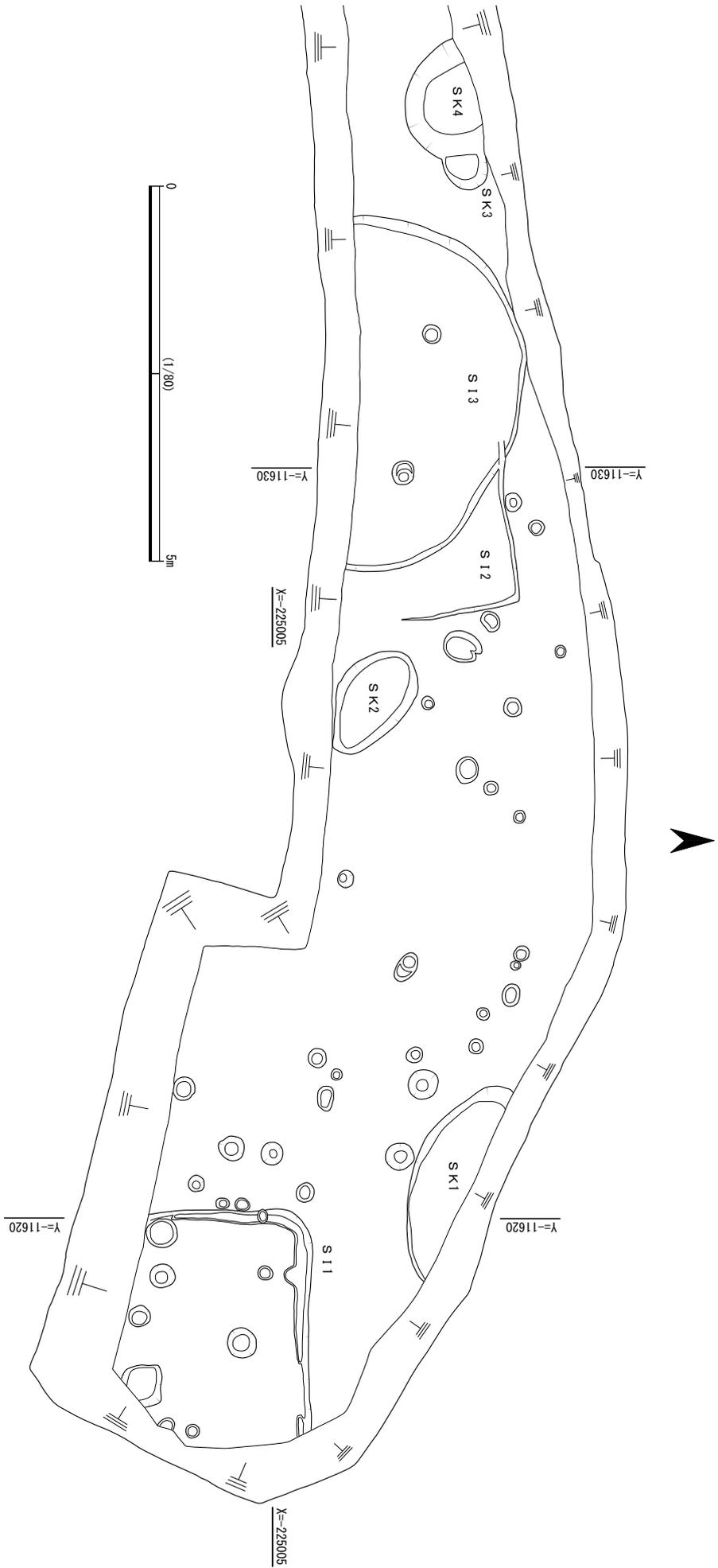
竪穴建物遺構は3棟を確認した。このうちS I 2とS I 3は重複関係にあり、円形建物であるS I 3が古く、S I 2がこれを切るかたちで構築されている。しかし、先述したような降雨等の影響により、遺構内の埋土やベルトが流失したため、S I 2の西側プランを検出することができなかった。また、S I 3は焼失住居であり、炭化材が放射状に残存していたが、これも降雨のため多くが流失してしまった。

S I 1 (第71図 図版56) 方形プランを呈する竪穴建物跡であるが、全体の半分以上が調査区外に埋存していると考えられるため、規模は不明である。残存長750cm、残存幅約300cmを測る。壁面下には周溝がめぐり、検出した部分の南東隅には中央土坑と考えられる掘り込みが確認できる。ただし、この中央土坑には被熱や焼土の痕跡は確認できないことから、炉跡ではないようである。主柱穴についても判然としないが、平面的な位置や深さなどからみて、中央土坑の西側に位置するものが該当する可能性を考えている。これらの推定が的を得ているならば、中央土坑を挟む2本主柱穴であったと考えられる。

出土土器が小片のため、建物跡の正確な年代を特定できないが、平面形態などから弥生時代終末から古墳時代初頭期に属するものと考えられる。

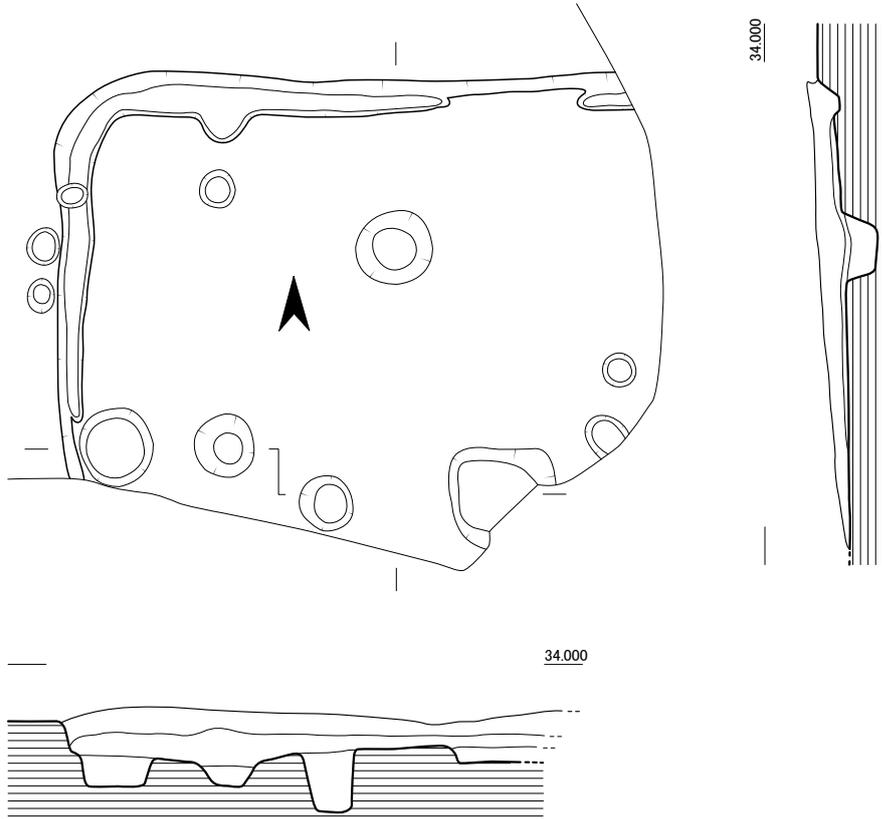
S I 2 (第71図 図版57) 方形プランを呈する竪穴建物で、S I 3を切っているものと考えられるが、上述したようにS I 3部分と重複する西側の壁面を確認することができなかった。床面のレベルはS I 3よりも約5cm高く、周溝などは検出されていない。埋土は2層に分けられ、1層が暗褐色の粘質土、2層が黒褐色の粘質土である。土層ベルトの観察によれば、第2層には段状の落ち込みが認められ、あるいはベッド状の高まりが存在した可能性もあるが、平面的には確認できていない。床面直上からは逆位にした状態の高坏口縁部や小型の甕などが出土しており、こうした土器の型式学的な特徴から、弥生時代後期後半頃の竪穴建物であると考えられる。なお、当遺構の埋土から採取した炭化物の一部をAMS分析に供したところ、較正年代で紀元後1世紀～2世紀初頭という値が得られている。

S I 3 (第71図 図版57) 直径約460cmを測る円形竪穴建物であるが、全体の約半分が調査区外に広がっている。主柱穴は4本と考えられ、うち2本について今回調査を行った。なお、調査した範囲内では、周溝や炉は検出することができなかった。なお、現存部分の西南隅からはほぼ完形の鉢が2個体出土しているが、これらの土器はいずれも口縁部が打ち欠かれており、重ねたような状態で出土している。この鉢を含め、出土した土器は弥生後期前半頃に比定され、当該建物の年代を示している。また、当建物跡は焼失住居であり、炭化材が床面直上で放射状に検出されている。なお、この炭化材の一部をAMS分析に供したところ、樹種はクリであり、較正年代で紀元後1世紀～2世紀初頭という値が得られている。

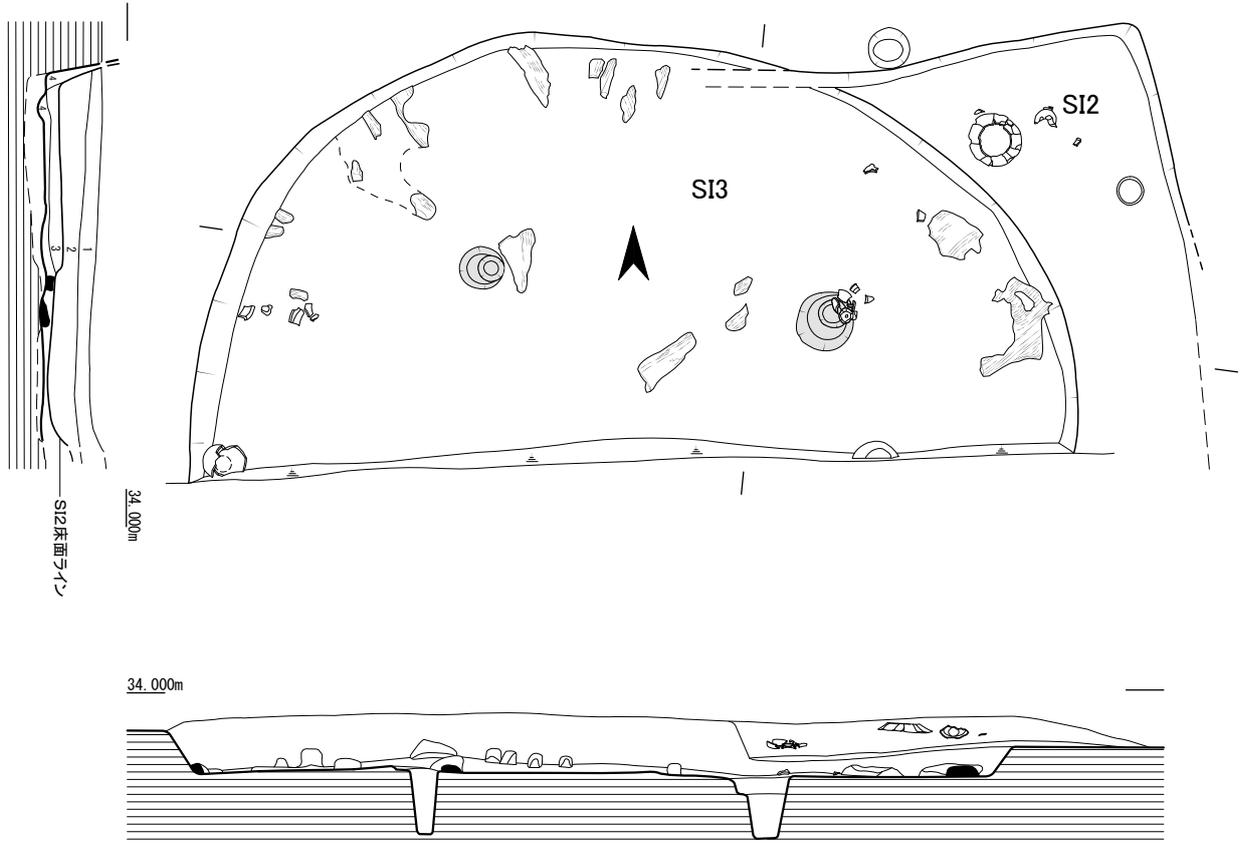


第 70 图 北西端部放大图

S I 1

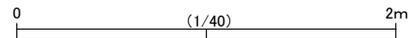


S I 2・3



土層凡例

- 1 暗褐色(10YR3/3)土 2 黒褐色(10YR2/2)土
- 3 にぶい褐色(10YR4/3)土 4 黒色(10YR2/1)土



第 71 図 S I 1 ~ 3 実測図

(2) 土坑

北西端部で4基を確認している。いずれも出土遺物が少ないため、明確な時期を特定しえないが、竪穴建物跡同様、弥生時代後期の所産と考えられる。なお、このうちSK3・4は重複関係にあり、それぞれの全形については不明確である。ここではSK1とSK2について個別に解説を行う。

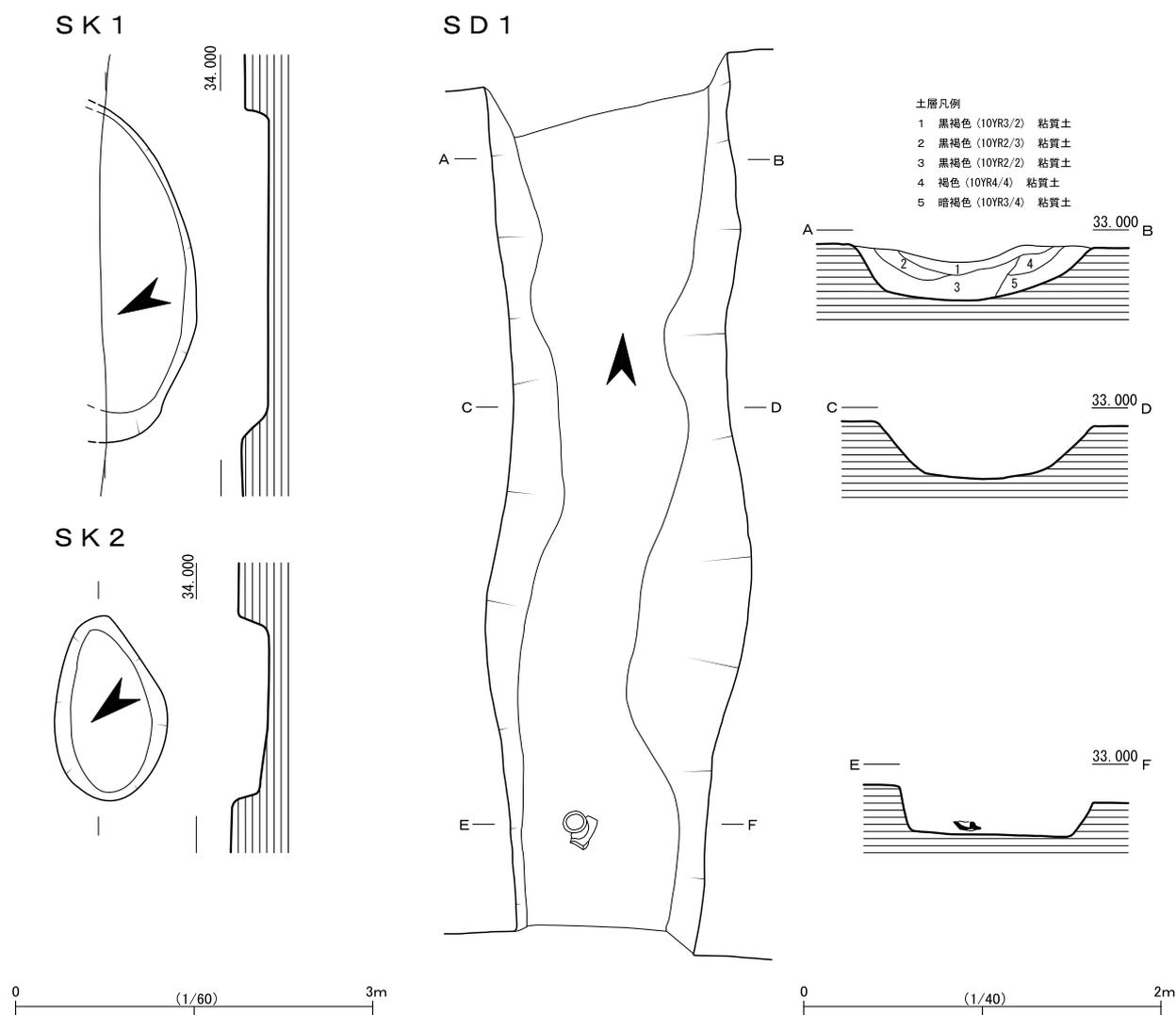
SK1 (第72図 図版58) 平面形態は楕円形であるが、全体の約半分が調査区外に広がっている。長軸約280cm、深さ約20cmを測り、床面はほぼ平坦である。黒褐色系埋土の単一層であり、廃棄土坑と考えられるが、遺物の出土量は少ない。

SK2 (第72図) 平面形は楕円に近いが、やや不整形である。長軸150cm、最大幅90cm、深さ約30cmを測る。黒褐色系埋土の単一層であり、遺物はほとんど出土していない。

(3) 溝状遺構

溝状遺構は、北西端部では確認されておらず、南西端部で1条を検出した。

SD1 (第72図) 調査区南西端部で検出された遺構であり、最大幅約150cmを測る。断面形状は逆台形状を呈しており、黒褐色系の粘質土が堆積している。堆積土層からは流水の痕跡は確認できない。埋土から弥生時代後期の土器片が出土していることから、当該時期の遺構であると考えられる。



第72図 土坑・溝状遺構実測図

3 遺物

調査の結果、弥生時代から中世に至る土器類を中心に出土した。この他、石鏃や中国銭等が出土している。

(1) 土器 (第 73・74 図 図版 59・60)

1～5はS I 2から出土した弥生土器である。1・5は甕で、1は上げ底状になっており、二次焼成が著しく、底部に赤変、黒斑がある。3は高杯であり、口縁部内面には暗文を施す。2は壺口縁部で、ゆるやかに外反する。4は鉢である。平底の底部をもち、口縁はわずかに外反して口唇に至る。

6～8はS I 3出土の弥生土器の鉢である。6は外面にハケ目を施し、口縁部は外反する。7・8は重なった状態で出土した。両者とも口縁部を打ち欠いており、7の底部は凸レンズ状を呈す。

9は南西端部のSD 1から出土した弥生土器の高杯である。脚部外面には凹線文を施している。

10～12は北西端部包含層出土の弥生土器である。10は壺の口縁部で、口唇部に2条の沈線をめぐらし、その下の口縁外面には鋸歯文を施す。11は甕の胴部であり、外面にはヘラ描きによる線画を施す。12は甕底部であり、外面に黒斑がある。

13～29は南西端部包含層出土の遺物である。13・14・17は弥生土器の甕で、13は口唇部と頸部外面に擬凹線を施す。14は頸部外面に刻目を施す。16は小型の甕で、外面の頸部付近に煤が付着する。15・18・19は弥生土器の壺である。15の口唇部には2条の沈線をめぐらす。18は外面に3条の沈線および波状文を施す。19は頸部外面に刺突文を施す。

20は弥生土器の器台で、外面は丁寧にミガキを施している。22はミニチュア土器の蓋である。23～26は土師器の椀で、すべて貼付高台である。底部切り離し法は回転糸切りであるが、25は不明である。26は見込み部分に、円形のライン状に赤色顔料が付着する。ライン内部は黒ずんでいる。27は土師器の杯である。ロクロの回転方向は右、底部は回転糸切りで、胎土にはくさり礫を含む。28は玉縁口縁の白磁の椀である。底部はケズリ出し高台で削りは非常に浅い。底部付近から高台にかけて釉剥ぎされる。29は土師質土器の鍋で、足鍋と考えられる。

30～33は東部出土の遺物である。30は土師器の甕で胎土にくさり礫を含む。31は弥生土器の甕底部、32・33は弥生土器の高杯である。32の杯部底面は円盤充填技法により作成される。33の脚部には、6条の擬凹線の下に退化した矢羽根状の文様が施される。

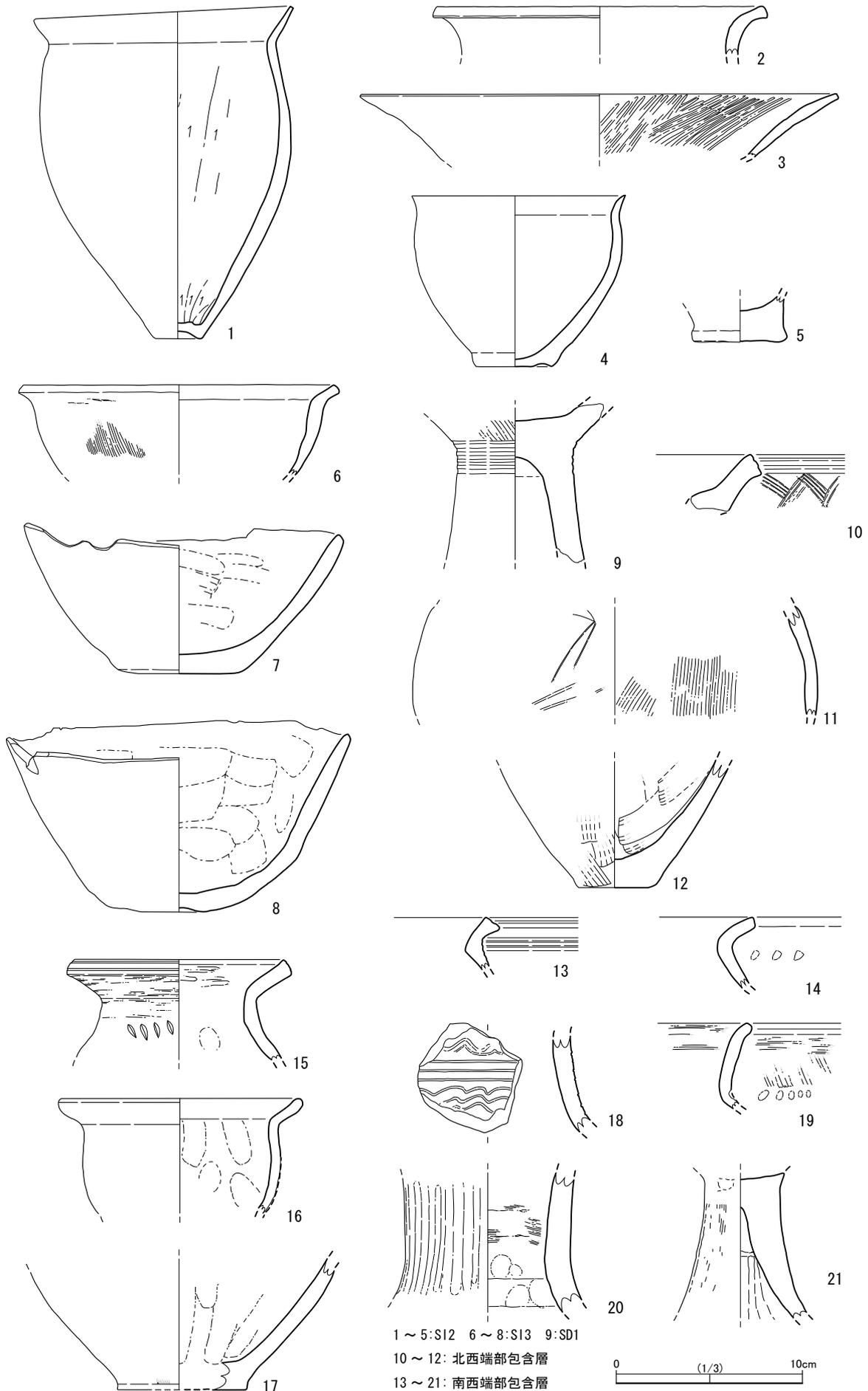
(2) 石製品 (第 74 図 図版 60)

34～36は凹基無茎式の石鏃である。34は南西端部包含層から出土し、安山岩製である。重量は0.8gである。35・36は北西端部包含層から出土した。サヌカイト製である。前者は重量0.7g、後者は重量1.4g。

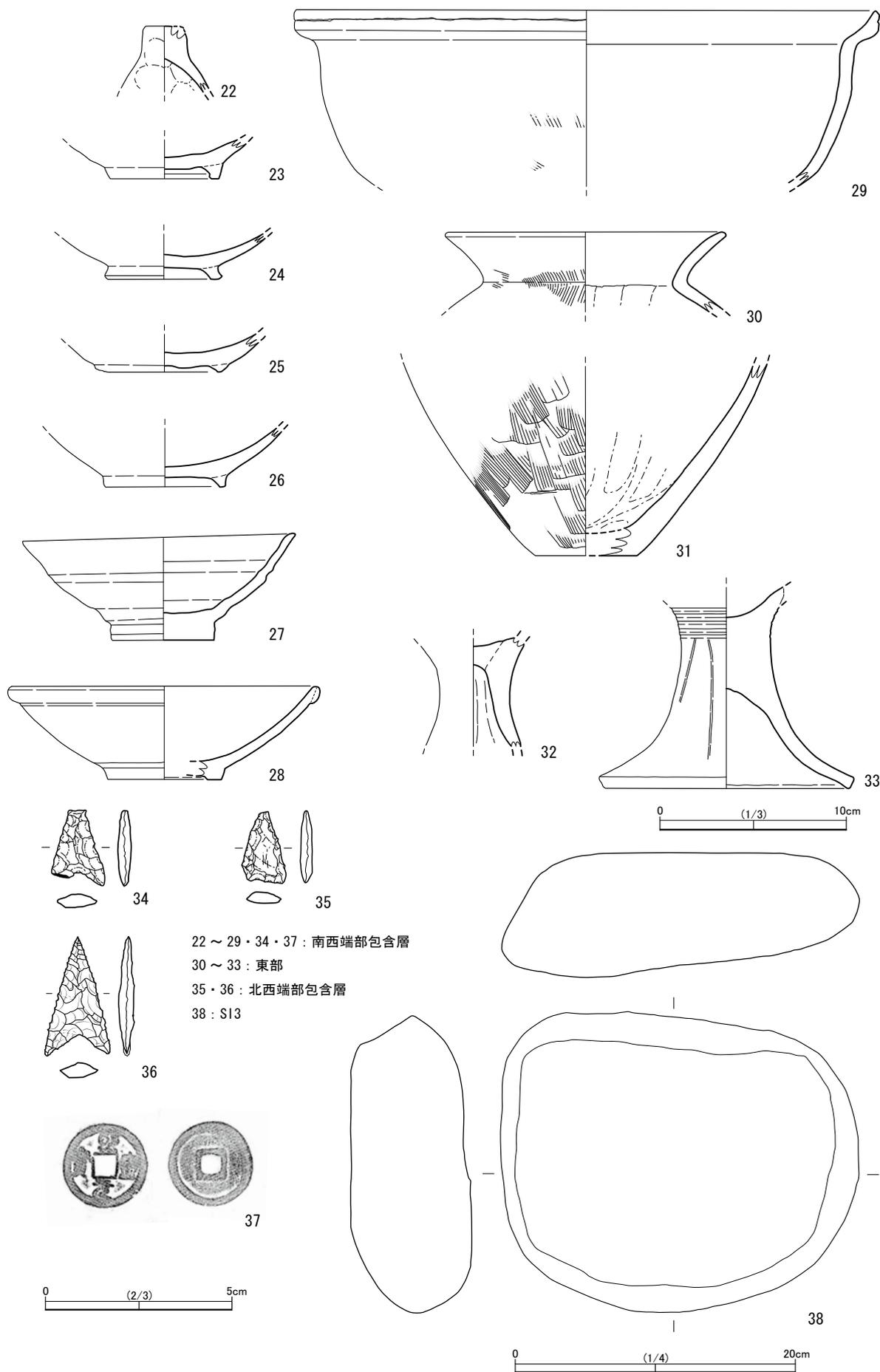
38はS I 3から出土した砂岩製の石皿である。使用面は全体に擦痕がみられる。長さ25.5cm、幅21.3cm、重量は7.5kg。

(3) 金属製品 (第 74 図 図版 60)

37は南西端部包含層から出土した中国銭である。表面は多少摩耗しているが、熙寧元宝の文字がよみとれる。熙寧元宝は1068年初鑄の北宋銭である。直径2.2cm、重量3.2gである。



第 73 图 出土遺物実測図 (1)



第 74 図 出土遺物実測図 (2)

第 11 表 出土土器観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
73	59	1	北西端部 SI2	弥生土器	甕	13.6	17.9	2.5	粗	やや不良	にぶい オレンジ色 にぶい オレンジ色	ケズリ後ナデ タタキ後ナデか	二次焼成著しい 底部亦変・黒斑あり
73	-	2	北西端部 SI2	弥生土器	壺?	17.4	2.6	-	粗	良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ナデ ナデ	
73	59	3	北西端部 SI2	弥生土器	高杯	25.6	(3.4)	-	粗	やや不良	にぶい 黄褐色 灰黄色	暗紋 器面摩滅につき不明	石英を含む
73	59	4	北西端部 SI2	弥生土器	鉢	11.4	9.2	4.3	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	器面剥落につき不明 器面剥落につき不明	
73	-	5	北西端部 SI2	弥生土器	甕?	-	(2.3)	5.0	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	ナデ ナデ	
73	-	6	北西端部 SI3	弥生土器	鉢	(16.6)	(4.8)	-	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	不明 ハケ	
73	59	7	北西端部 SI3	弥生土器	鉢	16.7	8.1	6.6	粗	良	オレンジ 色 オレンジ 色	ナデ ナデ	
73	59	8	北西端部 SI3	弥生土器	鉢	18.4	10.3	7.0	粗	良	にぶい 黄褐色 オレンジ 色	ナデ ナデ	二次焼成 黒斑あり、くさり礫を含む
73	59	9	南西端部 SD1	弥生土器	高杯	-	-	-	粗	やや良	オレンジ 色 オレンジ 色	ケズリ、ナデ ハケ目後ナデ	脚部外面上位に擬凹線
73	59	10	北西端部 包含層	弥生土器	壺	-	-	-	粗	良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ナデ ナデ	クシ描き状文様有り
73	59	11	北西端部 包含層	弥生土器	甕	-	-	-	粗	やや不良	灰黄色 明黄褐色	ハケ目 ナデか	外面に線画か? くさり礫含む
73	59	12	北西端部 壁面清掃	弥生土器	甕	-	(6.8)	4.2	粗	やや不良	にぶい オレンジ 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目	外面に黒斑あり
73	-	13	南西端部 包含層 b3	弥生土器	甕	-	-	-	密	良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ナデ ナデ (擬凹線有り)	
73	59	14	南西端部 清掃時	弥生土器	甕	-	(3.8)	-	粗	やや不良	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ ナデ	頸部外面に刻目を施す
73	59	15	南西端部 包含層	弥生土器	壺	(11.2)	(5.4)	-	密	やや良	灰白色 灰白色	ナデ、口縁部横ナデ ナデ、口縁部横ナデ	頸部外面に刻目を施す 石英・くさり礫を含む
73	59	16	南西端部 包含層	弥生土器	甕	(12.8)	(6.2)	-	粗	やや良	浅黄色 にぶい オレンジ	ナデ、指押さえ、口縁部横ナデ ナデ	外面に煤付着
73	-	17	南西端部 包含層	弥生土器	甕	-	(7.0)	(6.6)	粗	やや不良	浅黄色 浅黄色	ナデ、指押さえ ハケ目後ナデ	石英を多く含む
73	59	18	南西端部 包含層	弥生土器	壺	-	-	-	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ナデ ナデ	外面に 3 条の擬凹線および波状 文を施す
73	60	19	南西端部 包含層	弥生土器	壺	-	(4.6)	-	密	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ナデ ナデ	頸部外面に刺突文を施す
73	-	20	南西端部 包含層	弥生土器	器台	-	-	-	粗	やや良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ケズリ後ナデ ミガキ	
73	60	21	南西端部 清掃時	弥生土器	高杯	-	-	-	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	ケズリ ハケ目後ナデ、指押さえ	
74	60	22	南西端部 包含層 b2	弥生土器	ミニチュ ア土器	-	(3.5)	4.0	粗	やや不良	浅黄色 浅黄色	指頭による手捏ね 指頭による手捏ね	
74	60	23	南西端部 包含層	土師器	椀	-	(2.1)	5.8	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切りか 貼付け高台
74	60	24	南西端部 包含層 b1	土師器	椀	-	(2.4)	6.2	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデか 回転ナデか	底部回転糸切りか 貼付け高台
74	60	25	南西端部 包含層	土師器	椀	-	(2.0)	6.0	密	やや良	灰白色 淡褐色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	貼付け高台 内外面の一部に黒斑有す
74	60	26	南西端部 包含層	土師器	椀	-	(3.1)	6.4	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	見込み部分に紅色のラインを有 す、底部回転糸切り、貼付け高 台
74	60	27	南西端部 包含層 a2	土師器	杯	14.6	5.7	5.4	密	やや良	にぶい オレンジ にぶい オレンジ	回転ナデ 回転ナデ	底部は低い台状形成、回転糸切 り、ロクロ回転右、くさり礫を 含む
74	-	28	南西端部 包含層	白磁	椀	(16.4)	5.0	(6.1)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	ケズリ出し高台 底部釉剥ぎ
74	60	29	南西端部 壁面清掃	土師質 土器	鍋	(31.0)	(9.5)	-	粗	やや良	褐灰色 黒色	ナデ、口縁部横ナデ ハケ目後ナデ、口縁部横ナデ	足鍋か
74	-	30	東部 清掃時	土師器	甕	(15.0)	(4.3)	-	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	ハケ目後ナデ、口縁部横ナデ ハケ目後ナデ	くさり礫を含む
74	-	31	東部 壁面清掃	弥生土器	甕	-	(10.3)	(5.6)	粗	やや不良	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目	底部に黒斑あり
74	60	32	東部 壁面清掃	弥生土器	高杯	-	-	-	粗	やや不良	オレンジ 色 オレンジ 色	ケズリ 器面摩滅につき不明	杯部底面は円盤充填技法により 作成
74	60	33	東部中央 トレンチ	弥生土器	高杯	-	(10.6)	13.6	密	良	黄灰色 浅黄色	ナデ ミガキ	脚部

Ⅸ まとめ

はじめに

発掘調査は、平成24年度から25年度にかけて、6遺跡を対象として実施した。時代や性格がそれぞれ異なるため、ここでは各遺跡について個別に現時点での所見を述べて、まとめとしたい。

1 堀川遺跡

今回の調査区は、北西端部に東から流下する谷川の斜面が入り込み、大部分は狭い尾根上にあたる。地山は削平を受けた痕跡があり、遺構密度が低く、残存状態は良くない。遺物も少ないことから、遺跡の中心は、東側山腹部であると考えられる。一方、調査区の南側の湿地部分では、試掘調査時に、砂礫層から弥生土器や土師器が検出されており、南東山腹部に弥生時代以降の集落跡が存在する可能性がある。

2 平井遺跡

S I 5付近では、縄文時代草創期のものとみられる尖頭器や尖頭器未製品が出土した。尖頭器は、県中央部～西部では散発的に出土しているが、県東部では極めて少なく、岩国市周東町用田遺跡が知られる程度である。S I 5及び北側の地山直上では剥片も数点出土しており、北側調査区外に当該時期の遺構が存在していた可能性がある。

西部で検出された竪穴建物跡は、上部を厚い遺物包含層に覆われている。そのため、多少混入はみられるが、ほぼ同時期とみられるS I 1及びS I 3から出土した土器は、セット関係をよく示し、県東部の弥生時代後期の土器編年を考えるうえで良好な資料である。壺・甕・鉢は、底部がやや上げ底または平底をなす。壺は、胴部上位が張り、頸部で屈曲して口縁部が外反する。口縁端部は面をもち、擬凹線をめぐらすものもある。口縁端部内面に内傾する短い立ち上がり部を貼付するものや立ち上がり部が長く端部を外方に拡張するものがある。後者は外面に櫛描き平行線文や波状文を施す。甕は、やや長胴で胴部上位が張り、頸部で屈曲し、口縁部がくの字形に外反する。端部に擬凹線、頸部に連鎖状突帯をめぐらすものがある。鉢は、胴部上位が張り、頸部で屈曲し、口縁部がくの字形に外反するものと内湾気味に立ち上がり直口となるものがある。後者には、口縁部外面に4条の擬凹線をめぐらす伊予系のものもある。高杯は、杯部が屈折・外傾する瀬戸内系のもの、屈折部が尖り気味に張り出し、口縁部が大きく外反するものがある。脚部は緩やかに開くもの、やや太く裾部がほぼ水平に短く開くもの、内湾気味に立ち上がり、端部を上方へ拡張するものがある。器台は中型のものがみられ、受部の端部にヘラ描き鋸歯文を施している。これらの土器は、複合口縁壺が出現し、壺・甕・鉢の内面調整はヘラケズリが主であること、中型器台が出現することや連鎖状突帯が残ることから、後期I-2～II-1(田畑 2012)、V-1新～2古段階(石井 2004)にあたり、後期前半に位置づけられる。

S I 1では、多量の焼土塊や炭が繰り返し投棄されていた。焼土塊には土器片がパックされた状態で出土したのがあり、焼成破裂痕のある土器片も出土する。これらのことから、平井遺跡では、弥生土器を製作・焼成していた可能性が高く、調査区西部の北側調査区外に土器焼成遺構が埋存する可

能性が高い。胎土分析結果でも、弥生土器2点中1点は、遺跡周辺で粘土が採取された可能性が高いとの結果が示されている（付編2参照）。

周辺の遺跡では、開明遺跡と明地遺跡が、集落が営まれた時期が平井遺跡と重なり合う。集落規模は、明地遺跡が最も大きく、開明遺跡がこれに次ぎ、平井遺跡が最も小さい。出土土器をみると、明地遺跡では畿内系、吉備系、安芸系、山陰系、伊予系土器が出土し、開明遺跡では、九州系、畿内系、吉備系、山陰系、伊予系の土器が出土した。平井遺跡は、山陰系・伊予系土器が出土したが、他地域の土器は少なく、在地系土器がほとんどを占める。明地遺跡や開明遺跡は各地と交流をもつ拠点集落と考えられ、一方、平井遺跡は在地型の集落といえるだろう。

また、平井遺跡では、県内ではあまり例のない筒形器台(234)が出土した。5世紀後半代のもので、県東部地域の須恵器としては古い段階の資料である。同一個体とみられる破片の胎土分析では、搬入品の可能性が高いとの結果が得られた。搬入の意味や経緯については、現時点ではよくわからない。

調査では、古代の平瓦2点(263・264)や近江産とみられる緑釉陶器(261)が出土した。平瓦は外面に格子目タタキ、内面に布目をもつもので、古代のものである。限定的な搬入も考えられるが、周辺に古代寺院や官衙または瓦窯等の重要遺構が埋存する可能性が高い。

なお、S I 5は北東部に1辺50cmを超える礫が5～6個流入し、最大のものでは1mを超え、ほぼ地山直上で検出された。北側から山崩れに伴い流入したとみられ、建物廃絶の直接の要因となった可能性がある。遺跡全体を覆う遺物包含層中には多量の礫が含まれており、古墳時代以降は頻りに地滑りが発生し、以後の集落経営や土地利用に大きな影響を与えたものと考えられる。

3 三反地遺跡

西半部は自然流路、東半部は山麓斜面であり、土坑や柱穴等が検出されたが、集落の本体は、東側山腹部に埋存するものとみられる。遺物包含層からは、古墳時代を中心として弥生時代～中世の遺物が出土しており、断続的に居住が行われたと考えられる。

遺物としては、古墳時代の移動式竈片が注目される。古墳時代の移動式竈は、5世紀代に朝鮮半島から伝わったとされ、県内では主に西部の海沿いの遺跡で出土しており、東部ではあまり出土例がない。田布施川中流域の山間部で出土したことは、周辺で製作された可能性が高いとされる胎土分析結果と合わせて、今後集落の性格を考えていくうえで重要である。

4 水奥遺跡

掘立柱建物や土師器皿等を一括廃棄したS X 1を囲むように配置されているS D 1とS D 3は屋敷溝である可能性が高いと考えられる。そしてこの屋敷地と考えられる区域以外では、ほとんど遺構や遺物を確認することができないという点も注目される事実であろう。水奥遺跡は平野部からは奥まった谷に面した小丘陵上に位置しており、中世の集落が形成されるには適地とは言えない。よって今回確認された遺構群は一般的な集落とは若干性格を異にするものと考えられ、このことは大量の中世土器が廃棄されたS X 1の存在からも支持されよう。このS X 1出土土器群については後述するが、およそ12世紀代後半から13世紀前半代に比定され、掘立柱建物跡、溝状遺構の時期もこれと近接する

時期であることが推察される。居住区の使用は比較的短期間であり、建物の廃絶に伴い、大量の土器廃棄を伴う儀礼行為や溝の埋め戻しが行われたものとみられる。

5 西河内遺跡

西河内遺跡では遺構は検出されていないものの、A地区の遺物包含層からまとまった量の弥生土器が出土している。これらの土器はおおむね弥生時代後期前葉に位置づけられるものと考えられ、近辺には同時期遺構の存在が想定される。とりわけ注目されるのは器台口縁部の出土であり、西部瀬戸内一帯に分布する大型器台の一部であると考えられる。全形を窺うことができないため、断定はできないが、口縁部形態は上方に若干比厚する形態で、同一包含層から出土する土器群同様、後期前葉頃の所産ではないかと考えられる。なお、こうした大型器台は県内において島田川流域の高地性集落群で検出されているが、西河内遺跡や平井遺跡の事例はこれらよりやや古く位置づけられる。今後、田布施地域でもより良好な資料が検出されれば、島田川流域の資料と比較検討が必要となる。

6 中屋B遺跡

中屋B遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡を3棟検出した。出土した土器の量は必ずしも多くはなく、明確な年代を提示するのは困難であるが、弥生時代後期前葉から古墳時代初頭までの時間幅で捉えることが可能であろう。竪穴建物のうちS I 3は火災を受けており、炭化材が床面直上で検出されている。この火災が不慮のものなのか、あるいは廃絶儀礼に伴うものなのか断定はできないが、こうした炭化材とともに口縁部を意図的に打ち欠いた鉢形土器が一部重なるようにして出土していることは注目に値する。弥生時代から古墳時代初頭の火災住居を集成・分析した重根弘和氏によれば、その要因のほとんどが集落の廃絶など、祭祀的要素が絡むものと見ており（重根：1999）、本遺跡の事例も、これと同様に考えておきたい。中屋B遺跡では限定された調査区の中で比較的高密度の竪穴建物が検出されていると言え、集落自体は一定の広がりをもっているものと考えられる。

7 水奥遺跡SX1出土土器の位置づけ

今回の調査ではSX1から、土師器の皿・杯・椀が大量に出土した。特に皿の数は突出している。さらに台付皿、青磁、刀子等も出土しており、県東部における中世土師器の一括性の高い良好な資料として注目される。

皿は図示していないものも含め108点をデータ化したが、その他複数個体出土している。径7.4cm～9.5cm、器高1.0cm～2.4cm。色調は全て橙色系である。底部切離し法は全て回転ヘラ切りである



写真1 皿底部のヘラ切り痕

(写真1)。水奥遺跡では杯・椀は全て糸切りで、皿は全てヘラ切りという特徴がある。ヘラ切りは全体的に雑で、段や、凹凸のあるものも多い。杯は16点出土した。口径12.4cm～15.4cm、器高3.6cm～4.4cmを測り、色調は全て橙色系を呈す。体部はやや内湾気味に立ち上がる。椀は4点が出土した。口径15.8cm～16.4cm、器高は5.0～5.2cmを測る。杯よりも大ぶりの個体が多く、色調は全て灰白色

を呈す。高台の断面は三角形のものと台形状のものがある。青磁は4点出土しており、全て龍泉窯系の青磁椀である。その形態から山本編年（山本：2000）の椀Ⅰ類に定められる。また包含層掘り込みの際に出土した青磁皿（第56図 140）も本来SX 1に伴うものであった可能性が高く、これは同安窯系の皿Ⅰ-2b類に定められる。

県東部の遺跡に同時期の土師器の一括資料がないため、時期は下がるが遺跡内での土師器出土点数が多い向田遺跡（14世紀代）・尾崎原遺跡・大里遺跡（14～16世紀）と比較する。皿をみると器高はどちらも1～2cm程度だが、口径については、水奥遺跡のものが一定の大きさにまとまるのに対して、両遺跡のものはばらつきがある。杯は器高・口径ともにばらつきがある。さらに、実年代のわかる同時代の一括資料として、防府市の下右田遺跡（神里地区）SD9-Ⅱから出土した資料と比較すると、皿、杯、椀ともに法量・器形が非常に近い内容となっている。しかし下右田遺跡のものは皿の底部切離し法が全て糸切りである点で異なっている。

今回SX 1出土の炭化材をAMS法で分析したところ11世紀～12世紀頃の年代を示した（付編3）。しかし、炭化材の場合、最外年輪に相当するとは限らないので多少の誤差が生じることになる。

以上のことをふまえるとSX 1の編年的位置づけについて、12世紀後半から13世紀前半に置くことができるだろう。

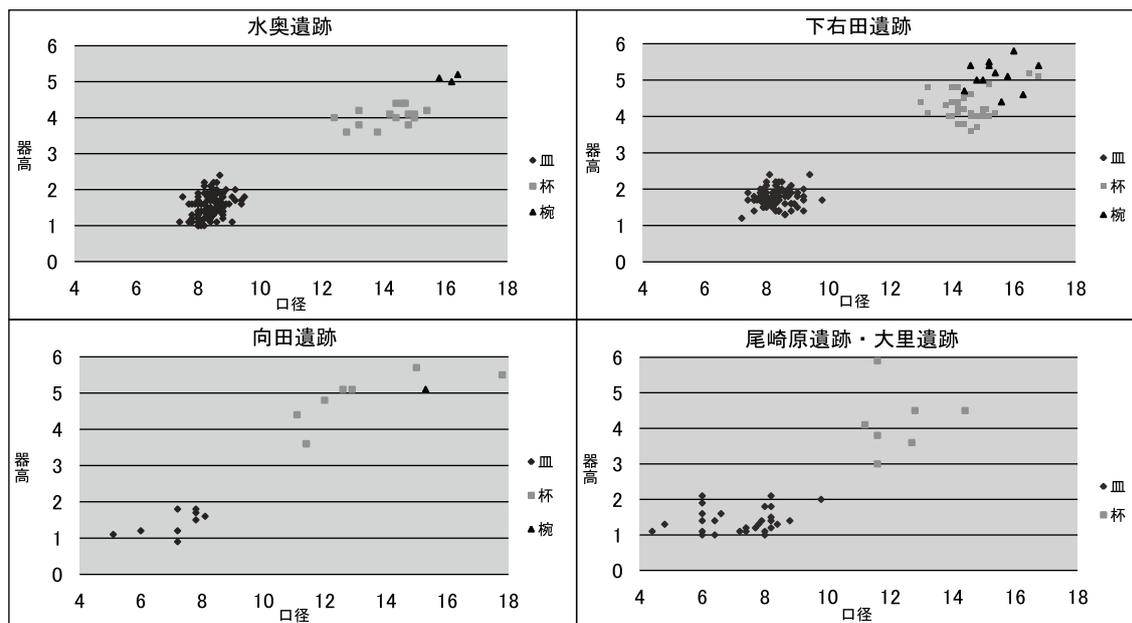


図1 土師器法量分布

参考文献

- 石井龍彦「山口県東部（周防）の弥生時代後期の土器について」『山口県埋蔵文化財センター年報陶墳第17号』財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2004
- 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・田布施町教育委員会『開明遺跡・尾尻遺跡』2013
- 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『明地遺跡Ⅰ』1993,『明地遺跡Ⅱ』1994
- 財団法人山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『郷遺跡』2004
- 財団法人山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター・柳井市教育委員会『中院遺跡』2003
- 重根弘和「2 弥生時代から古墳時代はじめにかけての火災住居について」『高野遺跡（南地区）』豊浦町教育委員会 1999
- 田畑直彦「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』山口大学埋蔵文化財資料館 2012
- 山口県教育委員会『円光寺遺跡』1987,『石光遺跡』1990
- 山本信夫『大宰府の文化財第49集 大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』2000

X 付編

付編 1

平井遺跡、堀川遺跡、三反地遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

平井遺跡は、山口県熊毛郡田布施町大字波野木地（北緯 33° 58′ 24″、東経 132° 2′ 38″）に所在し、山間部の狭隘な谷に張り出す丘陵上に立地する。測定対象試料は、竪穴建物跡や遺物包含層等から出土した木炭と土器付着炭化物の合計 14 点である（表 1）。土器付着炭化物はすべて土器の外表面から採取された。炭化物の付着は全体的に薄い。

試料 1 は、竪穴建物跡 SI6 と溝 SD5 が重複した部分から出土し、帰属遺構が明確でない。試料 2～7 は、竪穴建物跡 SI1 に投棄された焼土層やその下層から出土している。試料 8 が付着した土器は、竪穴建物跡 SI3 から一括性が高い状態で出土した。試料 9～11 が出土した中央土坑は、竪穴建物跡 SI2 の床面に掘り込まれた炉跡と見られる土坑である。この建物跡は遺跡内最大で、出土土器に年代幅が認められることから、長期間かかって埋没したと推定されている。土器付着炭化物が採取された土器は、試料 2、6～8 の土器が弥生土器甕、12 の土器が弥生土器鉢、13 の土器が土師器甕、14 の土器が土師器鍋とされる。

堀川遺跡は、山口県熊毛郡田布施町大字波野木地（北緯 33° 58′ 24″、東経 132° 2′ 43″）に所在し、山間部の狭隘な谷間盆地周縁の小さな谷部分に立地する。測定対象試料は、柱穴から出土した木炭 1 点である（表 1）。

三反地遺跡は、山口県熊毛郡田布施町大字波野木地（北緯 33° 58′ 32″、東経 132° 2′ 30″）に所在し、山間部の狭隘な谷間盆地周縁の丘陵斜面～谷底部に立地する。測定対象試料は、遺物包含層から出土した土器に付着した炭化物 1 点である（表 1）。土器の外表面に薄く付着した炭化物が採取された。炭化物が付着した土器は土師質土器鍋とされる。

2 測定の意義

平井遺跡出土試料の年代測定においては、試料 1 の測定により、試料が出土した埋土が重複した 2 遺構のどちらに属するか検討する。試料 2～7 の測定により、竪穴建物跡内に繰り返し投棄された焼土の時期を明らかにする。試料 9～11 の測定により、長期間かかって埋没したと見られる建物跡の時期を確認する。試料 8、12～14 の測定により、編年的位置づけが可能な土器の絶対年代を明らかにする。

堀川遺跡は出土遺物が少なく、年代決定が困難なため、年代測定の結果を参考とする。

三反地遺跡の炭化物が付着した土器は、編年的位置づけが可能であるため、炭化物の年代測定により土器の絶対年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正

プログラムに入力される値は、 δ 13C 補正を行い、下 1 桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を使い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

平井遺跡出土試料について検討する。同一遺構で複数測定された試料の 14C 年代を見ると、SI7 から出土した試料 2～7 のうち、木炭 3 と 4 は誤差 ($\pm 1 \sigma$) の範囲で一致する。土器付着炭化物 2 と木炭 5 はこれらに比較的近い値を示す。3 点の土器付着炭化物の値には相互に年代差が認められ、全体的に木炭との間にも年代差がある。SK13 から出土した木炭 9～11 の値は誤差範囲で一致する。暦年較正年代 (1σ) は、古い方から順に 12 が縄文時代晩期前葉から中葉頃、7、8 が弥生時代前期から中期頃、2、6 が弥生時代中期頃、3 が弥生時代中期から後期頃、4、5、9～11 が弥生時代後期頃、13 が古墳時代前期頃、1 が古墳時代中期から後期頃、14 が中世頃に相当する (藤尾 2009、小林 2009、佐原 2005)。

なお、試料 13 が含まれる 1～3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾崙 2009、坂本 2010 など)。その日本版較正曲線を用いて試料 13 の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率を確認すると、木炭 1、3～5、11、土器付着炭化物 14 はいずれも 50% 以上で、炭化物としておおむね適正な値となっている。木炭 9 は炭素含有率が 27%、10 は 28% とやや低い値で、 δ 13C が他の木炭に比べてかなり高い点が注意される。土器付着炭化物 2 は炭素含有率が 13%、6 は 4%、7 は 2%、8 は 6%、12 は 7%、13 は 16% で、いずれも低い値を示している。土器付着炭化物は、付着が薄い場合や土器が脆弱な場合、採取する際に土器胎土が混入し、その結果炭素含有率が低くなる可能性がある。そのような試料においては、測定される炭素の由来に注意を要する。

堀川遺跡出土木炭 15 の 14C 年代は $150 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 1678～1940cal AD の間に 7 つの範囲で示される。試料の炭素含有率は 70% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

三反地遺跡出土土器付着炭化物 16-1 の 14C 年代は $610 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 1301～1394cal AD の間に 3 つの範囲で示される。試料の炭素含有率は 50% を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-130517	1	平井遺跡 SI6・SD5	木炭	AAA	-27.50 ± 0.64	1,610 ± 20	81.83 ± 0.25
IAAA-130518	2	平井遺跡 SI1	土器付着 炭化物	AaA	-27.04 ± 0.56	2,060 ± 30	77.38 ± 0.25
IAAA-130519	3	平井遺跡 SI1	木炭	AAA	-28.28 ± 0.40	1,990 ± 20	78.08 ± 0.24
IAAA-130520	4	平井遺跡 SI1	木炭	AAA	-25.48 ± 0.43	1,980 ± 30	78.18 ± 0.25
IAAA-130521	5	平井遺跡 SI1	木炭	AAA	-28.36 ± 0.58	1,920 ± 30	78.70 ± 0.25
IAAA-130522	6	平井遺跡 SI1	土器付着 炭化物	AaA	-26.84 ± 0.37	2,110 ± 20	76.90 ± 0.24
IAAA-130523	7	平井遺跡 SI1	土器付着 炭化物	AaA	-25.16 ± 0.35	2,240 ± 20	75.67 ± 0.23
IAAA-130524	8	平井遺跡 SI3	土器付着 炭化物	AaA	-24.38 ± 0.49	2,350 ± 20	74.62 ± 0.23
IAAA-130525	9	平井遺跡 SI2中央土坑	木炭	AaA	-16.03 ± 0.43	1,930 ± 20	78.67 ± 0.24
IAAA-130526	10	平井遺跡 SI2中央土坑	木炭	AaA	-14.73 ± 0.35	1,910 ± 20	78.87 ± 0.24
IAAA-130527	11	平井遺跡 SI2中央土坑	木炭	AAA	-27.82 ± 0.52	1,920 ± 20	78.79 ± 0.24
IAAA-130528	12	平井遺跡 遺物包含層	土器付着 炭化物	AaA	-27.34 ± 0.60	2,830 ± 30	70.33 ± 0.23
IAAA-130529	13	平井遺跡 西部遺物包含層	土器付着 炭化物	AaA	-25.60 ± 0.42	1,730 ± 20	80.60 ± 0.23
IAAA-130530	14	平井遺跡 表面採集	土器付着 炭化物	AaA	-26.39 ± 0.55	520 ± 20	93.76 ± 0.27
IAAA-130531	15	堀川遺跡 SP1	木炭	AAA	-27.25 ± 0.39	150 ± 20	98.19 ± 0.30
IAAA-130532	16-1	三反地遺跡 遺物包含層	土器付着 炭化物	AaA	-26.12 ± 0.40	610 ± 20	92.63 ± 0.28

[#5882~5884]

表 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130517	1,650 \pm 20	81.41 \pm 0.23	1,610 \pm 24	411calAD - 440calAD (28.6%) 485calAD - 532calAD (39.6%)	404calAD - 535calAD (95.4%)
IAAA-130518	2,090 \pm 20	77.05 \pm 0.23	2,060 \pm 25	146calBC - 141calBC (3.0%) 111calBC - 40calBC (65.2%)	166calBC - 1calAD (95.4%)
IAAA-130519	2,040 \pm 20	77.56 \pm 0.23	1,987 \pm 24	36calBC - 31calBC (4.7%) 20calBC - 12calBC (7.5%) 1calBC - 53calAD (56.0%)	42calBC - 64calAD (95.4%)
IAAA-130520	1,990 \pm 20	78.10 \pm 0.24	1,977 \pm 25	2calAD - 60calAD (68.2%)	41calBC - 73calAD (95.4%)
IAAA-130521	1,980 \pm 20	78.16 \pm 0.23	1,924 \pm 25	54calAD - 90calAD (44.6%) 100calAD - 124calAD (23.6%)	22calAD - 130calAD (95.4%)
IAAA-130522	2,140 \pm 20	76.60 \pm 0.23	2,110 \pm 24	176calBC - 95calBC (68.2%)	198calBC - 54calBC (95.4%)
IAAA-130523	2,240 \pm 20	75.64 \pm 0.22	2,239 \pm 24	379calBC - 354calBC (20.1%) 291calBC - 232calBC (48.1%)	388calBC - 348calBC (26.3%) 318calBC - 207calBC (69.1%)
IAAA-130524	2,340 \pm 20	74.71 \pm 0.22	2,352 \pm 24	412calBC - 390calBC (68.2%)	509calBC - 437calBC (19.2%) 423calBC - 384calBC (76.2%)
IAAA-130525	1,780 \pm 20	80.13 \pm 0.23	1,926 \pm 24	54calAD - 89calAD (47.6%) 102calAD - 122calAD (20.6%)	24calAD - 129calAD (95.4%)
IAAA-130526	1,740 \pm 20	80.54 \pm 0.23	1,906 \pm 23	74calAD - 93calAD (27.3%) 98calAD - 125calAD (40.9%)	27calAD - 41calAD (2.1%) 48calAD - 137calAD (93.0%) 199calAD - 203calAD (0.3%)
IAAA-130527	1,960 \pm 20	78.33 \pm 0.23	1,915 \pm 24	65calAD - 92calAD (35.5%) 98calAD - 125calAD (32.7%)	26calAD - 133calAD (95.4%)
IAAA-130528	2,870 \pm 20	69.99 \pm 0.21	2,827 \pm 26	1011calBC - 969calBC (40.1%) 963calBC - 931calBC (28.1%)	1051calBC - 909calBC (95.4%)
IAAA-130529	1,740 \pm 20	80.50 \pm 0.22	1,732 \pm 23	255calAD - 306calAD (44.1%) 312calAD - 341calAD (24.1%)	246calAD - 382calAD (95.4%)
IAAA-130530	540 \pm 20	93.49 \pm 0.25	517 \pm 23	1410calAD - 1430calAD (68.2%)	1333calAD - 1337calAD (1.2%) 1397calAD - 1441calAD (94.2%)

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-130531	180 ± 20	97.74 ± 0.29	146 ± 24	1678calAD - 1695calAD (10.7%)	1668calAD - 1707calAD (16.1%)	
				1727calAD - 1766calAD (24.9%)		
				1772calAD - 1777calAD (2.3%)		1719calAD - 1782calAD (31.5%)
				1800calAD - 1813calAD (8.6%)		1797calAD - 1826calAD (11.7%)
				1839calAD - 1842calAD (1.4%)		1832calAD - 1885calAD (19.2%)
				1854calAD - 1867calAD (5.6%)		1913calAD - 1947calAD (16.9%)
IAAA-130532	630 ± 20	92.42 ± 0.27	614 ± 24	1301calAD - 1326calAD (28.3%)	1296calAD - 1400calAD (95.4%)	
				1344calAD - 1368calAD (27.4%)		
				1382calAD - 1394calAD (12.5%)		

[参考値]

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82

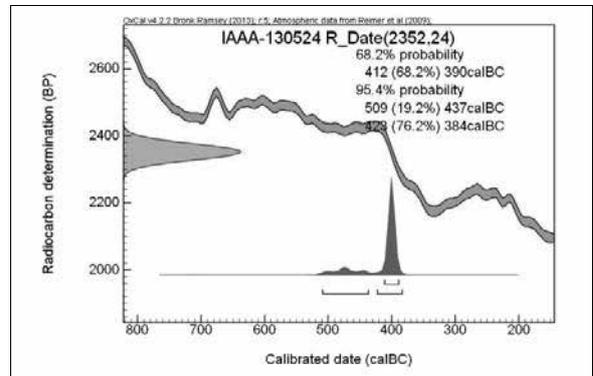
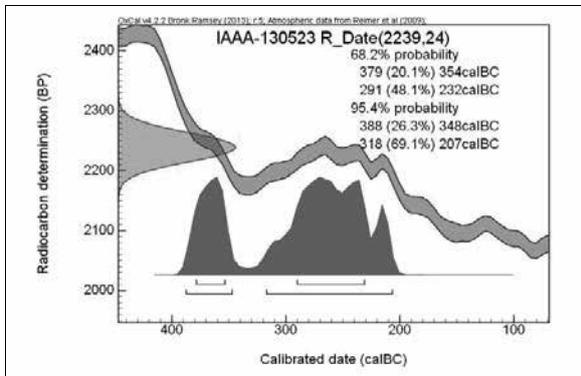
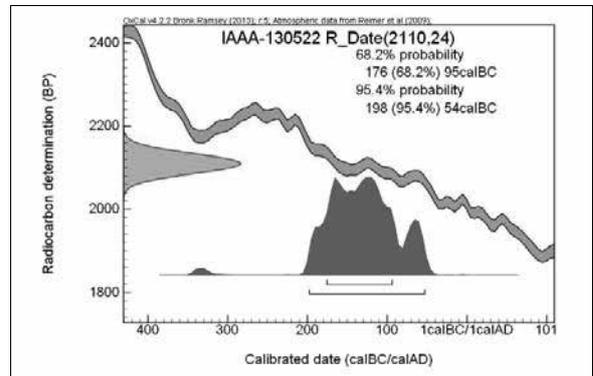
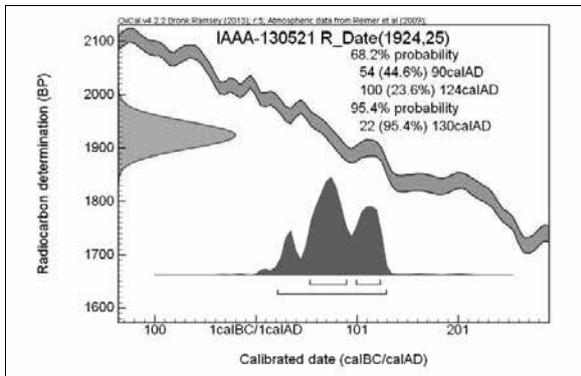
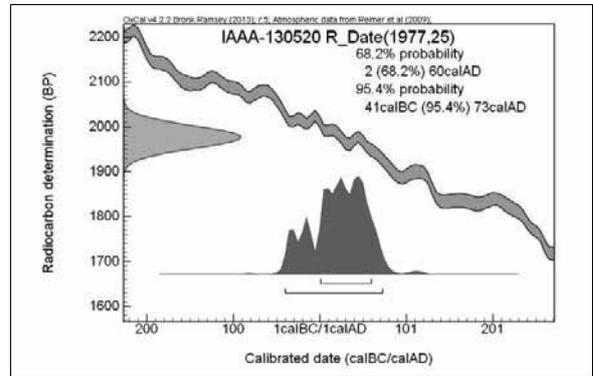
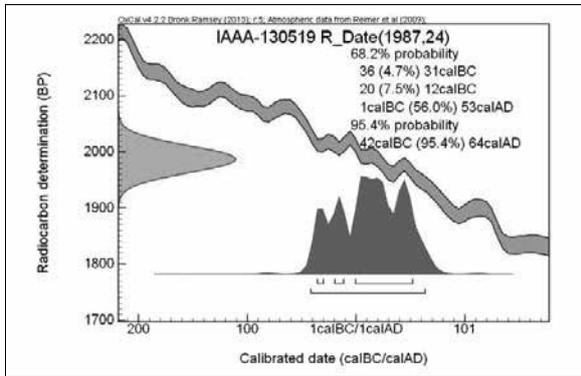
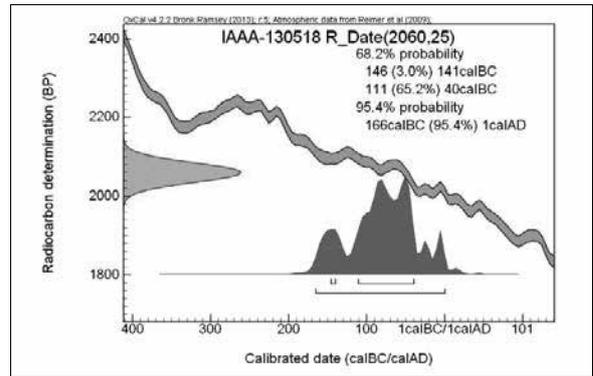
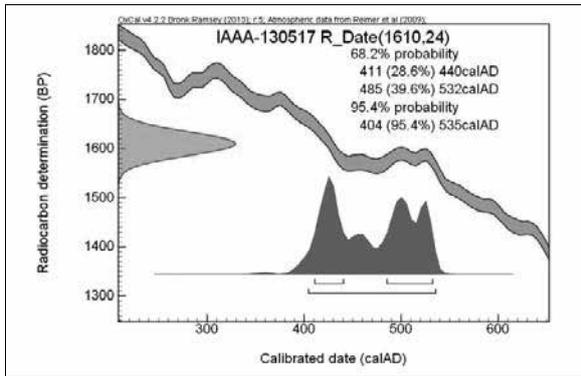
尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

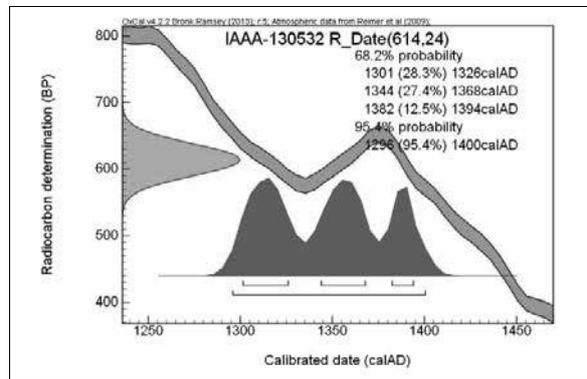
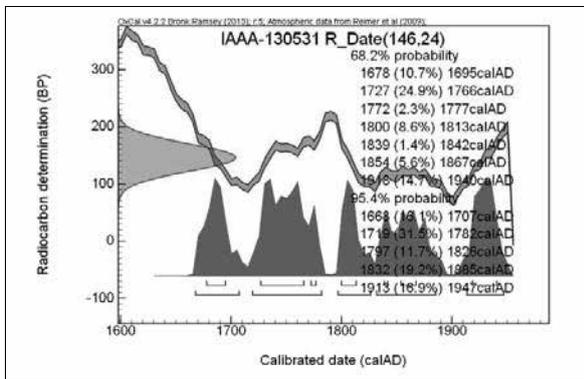
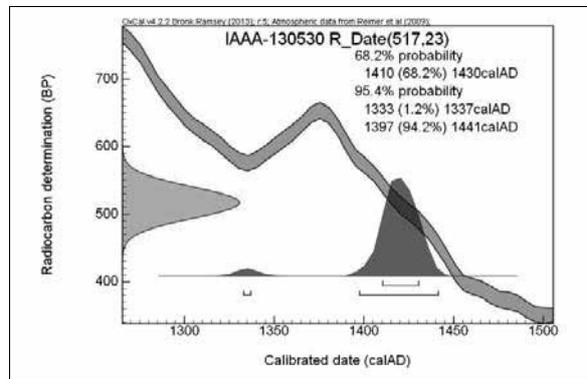
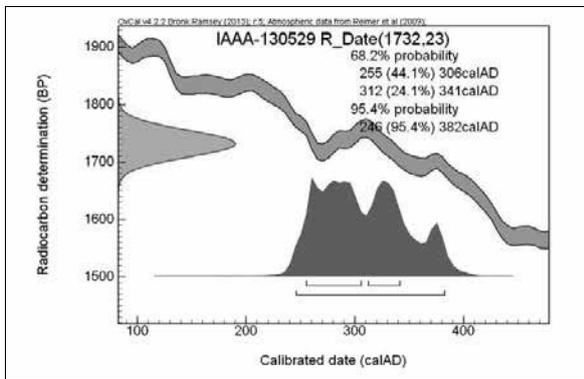
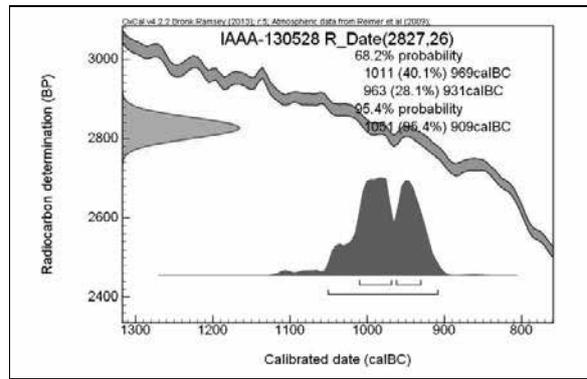
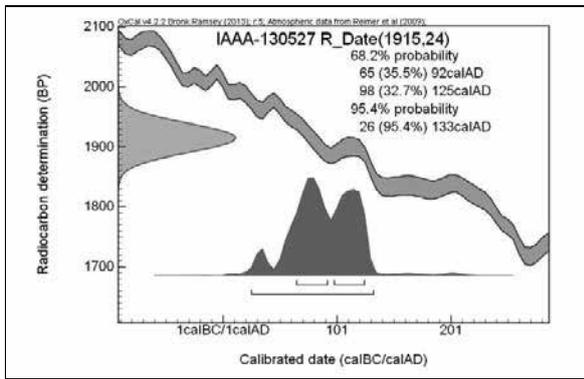
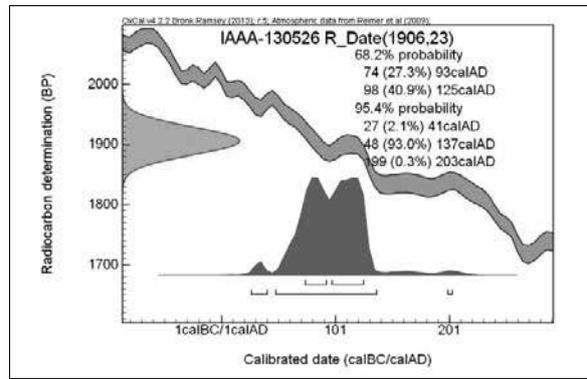
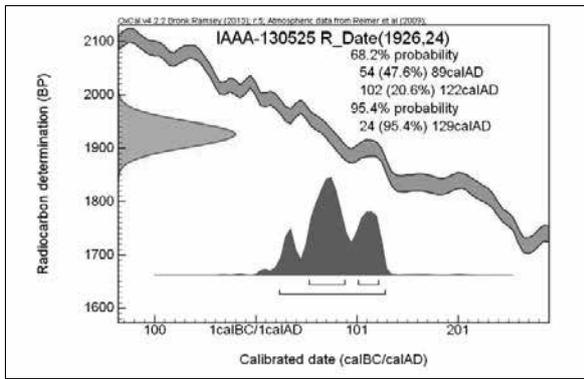
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150

佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木 - 弥生から古墳へ -, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363





[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

はじめに

これまでの発掘調査により、山口県熊毛郡田布施町波野所在の平井遺跡からは、古墳時代とされる須恵器が多量に出土している。考古学的所見によれば、これらの須恵器には搬入されたものと、在地と判断されるものがあるとされている。今回の分析調査は、これらの須恵器の材質（胎土）上の特性を明らかにして周辺地質との比較を行うとともに、同遺跡から出土した同時期の土師器や、弥生土器・古代の須恵器・中世の瓦質土器、さらに周辺遺跡から出土した同時代の須恵器や土師器を比較試料とすることにより、土器の生産や移動に関わる基礎資料の作成を目的として実施した。

1 試料

分析試料は、平井遺跡から出土した土器 19 点と、近接する三反地遺跡より出土した土器 2 点の合計 21 点である。平井遺跡出土試料の内訳は、古墳時代の須恵器が 10 点、古墳時代の土師器が 2 点、古代の須恵器が 3 点、古代の土師器が 1 点、弥生土器が 2 点、中世の瓦質土器が 1 点である。三反地遺跡出土試料は、古墳時代の須恵器と土師器各 1 点である。平井遺跡出土試料には No.1 ～ No.19 までの試料番号が付されており、三反地遺跡出土試料には、土師器に No.20、須恵器に No.21 が、試料番号として付されている。

なお、試料番号、種類、器種、出土遺構・位置、出土年月日、時代などは、一覧にして表 1 に示す。

2 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は切片による薄片作製観察が主に用いられており、後者では蛍光 X 線分析が最もよく用いられている方法である。薄片作製観察は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の試料は、周辺地域での分析事例に乏しいことから、胎土からできるだけ多くの情報を引き出す必要がある。そこで、ここでは薄片作製観察を用いることが適当と判断した。以下に試料の処理過程を述べる。

表1. 試料一覧および胎土分類結果

No.	遺跡名	器種	器形	遺構・出土位置	出土年月日	時代	備考	胎土分類		
								鉱物・岩石	焼成温度	粒径組成
1	平井遺跡	須恵器	杯身	SI7	20130226	古墳		A	1200~1250	細
2	平井遺跡	須恵器	筒形器台片	中央部遺物包含層	20130306	古墳	234と同一個体	A	1200~1250	中
3	平井遺跡	須恵器	器台片	中央部遺物包含層	20130305	古墳		A	1200~1250	中
4	平井遺跡	須恵器	甕	中央部遺物包含層	20130309	古墳		B1	1200±	粗
5	平井遺跡	土師器	甑(甕)	SI5	20130306	古墳		B2	800±	中
6	平井遺跡	須恵器	杯身	中央部遺物包含層	20130107	古墳		A	1200~1250	中
7	平井遺跡	須恵器	杯蓋	中央部遺物包含層	20130121	古墳		B2	1200±	中
8	平井遺跡	須恵器	高坏	中央部遺物包含層	20130121	古墳		A	1150~1200	細
9	平井遺跡	須恵器	杯蓋	中央部遺物包含層	20130122	古代		B1	1150±	中
10	平井遺跡	須恵器	提瓶	中央部遺物包含層	20130122	古墳		A	1200~1250	中
11	平井遺跡	須恵器	杯蓋	中央部遺物包含層	20121226	古代	土師質	B1	800±	中
12	平井遺跡	須恵器	杯蓋	西部遺物包含層	20121217	古墳		A	1200~1250	中
13	平井遺跡	土師器	椀	西部遺物包含層	20121218	古墳		B1	800±	中~細
14	平井遺跡	須恵器	壺	西部遺物包含層	20121218	古墳	231と同一個体	A	1200±	中
15	平井遺跡	弥生土器	甕	中央部遺物包含層	20130117	弥生		B1	800未満	粗
16	平井遺跡	弥生土器	壺	中央部遺物包含層	20130117	弥生		B2	800未満	中
17	平井遺跡	須恵器	杯身	遺物包含層	20121213	古代		B1	1200~1250	中
18	平井遺跡	土師器	椀	遺物包含層	20121225	古代		B1	800未満	中
19	平井遺跡	瓦質土器	鍋	遺物包含層	20121225	中世		B1	800未満	粗
20	三反地遺跡	土師器	移動式カマド	遺物包含層	20130128	古墳		B2	800±	粗
21	三反地遺跡	須恵器	杯蓋	遺物包含層	20130129	古墳		A	1200~1250	細

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫~中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果

薄片観察結果を表2~5、図1~8に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒径組成、碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合の順に述べる。

(1) 鉱物片・岩石片の種類構成および推定焼成温度(表2~5、図1~3)

鉱物片は、No.5、7、16、20の4点を除く17点の試料において、石英の鉱物片が非常に多く、他の鉱物片は少量または微量という組成を示す。これら17点の試料では、斜長石が少量または微量伴われ、さらに試料によってはカリ長石や角閃石、黒雲母などの鉱物片が含まれる。一方、上述した4点の試料では、石英と同量程度に斜長石の鉱物片が含まれることが特徴である。岩石片の産状については、チャートや凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英など比較的多種類の岩石片が含まれる試料と、ほぼ多結晶石英と花崗岩類の2種類のみ含む試料に分けられる。

五十嵐(2007)は、粘土の焼成温度の推定法として、その温度条件と化学組成に対応した鉱物の晶出・溶融・非晶質化などの現象を、推定指針として適用している。ここではその指針に従って、各試

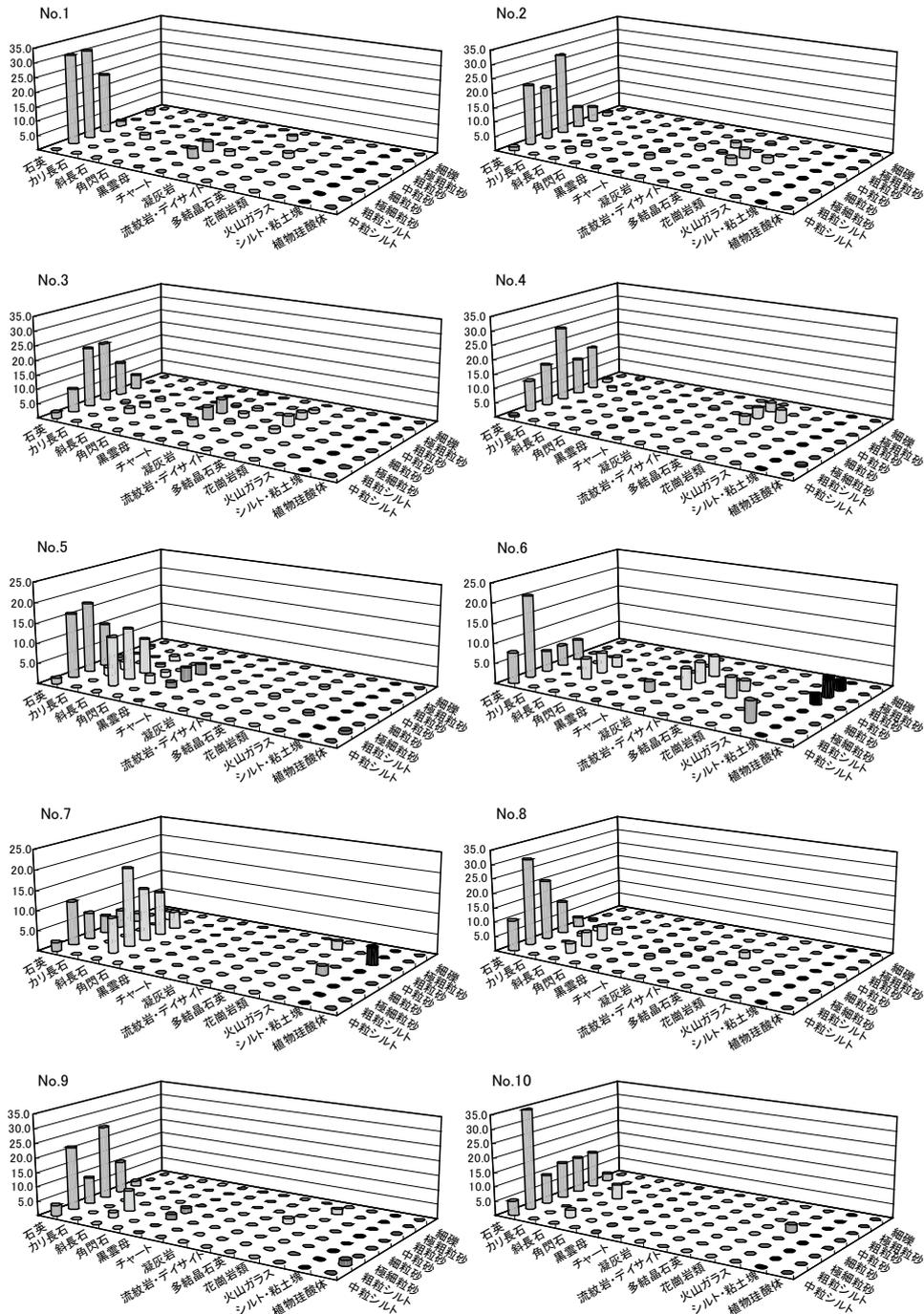


図1. 平井遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

料の焼成温度を以下のように推定した。

800℃未満:角閃石の酸化が認められない。

800℃±:角閃石の酸化が認められる。

1150℃±:極めて微弱な長石類の溶融が認められる。

1150～1200℃:基質を構成する粘土鉱物の非晶質化は中程度に進んでおり、長石類の溶融も認められるが、ムライトの生成はほとんど確認できない。

1200℃±:基質を構成する粘土鉱物の非晶質化が進んでおり、長石類の溶融が認められ、斜長石には微細な針状ムライトが生成している。

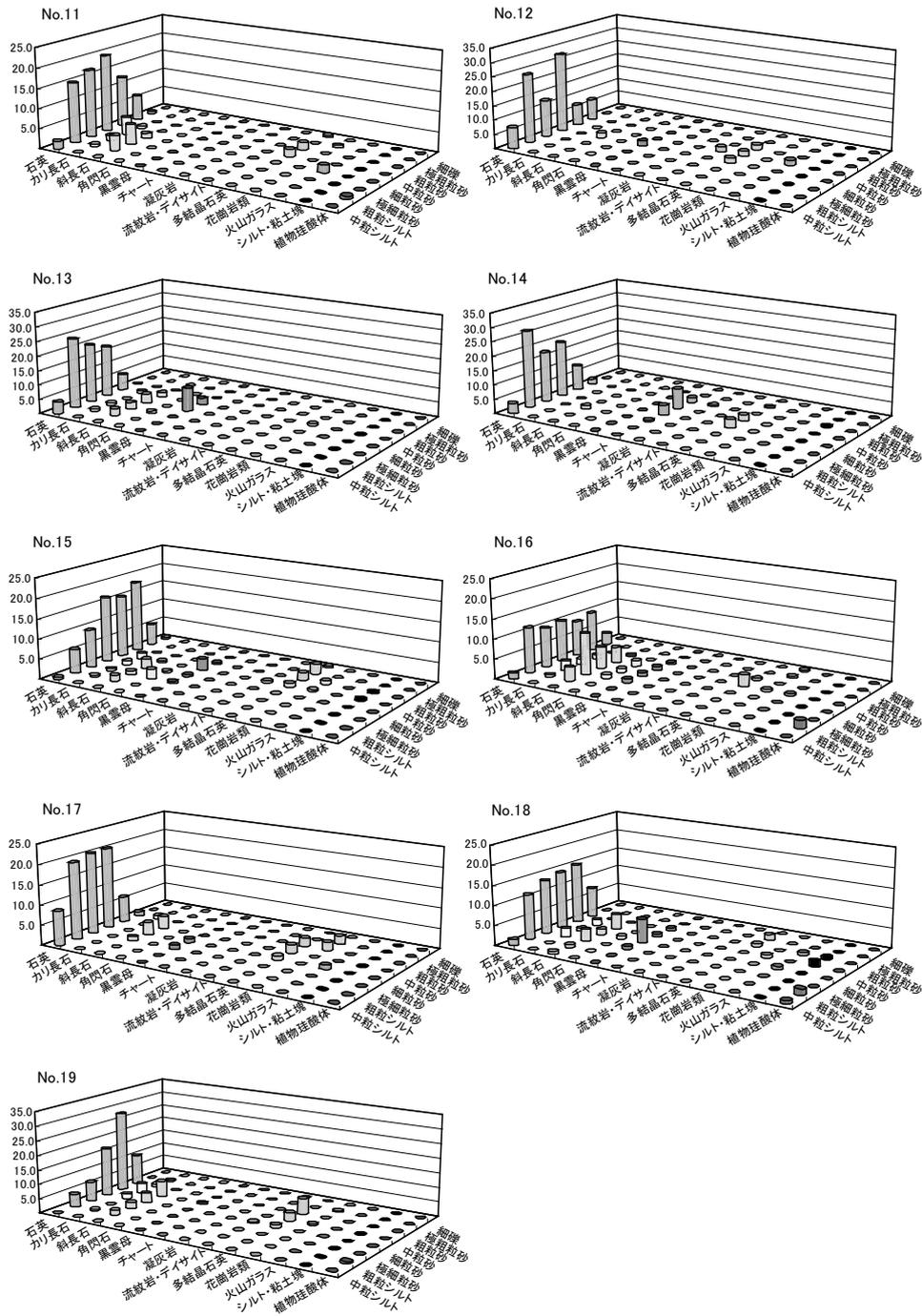


図2. 平井遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

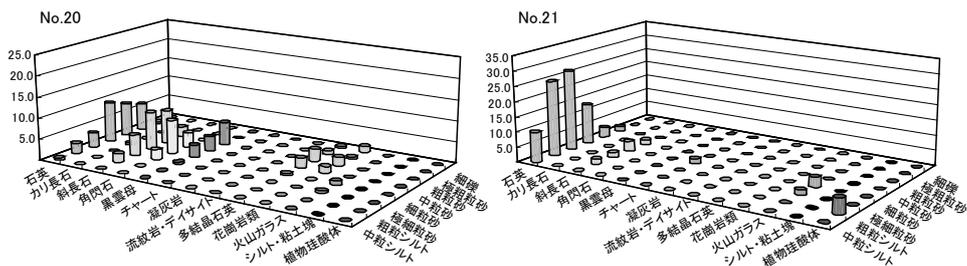


図3. 三反地遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

表2. 薄片観察結果(1)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計	焼成温度(℃)							
		鉱物片						岩石片						その他												
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英			花崗岩類	脈石英	珪化岩	火山ガラス	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体
1	細礫																								0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂	1													1										2	
	粗粒砂																								0	
	中粒砂	1														1									2	
	細粒砂	12		1										2	1										16	
	極細粒砂	18												2											20	
	粗粒シルト	18																							18	
	中粒シルト																								0	
基質																								313		
孔隙																									8	
備考	基質は非晶質化し、灰褐色を示す。長石類、岩片の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。																									
2	細礫																								0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂	2														1									3	
	粗粒砂	8													3										11	
	中粒砂	11												2	1	5	3								22	
	細粒砂	43											1			4									48	
	極細粒砂	28		2									2												32	
	粗粒シルト	32		2								1													35	
	中粒シルト	2																							2	
基質																								934		
孔隙																									23	
備考	基質はほとんど非晶質化しているが、粘土鉱物が微量程度残存している。長石類、岩片の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。流紋岩、凝灰岩は結晶質なものと同結晶質なもの2種が認められる。																									
3	細礫											1	1												2	1200 ~ 1250
	極粗粒砂														2										2	
	粗粒砂	10										1		2		5									18	
	中粒砂	23		2								10	1	3		7									46	
	細粒砂	41	1	3								1	9	2		3									60	
	極細粒砂	41		4									5												50	
	粗粒シルト	16												2											18	
	中粒シルト	4																							4	
基質																								991		
孔隙																									18	
備考	基質はほとんど非晶質化しているが、粘土鉱物が微量程度残存している。長石類、岩片の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。チャートには破碎チャートあり。凝灰岩は低結晶質。ジルコンあり。																									
4	細礫		1																						1	1200±
	極粗粒砂	2														5									7	
	粗粒砂	24	2	1										1		6	7								41	
	中粒砂	20														5									25	
	細粒砂	41																							41	
	極細粒砂	23			1								1												25	
	粗粒シルト	17											1										1		19	
	中粒シルト	1																							1	
基質																								1127		
孔隙																									79	
備考	基質はほとんど非晶質化しているが、粘土鉱物が少量程度残存している。長石類、岩片の溶融が進んでいるものの、残存する斜長石が見られる。斜長石には微細な針状ムライトが生成している。凝灰岩は低結晶質。ジルコンあり。																									
5	細礫																								0	800±
	極粗粒砂	1																							1	
	粗粒砂			2													1								4	
	中粒砂	1		1									4												6	
	細粒砂	16	3	13		2							5			1									40	
	極細粒砂	26	3	19		3							2									1			54	
	粗粒シルト	24		18																				1	43	
	中粒シルト	2																							2	
基質																								853		
孔隙																									14	
備考	基質は黒雲母質で褐色を呈する。長石類の溶融は認められない。角閃石は弱酸化している。火山ガラスはバブルウォール型。																									
6	細礫																								0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂																						1		1	
	粗粒砂														2					1		2			5	
	中粒砂	2		1											2		1					1			7	
	細粒砂	2		2											2		2								8	
	極細粒砂	2		2									1												5	
	粗粒シルト	8																				2			10	
	中粒シルト	3																							3	
基質																								273		
孔隙																									5	
備考	基質はややシルト質で、非晶質化し、灰褐色を示す。長石類は溶融し、斜長石には微細な針状ムライトが生成している。凝灰岩はやや結晶質。火山ガラスはバブルウォール型でほとんどは極細粒砂以下のサイズである。																									

表3. 薄片観察結果(2)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計	焼成温度(℃)							
		鉱物片						岩石片						その他												
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英			花崗岩類	脈石英	珪化岩	火山ガラス	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体
7	細礫																								0	1200±
	極粗粒砂		1															1							2	
	粗粒砂	1		2																					5	
	中粒砂	2		5																					7	
	細粒砂	2		6																	1				9	
	極細粒砂	3		9																					12	
	粗粒シルト	5		4								1													10	
	中粒シルト	1																							1	
	基質																								380	
	孔隙																								8	
備考	基質はややシルト質で酸化鉄が多く、赤褐色を示す。長石類は溶融し、ムライトは微細でごく微量。火山ガラスはバブルウォール型。																									
8	細礫																								0	1150 ~ 1200
	極粗粒砂																								0	
	粗粒砂	1																							1	
	中粒砂	6	2	3										1		4									16	
	細粒砂	20	2	9									1	1	1	1					1				36	
	極細粒砂	37		9									2												48	
	粗粒シルト	54		6																					60	
	中粒シルト	19																							19	
	基質																								949	
	孔隙																								21	
備考	基質はややシルト質で、淡褐色の粘土鉱物が中量程度残存する。長石類は溶融しているが、ムライトは微細できわめて微量でほとんど確認できない。凝灰岩、流紋岩は、結晶質なものと同結晶質なものが認められる。火山ガラスはバブルウォール型。																									
9	細礫																								0	1150±
	極粗粒砂																	1							1	
	粗粒砂	1																							1	
	中粒砂	6														1									7	
	細粒砂	14																							17	
	極細粒砂	5		4																			2		12	
	粗粒シルト	12		1									1											1	15	
	中粒シルト	2																							2	
	基質																								318	
	孔隙																								8	
備考	基質はシルト質で、雲母鉱物、淡褐色粘土鉱物、酸化鉄、石英、長石類、炭質物などで埋められる。長石類はリムがきわめて微弱に溶融している。																									
10	細礫																								0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂	1																							1	
	粗粒砂	5																							5	
	中粒砂	5		2																	1				8	
	細粒砂	5																							5	
	極細粒砂	4																							4	
	粗粒シルト	14		1																					15	
	中粒シルト	2																							2	
	基質																								468	
	孔隙																								16	
備考	基質は非晶質化が進んでいるものの、粘土鉱物が少量程度残存する。長石類の溶融は著しく、斜長石には径0.05mmに達する針状ムライトも生成している。火山ガラスはバブルウォール型を呈するが、再溶融して発泡している。																									
11	細礫																								1	800±
	極粗粒砂	1																							2	
	粗粒砂	10																							13	
	中粒砂	20	1																						24	
	細粒砂	31	7	2																					45	
	極細粒砂	27	2	8																			1		38	
	粗粒シルト	24	1	6									1											1	33	
	中粒シルト	3																							3	
	基質																								757	
	孔隙																								20	
備考	基質はシルト質で、雲母鉱物、淡褐色粘土鉱物、酸化鉄、石英、長石類、炭質物などで埋められる。長石類の溶融は認められない。弱酸化した角閃石あり。																									
12	細礫																								0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂																								0	
	粗粒砂	4																							5	
	中粒砂	4																							7	
	細粒砂	15		1																					18	
	極細粒砂	7																							7	
	粗粒シルト	13																							13	
	中粒シルト	4																							4	
	基質																								552	
	孔隙																								8	
備考	基質は非晶質化し、淡灰褐色を示す。長石類、岩片の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。流紋岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。																									

表4. 薄片観察結果(3)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成															合計	焼成温度(°C)									
		鉱物片					岩石片					その他															
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト			多結晶石英	花崗岩類	脈石英	珪化岩	火山ガラス	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体	
13	細礫																									0	800±
	極粗粒砂																									0	
	粗粒砂																		1							1	
	中粒砂	7	1	2																						14	
	細粒砂	22		4							1	10														37	
	極細粒砂	25	1	3		1	1		1	1																33	
	粗粒シルト	30	1	3																						34	
	中粒シルト	5																								5	
基質																							626				
孔隙																								22			
備考	基質は黒雲母質で褐色を呈する。長石類の溶融は認められない。角閃石は弱酸化している。火山ガラスはバブルウォール型。																										
14	細礫																									0	1200±
	極粗粒砂															1										1	
	粗粒砂	3											3		1								1			8	
	中粒砂	15											12				4									31	
	細粒砂	33											6			5										44	
	極細粒砂	30		2									1													33	
	粗粒シルト	46										1														47	
	中粒シルト	6																								6	
基質																							903				
孔隙																								24			
備考	基質はややシルト質で、非晶質化し、灰褐色を示す。長石類は溶融し、斜長石には微細な針状ムライトが生成している。凝灰岩は低結晶質。バブルウォール型火山ガラスあり。																										
15	細礫	1														1										2	800未満
	極粗粒砂	11														5										16	
	粗粒砂	36								1						4	2					1				44	
	中粒砂	31	3	1					1	6					1	2	1						1			47	
	細粒砂	33	2	5		1				1	1															43	
	極細粒砂	19	1	2		5				1	3															31	
	粗粒シルト	12	1	3																						16	
	中粒シルト	1																								1	
基質																							808				
孔隙																								19			
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は未酸化である。長石類の溶融も認められない。ざくろ石、ジルコン、植物珪酸体あり。																										
16	細礫																1									1	800未満
	極粗粒砂	6															1									7	
	粗粒砂	20		1							1					1										23	
	中粒砂	18	2	8		3					2					6	1					1				41	
	細粒砂	21	3	11		2					2															39	
	極細粒砂	20	5	21		2	1				2															51	
	粗粒シルト	23	1	7																				4		35	
	中粒シルト	3																								3	
基質																							831				
孔隙																								24			
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。長石類の溶融は認められない。火山ガラスはバブルウォール型。																										
17	細礫																									0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂																	2								2	
	粗粒砂	1	1														2	2								6	
	中粒砂	6		3													2									11	
	細粒砂	19		3						1						1						1				25	
	極細粒砂	19		1																						21	
	粗粒シルト	18										2														20	
	中粒シルト	8																								8	
基質																							726				
孔隙																								19			
備考	基質は非晶質化し、淡褐色を示す。長石類、岩片の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。火山ガラスはバブルウォール型。																										
18	細礫																									0	800未満
	極粗粒砂															2										2	
	粗粒砂	10								1						1					1	1				14	
	中粒砂	20	2	5						1								1					2			31	
	細粒砂	19	1	2		1				8	1											1				33	
	極細粒砂	18	3	4							1	3														29	
	粗粒シルト	15		1								1												2		19	
	中粒シルト	2		1																				1		4	
基質																							724				
孔隙																								27			
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は未酸化である。長石類の溶融も認められない。ジルコンあり。火山ガラスはバブルウォール型。																										

表5. 薄片観察結果(4)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計	焼成温度(°C)								
		鉱物片								岩石片						その他											
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英			花崗岩類	脈石英	珪化岩	火山ガラス	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体	
19	細礫																									0	800未満
	極粗粒砂		1															1								2	
	粗粒砂	19	2													10		1								32	
	中粒砂	50	6	10						1		1				5	1									74	
	細粒砂	30	3	6												1	2									42	
	極細粒砂	12		4																						16	
	粗粒シルト	8	1	3																				1		13	
	中粒シルト																									0	
	基質																								686		
孔隙																								11			
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は未酸化である。長石類の溶融も認められない。石英には、フィロライトを包有するものが認められる。パブルウォール型火山ガラスあり。																										
20	細礫															1	3									4	800±
	極粗粒砂	1														2	1									4	
	粗粒砂	13		5						11						6	4									39	
	中粒砂	16		16		7				7	1					5	3									55	
	細粒砂	19	1	18		16				6	1					1					2					64	
	極細粒砂	7		10		5				1										1						24	
	粗粒シルト	5		4																						9	
	中粒シルト	1																								1	
	基質																								811		
孔隙																								12			
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は弱酸化している。長石類の溶融も認められない。石英には、フィロライトを包有するものが認められる。火山ガラスは、パブルウォール型。																										
21	細礫																									0	1200 ~ 1250
	極粗粒砂																									0	
	粗粒砂	1																								1	
	中粒砂	2		1																						3	
	細粒砂	8		2								1									2					13	
	極細粒砂	16		1																	1					18	
	粗粒シルト	15		1																				3		19	
	中粒シルト	6																								6	
	基質																								353		
孔隙																								4			
備考	基質は非晶質化しているが、淡褐色の粘土鉱物が少量程度残存する。長石類、岩石の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。火山ガラスはパブルウォール型。																										

1200 ~ 1250°C : 基質はほとんど非晶質化しており、長石類および岩石の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。

前述した鉱物片と岩石片の産状と焼成温度の推定結果より、今回の分析試料の胎土の特性は、以下のように分類することができる。

A 類: チャート、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類など多種類の岩石を含む胎土。鉱物片は石英が非常に多いことが特徴であり、微量の斜長石と試料によってはカリ長石などが含まれる。これに分類される試料は、No.1 ~ 3、6、8、10、12、14、21 の計 9 点であり、いずれも須恵器である。なお、No.10、12、21 の 3 点は岩石片の種類と量比が少ないが、推定焼成温度が最も高い 1200 ~ 1250°C であることから、岩石片の溶融を考慮して A 類に分類した。9 点の推定焼成温度は、No.8 と No.14 の 2 点を除く 7 点で 1200 ~ 1250°C、No.14 はそれよりも若干低い 1200°C ±、No.8 はさらに低い 1150 ~ 1200°C である。

B 類: 岩石片の産状は、多結晶石英と花崗岩類の 2 種類を主体とする胎土。鉱物片の産状の違いより、さらに B1 類と B2 類に細分される。

B1 類: 鉱物片では石英が非常に多いのに対し、他の鉱物片は微量であり、カリ長石と斜長石および黒雲母を含むことが特徴である。これに分類される試料は、No.4、9、11、13、15、17、18、19 の

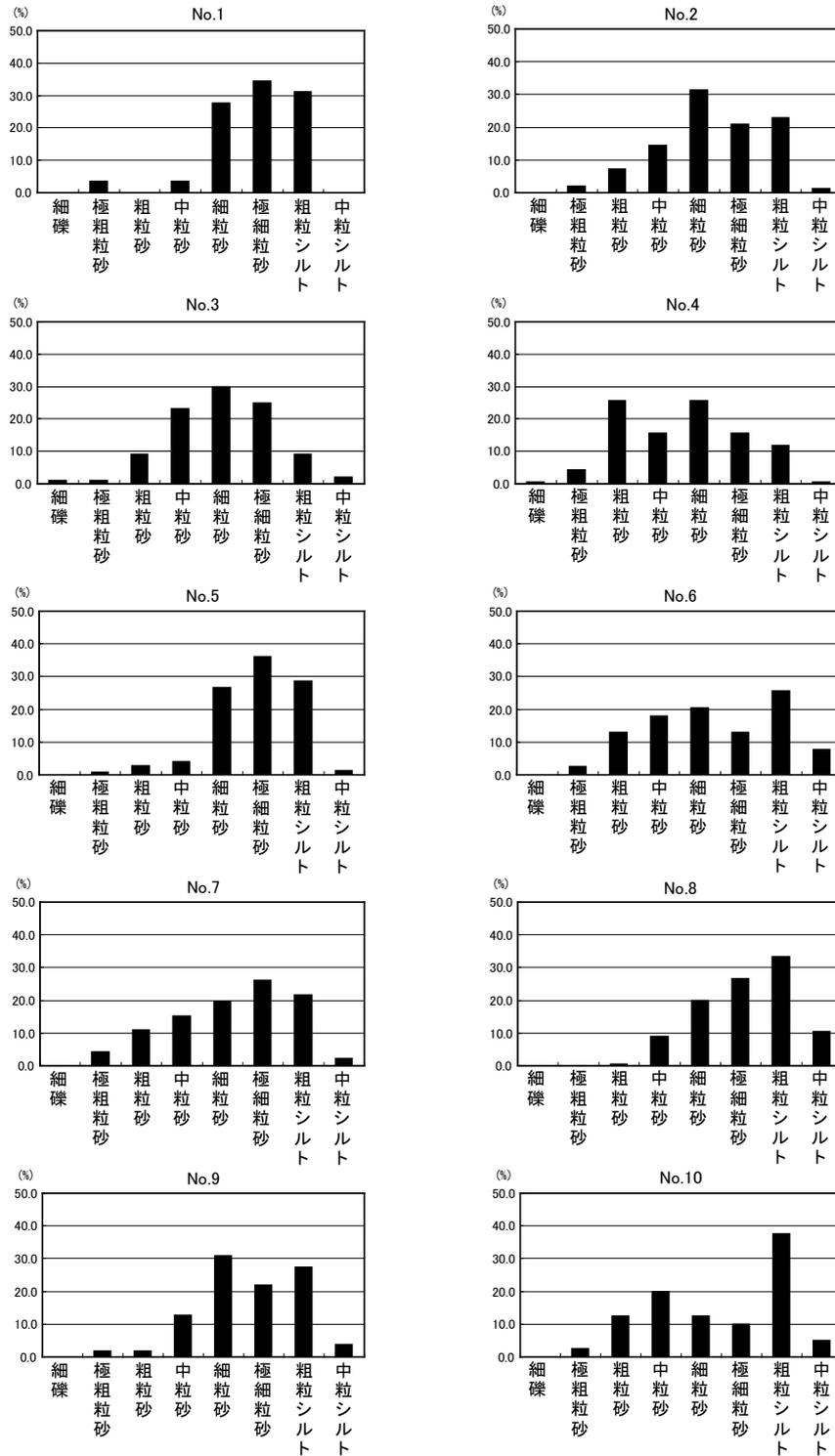


図4. 平井遺跡出土試料の砂の粒径組成(1)

8点であり、これらのうち須恵器が4点、土師器が2点、弥生土器と瓦質土器が1点ずつである。

B2類: 鈹物片では石英と斜長石の2者を主体とし、その他の鈹物片としては、微量のカリ長石と微量、または少量の角閃石と黒雲母を含むことが特徴である。これに分類される試料は、No.5、7、16、20の4点であり、これらのうち須恵器と弥生土器が1点ずつ、土師器が2点である。

B類の試料の推定焼成温度は、1150℃ ±以上の試料と 800℃ ±以下の試料に2分される。1150℃ ±

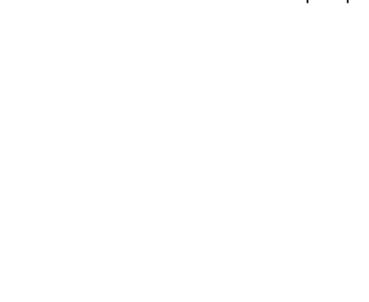
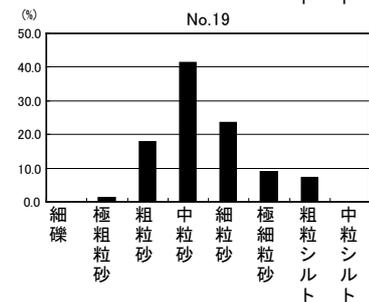
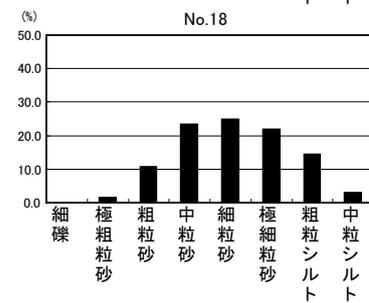
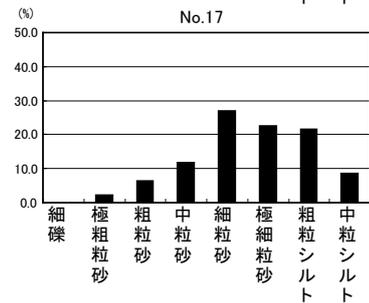
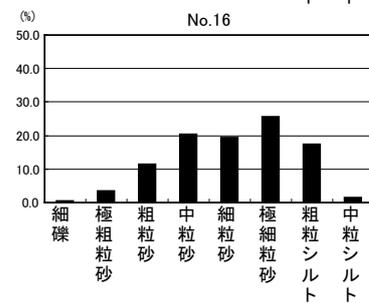
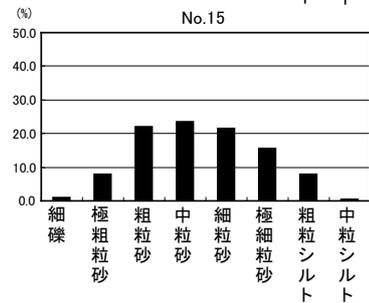
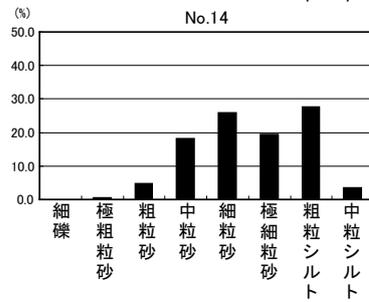
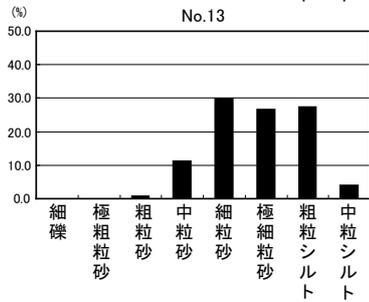
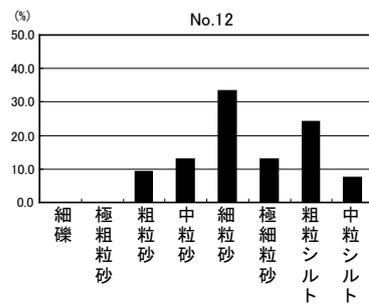
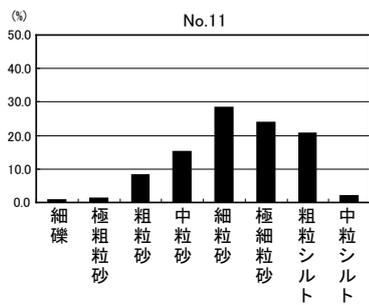


図5. 平井遺跡出土試料の砂の粒径組成(2)

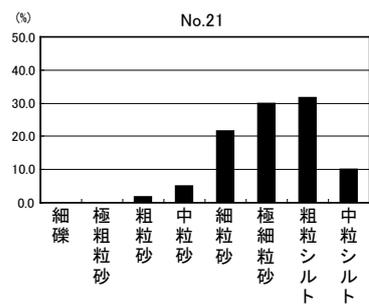
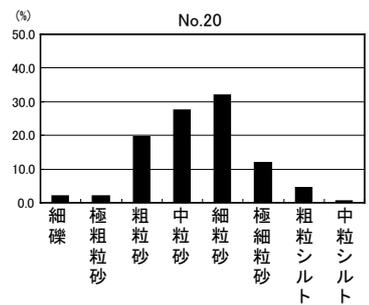


図6. 三反地遺跡出土試料の砂の粒径組成

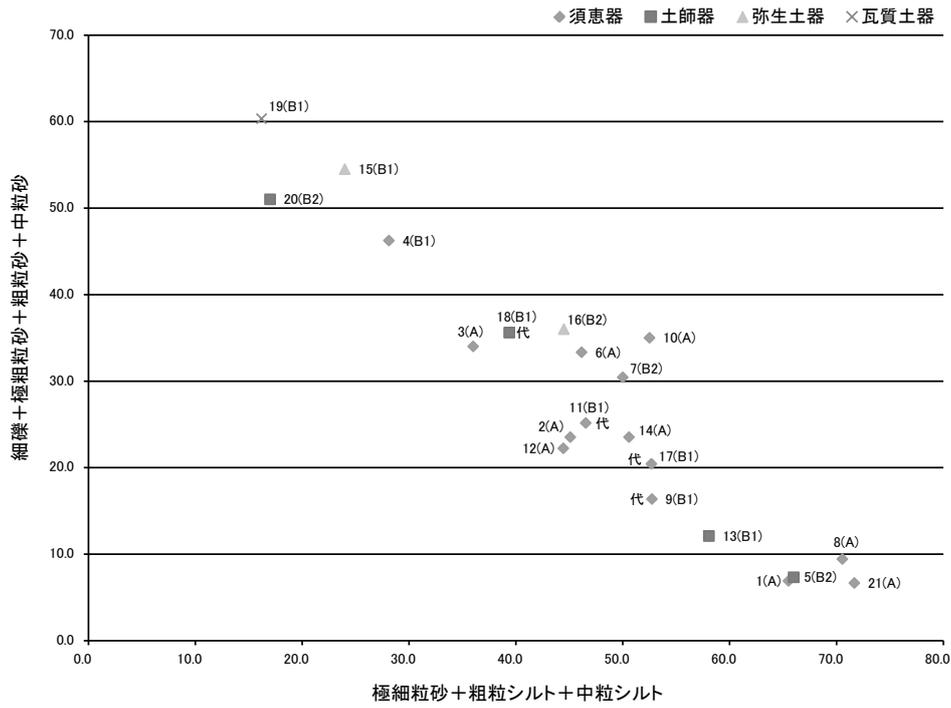


図 7. 砂の粒径組成散布図

図中の数字は試料 No.、括弧内は鉢物・岩石組成、代は古代の試料

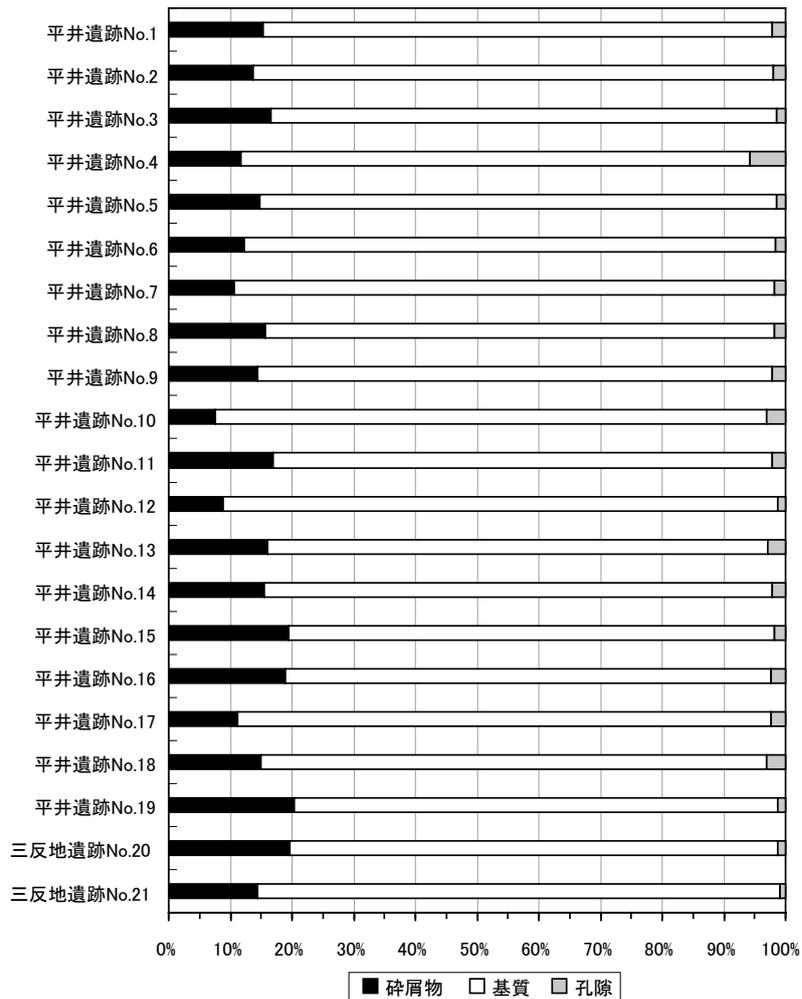


図8. 碎屑物・基質・孔隙の割合

以上の試料はいずれも須恵器であり、800℃±以下の試料には土師質とされた須恵器（No.11）以外は、いずれも土師器、弥生土器、瓦質土器である。

各試料の分類結果および焼成温度は、試料一覧を示した表1に併記する。

(2) 砂分全体の粒径組成（図4～7）

図4～6において、各試料のモードにおける粒径は粗粒砂から粗粒シルトまでの各粒径が認められるが、詳細に見れば試料によってモードとなる粒径だけではなく、粒径分布が細粒側に偏るか粗粒側に偏った組成なども認められる。このような傾向をより明確に捉える目的で、細粒砂より粗粒側の粒径（細礫、極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂）と細粒砂より細粒側の粒径（極細粒砂、粗粒シルト、中粒シルト）に分けて、それぞれの割合を軸として散布図に示した（図7）。

この散布図では、右下の領域ほど細粒傾向が強く、左上の領域ほど粗粒傾向が強いことを示す。同図によると、粗粒傾向の強い試料は、No.4、15、19、20の4点であり、細粒傾向の強い試料は、No.1、5、8、21の4点である。これら以外の13点の試料は、中間的な領域にばらつく。No.13は、中間的な領域と細粒傾向の強い領域の間に位置している。

各試料の属する領域を一覧にして、表1に併記する。

(3) 碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合（図8）

碎屑物の割合に注目すると、いずれの試料もほぼ10～20%の範囲でばらつき、特に集中する値は認められない。したがって、碎屑物の割合における分類はできない。

4 考察

(1) 胎土から推定される地質学的背景

土器胎土中に含まれる碎屑物の種類およびその構成比は、土器の材料として使用された砂や粘土の採取された場所の地質学的背景を反映している。ただし須恵器の場合は、1000℃以上の高い焼成温度によって熔融、消失してしまう鉱物や岩石片などがあるため、出現する鉱物片や岩石片の種類や量比の評価にあたっては、焼成温度も考慮する必要がある。すなわち、胎土中には熔融しにくい鉱物片や岩石片がより多く残る傾向があり、さらに焼成前の素地土中には含まれていた鉱物や岩石が胎土中では消失していることもある。今回の須恵器の試料をみると、全て1150℃以上の焼成温度が推定されているが、熔融し難い石英以外にも、比較的多くの種類の鉱物片や岩石片が認められる。この状況から、今回の分析試料では、須恵器試料でも焼成前の素地土中の鉱物・岩石組成を、概ねとどめてみるとよい。これを考慮して、以下検討を進める。

今回の21点の試料の分析結果より、鉱物片と岩石片の種類構成からA類とB類に分類することができた。A類については、多種類の岩石片が混在することから、比較的広い流域を持つ河川の下流域の堆積物に由来することが推定される。その流域には、チャートや頁岩などの堆積岩類からなる地質の分布と、凝灰岩や流紋岩・デイサイトなどの火砕岩や火山岩からなる地質、さらに花崗岩類からなる深成岩類が分布する可能性がある。一方B類については、花崗岩類を特徴的に含むことから、花崗岩類により構成される山地や、同様の地質からなる山麓の平野や盆地に堆積する堆積物に由来する可能性がある。

ここで、平井遺跡が位置する周辺の地質学的背景を、山口地学会（1995）や日本の地質「中国地方」編集委員会（1987）などの記載に従い概観する。本遺跡周辺の山地は、中生代白亜紀に形成された領家帯とよばれる花崗岩類からなる地質で構成されている。この地質は、大島から柳井市、熊毛郡および光市、下松市付近まで分布しており、さらにその分布域で柳井市や田布施町南部、下松市南部などには、部分的に片麻岩類や片岩類からなる領家帯変成岩も分布している。また、領家帯花崗岩類の北側には、ほぼ同時期の花崗岩類からなる広島花崗岩が分布している。このような地質学的背景は、A類の地質学的背景と全く異なり、B類の地質学的背景とよく一致する。したがって、今回の分析試料21点のうち、B類に分類された試料が「在地」（以下、「在地」）である可能性が高く、A類の胎土に分類された試料は、「搬入」（以下、「搬入品」）である可能性が高い。

搬入品と判定したA類の胎土を有する試料は、全て須恵器である。須恵器の生産地については、今後周辺域における窯跡の分布などを考慮して、分析調査例を蓄積する必要がある。それは以下の理由による。

A類の胎土から推定されるような地質学的背景を有する地域は、西日本地域で広範に認められる。例えば田布施町周辺域に限っても、A類胎土の特徴の一つである堆積岩類の分布をみると、広島花崗岩の分布域の北側の岩国市中部に中生代ジュラ紀の堆積岩類からなる玖珂層群が分布しており、その分布域を流れる錦川の上流域には古生代ペルム紀の堆積岩類からなる錦層群の分布が認められる。さらに、錦川の上流域には中生代白亜紀後期の流紋岩質凝灰岩からなる阿武層群が分布しており、下流域には広島花崗岩の分布も見られる。また地質記載のみからみれば、岩国市域の錦川下流域でも、A類の胎土から推定される地質学的背景を有する地域といえる。いずれにしても、A類の胎土を有する須恵器の生産地の推定は、今後の検討課題であり、窯跡で生産された須恵器試料についても、分析調査例を蓄積することが望まれる。

一方B類の胎土は、さらにB1類とB2類に細分された。両細分類の違いは、斜長石と角閃石の量比にあるが、B類の岩石片組成は花崗岩類を特徴とすることから、いずれの鉱物も主に花崗岩類に由来すると考えられる。花崗岩類は、鉱物組成によって分類されていることから、B1類とB2類の違いは、背景となる花崗岩類の岩石の種類が異なることに由来する可能性が大きい。

斜長石がカリ長石と同量程度であり、黒雲母の比較的多いという特徴のB1類は、おそらく黒雲母アダムロ岩に由来し、斜長石と角閃石の比較的多い鉱物組成のB2類は、おそらく角閃石黒雲母花崗閃緑岩に由来すると考えられる。前述した地質記載に従えば、本遺跡の周囲にある山地では、領家帯の花崗岩類は主に角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなり、その北側に分布する広島花崗岩は主に黒雲母アダムロ岩からなる。したがって、本遺跡の地理的位置からみて、在地性の高い胎土はB2類であり、B1類は岩国市南部かあるいは局所的に広島花崗岩の分布する光市西部など、平井遺跡からやや離れた地域で生産されたことが示唆される。

(2) 各種土器の胎土の違いについて

1) 須恵器

上述したようにA類の須恵器試料は搬入品、B類の須恵器試料は在地である可能性が高い。また、前項で述べた通り、A類の試料はB類の試料に比べて、明らかに焼成温度の高い傾向を示している。

このことは、生産地によって、焼成温度や胎土の調整等の製作技術が異なっていたことを示唆する。

一方、時代・時期別にみると、近隣の三反地遺跡出土試料も含め、古墳時代の須恵器 11 点のうち 9 点が搬入品の A 類であり、在地の B 類は B1 類と B2 類がそれぞれ 1 点ずつである。これに対して、古代の須恵器 3 点は、いずれも在地の B1 類であった。この結果から、古墳時代と古代とでは、須恵器の生産と供給に関わる事情が異なっていたことが窺える。さらに在地の B 類の試料でも、古墳時代の試料にはより在地性の高い B2 類が含まれるが、古代の試料は平井遺跡からやや離れた生産地が想定された B1 類のみである。この点からも、古墳時代と古代との生産と供給に関わる事情が異なっていたことが看取される。

また、A 類と B 類の胎土の特徴別に、粒径組成の相関関係についても検討したところ、A 類の試料の中では細粒傾向の強い No.1、8、21 の 3 点と、それ以外の 6 点とに分けられたが、この分類と相関する他の分類指標（出土遺跡、器形および時代）は見出せなかった。搬入品とされた A 類の中で、粒径組成の違いがどのような事情を反映しているかについては、今後より多くの分析事例が必要と考えられる。

これに対して、B 類の須恵器試料中では、No.4 が特徴的に粗粒傾向が強いことが把握された。図 7 によれば、同様の粒径組成の傾向を示す試料の中には、No.4 同様に甕とされた弥生土器があることから、No.4 の粒径組成の特徴は、甕という器形の違いを反映している可能性がある。

2) 土師器・弥生土器・瓦質土器

土師器試料 4 点は、B1 類と B2 類にそれぞれ 2 点ずつに分かれるが、B1 類は古墳時代と古代の違いはあるもののいずれも椀であり、B2 類は甑と移動式カマドである。これより、分析試料数は少ないが、器形と胎土の間には相関あることが示唆される。上述の在地：搬入の判定根拠を援用すれば、B1 類の椀は本遺跡から若干離れた地域で生産され、B2 類の甑や置カマドは本遺跡や近隣の三反地遺跡周辺で生産されたと考えられる。

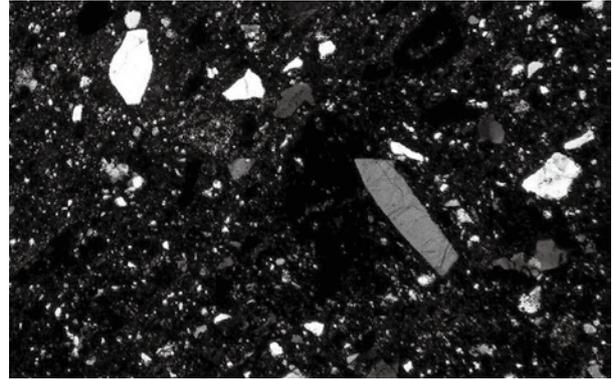
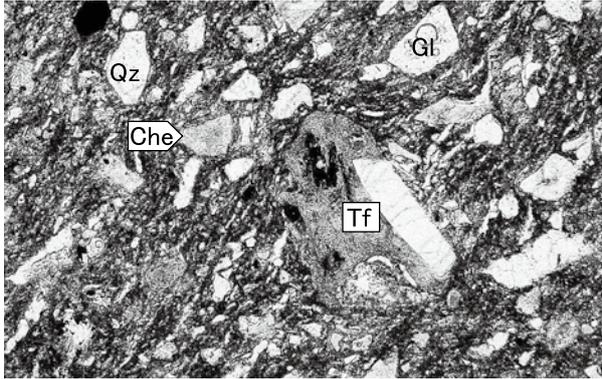
また、弥生土器試料 2 点は B1 類の甕と B2 類の壺であったが、器形等との相関は判断しがたい。ただし、B1 類と B2 類という 2 種類の胎土が混在する状況は、すでに弥生時代に生じていたことが理解される。

最後に、中世の瓦質土器は B1 類であったことから、本遺跡周辺ではなく、上述同様やや離れた地域で生産された可能性がある。

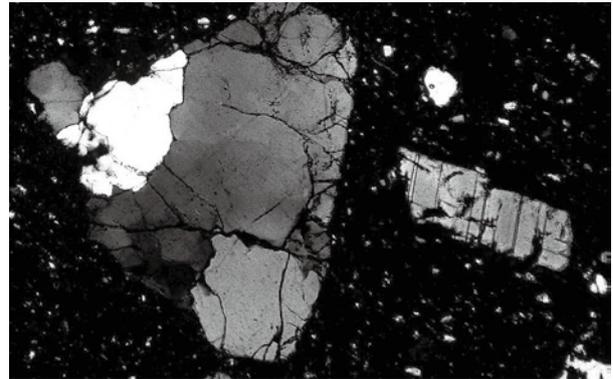
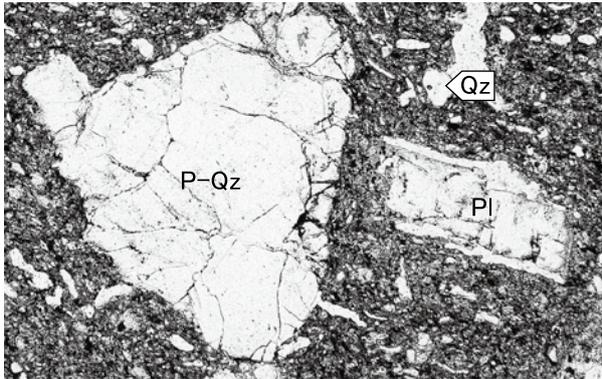
引用文献

- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集,120-121.
日本の地質「中国地方」編集委員会,1987,日本の地質 7 中国地方,共立出版,290p.
山口地学会,1995,新編山口県地質図(1:150,000).

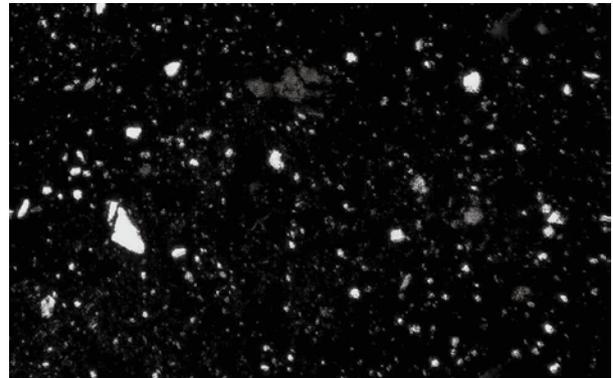
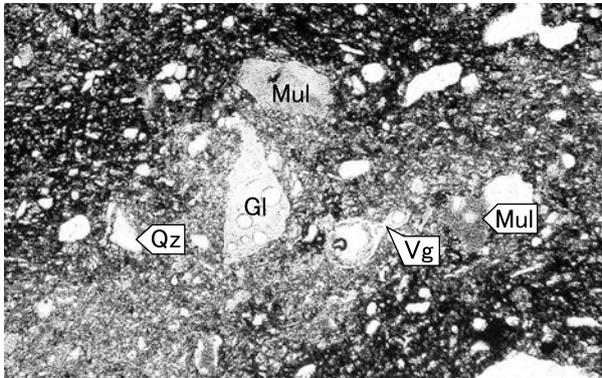
図版1 胎土薄片(1)



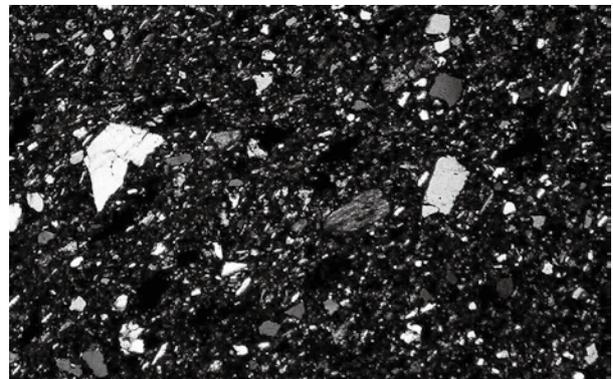
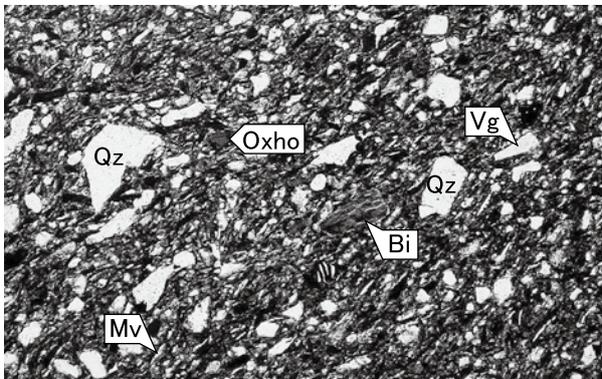
1.No.3 平井遺跡 須恵器 器台片 中央部遺物包含層 20130305 古墳



2.No.4 平井遺跡 須恵器 甕 中央部遺物包含層 20130309 古墳



3.No.10 平井遺跡 須恵器 提瓶 中央部遺物包含層 20130122 古墳

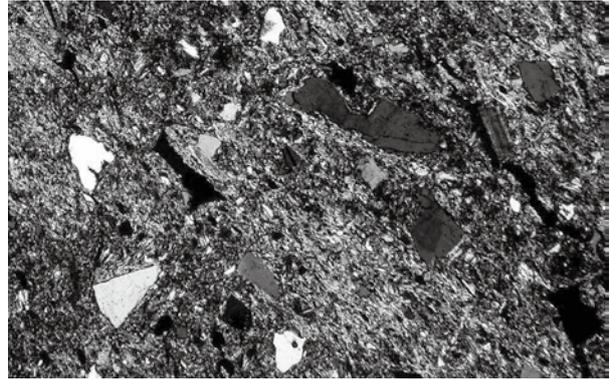
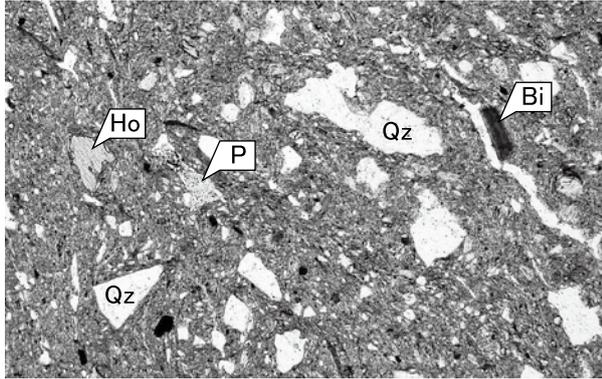


4.No.13 平井遺跡 土師器 椀 西部遺物包含層 20121218 古墳

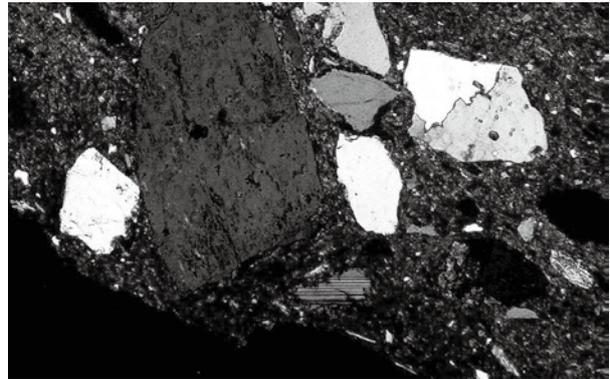
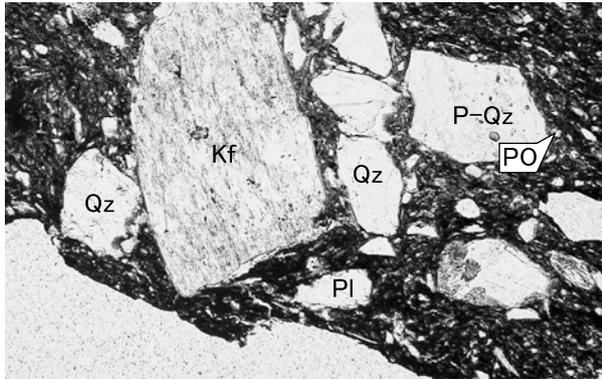
Qz:石英. Pl:斜長石. Oxho:酸化角閃石. Mv:白雲母. Bi:黒雲母. Che:チャート.
Tf:凝灰岩. P-Qz:多結晶石英. Vg:火山ガラス. Mul:ムライト. Gl:熔融ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

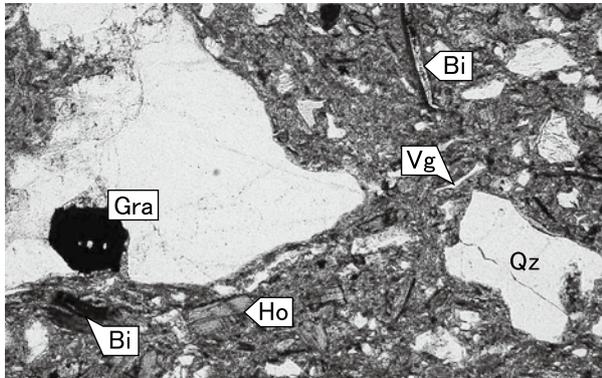
図版2 胎土薄片(2)



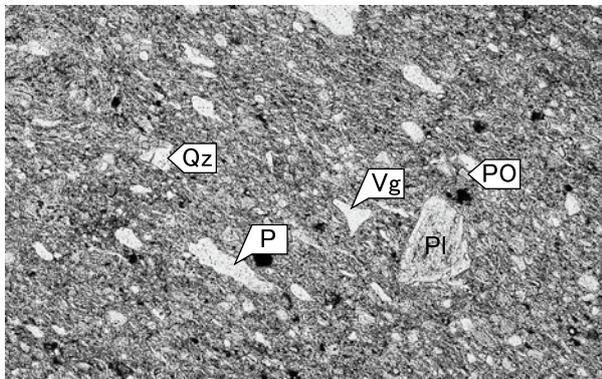
5.No.15 平井遺跡 弥生土器 甕 中央部遺物包含層 20130117 弥生



6.No.19 平井遺跡 瓦質土器 鍋 表採 20121225 中世



7.No.20 三反地遺跡 土師器 移動式カマド 遺物包含層 20130128 古墳



8.No.21 三反地遺跡 須恵器 杯蓋 遺物包含層 20130129 古墳

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. P-Qz:多結晶石英.

Gra:花崗岩. Vg:火山ガラス. PO:植物珪酸体. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

水奥遺跡・中屋B遺跡発掘調査に伴う放射性炭素年代測定業務 報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、水奥遺跡および中屋B遺跡の発掘調査で検出された遺構に関する年代情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1 試料

放射性年代測定は、水奥遺跡A区SX1、SD1、中屋B遺跡SI2、SI3の各遺構から出土した炭化材5点について実施する(表1)。なお、分析対象とした炭化材については、試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)、木材組織については、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。その結果、水奥遺跡の炭化材3点は、SX1の2点が広葉樹のコナラ属アカガシ亜属と種類不明の針葉樹、SD1の1点がアカガシ亜属に同定された。また、中屋B遺跡の炭化材は、いずれも広葉樹でSI2の1点がスダジイ、SI3の1点がクリに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管壁の厚さは中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

表1. 樹種同定結果

遺跡名	地区・遺構名・試料名	試料状態	試料状態(種類)
水奥遺跡	A区SX1サンプル①	炭化材	針葉樹
	A区SX1サンプル②	炭化材	コナラ属アカガシ亜属
	A区SD1	炭化材	コナラ属アカガシ亜属
中屋B遺跡	SI2	炭化材	スダジイ
	SI3	炭化材	クリ

2 分析方法

分析は、いずれも AMS 法で実施する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する (AAA 処理)。水酸化ナトリウム処理については、試料の損耗がおこるため、注意深く行う。定法では 1N の塩酸ならびに水酸化ナトリウムを用いるが、試料の損耗状況によっては水酸化ナトリウムの濃度を薄くする場合がある。この処理を行った場合は「AaA」と記載する。

試料を燃焼させてあと、不純物 (水など) を取り除き、精製された CO_2 を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 を用いる。なお暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ と 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは σ や 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 2 に示す。また各遺跡の暦年較正結果の比較を図 1 に示す。

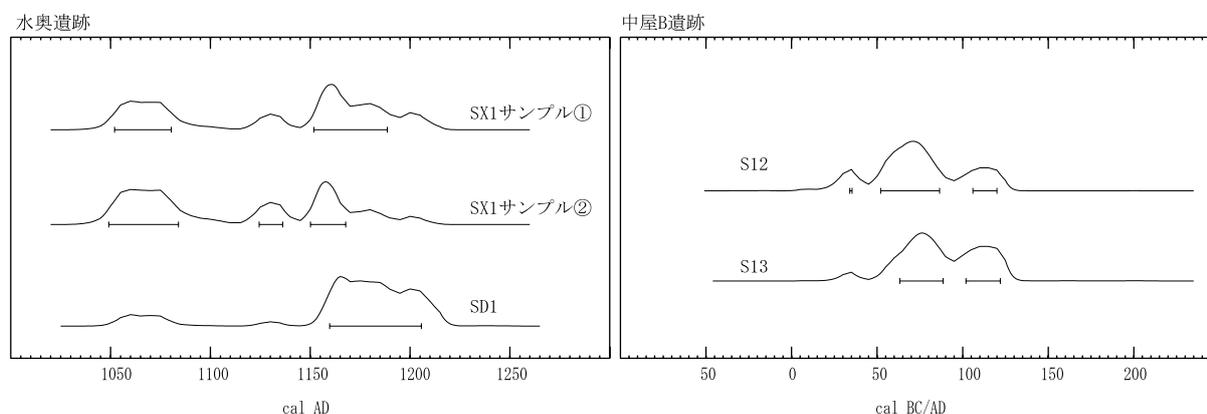


図 1 暦年較正結果の比較

表 2. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

地点 層位 試料状態	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
					分散度	cal BC/AD		cal BP	
水奥遺跡 A区SX1 サンプル① 炭化材	AAA	930±20	-27.51±0.29	890±20 (890±19)	σ	cal AD 1,052 - cal AD 1,080	cal BP 898 - 870	0.401	IAAA- 132135
						cal AD 1,152 - cal AD 1,189	cal BP 798 - 761	0.599	
						cal AD 1,496 - cal AD 1,506	cal BP 454 - 444	0.353	
						cal AD 1,120 - cal AD 1,140	cal BP 830 - 810	0.084	
水奥遺跡 A区SX1 サンプル② 炭化材	AAA	890±20	-24.26±0.32	900±20 (898±18)	σ	cal AD 1,049 - cal AD 1,084	cal BP 901 - 866	0.571	IAAA- 132136
						cal AD 1,124 - cal AD 1,136	cal BP 826 - 814	0.131	
						cal AD 1,150 - cal AD 1,206	cal BP 800 - 744	0.298	
						cal AD 1,044 - cal AD 1,100	cal BP 906 - 850	0.486	
水奥遺跡 A区SD1 炭化材	AAA	890±20	-25.65±0.18	870±20 (874±19)	σ	cal AD 1,160 - cal AD 1,206	cal BP 790 - 744	1.000	IAAA- 132137
						cal AD 1,051 - cal AD 1,081	cal BP 899 - 869	0.107	
						cal AD 1,152 - cal AD 1,219	cal BP 798 - 731	0.893	
						cal AD 1,119 - cal AD 1,143	cal BP 831 - 807	0.139	
中屋B遺跡 S12 炭化材	AaA	1950±20	-26.00±0.19	1930±20 (1930±21)	σ	cal AD 34 - cal AD 35	cal BP 1,916 - 1,915	0.012	IAAA- 132138
						cal AD 52 - cal AD 87	cal BP 1,898 - 1,863	0.790	
						cal AD 106 - cal AD 120	cal BP 1,844 - 1,830	0.198	
						cal AD 25 - cal AD 43	cal BP 1,925 - 1,907	0.111	
中屋B遺跡 S13 炭化材	AaA	1960±20	-26.00±0.19	1920±20 (1918±20)	σ	cal AD 63 - cal AD 89	cal BP 1,887 - 1,861	0.594	IAAA- 132139
						cal AD 102 - cal AD 122	cal BP 1,848 - 1,828	0.406	
						cal AD 30 - cal AD 37	cal BP 1,920 - 1,913	0.019	
						cal AD 51 - cal AD 129	cal BP 1,899 - 1,821	0.981	

1)処理方法のAAAは、1Nの塩酸ならびに水酸化ナトリウムを用いる、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。試料の損耗状況によっては水酸化ナトリウムの濃度を薄くする場合がある。この処理を行った場合は「AaA」と記載する。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。暦年の計算には、補正年代の括弧内に示した1桁目を丸める前の値を使用。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率は σ が68.3%、 2σ が95.4%である。相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

水奥遺跡：各遺構の補正年代と暦年較正年代 (2σ 確率1位の値) をみると、SX1の炭化材片2点のうち、サンプル①が $890 \pm 20\text{BP}$ (cal AD 1147-1213)、サンプル②が $900 \pm 20\text{BP}$ (cal AD 1044-1100)、SD01の炭化材片が $870 \pm 20\text{BP}$ (cal AD 1152-1219) を示す。各試料の年代値は近似する。

中屋B遺跡：SI2の炭化材片は $1930 \pm 20\text{BP}$ (cal AD 46-126) を示す。SI3の炭化材片は $1920 \pm 20\text{BP}$ (cal AD 51-129) を示す。両者は誤差範囲内で一致する年代値を示す。

4 考察

今回調査を行った水奥遺跡の溝および不明遺構から出土した炭化材は、近似する年代値を示した。暦年較正年代で11世紀～12世紀頃の年代を示している。木材は外側に二次肥大成長を繰り返しながら年輪を蓄積していくため、中心の年輪ほど、古い年代値を示すことから、今回のような炭化材片の場合、最外年輪に相当するとは限らないので多少の誤差が生じていることを考慮しておく必要がある。測定対象とした炭化材の樹種は、SX1のサンプル②とSD1が常緑広葉樹のスタジイ、SX1のサンプル①が針葉樹材であった。スタジイは常緑広葉樹林の主要構成要素であるが、萌芽更新能力が高く、照葉樹林域における二次林を構成要素でもある。今回の炭化材片が、樹齢の長い木を使用しているとすれば炭化材片の年代値と伐採・利用された年代との誤差は比較的大きくなっている可能性がある。逆に二次林をなす若齢のスタジイを利用している場合、炭化材片の年代値と伐採・利用された年代との誤差は大きくないことになる。この点については当時の植生等の情報を踏まえ慎重に評価する必要がある。

一方、中屋 B 遺跡の SI2・SI3 の炭化材は、誤差範囲内で一致する年代を示しており、両遺構はほぼ同時期に存在した可能性が推定される。得られた暦年年代は 1 世紀～2 世紀初頭を示しており、西本編（2007）による弥生時代とその前後期の 14C 年代値の集成と比較すると、弥生時代後期に比定される。SI2 の炭化材はスダジイ、SI3 の炭化材はクリに同定された。スダジイは上記した生態性を持ち、クリは二次林に普通に生育する落葉高木となる樹種である。上記したように年代値と伐採・利用された年代との誤差は多少の誤差が生じていることを考慮しておく必要がある。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- 西本豊弘 編,2007, 新弥生時代のはじまり第 2 巻 縄文時代から弥生時代へ. 雄山閣, 185p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

堀川遺跡図版



堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡遠景



堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡全景



堀川遺跡・平井遺跡全景

図版 2



調査区全景



調査前全景（西から）



完掘全景（南から）



調査区東壁北半部土層断面（西から）



出土遺物

平井遺跡図版



調査区全景



竪穴建物跡群・掘立柱建物跡全景



調査前全景（南から）



S I 1 土層断面（南から）



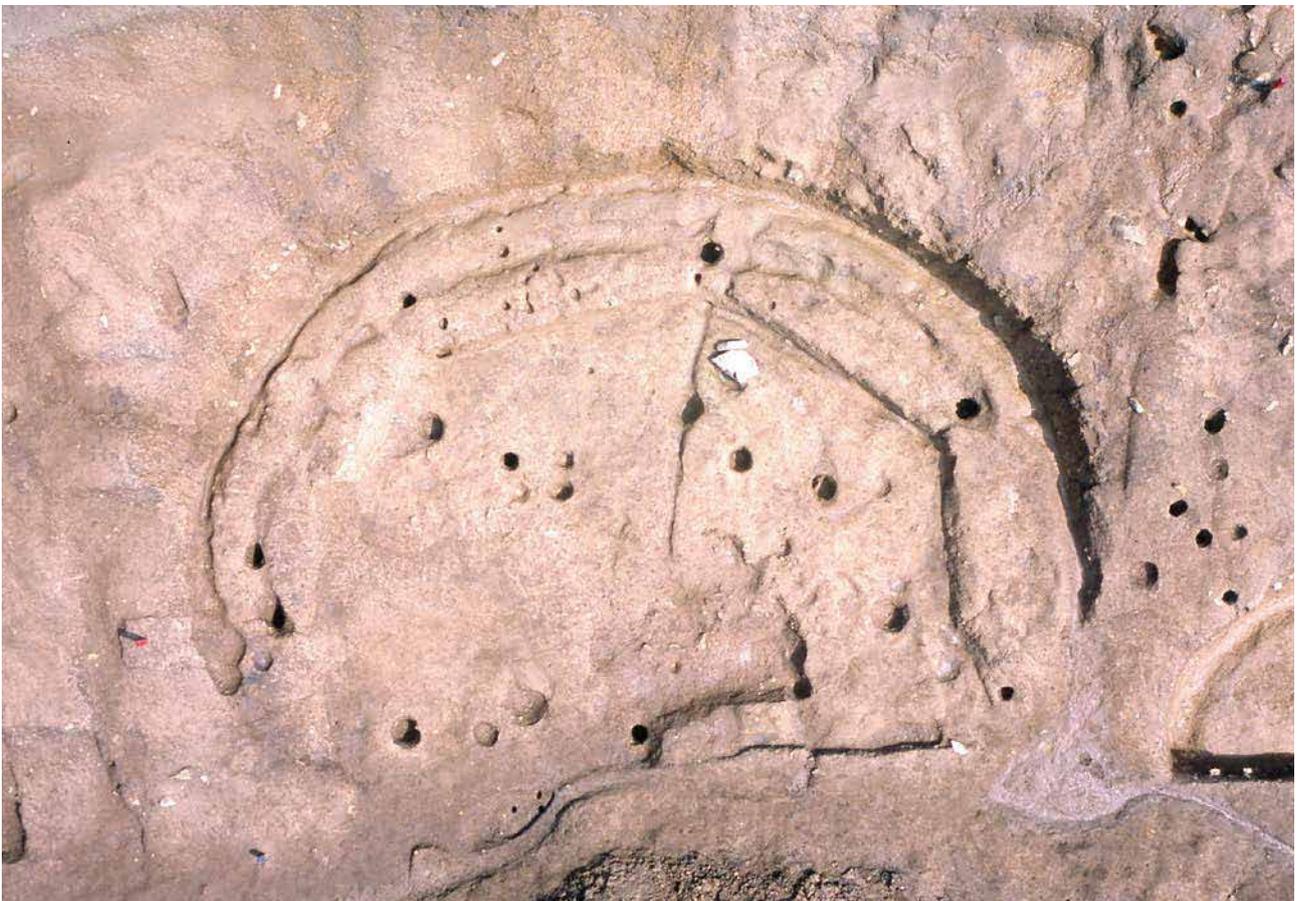
S I 1 遺物出土状況（北から）



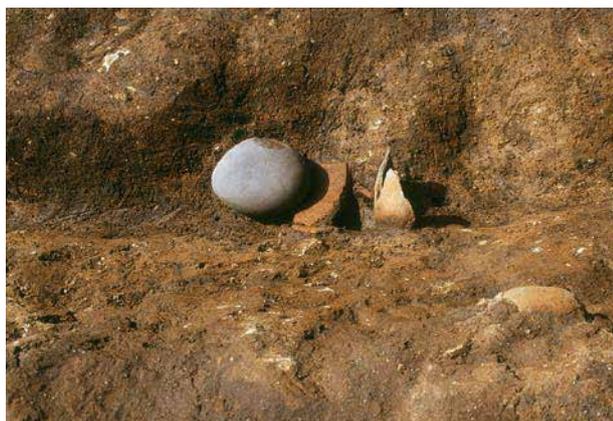
S I 1 中央土坑完掘（南から）



S I 1 完掘 (南から)



S I 2 完掘



S I 2 遺物出土状況 (南から)



S I 2 土層断面 (西から)



S I 2 中央土坑遺物・炭検出状況 (南から)



S I 2 中央土坑完掘 (南から)



S I 3 遺物出土状況 (北から)



S I 3 土層断面 (東から)



S I 3 完掘 (南から)

図版 6



S I 4 遺物出土状況 (西から)



S I 4 完掘 (南から)



S I 5・6 土層断面 (西から)



S I 6 遺物出土状況 (西から)



S I 5・6 完掘 (南から)



S I 7 完掘 (南から)



SP 2 遺物出土状況 (南から)



SK 4 完掘 (南から)



SK 8・9 完掘 (南から)



SK 11 完掘 (南から)

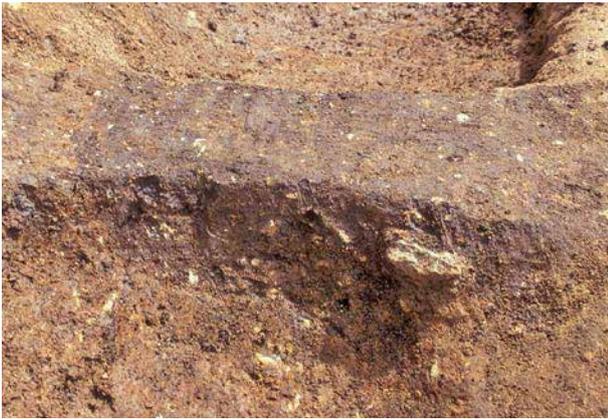
図版 8



S K 12 完掘 (南から)



S K 13 完掘 (南から)



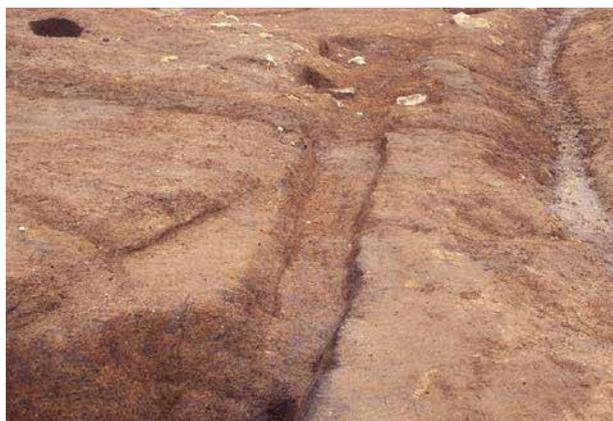
S D 1 土層断面 (西から)



S D 1 完掘 (西から)



S D 4 完掘 (西から)



SD3完掘（西から）



SD5完掘（西から）



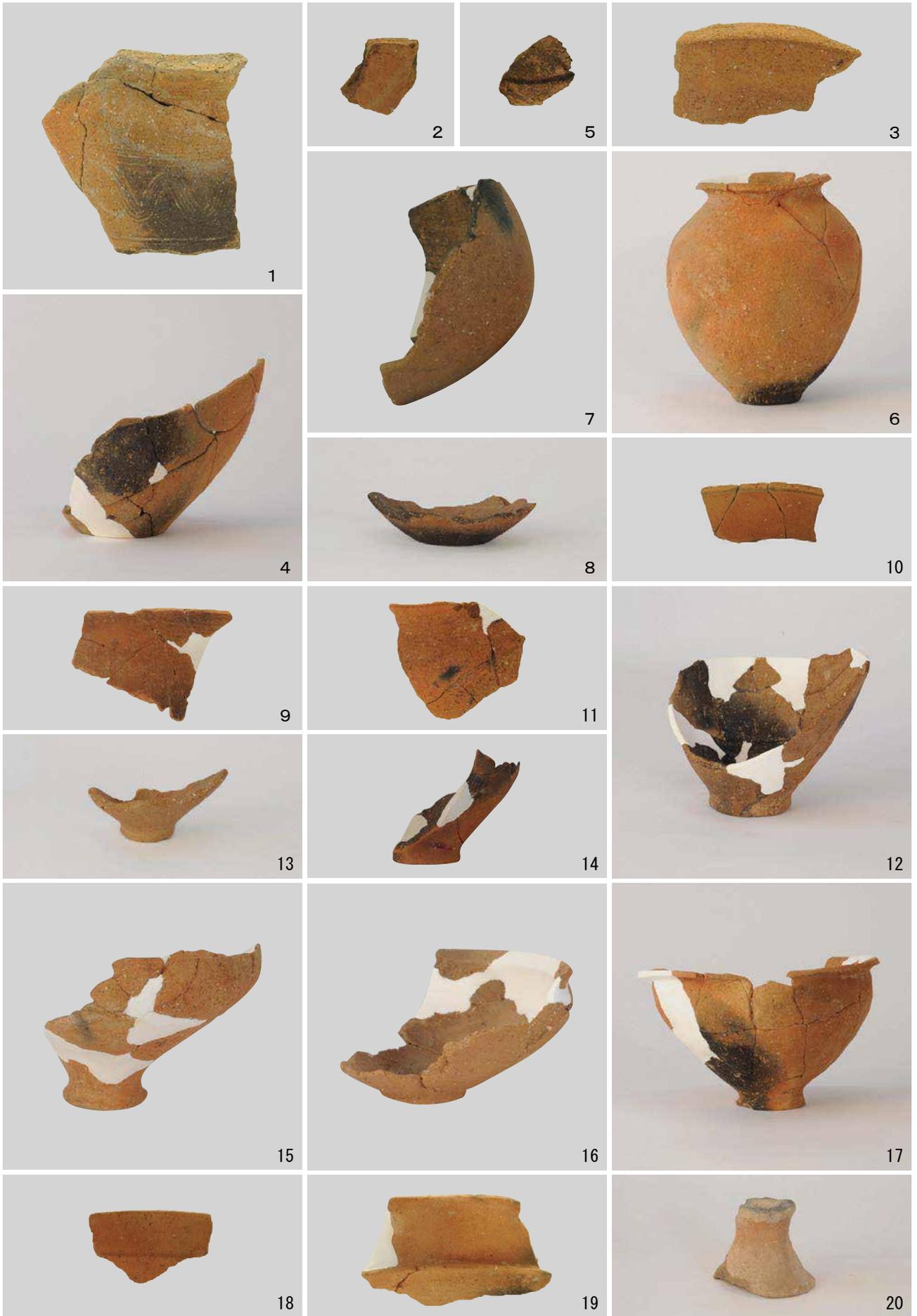
中央部遺物包含層東部遺物出土状況（南から）



中央部遺物包含層西部遺物出土状況（南から）



中央部遺物包含層西部遺物出土状況（南から）

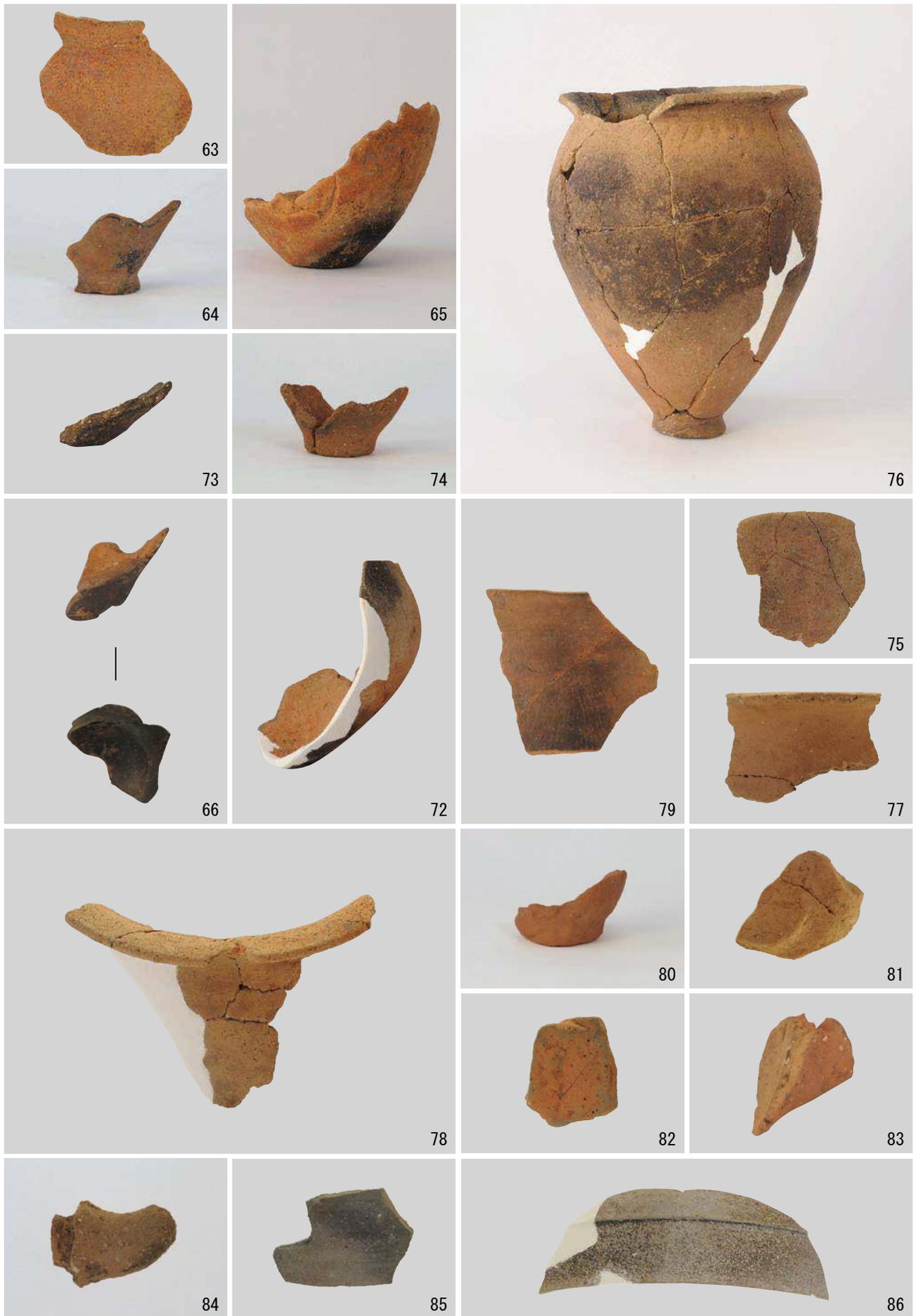


出土遺物 (1)



出土遺物 (2)





出土遺物 (5)



出土遺物 (6)



出土遺物 (7)



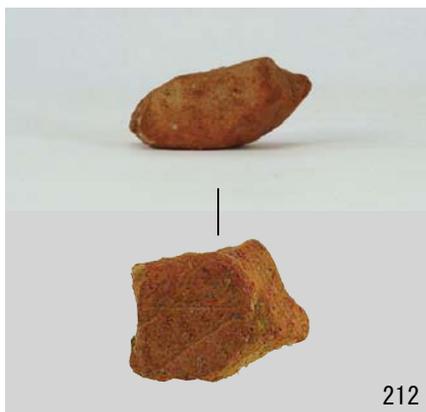
出土遺物 (8)





出土遺物 (10)





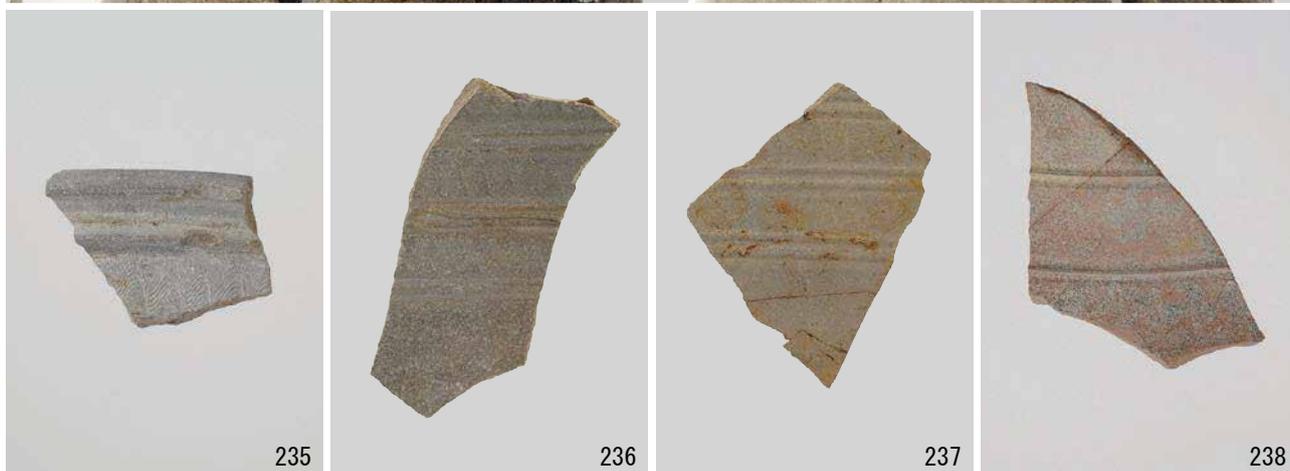
图版 22



出土遺物 (13)



234



235

236

237

238





出土遺物 (16)



三反地遺跡図版



調査区全景



調査区全景



完掘全景（南から）



完掘全景（北から）



調査前全景（北から）



NRトレンチ 3 土層断面（南から）



NRトレンチ 2 遺物出土状況（北から）



調査区北壁東半部土層断面（南から）



出土遺物 (1)

图版 30



出土遺物 (2)

水奥遺跡図版



水奥遺跡遠景（北西から）



調査区全景



A 地区遺構密集区



SB1完掘状況（西から）



SX1土師器皿等出土状況（西から）



SX1土師器皿等出土状況（南から）



SX1鉄刀子出土状況（西から）



SX1完掘状況（西から）



SD1遺物出土状況（西から）



SD1砥石出土状況（北から）



SX7遺物出土状況（西から）

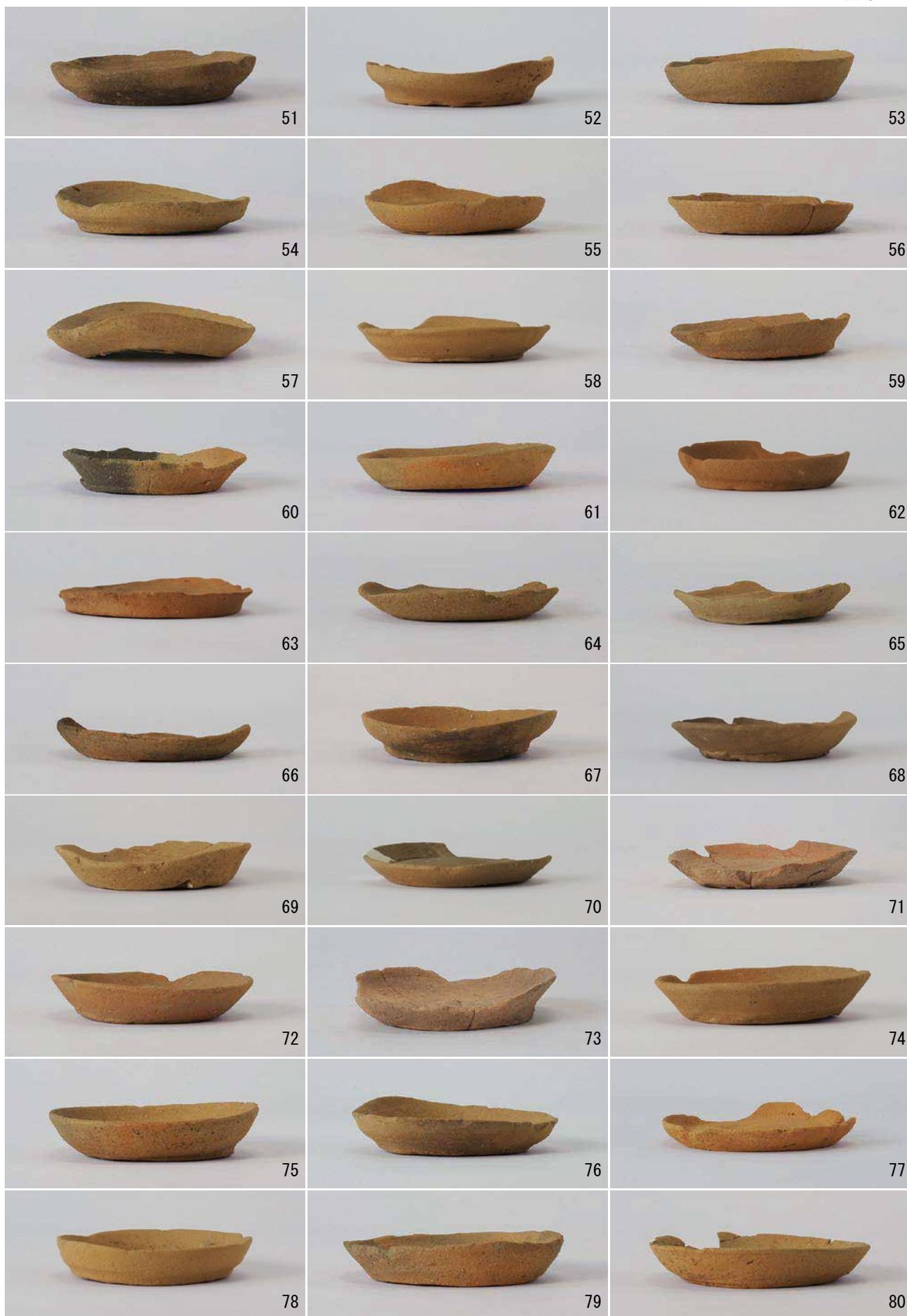


SP 16 遺物出土状況（西から）

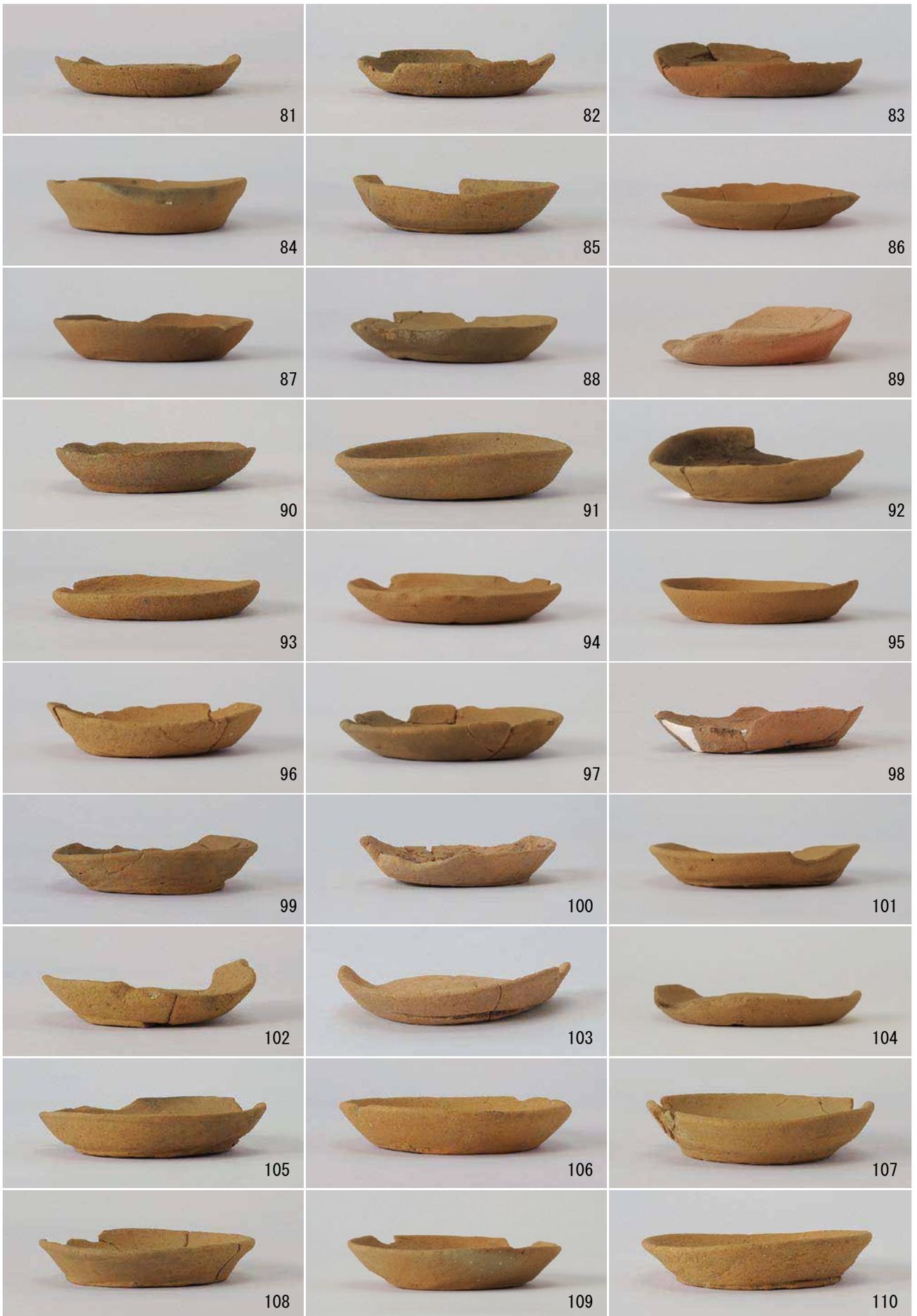


出土遺物 (1)





出土遺物 (3)





出土遺物 (5)







西河内遺跡図版



西河内遺跡B地区全景（南から）



A地区北端部（東から）



A地区北部中央（東から）



A地区南端部（南から）



A地区南部中央（北から）



B地区北部（西から）



B地区南部（西から）



A地区北側包含層土層断面（北から）



A地区北側包含層ベルト土層断面（西から）



A地区南側包含層土層断面（東から）



A地区北側包含層遺物出土状況（南から）



B地区トレンチ1土層断面（北から）



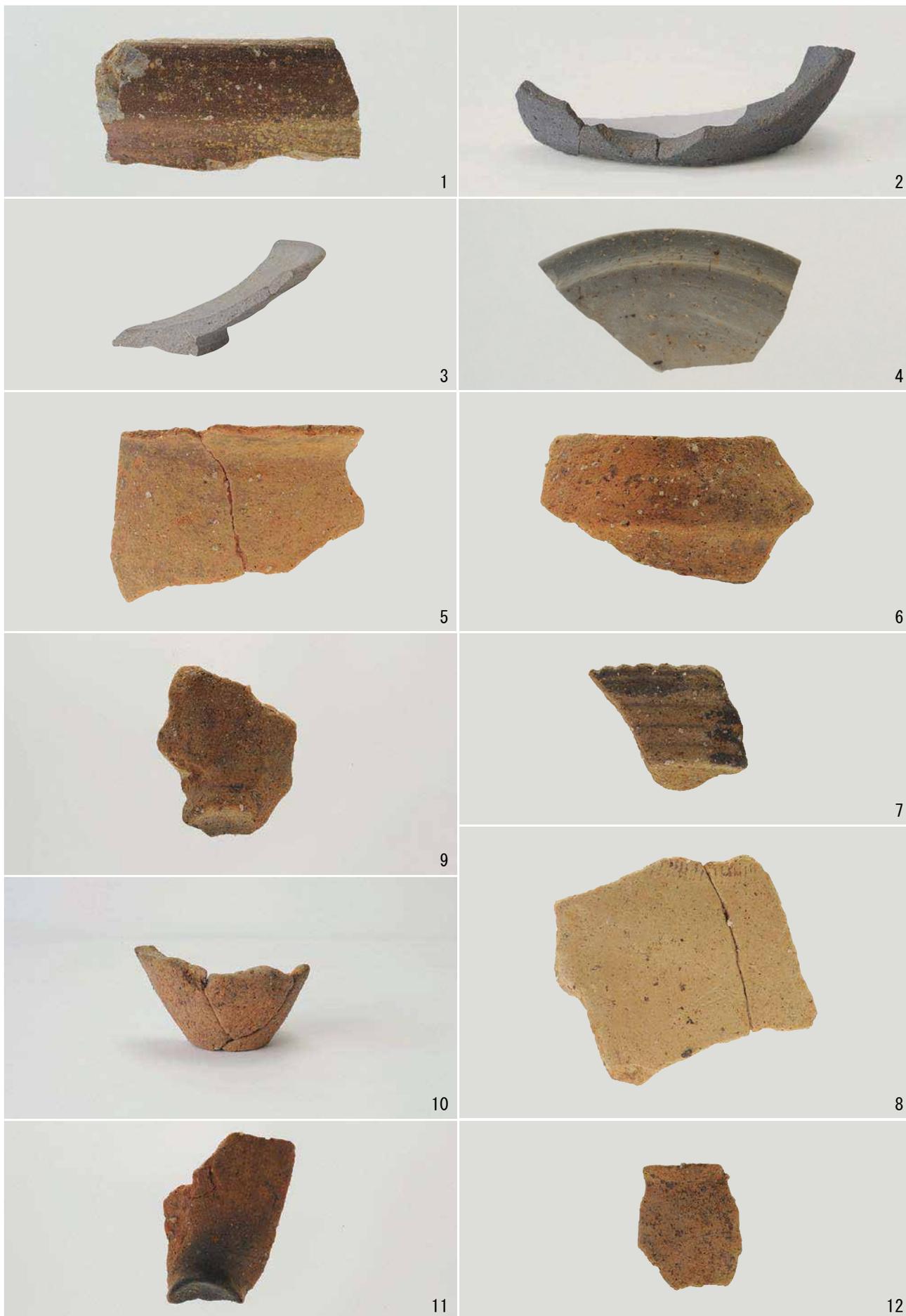
B地区トレンチ2土層断面（北から）



B地区トレンチ3土層断面（北から）



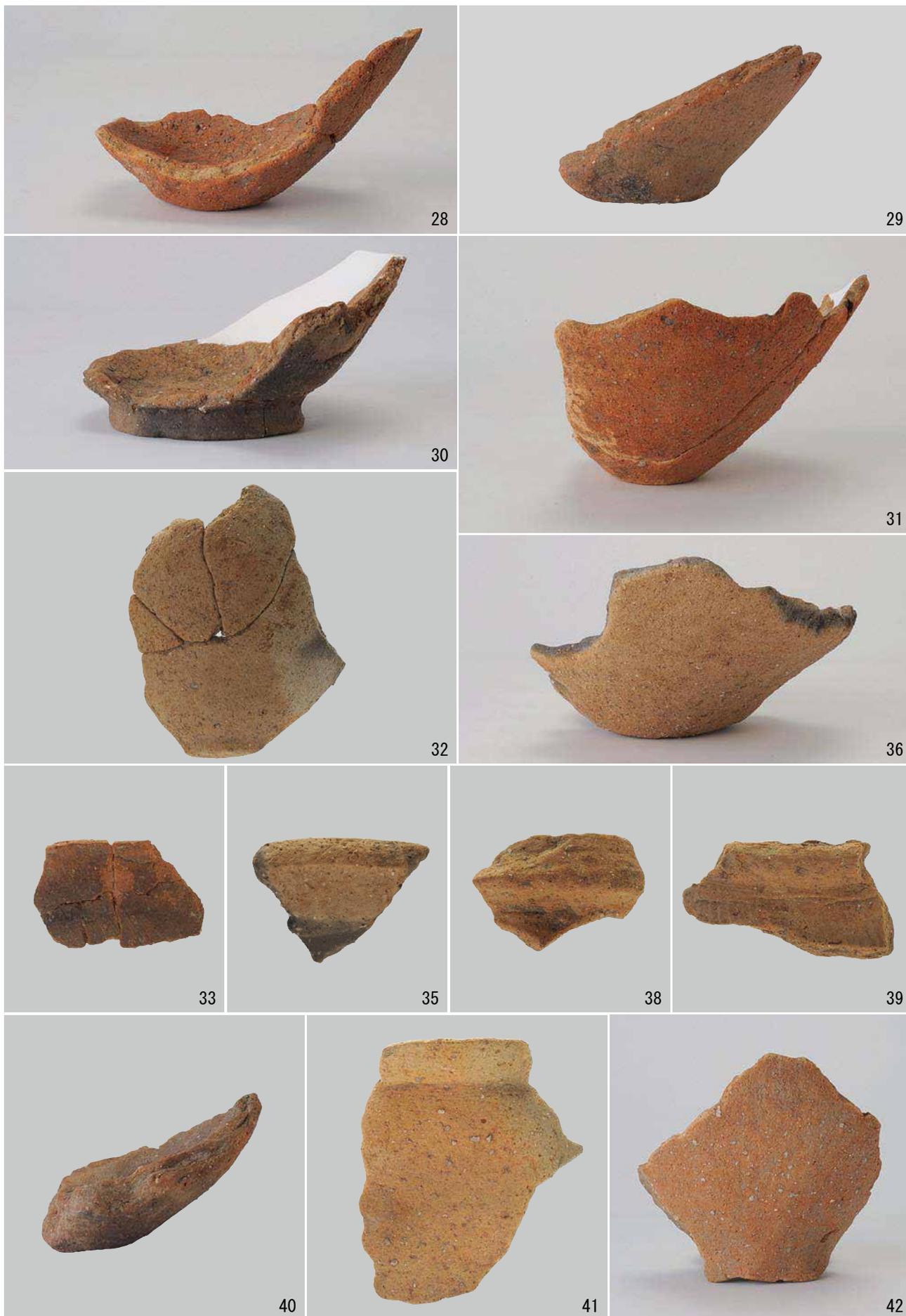
B-2地区石斧出土状況（南から）



出土遺物 (1)



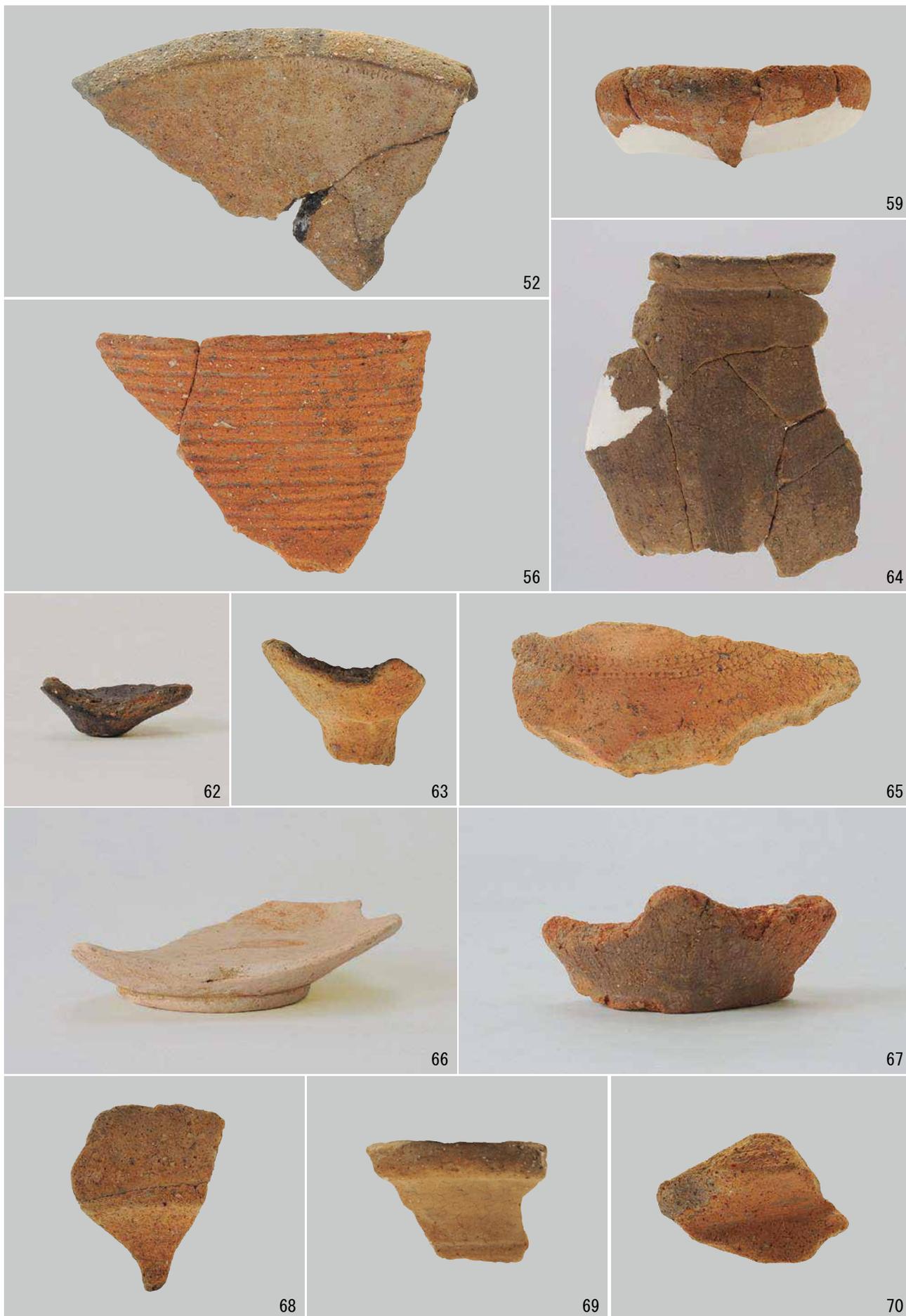




出土遺物 (4)



出土遺物 (5)



出土遺物 (6)



出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

中屋B遺跡図版



中屋B遺跡遠景（南から）



調査区全景



調査区北西端部近景



SI1・SK1完掘状況（南から）



SI1完掘状況（南から）



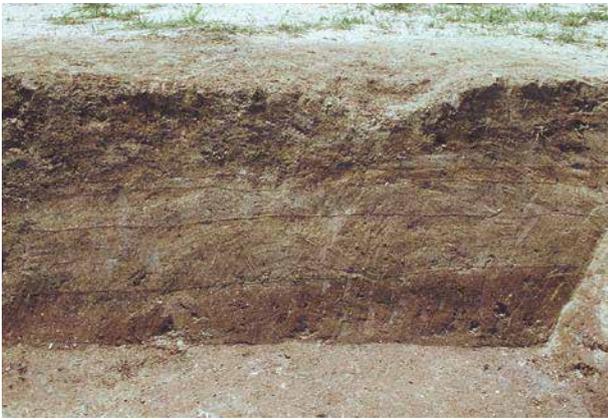
S12・S13炭化材・遺物出土状況（南から）



S12・S13完掘状況（南から）



SK1完掘状況（南から）



北西端部土層断面（北から）



南西端部土層断面（南から）



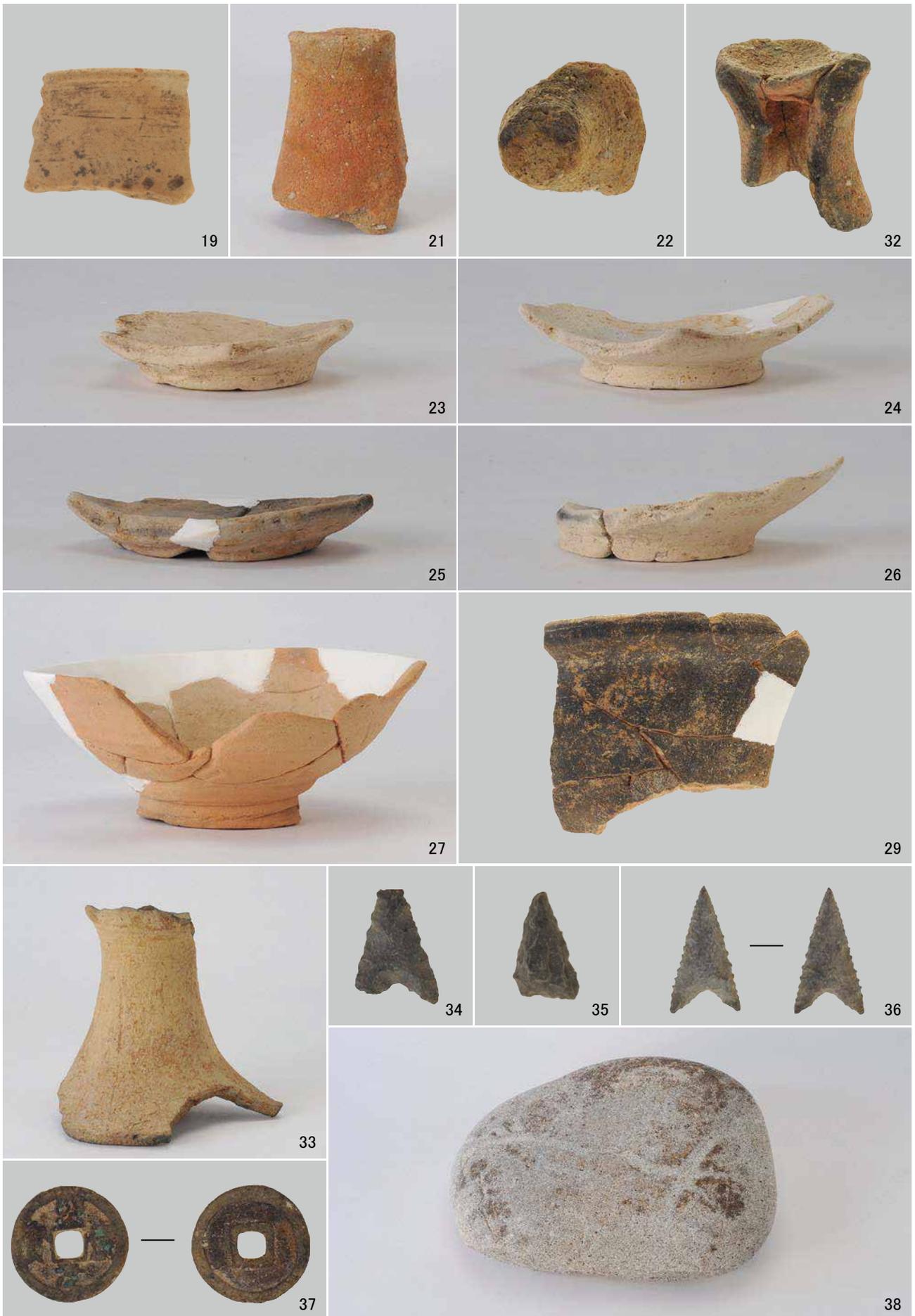
SI2遺物出土状況（北から）



SI3遺物出土状況（北から）



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほりかわいせき・ひらいいせき・さんたんじいせき みずのくいせき・にしごうちいせき・なかやびーいせき	
書名	堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋B遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	田布施町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第85集	第4集
編集著者名	石井龍彦 小南裕一 井上広之 荒蒔周平 中原有彩	池本 篤
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	田布施町教育委員会
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060	〒742-1592 山口県熊毛郡田布施町大字下田布施 3430-1 TEL0820-52-5813
発行年月日	西暦2014年3月20日（平成26年3月20日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほりかわいせき 堀川遺跡	やまぐちけん 山口県 くまげけん 熊毛郡 たぶせちょう 田布施町 おおあざはの 大字波野	353434		33° 58' 25"	132° 2' 42"	20121203 ～20130325	268㎡	ほ場整備
ひらいいせき 平井遺跡		353434		33° 58' 23"	132° 2' 38"	20121203 ～20130325	1,505㎡	ほ場整備
さんたんじいせき 三反地遺跡		353434		33° 58' 32"	132° 2' 29"	20121224 ～20130322	800㎡	ほ場整備
みずのくいせき 水奥遺跡		353434		33° 58' 12"	132° 2' 36"	20130617 ～20131029	848.3㎡	ほ場整備
にしごうちいせき 西河内遺跡		353434		33° 58' 03"	132° 2' 28"	20130530 ～20131010	800.2㎡	ほ場整備
なかやびーいせき 中屋B遺跡		353434		33° 58' 17"	132° 2' 28"	20130607 ～20130925	814.4㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀川遺跡	集落	中世	溝状遺構、土坑、柱穴	瓦質土器	弥生～古墳時代の堅穴建物から土器がまとまって出土 自然流路を検出 性格不明遺構から、土師器・皿・杯などが多量出土 弥生後期の焼失堅穴建物を検出
平井遺跡	集落	弥生～中世	堅穴建物9棟、掘立柱建物1棟	弥生土器	
三反地遺跡	集落	古墳	溝状遺構8条、土坑、柱穴	土師器、須恵器	
水奥遺跡	集落	中世	自然流路、土坑、柱穴	竈片、須恵器	
西河内遺跡	集落	弥生	掘立柱建物2棟、溝状遺構3条、 性格不明遺構7基、土坑、柱穴	土師器、青磁	
中屋B遺跡	集落	弥生～古墳	溝状遺構1条、集石遺構	白磁、鉄刀子	
			堅穴建物3棟、溝状遺構1条、土坑、柱穴	石斧、弥生土器	
				石鏃、弥生土器	

要約	<p>今回調査した六つの遺跡はいずれも田布施川支流の上流域にあたる緩斜面に位置する。標高25mから70mの丘陵地に立地し、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物が集中する集落と、中世の掘立柱建物を主体とする集落が混在する。</p> <p>平井遺跡では弥生時代中期から古墳時代にかけての堅穴建物9棟が確認された。中屋B遺跡では弥生時代後期の焼失堅穴建物が検出された。三反地遺跡の遺物包含層からは竈片が出土した。水奥遺跡では中世の性格不明遺構から、200余点の土師器皿・杯・碗、青磁・白磁碗、鉄刀子などが出土している。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第85集
田布施町埋蔵文化財調査報告 第4集

堀川遺跡
平井遺跡
三反地遺跡
水奥遺跡
西河内遺跡
中屋B遺跡

2014年3月20日

編集・発行 公益財団法人 山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
田布施町教育委員会
〒742-1592 山口県熊毛郡田布施町
大字下田布施3430-1

印刷 児玉印刷株式会社
〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号